
魔宝樹の鍵

桐谷瑞香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔宝樹の鍵

【Nコード】

N8365S

【作者名】

桐谷瑞香

【あらすじ】

遠い、遠い昔から——世界創世の時代から存在し、人々に恩恵を与えている樹があった。しかしある日突然、人々の前からその樹は消えてしまった——。

それから月日は流れ、駆け出しの還術士リデイスは、不意を突かれたモンスターから城の若手騎士フリートとロカセナに助けられる。やがて世界の転換点に続く道を開く鍵になるとは知らず……。

魔宝珠を利用することで様々な物を召喚する、長編異世界ファンタジー。

転がる樹の零（前書き）

初めまして、もしくはお久しぶりです。

まずは拙作に目を留めて頂き、ありがとうございます。

この小説は長めの異世界ファンタジー小説となる予定です。

一定更新をするよう心がけますが、よろしければ長い間お付き合い合
いいただけると嬉しいです。

転がる樹の雫

真つ青な空が広がる中、小鳥のさえずりが、川のせせらぎが、そして風によって葉が揺れあう音が辺りに響き渡る。そこに居るだけで心が和らぐような空気が漂っていた。

その空間の中心には雄大にそびえ立ち、青々とした葉が付いている一本の樹があった。

いったい何百年、いや何千年この場にいるのだろうかというほど、堂々とした大きさである。

また樹の周りは微かに靄^{もや}のようなものがかかっていた。それにより樹は神聖な雰囲気^{もや}を醸し出している。

そんな樹の近くで見上げている者がいた。たつぷりとしたフードを被っているため、顔は判別できないが、金色の長い髪が隙間から零れている。

その人が一歩近づく度に、風が吹く。

また一歩近づく度に、より強い風が吹く。

風が吹くたびに、小鳥は飛び去り、空は雲に覆われ始める。一気に緊張感が増した。

やがて近づくことは難しいと判断したのか、その場に跪き、両手を握りしめる。

「もうこの祈りも届くのが厳しくなっている。——扉は閉じられたまま。このままでは——」

呟かれた声は、優しそうな女性の声であったが、それ以上に切羽詰まった状況が伺える。

必死に彼女は祈りを送るが、ほとんど変化はない。握りしめる力が強くなる。

どれくらいやっていたのだろうか。

祈りが少しだけ通じたのか、わずかに木々を揺らす風が穏やかになったようだ。

雲の合間から少しずつ光が漏れて、あの穏やかな空気に戻りつつある。

祈りを捧げていた女性は両手を解くと、激しく呼吸をし始めた。

「時間が……ない」

苦しそくに眩きながら立ち上がり、一步離れて、樹を見上げた。

少しずつではあるが、葉の量が少なくなってきた。それが目に見える限りでの気がかりであった。

そして女性はやがて足取りで歩き始め、樹を後にした――。

彼女が去ってしばらくして、樹から小さな石がまるで果実のように落ちた。

それは意思を持っているかのように転がり、近くの川へと吸い込まれるように入っていく。

その後は変わらず、ただ大きな樹は風に揺られ続けた。

静かに、何もなかったかのように、その場に居座っていた――。

* * *

遠い、遠い昔から――世界創世の時代から暗黙の内では了解をし、人々に言い伝えられていることが三つある。

一つ、その樹には触れてはならない。
一つ、その樹から出た雫は返さねばならない。
一つ、その樹を巡る循環を乱してはならない。

もし過ちを起こせば、不幸が襲い掛かるであろう――。

その内容を子供は親から厳しく言い聞かせられて育つ。
しかし悲しいことに、伝承よりも好奇心を優先してしまった者が
いたのも事実であつた。

遠くから見ているのには耐えきれず、その樹の近くに行き、触れ
るために、奥地まで旅に出たものは数え切れないほどいた。
しかし、誰一人帰ってくる者はいなかった――。

そのような重い言い伝えがある一方、この樹は人々の生活に恩恵
を降り注いでいた。

魔宝珠まほうじゆという、別名、樹の雫とも呼ばれる、特殊な珠をもたらし
ているのである。

それを利用し、使い方を様々な方面で発展させることにより、文
明は進化していった。

一方、魔宝珠には主に三つの使い方があると言われているが、未
だに二つ目の使い方までしか知られていない。それを知るために、
多くの研究者が躍起になって調べようとした時代もあつた。

しかし、今はそれを解明することはもうできない。

なぜなら、その樹はこの世界からなくなってしまったのだから――
|。

1、始まりを導く鍵（1）

——運命の扉を開くのはあなた自身。

その日はいつもと同じだった。

少し雲に覆われた空から、遠慮深げに日の光が漏れている。

天気がいいとは言いい切れなかったが、町の人たちの表情も穏やかで、何かが起きるとは考えられなかった。

そう、その瞬間までは——。

肩より少し長い金色の髪をなびかせながら、少女は毎日の行動と同じように商店街を歩いていた。左右を見渡ししながら、店頭に並んでいる品を眺める。美味しそうな果物も売っており、それにはつい目を輝かせてしまう。

ふと奥から出てきたふくよかな女性が、彼女に声を投げかける。

「あら、リデイスちゃん、こんにちは！」

「こんにちは。今日は特に新鮮な品ばかりね」

「業者さんが来ていてね、さっき仕入れたんだ。ほら、これなんかいい色をしているだろう」

果物屋の女性はリデイスに対して、赤く丸いものを手渡す。つるつるしており、光沢もある。香りもほのかに漂っており、美味しい果実なのに間違いないと思われる。

「美味しそう！ これを四個ください。夕食の後にも食べるわ」
「どうもありがとう」

にこにこしながら、女性は果物を紙袋に入れて、詰め始める。

詰めている間、リデイスは通りを歩いている方から視線を感じていた。好奇心の視線であるだろうが、少し気恥ずかしいものでもある。

「どうしたの？」

紙袋を目の前に差し出されて、慌てて意識を前に戻した。

「いえ、やっぱりこの髪の色は、シュリッセル町では目立ちますよね」

服装は動き易さを重視しているため、二十歳前後という、リデイスくらいの年代の少女では地味な方である。抑えた黄色のシャツとスカートの上に、淡い水色の袖なしの長い上着を羽織り、それをリボンで腰の辺りで結んでいる。靴もすぐに走れる茶色のブーツだ。

派手な少女となれば、露出度は非常に高く、もっと赤や橙色など明るい色を着ている子もいる。

だがどうしても金色の髪と緑色の瞳は、他の人よりも群を抜いて目立つのだ。

「容姿はしょうがないわよ。生まれつきですもの。私はむしろもったいないと思う。綺麗な格好をすれば、もっと素敵なお嬢さんになるのに」

「いいんですよ、格好はこのままで。動きやすくては、いざというときに動けない」

女性は少し苦笑いをしながら、リデイスの左腰にある短剣タガーに視線をやった。

「今日も巡回？ お父様はよく許してくださいさるわね」

「名目上、買い物と言って飛び出しました。毎日屋敷にいるのは息が詰まりますから」

財布を取り出し、果物の値段分の硬貨を差し出し、女性は受け取った。

「ありがとうございます」

「また来ますね！」

手を振りながら、笑顔でその店を後にした。

袋を抱えて、一直線に続く通りを歩いていく。このまま真っ直ぐ進めば、町の南出入り口である。そこから日課である、リデイスの巡回が始まるのだ。

しかし出入り口に近づくにつれて、何か異様な雰囲気を感じ始める。進む速度が少しずつ早くなり、鼓動も速くなっていく。

そしてその異様さは視界の中に飛び込んできた。

町のすぐ外で、剣を抜いている二人の門番と援護に入った術師が、人の二倍ほどの高さである大型のモンスターと対立しているのだ。真っ黒な毛と突きだした鼻と耳が印象的な獣である。

その様子を見た町人たちは、悲鳴を上げながら慌てて町の奥か建物の中へと逃げ始めた。いつもより門番の数が少ないためか、こんなに接近されたのは久々なためか、どちらにしても逃げるのには越したことはない判断したのだろう。

城下町よりモンスターに接触しやすい場所にある、森に囲まれている町とはいえ、周りをモンスター避けの結界を発動させているため、こんなに近づくことはほとんどない。しかし、それは願望と仮定であり、実際はもうすぐ傍にいる。

リデイスは道の端に寄り、固い表情のまま首から下がっている、まほうじゆ魔宝珠と呼んでいる石を掴んだ。

そして小さく想いを込めて、一声かける。

「魔宝珠よ、我が想いに応えよ」

すると石が光始め、見る見るうちに光によって形が作り出されていく。長細く、手で握れるくらいの一本の棒。それがリデイスの手のひらに収まると、光は霧散した。

棒の先には鋭く尖った一本の刃が挿し込まれている。

手元に現れたのはリデイスの背より少し短いショートスパ。刃の下の部分には水色のリボンが柵引いているのが、特徴的である。

それを両手でしっかりと持ち、先端を入り口に向けて構えた。

もし門番たちが倒されてしまったら、ここで止めなければ町に甚

大なる被害が及ぶ。助けを呼ぶのも一つの手であるが、リデイスは直感的にそれでは間に合わないと悟っていた。

緊張を少しでも抑えようと、深く息を出し入れしながら、じっと敷地のすぐ外で起こっている光景を目にやる。

気がつけば残りは術師だけになっていた。門番は木に背中を打ちつけられて、ぐったりとしている。術師は入り口の結界をより強固なものにしようとしていたが、モンスターの尻尾によって投げ出された。

モンスターの視線が町の中へと移動する。

ゆつくりと動き始め、モンスター避けの緩んだ結界の間をすり抜けて、侵入してきた。

そして野太い鳴き声を出しながら、中へと進み始める。

建物の陰に隠れていたリデイスは、モンスターが背を向けたのを確認すると、瞬時に飛び出す。スピアを掲げて、勢いよく脇へと突き刺した。

唸り声と共に振り返られ、攻撃の対象をリデイスへと定められた。モンスターに睨まれて、一瞬足が竦んだが、すぐに思考を切り替える。

一直線に向かってくるモンスターをすれすれで避け、その隙に脇や尻に攻撃を与えていく。意外に表皮は柔らかかったため、跳ね返される事無く刺すことができる。動きが鈍くなっているところから徐々に体力は落とせているらしい。

剣と違い、微妙なリーチの差がモンスターには少し理解しにくいのか。

集中力を極限まで高めて、猛突進してくるのに対して、右足に深々と切り傷を入れた。

怯んだところで、駆け登って背中に飛び上がり、スピアをぎゅっと握りながら、切っ先をモンスターに向ける。

「魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ。——生まれしすべてものよ、在るべき処へ還れ！」

切っ先が光輝き始めると、思い切り突き刺した。モンスターが痛みと共に叫び声を上げる。振り落とされまいと、必死に握りしめた。そしてスピアの切っ先を中心として、大きな光の円が広がる。同時にモンスターが光に包まれつつ、黒い霧となり始めた。

浄化されている、そう感じさせる光景である。

在るべき処へ還れ――。

そう再び強く想うと、モンスターが黒い霧となって消失した。

足場が無くなると同時にリデイスは、地面に降り立った。

モンスターは跡形もなく消え去り、残ったのは踏み荒らされた地面と少し攻撃を受けた建物のみ。それ以外は何も変わらなかった。

見渡して、何もないことを確認すると、大きく息を吐いて、警戒を解いた。

「良かった、上手くいった」

地面に向いているスピアの先端を見つめた。そこには先ほどの光の面影もなく、ただのスピアに戻っている。

ふと、視界に動いている何かが入った。再び構え直そうとしたが、現れたものを見て、ほっと一安心をする。

町の少年であった。逃げそびれたのだろうか、強ばった表情をして、建物の端からリデイスの手元を見つめていた。

視線の意図がわかり、スピアに目を向けながら、そっと囁いた。

「魔宝珠よ、我が想いに答えてくれて、ありがとう」

すると再び全体が光に包まれる。長細い光であったが、それは手のひらに乗るくらいまでに小さくなり、光が消えると、胸元ににあった魔宝珠へと戻っていった。

そしてにこりと微笑みながら、少年へと近づく。

「もう大丈夫よ。さあ、町のみんなに伝えてこようか」

ぱあっと少年の顔が明るくなり、歩きだそうとした。しかし再び驚愕の顔に変わる。不思議に思ったりデイスだが、後ろから感じた殺気に気づき、その場から飛び退いた。

「ま……まだいたの！」

今さつき、リデイスがいた場所に、大きな前足が突き出されている。さつきの獣型のモンスターと同じ種類であるが、大きさが倍近くあった。避ける瞬間に左腕がかすり、血が流れる。

少年の反応がなければ、確実に大怪我をしていたところだ。

魔宝珠に再び手を触れようとしたが、まるでそんな時間も与えないと、勢いよく迫ってくる。

——隙なんか与えてくれない。

舌打ちをしつつも、短剣^{ダガー}を抜いた。こんなの威嚇にもならない。これで耐え凌ぐのは、至難すぎるということはわかりきっている。その時、少年が足をガタガタと震えつつも、町の奥へと向かおうとしていた。

モンスターの視線がリデイスから少年へと移ろうとしている。それを見て、とつさに前に飛び出していた。

「あなたの相手は私よ！」

少しでも気が逸れれば、その隙に少年が助けを求めてくれれば——、町は守られるかもしれない。自分がどうなるうが。

モンスターの前足にある鋭い爪がリデイスに向けられる。次に起きる恐怖を声に出さないために、歯を食い縛った。

だが突然誰かの大声が耳の中に飛び込んできた。

「止まれ！ 死に急ぐようなことをするな！」

一瞬たたらを踏んだ隙に、目の前に黒色の少しクセがある髪の子が現れた。紺色のマントが風に揺られ、手には大きな剣が握られている。

「あ、あなたは……」

言葉を漏らすと、肩越しから鋭い視線が突き刺さる。

「いいから下がっている。気が散る」

あまりの言われように、驚き、立ち尽くす。そして彼はリデイスのことなどいなかったかのように、果敢に一人でモンスターへと向かっていった。全然大きさの違う一匹と一人を見て、硬直は溶ける。「待つて、こんなに大きいのに、一人でなんて、無茶よ！」

格好からして、それなりに剣術は精通しているように見えたが、それでもあのモンスターは一筋縄ではいかないはずだ。すぐに魔宝珠に触れようとした。

「お嬢さん、ちょっと待って」

だが、この場の緊張感にそぐわない、柔らかな青年の声が入ってくる。そしてやんわりと魔宝珠を握ろうとした左手を、その人物の手で握られていた。

振り向くと、優しくそんな顔をした、銀色の髪の青年が微笑んでいる。灰色のマントに、サーベルらしき剣。さっきの青年と共に行動しているものだろうか。

「待って、ってどういう意味ですか」

「あいつは一人の方が戦いやすいんだ。これくらいなら、造作もなく終わるよ。だから見守ってしよう」

「造作もなく？　だって、さっきのより遙かに大きいのに……！」

微笑む青年がぎゅっと手を握っているため、動けない。

「ほら、見てごらん」

そう言われ、つられて黒髪の青年と大型獣のモンスターとの戦いを見る。

モンスターの動きが随分遅くなっているように感じる。数分も目を離していないのに、早くも所々に血が流れている。

一方、黒髪の青年は返り血を浴びたくらいで、怪我は見あたらな
い。

「——魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ」

そう言い始めると、青年の剣が光輝き始める。その光の量に目を見張った。リデイスより遙かに大きな光——つまり相当な力量の持ち主ということが目に見えてわかる。

動きが鈍ったモンスターを華麗に飛び上がり、急所の一つである、頭部の上へと突き刺した。

「——生まれしすべてものよ、在るべき処へ還れ！」

比べものにならないほどの悲鳴と共に、モンスターが光に包まれ

ながらも黒い霧を出して消失していく。

そして霧散と同時に跡形もなく、なくなった。あの大きさの相手を一人で難なく倒してしまったのだ。

青年は血を払いのけながら、特に表情も変えずに、こちらへと歩いてくる。

「ほら、大丈夫って言っただろう？」

銀髪の青年が確認したように尋ねると、首を縦に振った。

そして少しずつ溢れ出す好奇心という想い。恐怖などなくなり、いつたい彼らは何者なのか、それが唐突に知りたくなる。軽く怪我をしている左腕の存在も忘れてしまいそうだ。

黒髪の青年が戻ってくると、銀髪の青年を一瞥した後に、視線が真っ先にリデイスに来た。だがその視線が若干痛いような気がする。とりあえず、まずは挨拶だと声を出す。

「あの、助けてくださり、ありがとうございます——」

「お前は馬鹿か」

——馬鹿？

思わぬ言葉に、顔をひきつらせる。不機嫌そうな表情をしていた。「あのモンスターは親子でいるのが常識だ。お前が先に還したのが、子供のほう。それくらい大きさを見ればわかるだろう」

そんな話を昔聞いたことがあった。町からだいぶ離れたところであるが、今戦った種のモンスターが住んでいるという内容。

「子供だけ還して、大人を待たずに武器をしまうのは、馬鹿と同然だ」

その言葉は正しいと思う。だが、言い方がいちいち勘に触る。

「その通りですね。以後、気をつけます」

「以後？ 以後って、まだ続ける気か。そんな中途半端な気持ちでモンスターと戦うのなら、すぐに死ぬぞ」

容赦なく突き刺さる言葉に、歯をぎりっと噛みしめた。だが一点だけ、どうしても府に落ちないことを言われ、精一杯の想いで言い返す。

「中途半端な気持ちじゃないです！ 私は町をモンスターから守りたい想いは——」

「なら、結術士けつじゅつしになって、結界を強化した方が現実的だと思うが。あの門番たちよりは使えるかもしれないが、お前かんじゅつしごときの還術士は大陸中にたくさんいて、同時に死ぬ割合も高いのが現実だ。——それを肝に命じておけ」

怒濤のように言い放ち、マントを翻して、入り口の方へと彼は歩いていった。

その背中を悔しさと怒りと、切ない想いがこもった視線で追う。出会って間もない人にすべてを否定されたような気がした。けれど、言っていることは正しい。

実力がまだ劣っているのは知っている。興奮状態のため血がさらに流れており、少し立っているのが辛くなる。それを察知した銀髪の青年はリデイスを座らせた。

「……ごめん。あいつ、腕は確かなんだけど、素直に思った言い過ぎるんだ。気に病むかもしれないけど、一つの参考として聞き流しておくといい」

持っていた布で腕を縛られて、応急処置をされる。

「はい……。ありがとうございます」

「女の子なんだから、あまり無理はしないでね」

目を細め、リデイスが腕以外に目立った傷がないことを確かめる。その優しさが、少し気恥ずかしかった。

突然吹いた風が木々やリデイスの髪を揺らしていく。歩いている黒髪の青年のマントもはためいていた。

その出会いは些細なこと。

だがすでに鍵穴に鍵を差し込んでいるなど、誰も知らなかった。世界の転観点に続く道が広がっている扉の——。

2、始まりを導く鍵（2）

シュリッセル町——ドラシル大陸西部に位置するミスガルム領の町の1つであり、山に近く、森に囲まれている町だ。土壌も肥沃的であり、気候も過ごしやすく、必然的に人が集まりやすい。だが場所はいいが、モンスターが多いのが難点だ。そのため町をモンスターから守るために、大がかりな結界を張っている。だが今回、一部とはいえ、突破されたのは死活問題であった。

それに対して、町を治める立場である、貴族のオルテガ・ユングリガは頭を悩ましている。町をどうやってモンスターから守ればいか、そんなことをいつも食卓で喧かれていれば、共に食事をしている十九歳の娘リデイス・ユングリガも考えるようになるは必然であつたかもしれない――。

リデイスは戦闘後、怪我の治療と町の詰め所で詳細を話し、それらが終わった頃は日が暮れ始めていた。

今は使用人のマデナと共に帰路に付いている。

マデナはリデイスの怪我を見た瞬間、始めはこつぴどく叱つたが、最後は抱きつかれてしまった。母親代わりである彼女に心配をかけさせてしまい、ほろ苦い想いが残る。

一方、リデイスや町を助けた青年二人は治療中に詰問は終わっていたらしく、病院へと引き渡されてからは会っていない。

目の前で剣捌きを見て、助けてもらっただけで、彼らについてはまったく知らなかった。どこかの傭兵とかでもやっている姿ではあるが、今となつては知る由もない。

新たな風を吹き込んだ彼らにまた会いたいという気持ちはあるが、再度辛辣な言葉に耐えられるかが問題ではある。

「リデイスちゃん、今回はこれくらいの怪我で済んだから良かったものの、次があるとは限らないわ。駄目よ、大人しく家にいなくちゃ」

「わかつている。でもお父様の姿を見ると、心配で……」

「オルテガ様はさらに強力な結界の構築をお頼みになっています。ですから、大丈夫ですよ」

笑顔で言われたが、それを信用して良かった試しがない。記憶にはないが、リデイスの母親は産んで間もなくして、モンスターの手により命を落としたと言う。それが町の中であれば、結界は張られていたが、突破されてしまった可能性が高い。

そして記憶にある限りでも、何度も結界を張り直したが、数年に一度は破られる。モンスターの力が強くなっているためであろうか、それが最近は数カ月ごとへと周期が変化していた。

そのようなわけで、結界を張ってやり過ごすだけでなく、根本的な処理、モンスターを元の場所に還すことができる人物——かんじゅつし 還術士がより求められ始める時代となっていた。

モンスターはリデイスたちが住んでいる場所とはまったく違う場所、生まれ、育っているらしいが、今はそれがこつちまで漏れ出ている。そのため適切な場所に還すには、還術印が施されたものを用いて、モンスターを攻撃し、急所を刺さなければならないのだ。

母親の件もあるが、還術士の道をリデイスは昔から進もうと決めており、槍術を習っていたことから、魔宝珠の召還物をショートスピアにした。その後、上手いことに還術印を施してもらい、今は駆け出しの還術士となっている。

しかし守りたいという想いに偽りはないが、技量が足りないのは否めない。まだまだ訓練したいが、最近はマデナの監視が鋭いのが辛いところだ。

町の中心部から少し離れたところにある屋敷に着くと、リデイスは少し違和感を覚える。

「居間に誰がいる？ マデナ、今日は誰とも約束はないはずだったけど」

「ああ、言い忘れていましたわ。私が屋敷を出る際に突然連絡が来たのです。ミスガラム城の遣いが来るということに」

さらりと出した言葉を受けて、リデイスは足を止めた。ミスガルド領をまとめる中心地である城の遣い。つまり相当、地位が上の人物と思われる。

「どうなされましたか？」

「そんな人が来ているのなら、どうして早く言ってくれないの！
急すぎる……」

「焦らなくても大丈夫だそうです。何でもお嬢様ぐらいの若い騎士がお見えになられているのですが、少し聞きたいことがあって、立ち寄っているそうです。お嬢様は顔を出す程度で大丈夫ですよ」

「そう、ならよかった」

ほっと胸をなで下ろす。いくら還術士の端くれと言っても、根っことは貴族。お城の関係者相手にあまり失礼なこととはできないことは自覚している。事前にマデナが着替えを持って現れてくれて良かった。

屋敷に入り、居間に続くドアを開ける。その部屋の中には眼鏡をかけた初老のオルテガと、城の遣いが二人向かい合って座っていた。すぐに作り笑顔で挨拶をしようと思ったが、遣いの人物の顔を見て、思わず眉をひそめようとした。だがそこは抑えて、形式的な挨拶をする。

「お父様、帰宅が遅くなってしまい、申し訳ありません。——初めまして、お二方。娘のリデイス・ユングリガと申します。どうぞ、ごゆっくりとしてってくださいませ。では、私はこれで——」
「リデイス、彼らとは年齢も近いのだ。こちらに来て、一緒に話してもしょうじゃないか」

オルテガの言葉と共に、マデナに背中を押される。洪々と中へと踏み入れた。

遣いの青年が二人、ソファから立ち上がっている。一人はここにこした人の良さそうな銀髪の青年。灰色の上着やマントなど、薄めの色が印象的である。

もう一人は鋭い視線で、若干困惑した顔をしている黒髪の青年。

全体的に黒や紺など、暗めの服を着ており、二人並んでいると、対のように感じる。

先に口を開いたのは、困惑している青年であつた。

「お前……、町長の娘だったのか」

オルテガがいるにも関わらず、半ば呆れ気味に言葉を漏らされた。
「リデイス、二人と面識があるのか？」

驚いたような顔をされる。それを曖昧な言い方で受け流す。

「はい。先ほど偶然会いました。それ以上、面識はありません」

そう言つと、くすりと誰かが笑つた。視線が黒髪の青年から笑つた銀髪の青年へと移動する。

「何でしょうか」

「いえ、何でも。そういえば自己紹介はまだでしたね。ミスガラム城、三番隊の軍に所属している、ロカセナ・ラズニールです」

「同じく三番隊所属のフリート・シグムンドだ。貴族のお嬢さんがあんなところを出歩いては、お父様も気がではないでしょう。気をつけた方が賢明かと思いますよ」

オルテガがいるため口調は抑えているが、鋭い言葉であることは変わらない。

そつと左腕をさすつた。隣ではあつと溜息を吐く音が聞こえる。

「リデイス……、隠しても無駄だ。既に私の耳には入っている」

「……隠してはいませんよ。言いそびれているだけです」

困つたような視線、柔らかな視線、鋭い視線が容赦なく突き刺さる。それが耐えきれなかった。

「わかりましたよ、言えはいいでしよう！ 町の入り口で侵入したモンスターと接触して、フリートさんとロカセナさんに助けてもらつたんですよ。……先ほどは本当にありがとうございました」

二人に対して頭を下げる。感謝の意は言葉以上に含んでいないが、「私からもお礼を。本当にありがとう。リデイスや町が大事に至らなかつたのは君たちのおかげだ」

「いえ、見ていられなかつただけです。隙だらけのお嬢さんがモン

スターに無惨にやられるのが」

——いちいち、嫌みを言わずにはすまないのか！

視線を上げると、リデイスとフリートの間には静かに火花が散っていた。それをロカセナは苦笑いをしながら、眺めている。

「まあ先ほども言いましたように、この町の結界をより強固にする必要があります。それを伝えるのも一つとして訪れたのですが……、一歩遅く、怪我人を出してしまい、申し訳ありません。次が起らない為に、すぐ——」

「いや、明日にしよう」

ロカセナの言葉をフリートは遠慮なく切った。その言葉に対して、不思議そうな目で見返す。

「まだ入り口の結界が破られたただけだ。その修復は既にできている、急ぐ必要はない」

「だが——」

ちらつと視線がリデイスに向かれた気がしたが、すぐにロカセナへと戻る。

「これから夜だ。下手に動いたために、モンスターを刺激して、町が襲われたらそれこそ被害は甚大になる。夜は大人しく待機し、何かがあれば俺たちも加勢しよう」

「……わかった」

頬を緩めると、そのままオルテガを安心させるかのように、言葉を続けた。

「フリートの言うとおり、今日はこれで帰らせていただきます。また明日にでも来ますので、よろしければ地図か案内人の方をお願いします」

「わかった。他にも何かあれば遠慮なく言ってくれ。明日は頼みましたよ」

その流れで彼らは宿屋に戻るらしい。どうやら来た理由は明日行動することようだ。

リデイスよりも少し年上の青年二人を見送るため、入り口まで行

くと、フリートが依然不機嫌そうに腕の方に目をやった。

「……出血ほど傷は酷くない。ゆっくり休めよ」

それだけ言い去ると、オルテガに一礼をして、さっさと出て行ってしまった。その様子を微笑みながら口力セナは見つつ、挨拶をする、急いで後を追った。

何ともやりきれない想いが吹き上がる。ひたすらに突き落としたと思えばあの言いよう、よくわからない。

「そうだ、お父様。彼らはいったい明日、どこに行くのですか？」

「結界をより強固にするために、町の奥から続いているルセリ祠に行つて、魔宝珠を取ってくるそうだ」

「ルセリ祠？ あの場所は地図だけで行ける場所ではないはずです」町の奥にあるルセリ祠までは、途中から道がなく、木々で生い茂っているため、そう簡単に近づける場所ではない。

またそこにある魔宝珠は日の光を一番に浴びており、非常に強力な魔力を得ているため、欲するものも多い。そのため必然的に特別な結界をかけている。

それを解けるのは、町長の周りでも数名。リデイスも十八歳に魔宝珠を得ると同時に、万が一の為に教えてもらっていた。

「私が案内します」

リデイスにとっては自然に出てきた言葉に、オルテガは頭を少し抱えていた。

「いや、お前が無理して行く必要はない。他にも戦闘慣れした術者も知っている。彼の方が——」

「今、町が不安定な時期ですよ？ 戦力はあまり分かれてはいけません。私なら……、悔しいですがたいした力にならないので、彼らと一緒にいっても、町に害はないでしょう」

そう言い切ると、オルテガに背を向けて、自分の部屋へと向かい始めた。

そつと左腕の傷に触れる。動かしても支障はないが、まだ無理はせずに、今日は早く休むことに越したことはない。

またフリートに嫌みを言われるのは気が進まないが、あの強さをもう少しじっくり傍で見ていたいのも確かであった。

* * *

「フリートってさあ、いつもそうだよな」

宿屋の一室で剣を磨いている黒髪の青年に対し、銀髪の青年が背中に向かって話しかけてくる。フリートは振り返ることなく、相槌を打った。

「何がだ。ロカセナ、はっきりと言えよ」

「いや、何でもない。——この町はいいところだね。空気もいいし、食べ物も美味しい。人が集まるのもわかるよ」

「そうだな。だが人が多いのは同時に、様々な種類の人が集まるのも同義だ。モンスターの侵入によって浮ついている今晚あたり、盗みが起こる確率が高くなるだろう」

「ああ、だからさつき詰め所にまた寄ったんだ。そこら辺の町全体に対する常識的な思考の周り方は、なかなか軍人あがりでは思いつかないよね」

「……さつきから、何が言いたいんだ」

磨き終わり、静かに唱えると、光とともに剣は群青色の魔宝珠へと変わった。

ロカセナとは騎士団に所属してから早三年、一緒に行動することが多々ある。

「別に褒めているんだから、起こらないですよ。明日はまたハードな一日になるだろうから、早めに寝よう。ただモンスターを倒すだけなら簡単だけど、守りながらするのは少し気を使うからね」

「……その言葉、あいつに言ったら、噛みつかれるぞ」

「あれ？ 僕、一言もリデイスちゃんのことなんか思い浮かべて言

っていないけど。詳細な地図をもらえるかもしれないのに、どうして始めから案内人が、しかも彼女が付くってわかるの？」

——こいつに、下手なことは言えない。

いったい何度目かになるかはわからないが、それは堅く心の中で誓った。

窓の外から夜空を見上げたが、残念ながら雲で覆われて、星は見えない。

いい場所ではあるが、それと同時に警戒心が他の地域より全体的に低かった。詰め所で教えてもらったが、結界を張り、守りを主とする結術士と、モンスターを還す還術士かんじゅつしの割合が他よりも少ない。今までは優秀な守術士のおかげで成り立っていたらしいが、人数が少ないというのは何かあった時に心許ないことだろう。

だが、それは同時に強固な結界を導けば、しばらくは安心すると言っことだ。

明日を万全に過ごすためにも、フリートは早めに横になることにした。

3、始まりを導く鍵(3)

翌朝、リデイスがオルテガと朝食の時間を過ごしている時、慌ただしい足音と共に、詰め所の警備員が現れた。言わずとも、良いことが起こったということがわかる。

「食事中に申し訳ありません」

「構わん。何が起こったのか、すぐに話せ」

「実は……町の東側にありました、魔宝珠が盗まれました」

それを聞くと、オルテガは怪訝な表情を露わにした。

「東側はあまり出入りも少ない場所だが、魔宝珠がなければ危険度が高まる。変わりはすぐに用意したのか？」

「はい、予備の物を使っていますが、それは以前使われていたものなので、効力があまり持続できないと言われており……」

言葉を出す警備員も悔しそうな顔をしている。

町をモンスターから守るために、第一に中心部で結術士が魔宝珠を利用して、全体的に結界を張っている。しかし出入りが激しい場所では、その効力も弱くなりがちなため、町の中と外を行き来する場所では、必ず小さくても結界の元となる魔宝珠が置かれていた。

シュリッセル町には東西南北出入り口があり、昨日もモンスターに侵入された南口は、通常時でも馬車ごと乗り入れる業者や人の往来が激しいため、魔宝珠に対する警備は厳しくなる。だが東や西は人の往来程度しか見込んでいないため、比較的警備が緩い方ではあった。

「南口に人を割いていたら、東口がさらに警備が甘くなったというわけですね」

リデイスが漏らした言葉に、警備員は悔しそうな顔をしながら、頷いた。

「今、全力で犯人を追っています。町の中だけでなく、森ももちろん。また隣町にも応援を頼もうと、オルテガ様に確認を取りに来た

のです」

「森に逃げられたとなると、かなり厄介だぞ」

オルテガが渋い顔をしながら俯く。昔のように魔宝珠がたくさん生み出されていた時代と比べ、今、入手をするのは大変困難である。しかしリデイスはすぐに森へと逃げたことに対して、領けない部分があった。

「……もしかしたらまだ町にいる可能性が高いかもしれない」

思いついたことを発言すると、オルテガは目を丸くした。声に出しながら、考えを整理し、この場にいる人に伝える。

「結界を主としている魔宝珠は結術士でなければ使えない。いい値はするから、盗んだら売り飛ばすのが定石。けど売るということは他の町や村に行かなければならない。その移動を考慮すると、夜はモンスターの動きがわからないので避けて、明け方に移動を開始するはず——」

リデイスは視線を呆気にとられている警備員に向けた。

「明け方から怪しい人が出た形跡は？」

「出入りをする人を隅々まで身体検査をしています、特に出ていません。町全体の結界を張っている結術士にも聞きましたが、裏道を通ったとか、そういうことは感じていないそうです」

「もし仮説が正しければ、犯人は盗んですぐに夜の森の中へ逃げたか、引き返して町の中にまだ潜伏している可能性がある。——どう思いますか、お父様？」

娘の口からすらすら出てくる言葉に、多少圧倒されながらも、首を縦に振った。

「その可能性は大いにあるな。——引き続き、町の緊急配備を。念のために隣町にも頼むよう、手紙を書いておく。何か進展があったら、すぐに知らせること。いいな！」

「了解しました！」

警備員は大きく返事をする、一目散に出ていった。

オルテガはふうつと息を吐くと、まだ難しい顔をしているリディ

スの方に目をやった。

「どうした。あんなにはつきり言っておいて、仮説に自信がないのか」

「自信はあります。今後、犯人がどういう行動に出るか考えただけです。陽も上がり始めていますから、いい加減に脱出を試みようとするでしょうね。一番手薄だと思われるところから逃げるでしょうが」

柵を飛び越えるのが普通だと思うが、少々目立つ行動だ。東や西、南の出入り口は強化されている。北は川を挟んでルセリ祠まで続いているが、道は非常に険しい。普通なら行くはずなどない、普通なら――。

娘の言動に不思議に思っているオルテガをよそに、急いでご飯を食べ始めた。

部屋で動きやすい服装に着替え、最低限移動に必要なものを肩掛けの小さな鞆に詰め込んだ。

何もなければ昼の半ばには戻れるであろうが、念には念を入れておく。

いつも首から下がっている魔宝珠を握って感触を試していると、外からドアがノックされる。返事をする、マデナが入ってきた。

「フリート様とロカセナ様がお見えになりました。ルセリ祠に行きたいそうで、道案内人を探しているそうですが……」

短剣ダガーを腰に添え、鞆を持つと、背筋を真っ直ぐ伸ばしながら横を通る。

「私が案内します。盗みで余計な人員を割きたくないでしょうから」「けど怪我がまだ治っていないのに、あまり無理をなされては」

「見た目ほどではないから、大丈夫よ」

にこりと微笑むと、つられてマデナも頬を緩ませた。

昨日と同様に居間に行くと、黒髪と銀髪の青年の後ろ姿が目に入

った。ドアを開けると、すぐに振り向かれる。

「……リデイス」

オルテガが肩をすくませながら、娘を見ている。その視線を無視するかのよう、青年たちを見渡した。

「ルセリ祠に行くと言いました。私でよければ、ご案内します」

「もつと頼りがいのある人がいいのだが」

フリートは眉をひそめている。

「残念ながら、今、魔宝珠を得るために解く結界を知っている人で動けるのは私だけかと思います。……自分の身は自分で守ります。何かご不満でも？」

言葉では負けまいと、表情を緩めず言い放つ。それを聞いた口力セナはフリートの肩に手を乗せた。

「昨日の戦闘では彼女が油断していたから、判断しにくいけど、同年代の男子並には能力はあるし、動いていると思う。大丈夫でしょ、何も怪物が出るわけでもないんだから」

にこにこしながら論じているようで、幾分フリートの顔色が和らいだように見えた。

「……わかった。危険だと思ったら、すぐに下がれ。いいな」

「わかりました。お二方のご迷惑はいつさいかけません」

口を少し尖らせながら、可愛げのない返事をする。

そして部屋の中に入り、オルテガから地図を受け取ると、リデイスを先頭にして、屋敷から出た。

空は雲に覆われている。夕方が、もしくはもう少し早く雨が降り出すかもしれないだろう。

* * *

ルセリ祠に行くためには北門から町を抜け、橋が架かった川を越

えなければならぬ。

魔宝珠が盗まれたことが、町全体に伝わっているためか、いつもより通りは慌ただしく、妙な緊張感で満ち溢れている。そんな様子を横目で見ながら、足早に黙々と北門まで歩いていく。

「リデイスちゃん、そんなにピリピリしなくても、大丈夫だよ、僕たちがいるから」

ずっと無言だったことに気づき、はっとして振り返ると、口力セナが少し困ったような顔をしていた。

「申し訳ありません、そんなつもりでは……」

「言葉遣いもそんな堅くならないで。変に気を使っちゃうから」

「しかし……」

「そりゃ、城の人だから気を使いたい気持ちもわかるけど、僕たち騎士の末端だから、そこら辺は構わないって。それに歳も近いし、せつかくだから砕けた感じで行こう」

その申し出には正直有り難かった。町でも同年代の人はいるが、貴族である町長の娘というだけで、たいていの人から一步距離を置かれてる。

唯一、槍術で相手をしてもらっていた人は気がねなく話してくれるが、ほとんど遙かに年上。逆に同年代は町から出ていくことが多かった。

「ねえ、どう思う？ フリート」

話をそっちに振るのかと内心突っ込みをした。笑顔の口力セナと仏頂面のフリート、よく考えれば変わった組み合わせである。

「別にどう接してもらおうが、俺は構わない。ただ変に遠慮されるのは好きじゃない。どうせ戦闘になったら、言葉なんか選んでる暇はないから」

そう言つと、立ち止まっているリデイスを差し置いて、一人北門へと進み始めた。その後ろ姿をぽかんとしていると、隣で口力セナがくすつと笑っていた。

「何が面白いんですか」

「素直じゃないところ。僕のことロカセナで、あいつのことフリートで構わないからね。さあ案内を頼むよ、リデイスちゃん」

「はい……」

少しだけリデイスの心の中を占めていた緊張感が溶けたような気がした。

北門を抜けると、目の前には川が広がっていた。川と言いたいようなものに聞こえるが、流れが速くなければ、膝下程度まで濡れるが、歩いて向こう岸には渡れる。

また少し離れたところには足場用の石もあるため、森が広がる向こう側の川岸に行くだけなら何も問題はない。

リデイスが回り道をして、石の上に足を踏み出そうとしたとき、フリートの横顔が目に入った。目を細めて、森の向こう側を見ている。

「お前、向こう岸に渡ったことはあるのか」

ぶっきらぼうな言いように、躊躇いなど皆無であった。

「あるわよ。ルセリ祠の場所と解除の魔法を教えてもらったために」

「……何も感じないのか」

「とづくに感じているわ」

足下を注意深く見ながら、一步一步丁寧に進んでいく。森へ近づく度に、全身に寒気が襲ってくる。意志をしっかりと持っていないければ、すぐに怖じ気付いてしまうだろう。

一年前に、ルセリ祠に案内をされた時は、近くに結術士のおじさんがいたため、守られながら行くことができた。しかしそれでも、油断したら飲み込まれそうな場所であるとは認識できていた。

渡り終わると、手が微かに震えているのに気づく。それを悟られまいと、両手で握りしめた。

「リデイスちゃん、きつそうだったなら、僕たちだけで行くよ？」

ロカセナが顔を覗き込んでくるが、それに対して首を横に振った。「大丈夫です。——ここからの道はわかりにくいので、しっかり私の後に着いてきてください」

先頭を切って、微妙に残っている道を頼りに進み始める。元は綺麗に舗装された道があったが、手入れもされなくなり、草が無造作に増えた結果、手でかき分けなければ前に行けなくなってしまったのだ。

リデイスの身長と同程度ある草をやつとの思いで分けていたが、フリートが少し前に出ると、剣で薙払いだした。きよんとしてその様子を眺めていると、上から目線が降り注ぐ。

「あまりにも遅いからやっているだけだ。早く案内しろ」

「言われなくてもわかってる！」

口さえ開かなければ、好青年と見えなくもないのに、どうしてわざわざイメージを崩すようなことをするのだろうか。

何となくロカセナをちらつと見ると、さっきまで微笑んでいたが、今は何かに対して警戒しているのか、笑いなど見あたらなかった。見てはいけないうものを見たと感じ、慌てて早歩きで進んだ。

しばらくして、ようやく開けた場所に来ると、祠の入り口が目に入った。

「あそこがルセリ祠です。中は一本道ですが、少し道が悪いので先に行き——」

「いや、俺が先に行くから、お前は真ん中にいろ」

「はい？」

フリートの顔色がより強ばっていた。

「それは僕も賛成。リデイスちゃん、気分が悪くなったら、遠慮なく言っていいからね。あと何かあったら、魔宝珠よりも自分の身を守ることに……。いいね？」

ロカセナの言葉に対して、首を縦に振る。

祠に踏み入れる前に、二人は首から下がっている魔宝珠を取り出し、剣を召還した。

フリートは前に見たのと同じ、片手でも両手でも使えるバスタードソード、一方ロカセナは片刃のサーベルであった。

明らかに警戒している様子に、リデイスも不安になり魔宝珠に触

れようとした。だがそれをフリートが制止する。

「余計な体力は使うな。俺たち二人で敵わない相手が出てきたら、逃げるしか選択はない」

「何か悪いことでもあるの……？」

二人が警戒しているのを感じ取っているのもあるが、無意識のうちに警鐘が鳴り響いているのもあり、言葉を零す。

ふと入り口付近の地面に違和感がし、目を細めて見ると、足跡が残っていた。つまり誰かが洞窟に入っていたということだ。

「人間相手に戦闘になるかもね」

「……なるべくなら避けたい」

割り切っているロカセナと苦い顔をしているフリート。

だがそれ以上に、何かがここにいるような気がした。

「リデイスちゃん、顔色悪いけど？」

「だ、大丈夫です。気にしないでください」

この先に誰かいるのだろうか。いるのなら、人間だろうか、それとも……。リデイスの心の中では漠然とした不安が漂い始めていた。

4、始まりを導く鍵（4）

ルセリ祠の中に足を踏み入れると、言いようもない悪寒に襲われた。このまま進みたくないという思いも強くなるが、二人の剣士に挟まれているおかげで、リデイスはどうにか思い止められた。

フリートが持っている、光を照らす魔宝珠——光宝珠（まほうしゅ）のおかげで、闇に覆われることなく、前に進むことができる。

小さい祠のため、中心部までは入り口からあまり距離はなく、すぐに開けた部分が見えてきた。その時、何か鼻に突き刺さるような不快な臭いがしたのだ。

訝しげに思っていると、フリートは立ち止まった。急に止まるので、顔が背中にあたってしまう。だがリデイスの視界は彼のマントだけになり、不快な臭いも少し途切れた。

「これは少し意外だったかも」

ロカセナが後ろから前に出ると、リデイスが見えない場所で何かをし始める。顔をきよるきよる動かし前を見ようと試みるが、フリートは決して前方を見せてはくれなかった。

「いったい何が起こっているの！」

すぐ傍にある事象がわからなく、若干苛立つ。それに対して、ロカセナは静かに声を出す。

「貴族のお嬢さんが見たら、卒倒するものだよ。……これはさすがに見られたものじゃない」

ふと地面に投げ出されている足が視界に入った。その脇から何か液体が——赤い液体が流れている。

「人が死んでいるの……？」

「……ああ」

その言葉で疑問としていた一つが解消された。

地面が踏み荒らされていたことから、誰かが中に進入していたのはわかっていた。

いったい誰であるかはその場ではわからなかったが、おそらくその人が今、目の前で息絶えている。血を大量に流して――。

そんな人を横目で見つっ、ロカセナはしゃがみ込み、淡々と声を発する。

「これは固定用結界のために使われる魔宝珠だ。たぶん昨晚盗みに入った人かな。事情を聞けなかったのは残念だけど、とりあえず最低限、珠は取り戻せた。ただ――」

ロカセナの声がフリートの方に向けられる。

「この傷、人為的なものじゃない。切り裂かれている、鋭い爪で」

「……モンスターか」

「気をつけた方がいいね。抵抗する前に、前からばっさりやられている。――リディスちゃん、この先にある魔宝珠に番人とかいるの？」

「そういう話は聞いたことない」

以前に行ったときも、そのような気配はまったくなかった。だが、今感じる不安感は、明らかにこの先に恐怖が待っているとした考えられない。

「おい、この先にある魔宝珠の結界を解くのにどれくらいかかるんだ？」

背中越しから聞こえてくる、緊張した声。彼は剣をしっかりと握りなおしていた。

「そんなに結界を解くための文章は長くないから、集中力の状況による」

「なら、周りのことは一切気にせずに、集中しろ。あとはどうにかする」

その言葉は嬉しかったが、ただの結界を解く者としてしか見ていないのが少し悔しかった。だがそれでも今はやれることを精一杯やるしかない。

フリートが歩き始めると、従うかのように口を一文字にしてすぐ後ろに付いていった。二人の気の使い方を無下にしないために、そ

ここにいる人は見ないで――。

ロカセナと並ぶと、二人は頷きあい、フリートが意を決して開けた空間へと走り始めた。

次の瞬間、思わず耳を覆ってしまうくらいの、咆哮が聞こえた。

ロカセナに連れられて中に入ると、角張った羽が印象的な、首が長く、鋭い爪を尖らせている、昨日の大型獣よりもさらに大きいモンスターがいたのだ。

あまりの大きさと鋭さに、体が硬直してしまう。そんな相手にフリートは剣先を向けている。

彼が動くと、その方向にモンスターも動く。少しずつ入り口から離れつつ、ある程度の距離まで縮まったところで、飛び掛った。

息を吐く暇などなく、次々と斬撃を加えていく。だがモンスターはそれをかわしもせず、一気に爪で薙ぐ。あれに触れれば、次への攻撃だけでなく防御までもが難しくなるだろう。

足がすぐんでいるリデイスに対して、ロカセナは肩を軽く叩き、もう一方の手で、日にさらされている場所へと指で示した。

「リデイスちゃん、あそこに魔宝珠がある。僕が君をサポートするから、その間に解除してくれ」

「けど、それじゃあフリートは！」

「僕たちがあそこへ近づけば、必然としてモンスターは近寄ってくる。だから――行くよ」

背中を押されると、先に走り始めたロカセナの後を、無理矢理足を動かしてすぐに追った。モンスターは二人の存在に気づいたのか、ロカセナが言った通りに攻撃対象を変えてくる。

向かってきたモンスターの爪に対して恐怖を感じていると、ロカセナが間に入って抜いたサーベルを振りかざす。

小気味のいい音が鳴り響き、サーベルがはじかれる。

それはその爪の鋭さを静かに物語っていた。

リデイスは既に息も荒くなりながら、光が集まる中心へと走る。

祠の天井から穴が空き、その隙間から入ってくる日の光をたくさん

に浴びているその場所に、目的の魔宝珠は置いてあった。

リデイスや二人が常に持っているものとは、何十倍も大きい。両手で抱えるのがやつとの大きさである。

その周りには薄く靄もやのようなものが掛かっており、触れてみようとする、拒絶を意味する電撃が走った。

「解除の言葉……」

鞆から筒を取り出し、そこから年期がかった羊皮紙を抜き取る。

一方、フリートが叫びながら、モンスターの胴体を攻撃しようとするが、尻尾で叩き落とされたのが視界に入った。それは嫌でも切羽詰った感覚に陥ってしまう。

「早く、読まなくちゃ……」

目の前に起こっていることを直視すれば、手は止まる。だが焦りながらも、段階を次へと踏んでいく。

リデイスは首から下げている自分の魔宝珠を取り出した。

目の前にある魔宝珠を解除するには、二つのことが必要であるのだ。

一つは結界を解除するための詠唱文。

そしてもう一つは、鍵と認められた別の魔宝珠を持つ者の存在――

十八歳になるときに、その者たちへ初めて魔宝珠が与えられる。

それは魔宝珠が生まれたときから、ドラシル大陸では遠い、遠い昔から伝わっていることで、どの町や集落でも行っていることだ。

魔宝珠を持つことで、一人前の大人として認められ、その時に持ち主の能力にもよるが召還するものも決めるのである。

そして同時にリデイスは町長の娘として、ここの魔宝珠の結界を解く鍵としての自らの魔宝珠に植え付けられたのだ。

近づけると、呼応するかのように、大小違う、二つの魔宝珠が輝き始める。

その柔らかな光を見ると、焦っていた心が穏やかになっていく。まるで、リデイスの心を落ち着かせるような光である。

ある程度落ち着いたところで、羊皮紙を広げて、目を通した。

フリートやロカセナの険しい声が聞こえる。視線を下に向けていたが、そこに傷ついたフリートの体が目に入った。

「フリート！」

一気に現実世界へと戻ってくる。だが彼はちらつと厳しい顔を向けた。

「早く解除しろ！ 俺たちのことは気にするな」

「でも……」

「何かをやりたいのなら、目の前の扉を開けてからにしろ。お前が鍵なんだろう！」

そう言い捨てると、再び戦火へと舞い戻っていく。

心が痛み、涙が出そうになったが、それを必死に押さえている自分自身がいた。

泣いてはいけない。泣いたら心が折れてしまうから――。

大きな魔宝珠を真っ直ぐに見て、溢れる気持ちを抑えながら口を開いた。

「レーラズの樹から生まれた魔宝珠よ――。今こそ、我が気持ちを受け取りたまえ」

鍵となるリデイスの魔宝珠がより鮮明に輝く。

「大切な人を守るために、守る力をくれたまえ。大切な人と共に歩むために、戦う力をくれたまえ。――我はきつとその想いに報いよう」

結界の魔宝珠が溢れんばかりの輝きを放ち、靄が薄くなっていく。モンスターがこっちに向いたような気がしたが、集中力は途切れなかった。

「――魔法の力を受け持つ宝珠よ、今こそ真なる力を解き放て――！」

リデイスの魔宝珠の光が消えた途端、結界をもたらず大きな魔宝珠が彼女を包み込むほどの光を発した。

次の瞬間、絶叫が耳へと突き刺さる。すぐに光は消えると、目の

前にはのたうち回るモンスターの姿があった。

呆然とそれを見ていたリデイスを余所に、その隙を逃すまいと、フリートはモンスターの背中に深く剣を突き刺した。

呼吸が乱れながらも、しっかりとした声を発する。

「——魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ——生まれしすべてものよ、在るべき処へ還れ！」

剣を中心とした光と共に、モンスターは黒い霧と変化していく。

その量はリデイスが昨日還したものより、何倍も多かった。

黒い霧は祠の天井にある隙間から外に出ていく。

そんな様子を三人は立ち尽くしながら眺めていた。

そう、激しい戦闘の残り香を噛みしめながら――。

黒い霧もすべてなくなると、フリートが思わず崩れ落ちた。

見とれるのもやめて、すぐに駆け寄ろうとしたが、大きな魔宝珠が微かに動いた。その意図を察知すると、魔宝珠を抱えて、フリートの元へと向かう。

そこでは口力セナがすでにおり、止血用の布を取り出して、応急処置をし始めている。

いつになく眉間にしわが寄っているフリートの左腕からは、血が流れていた。

腰を下ろして、視線をフリートに合わせつつも、リデイスはただ俯くしかできない。

いつ怪我を負ったかはわからないが、もっと早く結界を解除していれば、また状況は変わったかもしれないだろう。

それに一人では何もできなかった。二人に守られながら、最低限のことしかできなかったのが悔しいと思わずにはいられない。

ずっとシュリッセル町に留まっていたから、外の世界などほとんど知らない。いつか町を出たいとも思っていた。しかし、おそらくこれ以上に厳しい世界が広がっているのである。出血多量の遺体も直視できず、巨大なモンスターを見るだけで足がすくんでしまう。一連のことを通して、自分を過大評価していたと、様々と見せつけ

られた気分だった。

「リデイス」

名前で呼ばれた。ちゃん付けではない、低い声。
困惑気味な顔を上げると、少しだけ落ち着いた表情のフリートがいた。だがそれと同時に布から染み出る血が心を貫く。

「ごめんなさい……」

どうにかして出した言葉がそれだった。それを聞いたフリートは不機嫌な顔に戻る。

「どうして謝る」

「だって、私が——」

「お前がその魔宝珠の結界を解除したことで、お前に対してすぐにモンスターが襲ってきた。だがそこには結界が張られていたから、逆に返り討ちができた結果、十分なダメージを与えられたんだ。それでどうして謝る？」

「結界？」

まったく予想外の言葉に目を丸くする。フリートは若干呆れた顔をしていた。

「気づいていなかったのか。いや、無意識のうちに結界を張っていたのか」

「何を言っているのか、よくわからないけど……。この結界を解除した以上のことはやっていない」

はつきり言い切ると、ロカセナが思案を巡らせながら、感心したような表情をしている。

「たまにいるんだよね。集中しすぎることによって、普段以上の能力が引き出され、魔法を発動することが。——たぶん普通の人なら解除だけで精一杯だよ」

フリートは納得しないような様子であつたが、それをロカセナは笑顔で振り切った。

「さて、早く町に戻ろうか。思った以上に怪我人が出たから、早く治療してもらわないと。その怪我、完全にフリートの判断ミスだろ

う。あまり器用なことはできないんだから、モンスターだけを相手
していればいいんだよ」

「……っ、その減らず口、閉じている」

忌々しい表情で言葉を吐くと、右手で左腕を押さえつつ、立ち上
がった。いつの間にか、フリートの剣は消えていた。体力の減少を
抑えるために、魔宝珠に戻したのだろう。

代わりにはないが、念のためにリデイスは自分のショートスピ
アを召還した。ロカセナの実力を低く見るわけではないが、こうし
ていないと落ち着かないのだ。

ロカセナを先頭にしながら、来た道を帰っていく。

出る前に広間を見ると、何もない空間が広がっていた。光が降り
注いでいた先にあった魔宝珠はない。いつか代わりのものを置いて、
日の光をふんだんに含んだ魔宝珠を再び作ろうと思っていた。

* * *

シュリッセル町に戻ると、慌ただしい時間が過ぎていった。

フリートを病院に連れて行った後に、ロカセナと共に詰め所へと
行き、盗まれた魔宝珠を渡すと、目を見開かれて話を求められる。

同時に苦勞して手に入れた大きな魔宝珠を結術士に渡すと、驚かれ
た。

「町長が娘や派遣された騎士と共に持つてくるとは言ったが、こん
なに早く帰ってくるとは……」

「どういう意味ですか？」

知らなかったモンスターの存在を思いだし、疑り深い視線を送っ
てしまう。

「いや、この魔宝珠の結界を解くにあたって、集中力を高めるため
に、相当な時間を費やすと思っていた。だから早くても夕方くらい

と考えていたんだ」

最高点から日は下がり始めているが、まだ夕方と言える時間ではない。

「すみませんが、これを守る番人というものは存在しませんよね？」

「そんなものがどうして存在する。ただでさえ、元から二重で鍵をかけているんだ。それ以上のことをする必要はあるのかい？」

結術士は目を瞬かせていた。相手の考えを読むような力はないが、嘘を付いているようには見えない。

あそこにいたモンスターは、たまたま入り込んだものののだろうか。それならば町から近い場所に、あんな大きなモンスターがいたというのは、驚愕の事実だ。

フリートの怪我や盗人が遺体となっていた件もある。話を求められると、より詳細に覚えている範囲で口を開き始めた。

それを口カセナが付け足しをしていくという感じで、あつと言う間に日は落ちていった。

5、光を頼りに進む道（1）

詰め所から解放されたときは、だいぶ辺りは暗くなっていた。

同じ頃、ルセリ祠にいた盗人の遺体も回収され、最近町に来た若者と言うことが判明した。

祠にある強力な魔宝珠の話聞きつけ、欲にかられてさらに得ようとしたのだろう。町人であれば盗まれるのを防ぐ術が施されているのを知っているが、彼は知らずに近づき、結果として命を落としてしまった。

今となって詳細はわからないが、その方向で事後処理を進めているらしい。

リデイスはロカセナの横について歩きながら、彼が持っている光宝珠ほうちゆうの光りを頼りに、屋敷へと送ってもらっていた。

「今日はお疲れさまだったね。休む暇がなかったけど、大丈夫？」

「丸一日、槍を振り回していた頃もあるから、意外に体力はあるのよ」

「へえ。それは頼もしい言葉だね」

にこにこしながら、受け答えられる。光宝珠の光りは、リデイスが普段使っているのよりも大きかった。魔宝珠は持ち主の精神力や体力に大きく左右される。そのため同一の種類の物でも差が目に見えてわかる。つまりロカセナの能力は高いということだ。

「ロカセナは、ミスガラム王国の騎士なんだよね。普段は何をやっているの？」

「下っ端だから、僻地に行つてモンスター狩りが中心。お城にも出入りするけど、王様たちの警護は近衛部隊の仕事だから」

「モンスター狩り……、今日みたいな相手にも？」

「まあ、たまに。あれは結構な大物だよ。最低でも連携の取れた五人以上で戦う相手さ。後方支援等も入れれば、十人いると安心できる」

「え……」

思ってもいなかった人数の多さに、不意打ちを突かれて言葉を漏らす。そんな相手に二人で挑んだ――。

「正直、フリートがあれくらいの怪我で済んだのは奇跡だね。もう少し戦闘が長引いていたら、ちょっとヤバかったかも」

「普通、明らかに相手との力量が違うとわかったら、一度引くべきじゃないの」

「彼、真面目で頑固だからね。ギリギリの線を――」

ロカセナがリデイスに向かって微笑んだ。

「リデイスちゃんの力を計算して考えた結果、挑んだと思うよ」

「……私は何も……」

おそらく褒められたことに対して、しどろもどろに返す。この二日間で下手に持っていた自信をどん底に突き落とされている。言葉を素直に受け止めきれなくなっており、よくわからないと言った方が正解かもしれない。

続く言葉を選んでいると、ぱんつと頭を手で優しく叩かれた。

「時に悩み、考えることも、若者の特権だよ」

その微笑みに対して、一瞬鼓動が早くなった気がした。だがすぐに冷静な突っ込みを入れてしまう。

「若者って、たいして歳は変わらないと前に言った気がするけど。随分悟ったような言い方をするのね」

「外に出ると、人生は波瀾万丈なんだよ」

笑われながら、適当に流された。その様子に少し啞然としたが、気がつけば屋敷の前に。部屋の中からは光宝珠の光りが漏れている。

「フリートの傷が閉じたら出発するけど、まだこの町にいるから、暇だったら案内してくれると嬉しいな」

「私で良ければ」

もう別れかと思っていたが、有り難い申し出を聞き、すんなり受け入れる。今日は雑談などほとんどできなかった。もっと王国のことを、外のことを知りたい――そう思い始めている。

どうせ屋敷にいても、刺激のない毎日。楽に話せる、二人ともつと時間を共有する方が、ずっと充実した日々を過ごせるだろう。

* * *

次の日、フリートの様子でも見てこようと思ったが、予想以上に疲れが溜まっていたのか、昼近くまではなかなか起きあがれなかった。ようやく起き上がり居間に行くと、マデナが片づけをしている最中であつた。リデイスを見るなり少し目を丸くする。

「あら、意外に早い起床で。昼食と一緒によろしいですね」

普通よりかなり遅い起床のはずであるが、何を言っているのだろうか。

「朝に口力セナ様がいらして、町長へ詫びと報告をされていたわ。結界をより強力なものにできたということとを城に戻ったら報告するそうよ。帰り際に、リデイスちゃんが相当疲労困憊のはず。だから無理はさせないでおっしゃっていたわ」

それを聞いて、肩を落とした。ふとさっきまで家を踏み入れている彼の顔が思い浮かぶ。

——何でもお見通しのね。

多大なる魔力を秘めた魔宝珠の結界を解除すれば、体力に負荷がかかるとは、聞いたことはなくもなかった。だがそれを当たり前にわかっており、その先も考慮してくれる発言がすごい。

——そういえば私が案内することも始めからわかっていたような様子だった。早く休めと言ったことも、きっとその延長線上？

気が利く青年たちと言えばそれで終わりだが、それ以上に気になり始めた存在となっていた。

朝食と昼食を一緒に取り、再び二階にある自室へと戻っていった。フリートのお見舞いと思ったが、逆に顔を出したら起こられそうな気がするからだ。

窓を開けると、心地よい風が吹く。机の上にあった開きかけの古い本が、パタパタと捲られる。かつて魔宝珠を生み出したと言われるレーラズの樹の存在についての本だ。

遠い、遠い昔から、それこそ世界が生まれたときから、このドラシル大陸の中心にそびえ立っていたらしい。話によれば、縦長の大陸全土から見えるほどの大きさだったとか。

そこから産み落とされるように、魔宝珠は突如として現れ、人々に恩恵を降り注いでいった——五十年前までは。

なぜなら突然、レーラズの樹がなくなってしまったのだ。膨大な光りで包まれたと思ったら、その一帯——大陸の中心にあるアスガラム領域と共に忽然と消え去ってしまったのだ。残ったのは円形に大きくくぼんだ地形のみ。

そしてそれ以後らしい、モンスターが人間の前に現れ始めたのは正確な理由は定かではないが、均衡を守っていた樹がなくなったことにより、突然変異で現れたのだと言うのが今のところの有力説だ。

または北部にある山に囲まれたニルヘイル領域から、独自に作り出して出しているという噂もある。ただ情報の信憑性はかなり薄いため、前者の説が一般的だ。

シュリツセル町はミスガラム領域でも、かつてアスガラム領域があった場所に近いところにある。そのため窓から見える景色には、異質な場所も見えてくる。レーラズの樹があった場所はくぼみとなり、そこには草木も生えず、動物は近づかない。周りと一線を越えて、奇妙な場所となっていた。

きつと研究者たちがこぞって、何十年も調査しているのだろうが、まったく成果はない。必死にあの地へと赴くが、これと言って手がかりを得られないのは非常に悔しい思いをしているだろう。

そんなことをリデイスは想いながら、一度本を閉じた。この本に載っている話は、卓上の理論や想像だけでなく、事例や調査結果なども多く含まれている。つまり著者やデータを提供した人は自らの足で外に出ているということだ。

リデイスはほとんど町から出たことはない。ごくたまに、社交辞令で近くの町にまで行くことはあるが、自由に飛び出したことはなかった。

首からぶら下がる魔宝珠が煌めいていた。正直、還術士の端くれになれたのは偶然が重なったことである。たまたま魔宝珠を得たときに、相当な力量の還術士が町に滞在していた。その人から洗礼を受けなければ、あのモンスターを還すような特殊な力は得られず、ただの一貴族の娘のままだっただろう。それをきっかけとして、伏せていた想いが溢れ出そうになる。

将来は人を守るために動きたいとずっと思っていた。だから立派な還術士になって、助けを求めている人の傍に行きたい。だが力はまだまだ足りず、今のまま一人で外に出てもプラスのことなどないだろう。

「もつと強くなりたい。だから……」

その時、町全体を覆っていた結界が一度途切れたことに気づいた。遮るものがなくなった日の光がしっかり射し込んでくる。魔宝珠を入れ替えて、改めて結界を張る時間だ。

個別にある出入り口の結界は顕在しているため、大事には至らないが、少し落ち着かない時でもある。

ふと森の奥の方で何かがうごめいた。僅かではあるが何かがいる。「まったく、最近の相手は学習能力まで付き始めているなんて」

口を尖らせつつ、窓を大きく開け放つと、そこから勢いよく飛び降りた。

すぐにその場所へと辿り着くと、リデイスの腰くらいの高さの四本足の獣型のモンスターが二匹進入していた。

召還したショートスピアをぎゅっと握り、呼吸を落ち着かせて、

切っ先を向ける。

一昨日戦ったようなモンスターよりも遙かに格下で、突進攻撃のみであるため、かわすのも容易。適度に足元目がけて何度か刺すと、動きが鈍くなった。

体力的にはあまり回復していないので、急いで終わらすために、狙いを澄まして、急所にスピアを突き刺す。

「魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ。——生まれしすべてものよ、在るべき処へ——」

スピアの先に光が集まってくる。本能的に危険を感じ取ったモンスターが残っている力を振り絞って逃げようとしたが、そんなことさせるはずなどなかった。

「還れ！」

力強く声を出すと、モンスターは光に包まれ、そして黒い霧となつて終わる——はずだった。

突然、脳内に激しい映像と叫び声が飛び込んできた。思わず左手で顔を抑え、右手で握っていたスピアを杖にしてどうにか立ち続ける。

「な、何……」

入り乱れるように流れてくる映像は、憎悪に溢れた人が他人に対して刃を向けているもの。または遺体となった人物を泣き叫ぶ姿など、見聞きしているだけでも辛い。

「やめて、何、いったい……」

言つても止まらない。ひたすらに流れ続けてくる。

そして最後には誰かの損傷した遺体が脳内を流れた。

「お願い、やめて、やめて……！」

目から涙が零れる。泣いても無駄。頭が壊れる、そう察した。薄らと前方を見れば、残りのモンスターが突進してこようとしている。あれに突き飛ばされれば、消えるのだろうか。

だが黒髪の青年が前に立ちはだかった。マントなど羽織っていない、すぐに出てきたという感じた。

突進してくるモンスターに対して、召喚した剣を声と共に切り裂くと、モンスターは一瞬で消失して黒い霧となった。

気が付けば結界が張りなおされている。もう大丈夫だろう。そう思うと気が抜け、なし崩しに崩れ落ちる。だが途中でフリートに受け止められた。

「リデイス！」

呼びかけられると、びくつとしながら顔を向けた。おそらく酷い顔をしているのか、彼は意表を突かれたような顔をしている。

「どうしたんだ……」

「声が、声が……」

今起こったことを伝えようとしたが、上手く言葉が出てこない。

思い返すだけで、震えが止まらなくなる。

「おかしい……今までなかったのに」

「モンスターに何かされたのか？ 女に飢えているやつも聞いたことがあるが……」

小刻みに震えたまま、首を横に振る。

「二匹いたけど、私から見ても弱くて、一匹はすぐに還せた。けど還した直後に頭の中に、妙な映像が入り乱れて、悲鳴が聞こえて……。一昨日還したときは、何ともなかったのに」

フリートが眉をひそめる。彼も知らないことなのかもしれない。発生したから約五十年、未だにわからないことが多いモンスターではあるが、還すことで、モンスターから影響を受けたなど、昔会った凄腕の還術士からさえ聞いたことはない。疲労が蓄積しているから起こったという理由も考えられなかった。

意味が分からない――。

モンスターの黒い霧も消えたことで、だいぶ脳内の映像は収まったが、それでも思い出すとあの惨劇がまたリデイス自信を苦しめる。そんなリデイスに対して、さすがに深刻に思ったのか、フリートにしては優しい言葉を投げかけてきた。

「とりあえずもう何もいないから、安心しろ。疲れているんだ、寝

れば落ち着くだろう」

彼にそう言われると、妙に安心感があつた。思わずリデイスはすがるように、フリートの肩へと倒れ込む。

「おい、大丈夫か。変な冗談なら、やめろ」

「呼吸を落ち着かせてから、戻らせて。またマデナやお父様に怒られる」

適当なことを言いつつ、ほんの少しだけ肩を借りる。

ふとマメを潰した痕がいくつもある自分の手が見えた。還すために必死に努力しているのに、今の映像や叫びがこれから続くのなら、耐え切れない。呼吸を落ち着かせつつも、自問自答をし続けた。

「お前、どうして還術士になりたいんだ」

不意にこの場にそぐわない質問をされた。少し投げやり気味に返す。

「……人を助けたい、理不尽な世の中から綺麗ごとだけど人を救いたい。まあ、今の立場から逃げたいという気持ちもあるけど。……あなただつて、騎士団に入っているのだから、助けたいという感情は持っているんでしょう？」

その言葉を出すと、フリートの目が一瞬泳ぐ。何か聞いてはいけないことでも聞いただろうか。

返答がないのに気になったが、続けて今の本音を漏らしてしまう。

「けど、今後ももし今のような、自分の脳内で耐え切れないことが続いて起こってしまうのなら……」

続く言葉を彼の顔を見て、どうにか飲み込む。不意に寂しそうな表情をされたのだ。その表情に目を丸くする。

「……お前らしくない」

零れた言葉に引き続き、不思議そうな表情をしてしまう。

あんなに人に対して厳しいこと言っておいて、こんな時に持ち上げられるとは、彼の思考が全然読めない。

「油断してモンスターを還し損ねたことに対して、散々言ったのに、すぐに立ち上がった。だが今回は酷い光景を見たからやめるのか、

「還術士を？」

「聞いてないから、わからないのよ！ あの小さなモンスターであの叫び。もっと大きなもの相手だったら……」

「たまらず悲鳴に近い声を上げる。」

「何も言っただけじゃない。」

自信がなくなった状態で、あんな酷い状況にあつて、おとなしく父親のひいたレールに乗りうとさえ思ったのに、フリートの言葉でまた揺れ動かされる。だがそんなリディアの様子を気にも留めていなかった。曇りのない目で見ってくる。

「今まで還術をしているやつでそんな現象にあつた奴は聞いたことはない。いや、いたかもしれないが、それを自分自身で対処したやつもいるんじゃないのか」

「本当なの？」

「確証など何もないが、力強く出された言葉。」

差し出された光に手を触れていいのだろうか――。

「わからないが、この大陸だって広い。色々な人がいるだろう。」

「俺も遠征で色々なところに行くから、ついでに探してやってもいい」

最後の文はどこか躊躇い気味だった。面倒なことを口走ってしまったからか、それとも――何かをリディアから求めているのか。

さらに揺れ動かされるリディアの心。しかしまだ決定的な言葉が続けなかった。

「何か言いたそうだな。声に出さないと、わからない」

ぶっきらぼうな言い方だが、それに対してすぐに答えることはできなかった。

「なぜなら還術士を続けるという利点がはっきりと導けないからだ。」

「……ごめん。まだわからない。今のさっきで、頭が回らない」

「そうか……」

一つの機会を自分から蹴り飛ばしたのかもしれない。いつも仏頂面のフリートがこんなに気を使ってくれた話をしてくれたのに、ま

ともに返事をする状態ではなかった。

「……俺の怪我がもう少しよくなるまではいるから。何かあったら話せばいいさ」

「え？」

リデイスは目を瞬かせる。だがフリートは視線を合わせようとはしなかった。

「フリート？」

「……ほら、もういいだろう。さっさと屋敷に戻れ」

落ちて着いてきたこちらの状態をわかっていたかのように促され、先にフリートが立って手を差し出してきた。驚きつつも、その手をしっかりと握りしめて、リデイスは再び立ち上がった。

6、光を頼りに進む道（2）

どうして、あんなことを口走ってしまったのだろうか。

いつもなら他人に対して、首など突っ込まないはずだが。

哀れに思ったからなのか、あまりの震えに対して。

好奇心が芽生えたからか、謎の現象に対して。

それとも試したかったのか、彼女の心の奥に閉まっている想いに
対して――。

徐々に平静が戻ってくる彼女をフリートは横目で見つつ、屋敷の
近くまで送っていった。口力セナなら、中まで送っていくだろうが、
出入り口でのやり取りも面倒であるし、何より自分自身はまだ怪我
人だ。心配そうな目で見られたくはない。

別れ際に軽くお礼を言われると、彼女は背を向けて歩き始めた。

昨日のように、凜として背筋を伸ばしているのではなく、先ほど
の出来事のように今にもしやがみ込んでしまいそうな姿ではなく、
その中間くらいの、ゆっくりと視線を上げ始めたような姿である。

それを見届けてフリートも宿に戻り始めた。だが不意に視線を感
じ、振り返ると、相棒とも言える青年が腕を組んでにこにこして、
そこにいた。いつからいたのだろうか、そう感じさせるほど気配が
なかった気がする。

「リデイスちゃんを連れていくの？ フリートがそんな提案を差し
出すなんて、本当に珍しい。正直言って当てもないし、それくらい
自分でどうにかしろって言うのかと思っていた」

「……望んでいればの話だ。外に出たがっていたのは気付いていた。
それに還術士が少なくなっている今、個々を鍛え上げることができ
れば今後としてもいいことだろう」

「まあその言い分ももっともだけど、町長が許してくれるのかな。
可愛い娘としばしの別れだなんて」

「それをどうするかは、あいつ次第だろう。俺はきっかけを与えた

にすぎない」

止めていた歩みを再び動かし始めた。

まだ左腕の傷の痛みは残っている。だがフリートやロカセナだつて、あまりこの村に長居はできない。この町だけに用があつて、城を出てきたわけではない。もう一カ所行くべきところがある。

「そういえばさ、面白い話を聞いたんだよね」

意味ありげな内容を言つたロカセナをちらりと見る。

「凄腕の還術士であつた男性が、ある日を境にしてぱつたりと還さなくなつたという話を。そんな彼が実は僕たちが探している人物と同一人物らしいよ。それと別の町に居ると思つていたけど、実は今この町に滞在しているらしい。話を聞いてどうにかなる問題でもないけど、まあ町の中なら、連れていってもいいんじゃない？」

「……それは本当なのか」

「僕がフリートたちに対して、嘘を吐くメリットはないけど」

「それもそうだな。町の中くらいなら、すぐに許しも出るだろう……」

言いながら、脳内の片隅に何かがつつかかった。思わず立ち止まつたが、そのままロカセナは宿へと向かつて歩き続けている。その背中を自然と目で追っていた。

ロカセナの情報源はよくわからないことが多いが、経験的に真であることが多い。つまり今回もその人がこの町に居るというのは、確率的に高いだろう。

だが、それ以外の些細なことなのか、隠れた根本的なことかはわからないが、何かがフリートを立ち止まらせた。

不思議に思つたのか、ロカセナが不思議そうな顔をして後ろを振り返る。

それを振り払うかのように、早歩きで追いつこうとした。

ゆつくりと空は夕暮れがcaつている。

ゆつくり、ゆつくりと――。

* * *

疲労が残っている状態で、還したためか、より疲れが蓄積されていた。

夕飯後はすぐにベッドに入り、リデイスは眠りに落ちてしまった。だが夢の中で、突然、還す時に脳内をよぎった光景が再び現れる。逃げようと思っても逃れられず、ずっと声が耳に残ってしまう。聞きたくない、心の底を突き刺すような声が。

そしてうなされながら、やっとの思いで飛び起きた。汗で下着は濡れ、呼吸が荒い。実際に起こっていないのに、また戻ってくるような感覚に陥る。

「どうして、やめてよ……」

まだカーテン越しから日の光は入ってきていない。もう一度寝る時間帯ではあるが、再び眠りに付けることができそうになかったのだ、とりあえず体を横にして少しでも疲労を減らそうとした。

「このままこれが続くの……」

ぎゅっとシーツを握りしめた。呼吸は落ち着いてくるが、心理的な面では何も解決はされていない。

あの光景はあまりに心理的にショックであった。きつとしばらくは夢などまともに見られないだろう。

どうしてあんなものが見えてしまったのか、そしてこれから続くのかと思うと、辛いところがあった。

「差し伸ばされた手、握ろうと決めていた。声だけでなく、実行しなくちゃ……」

やがてうつすらと外は明るみを帯び始めていた。

* * *

リデイスが異様な光景を見てから、三日ほど経過した。

怪我は確実に癒え始めており、まだ完全に槍を振り回すところまではいかないが、最低限の自衛程度ならできるだろう。

だが、疲労は徐々にしか回復できていない。夢は見なくなったが、不安が心を覆っており、安心することはできない。それが顔にも現れているのか、朝食の場でオルテガに心配までされてしまった。何があつたと聞かれても、信じてもらえるはずもないので流すしかなかった。

もしかしたら精神的なものでまで蝕んでいるのかもしれない。家に引きこもりすぎるのもよくないと感じ、町へと繰り出すことにした。雑踏でざわめく町の中心街へと向かおうとした時に、ふとある宿屋に視線がいく。そしてその宿の一階でご飯を食べている青年二人と目があつた。

黒髪のフリートは視線を逸らしたが、銀髪のロカセナは手で拱いている。それに従い、中に踏み入れた。

「やあ、リデイスちゃん、元気にしていた？」

「ええ、まあ……。二人はどうしたの、出かけるの？」

食後の紅茶を飲みながら、シュリッセル町の地図を広げている。

「フリートの調子も良くなってきたから、探索がてら、歩き回ろうと思って」

「それなら私に言ってくれば、案内するのに」

「けど疲れの方は大丈夫なの？」

「あまり家に居すぎても、かえって気が滅入るだけよ」

肩をすくませながら、リデイスは嘆息を吐いた。家だけでなく、一人でいるのに耐えきれないと言う部分もあつたが、それではフリートだけでなく、ロカセナにまで気を使わせてしまう恐れがあるので黙っておく。彼はリデイスの還した直後の不思議な現象を知らないからだ。

「それじゃあ、お言葉に甘えて案内を頼もうかな。別にモンスターが飛び出てくる分けでもないし」

「わかった。けど半日くらいだと、町の半分も案内できない。何か希望のところでもある？」

ロカセナは手を顎に添えて、考え込む。一方、フリートは視線を机に向けたまま、口を一文字にしている。

「フリート、どこか行きたいところがあるの？」

「い、いや別に……」

しどろもどろに返される。絶対にどこか行きたい場所があるはずだ。口を開こうとしかけて、ロカセナがやんわりと遮った。

「そういえばフリート、評判のいい武器屋や防具屋に遠征のときに行くよね。あとは古本屋とか」

「古本屋……？」

「そうそう。こいつ、実はこう見ても——」

「余計なことを言うな！」

鋭く割り込まれて、一瞬きょとんとしてしまう。深入れをしてしまつてはいけないことらしい。だが、それでも古本屋の単語を聞いたときのフリートの反応は分かりやすかった。即座に突っ込みを入れたが、顔の緩みは隠しきれていない。にやにやしつつ、話をまとめた。

「それじゃあ、東の商店街に行きましょう。あそこには武器屋もたくさんあるし、大きな古本屋もあるから」

その案を出すと、にこにこした様子と口を尖らせている様子といった風に二人の表情は違うが、しっかりと首を縦に振った。

中央にある商店街は食べ物屋が多く、少しずれた場所に延びている東の商店街は、流れものの傭兵が武器や防具を求めるだけでなく、大きな古本屋があるため、学者系の人もちらほらと伺える。

そこまで人が多い通りではないが、昼過ぎとあって、まばらに人

はいた。

「本屋は奥にあるから、武器屋とかを見ながら行きましょう。気になるところがあったら、遠慮なく言ってね」

リデイスにとっても、この通りに来るのは久しぶりで、少し浮き足立っている部分はある。なぜならこの通りを一人で歩いているところを目撃されたら、いったい何をしているのだと、小言を出される恐れがあるため、避けていたのだ。

ロカセナは相変わらずにこにこと眺めているだけなので、気に入っているかはわからないが、おそらく大丈夫であろう。フリートは窓の奥に見える品をじっと見つめながら歩いている。

「別に立ち止まって見てもいいけど」

「そこまで欲しているものではないから、大丈夫だ。それよりお前の還術印を入れてもらった店はあるのか？」

モンスターを還すためには、還術士によって還術印を施されたものが必要である。その言葉に対しては首を横に振った。

「私はたまたま町に通りがかった腕のいい還術士にやってもらったから、今はいいいわ。一応、それなりのレベルの還術印を押すところならあるけど……。フリートくらいの実力なら、自分で押せないの？」

「俺は、還術はできるが、還術士ではない。だから還術印を押せないんだ」

そう言っつて、先頭に出て歩き始める。ゆっくりと首を傾げると、ロカセナが隣に寄ってきた。

「僕たち騎士はね、人々からモンスターなどの驚異から守るための手だてとして、剣術などを習うんだ。その中でも優秀な人は還せるように教育される。でも術印を押すなんてことまでは要求されないから、知らないわけさ。つまり純粋な還術士とは違うと言っこと」

「ロカセナも還術できるの？」

「一応ね。あまり強い相手でなければ」

歯を出しながら、にかつとする。それを軽く相槌を打つ。

つまり逆に言えば、フリートはそれだけ優秀な人と言うことだ。
この前の祠での戦闘で、あのような巨大なモンスターを還せたのだから。

後ろから眺めていると、ある店の前で立ち止まり、興味津々に防具を眺める姿は一瞬凛々しい騎士に見えなくもない。もう少し中身が良ければ、人付き合いがよくなるではないかと、ふと思ってしまう。

溜息を吐いていると、不意に視線を感じた。思わず振り返るが、いつもと変わらない人々の往来が続いている。

「どうしたの？」

ロカセナが少しだけ眉をひそめていた。

「何でもない。ただの気のせい——」

「おい、さっさと行くぞ」

立ち止まっているリデイスたちに対して、フリートが声を投げかける。何だかんだ言いつつも、一番楽しんでいるのは彼であった。慌てて追いつき、並んで歩くと、すぐに二階立ての古本屋に辿り着いた。若干ながらより興奮しているようにみえるフリートを促しながら、中に入った。

少し埃っぽいが、棚に本が綺麗に並べられており、それが天井まで付きそうな勢いだ。フリートが背表紙を見ながら、一冊手に取ると、感嘆の声が漏れる。

「だいぶ珍しいものがあるな。しかもグレイゾーンまで」

「ミスガルド領外の学者さんや知識人が割と流れてくるのよ。そこで資金調達のために、売り払うわけ。たまに完全に黒の内容もあるから、そこは見逃してあげてね」

「ああ……」

上の空で聞かれながら、彼は本を物色し始めた。まるでリデイスの存在などなかったかのように。その姿がまた妙に様になっている。少し離れたところで、腕を組んでいるロカセナを見ると、仕方ないと言わんばかりの顔をしていた。

「フリートって、いつもあんな感じなの？」

「まあ珍しいものには目がないとことにしておいて。僕、あっち側の武器屋を見てきたんだけど、少し時間をもらってもいい？」

「ええ。私も寄りたいたところがあるし。またある程度時間がしたら集まりましょう」

「そうしようか」

そこで一度解散となった。

ロカセナは背を向けて、いつもの歩調で進み始める。リデイスも雑貨屋さんに行こうとしたとき、十歳に満たない少年がおぼつかない足取りで歩いているのが目に入った。服装からして、平民くらいの子に見えるが、靴がないのが気になる。

「僕、どうしたの？」

「……何でもない」

目の焦点が合わない様子でそう言われても説得力はない。

「とりあえず、どこかで休んだら？　すごく疲れているけど……」

「大丈夫。お家に帰るから」

その足取りで、ふらふらと裏通りへと入っていく。あの裏通りは表通りへと続く道。おそらく大丈夫であろうが、どうにも気になつてしまう。思わず彼の後を追った。

裏通りにふらふらと歩いている少年の背。向こうの表通りから漏れる光は僅かである。入ってみて気付いたのは、意外に長かったということだ。

息が少しずつ上がってくる。数十歩進んで、一度立ち止まる。それを繰り返していたが、少年はひたすらに前に進んでいた。

どうやら杞憂だったらしい。このまま一緒に行って、ただのお節介である。戻ろうとしたとき、反射的に短剣ダガーを引き抜き、左手を胸の前に添えて振り向いた。

「なんだ、気づくのが早いだろう、お嬢さん」

リデイスの二回りくらい体格の大きい中年の男性がにやにやしながら立っていた。頬に傷があり、どこかで見た記憶がある。

そして後ろをちら見すると、子分なのか四人ほど男性が出てきていた。

——畏だったか。

自分の油断に苛立ちつつも、前と後ろへの警戒を強めた。

「金色の髪の素敵なお嬢さんが、東の商店街を歩いているのを見てね。確かその人はとても優しい、貴族の娘さんだというのを思い出したんだ」

目立つ金色の髪に対しての評価が自分の中でまた落ちる。右手で短剣を握りつつ、左手で魔宝珠を握りしめた。そして心の中でしっかりと解除の呪文を唱える。

「お嬢さんに対して、どれだけの値段が付くかな……リデイス・ユングリガ」

「逆でしょう、報奨金はどれだけ付くのかしら、指名手配犯！」

その声とともに、ショートスピアを召還し、目の前の男へと鋭い切っ先ではなく、棒の部分の前にして突っ込み始めた。

7、光を頼りに進む道（3）

路地裏という狭い空間では、リデイスが使っている槍のような長い武器は扱いにくい。だがどうにか上手く使いこなして、短所は現れないようにする。

相手は前に一人、後ろに三人。本当ならば全員を一蹴したいが、それでは時間がかかりすぎるため、大通りに出るのが先決であろう。目の前の中年の男相手に、切っ先ではなく棒の方で突きを入れつつ、後ろに下がらせる。その男はにやけた顔をまだしており、それが癪に障った。

「町長の娘が、貴族らしくないと聞いていたが、本当なんだな。生きのいい女は好きだぜ」

男が下がるのをやめると、脇をめがけて突いた棒が手を差し出されて止められ、そのまま握りしめられた。

はっとして顔を上げると、最上級のにやけた顔で見下ろされていた。

「棒の部分なんかで遠慮するなよ。俺のこと、チクチク刺しても構わなかったんだぜ。変に気を使うと、あとで後悔しても知らないぞ」その言葉とともに、槍が勢いよく引つ張られる。力では敵わない、そう悟り、手から離す寸前に、ショートスピアを魔宝珠に戻す。引きずり込まれるという展開は避けられたが、武器を引つ込めたのに変わりない。

男は掴むものがなくなったため、つまらなそうな顔をしていた。だが後ろからの距離も前からの距離も、少しずつ縮められた気がする。

「さて、あまり長居すると、連れが現れそうだからな。早めに切り上げるか。お前ら、早く娘を捕まえろ」

声のトーンが下げたと思うと、後ろから男たちが一気に近づいてきた。狭そうにしているため、並んで来ることは無理そうだが、そ

の分縦に長い。この狭さで連続でかわしきる自信はなかった。

リデイスは短剣^{ダガー}を引き抜き、中年男の方に強行突破をしようと試みる。

威嚇で剣を振ると、数歩下がった。そこにできた僅かな隙間を通り抜けようとしたが、ほんの少し後ろに気を取られていた瞬間、男の拳がリデイスの腹に入り込んだ。

為す術もなく、近くの壁に激しくぶつかった。

「……っ痛！」

「ちょこまかするやつには、まずは動きを封じることが先決だよな。お嬢ちゃん、俺たちをあまり舐めては困る」

四人はリデイスを囲みながら、近寄ってくる。

彼らの存在は、詰め所で見ただ張り紙からも知っていた。強姦や強盗を中心として、シュリツセル町を荒らしている一団だ。意外にも頭は回り、上手く逃走されているため、犯人逮捕までは至っていない。

おそらくリデイスを狙ったのは身代金目当て。だが彼らの考えからすると、それだけで終わることはないだろう。自身に迫る恐怖が少しずつリデイスの精神を蝕む。

必死に立ち上がるうとするが、思った以上にダメージが大きく、激痛が走る。

「綺麗な体が俺は好きだ。あまり抵抗しないでくれよ」

「誰が、大人しく——」

言いかけて、男が急に右に吹っ飛んだ。呆気に取られて、その後ろを見ると、非常に不機嫌そうなフリートと頭を抱えている口力セナの姿があった。リデイスを見るなり、声を張り上げられる。

「お前、自分の立場がわかっていないのか！」

「わかってるわ！ でも、つい目の前に現れた男の子が気になつて……」

「どうせ罠だろう。還術士である前にお前は女だ、気をつける！」

「……説教はまた後だ」

視線をリデイスから、男たちへと向ける。威圧をかけているのか、今にも泣きそうな顔をしている情けない男たちに成り果てていた。「お前ら、確か賞金首の奴らだな。おとなしく俺たちの小遣いの一部になれ！」

勢いよく拳のみで突っ込もうとしたフリートに対して、男たちは脅えつつもナイフを取り出した。それを振り回しながら、牽制を取る。

吹っ飛ばされた中年の男も立ち上がり、刃の部分がギザギザの非常に鋭利な大型のナイフを向けていた。

しかしそれでもフリートの勢いは止まらない。

近づくとも男たちの腕に蹴りが入る。痛みと共に手元が緩んだ隙に、ナイフを手から落とし、次々と拳を入れていった。中年の男には顔に一蹴り入れると、呆気なく伸びてしまった。

もはや一方的な攻防に、リデイスは開いた口が塞がらなく、口力セナは溜息を吐いていた。

「ねえ、フリート、どこか怒っていない？」

「ちよつとね、正義感が強すぎて、犯罪者相手にはきついんだ。まあ、後でその怒りの矛先はリデイスちゃんに向かうよ」

「それは勘弁してよ……」

「フリートの言うことももっともだよ。今回は僕たちがすぐに気づいたから良かったけど、普通なら女性にとっては最悪の展開になるよ。こんな気づきにくい路地裏では」

「……ごめんなさい」

フリートとは違う、諭すような言い方に、リデイスは身が縮こまる思いがした。腹にできた痣は自分の愚かさとともに、しばらく消えることはないだろう。

リデイスを捕らえようとしていた男たちを、すべて気を失わせる、と、ご忠告通り突き刺さる視線がこっちに向かれた。視線を地面に向けて、それから逃げようとする。

だが唐突に何かの気配を感じた。顔を上げると、驚いたフリート

と顔があつたが、その奥の方に対して目を細める。

「何かいる……」

ゆっくりと立ち上がり、路地裏を見渡す。フリートとロカセナはリデイスの行動に対して、首を傾げている。

「おい、いったい何なんだ」

「ちよつと黙つて。何だろう、この感覚……」

そう呟くと、突然リデイスの魔宝珠が光った。それを手に取り、無意識にショートスピアを召還した。フリートの眉間にさらにしわが寄る。

「何を突然……」

その言葉を返す前に気配が明確化した。ようやく気づいたのかフリートは振り返ると、そこには一匹の真っ黒い狼型のモンスターがいたのだ。鋭い前歯が目につく。

やがて軽く助走を付けた後に、飛びかかってきた。フリートが備え付けの剣を振るうが、簡単にかわされる。

「この……!」

逆側に降り立ったモンスターを見ながら舌打ちをした。

そして間髪おかずに、リデイスたちに向かって襲い始めた。それをギリギリでかわさざるを得ない状況になる。

「動きが速い。召還する前に、攻撃されるぞ」

忌々しくフリートが吐く言葉に、リデイスは唾を飲み込んだ。つまり今の状態ですぐに還すことができるのは、リデイスだけ。

だが還すということは、同時にあの時の恐ろしい光景が蘇るかもしれないのだ。

スピアを握る力が強くなる。そして鼓動が早くなり始めていた。戦陣を切らなければならないのに、何を躊躇っているのだろうか。

ロカセナも備え付けのサーベルを取り出し、二人で襲ってくるモンスターに対して牽制をかける。

さすがに騎士とあって、剣の使い方はしっかりしており、かわしつつも攻撃を仕掛けられていた。しかし相手の体力はあまり落ちて

ない。なぜなら還術印を施していない武器で攻撃しても、モンスターに対して効率よくダメージを与えられないからだ。

リデイスが攻撃することが一番良いはずであるが、フリートは気を使ってなのだろうか、そのような言葉は出してこなかった。

ロカセナがフリートの傍に近寄る。

「フリート、僕が引きつけるから、その間に武器を召還して」

「そういう役は俺の方が適役だろう。俺にやらせろ」

「いや、召還する時間を考慮すると、僕じゃ遅すぎる。生身の剣で相手をするのは少し気が引けるけど、訓練していることだし大丈夫」
少しながらロカセナの表情が強ばっている気がした。

一人で間合いを詰め始め、引きつけさせようとする。

不意にモンスターがリデイスたちとは逆方向に顔を向けた。そして振り返ろうとする。

その先には大通り——シュリツセル町の人たちがたくさんいた。

『還術士というのは、ただなりたいと思っただけではなれない』
突然、昔聞いた言葉が脳裏をよぎる。

『なりたくてもなれない人は、たくさんいる。そして嫌々とならされてしまう人もいる。だがなりたくて、なった人は幸運な人だ。——リデイス、君もだ』

意を決して、スピアをしっかり握り、ロカセナを差し置いてモンスターに向かって駆け出す。

後ろから怒鳴る声が聞こえるが、今は真正面にいる相手に集中する。

『還術印を今から施す。リデイスの胸の内に秘めている想いが、いつまでも続くことも込めながら』

モンスターが突然迫ってきた相手を攻撃対象として定めると、飛び上がった。

その動きを見極め、集中しながら、下から上へと突き刺す。

どうにかかすったようで、血が若干地面に落ちた。

なぜだろうか、いつもより切っ先の光具合が激しい気がする。還

術を施した武器で攻撃した場合、浄化の意味も含めているため、光を発するが、今回は少し激しい気がする。

そしてモンスターもかすただけなのに、動きが目に見えて悪くなっていた。それでも諦めずに、再び襲いかかってくるのを正面から受け止める。

肩の力が抜け、いつも以上に冷静にその様子を見ることができた。

「魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ」

ささやくような言葉はリデイス自信しか聞こえない。

噛みつくこうとしてきたモンスターに対して構えた。

「――生まれしすべてものよ、在るべき処へ――」

切っ先とモンスターが触れた瞬間激しい光が発生する。

「還れ！」

そして同時に、不幸にも予測は的中し、リデイスの脳内に誰かの悲鳴と生々しい映像が浮かび上がる。頭が割れるような甲高い声に逆らうことはできない。

目の前のモンスターが黒い霧となって消え始めているのを辛うじて目で確認しながら、その場に崩れ落ちた。

だが予めわかっていたのか、フリートによって受け止められた。

「自分に負担がかかるとわかっていて、やる馬鹿がいるか」

「還術士は……目の前のモンスターを還さなくちゃ、存在する意味がないでしょう」

敢えて自分に対して厳しい内容を呟いてみる。それを聞いたフリートは少し驚いたような顔をしていた。

ふと、誰かが手を叩く音が聞こえる。ロカセナがいる方からではなく、逆側の、モンスターが行こうとした通りから人が踏み入れてきた。フリートがリデイスを支える手に力が入る。

映像は消え去ったが、まだ胸のざわめきは収まらず、うつすら目を開けるしかできない。近寄ってくる人物はぼさぼさの焦げ茶色の髪と無精髭を生やしていた。

「いやあ、俺でも動きを封じるのに手を焼いた相手を、まさか弟子

によつて還されるとは思つてもいなかった」

声を聞いて、はっと目を見開く。

リデイスにとつて半年ぶりに聞く洪みのある声の主は、使い古されたマントを羽織っている四十近い男性だった。

「リデイス、ああいう相手に果敢に挑むのは良いが、まだお前の力量じゃ、集中力も使うし、きついだらう。今だつて立つのも苦しいはずだ。まだまだだな」

「誉めているのか、けなしているのか、はっきりしてください。ファヴニール先生」

苦笑いをしながらその名前を発すると、フリートが唾を飲み込んだ音がしっかり聞こえた。そして探るような目でファヴニールを見る。

「あなた、還術士のファヴニール・ヨセフスですか？」

「……ファヴニール・ヨセフスは俺のことだが、どうした？」

「初めまして、ミスガルム城の者です。あなたを再び城に迎え入れるべく、探しております」

それを聞いたファヴニールは目を細めて、リデイスを抱えたまま膝を付いているフリートを見下ろしていた。

8、光を頼りに進む道（4）

リデイスは、ファヴニールの値踏みするような表情と緊張気味のフリートを見比べながら首を傾げた。知り合いではないが、まったくの他人でもないという関係だろうか。

ファヴニールはマントを翻し、背を向けると、フリートが慌てて声をかけた。

「待つ……」

「詳しい話はあとだ。まずはリデイスを休めさせる必要があるだろう。近くに俺が泊まっている場所があるから、そこまで付いてこい」
有無を言わない様子にあのフリートが若干圧倒されている。その上から目線の態度に対して、肩をすくめながら、リデイスは歩き始めた大きな背中を眺めた。

「あの人は知り合いなのか？」

立ち上がりながら、フリートに不思議そうな顔で囁かれる。

「ええ、一年前に私のショートスピアに還術印を施してくれた人。その後も基本的な還術の仕方は教えてもらったけど、突然いなくなつて。半年ぶりというところかしら」

「それじゃあ、敏腕還術士というのは間違っていないようだ……」

「ねえ、城に再び迎え入れたいって、どういう意味？」

「そのままだ」

まともに答えてくれなく、素っ気なく返されて、少しだけ頬を膨らませた。腹を殴られた衝撃や、還術するのになかなか集中していたため体力は減少気味だが、まだ動ける範囲ではあったので、一人で歩を進め始める。そんなリデイスに対してフリートはすぐ横に、口カセナは後ろに付いて歩く。その時、ぼそとフリートに呟かれる。
「あの人は昔、ミスガルド城の専属の還術士として遣えていた、三年前まで」

初耳であった。だが今、詮索をしても、ファヴニールに置いて行

かれるだけ。ぐつと言いたいことを飲み込んだ。
暗がりの静かな路地裏から出ると、明るく騒々しい表通りへと出た。

今さっきまで、この裏で戦闘を繰り返していたというのに、この様子には拍子抜けしてしまう。逆に言えば、あの時モンスターを逃してしまつたら、この明るい空間は恐怖に満ち溢れた空間へと変貌してしまつたのかもしれない。

恐ろしいことに気づきつつも、ゆつたりとした歩調で進んでいるファヴニールの後を追いつづめた。

大通りを抜け、人の往来がなくなつたところに、ファヴニールが滞在している宿はあった。少し寂れた宿であり、リデイスでも存在は知らない建物である。

「寝るだけという感じの宿だから、リデイスには少し悪いかもしくないが いいか？」

「構いません。座れば、今はそれでいいので」

宿に踏み入れ、ベルが置いてある無人のカウンターの脇を通り抜け、一番奥にある部屋へと進む。ドアを開けると、ベッドと机が一つだけ置いてある、簡素な部屋が広がっていた。

リデイスはベッドの端に座り込み、壁に寄りかかりながら呼吸をする。思ったよりも疲労が出ていたらしい。全身に重力が一気に降りかかってくる。

ファヴニールは椅子に座り込むと、腕を組みながら、立っている青年二人に目をやった。その目つきはリデイスに見せるような優しさで密かに込められているものではなく、完全に疑っているようであった。

「さて、話の続きを一応聞こうか。格好からすると、お前らはミスガラム城の騎士団というところか」

「そうです。三番隊のフリート・シグムンドと」

「同じく三番隊のロカセナ・ラズニールです。ファヴニール様の噂は、隊長や姫様からよくお話を聞いています。還せないモンスターは存在しないほどの腕前であったとか」

フリートは直立不動のままおり、ロカセナはいつものように愛想の良い笑顔を振りまきながら、ファヴニールの出方を伺っていた。

「姫様か……。元気か？ さぞ、昔よりさらに綺麗になっただろう」

「ええ、年々お綺麗になっていますよ。そんな姫様もファヴニール様が突然消えた後は、非常に落ち込んでいたそうです。……どうですか、一度お顔を見に来られませんか？」

「断る」

即答をされ、フリートの眉間にしわが寄った。ロカセナも続けようとした言葉が止まってしまふ。ただファヴニールだけが鼻で笑っていた。

「お前たちは知らないかもしれないが、俺はもう城に戻るつもりはない。それは何度も重ねて言ったはずだ。わざわざ探しに来てくれたのはご苦勞なことだが、残念だったな。早く城に戻るがいい」

それで終わりだと言わんばかりに、立ち上がり背を向ける。

一方的な終わりに、重苦しい空気が漂うが、それを打破するかのようにフリートは口を開いた。

「それは――」

そして次の言葉を聞いて、リデイスは目を大きく見開いた。

「もう還術はできないからですか？」

数瞬、沈黙が続く。フリートはファヴニールの背中をじっと見つめたまま、回答を待つ。リデイスも信じられないような想いで見つめていた。あんなに強かった人が、まさか――。

「……根拠は？」

「あなたは一度も自分のことを“還術士”とは言っていないことだけでは、弱いですか？ それとあなたと出会った直後の言葉、モンスターを追いつめるという表現を使っていた。還術士なら、還すというのが真つ先にでる言葉ではないんですか？」

確かにリデイスは再会した直後、ファヴニールが喋った言葉に、少しか違和感がしたのは覚えている。だがそれがこんな大きな内容に通じるとは思ってもいなかった。

ファヴニールは頭をかきながら、フリートの方に振り向いた。うつすらと笑みを浮かべている。

「ただの平としては、頭が回るんだな。直球過ぎる聞き方じゃなかったら、諜報としても使えそうだ」

誉め言葉に対して照れているのだろうか、フリートは俯いてしまう。そしてファヴニールは肩をすくませながら、視線を天井へと向けた。

「お前の言う通りさ。俺はもう還術はできない、ただのちよつと剣術が上手いオッサンに成り果てた——」

「どうしてですか？ 一年前は強力な還術印も押せるほど、凄い腕をお持ちだったのに！」

ずつと外野にいたりリデイスは驚きの告白に反射的に言葉を返す。そんな彼女を諷めるかのように、穏やかな表情をされた。

「事情はわからないが、武器に光がまったく灯らなくなったのさ」ポケットから魔宝珠を取り出し、念を送っただけで、片刃の一つであるファルシオンを召還させる。刀身は短く、身幅の広い刀で、刃は弧を描いているが、峰は真っ直ぐである先端が重めの剣だ。

乱雑に布で巻かれており、それを一番近くににいるフリートへと差し出した。

「拝借させて頂きます」

畏まりながら、布を取り外し、刃の部分を見た。

光沢で刃の部分はきらめいている。だがそれだけであつた。

「どうだ、何か感じるか？」

「……何も感じません。ただの剣の感触しか見られません」

口を一字にして、黙り込む。

信じられないという表情をしながらリデイスは立ち上がり、フリートの隣に行くと渡された。

還術印が施されていれば、微かに温もりを感じるはずであつたが——彼の言うとおり、何も感じなかった。

「いつも使っていた武器に還術印がなくなった。それなら他の武器に印を、それかもう一度押せば良いだろうって思うだろう。だが、押してもらっても俺自信が還術できなくなっているから、意味がない」

リデイスからファルシオンを取り上げると魔宝珠へと戻した。

「……還術ができないって、よくわからないです」

どうにか振り絞って出した言葉がそれだけだった。ファヴニールはしゃがみ込み、リデイスの頭を撫でながら、視線を合わせる。

「前にも言ったが、還術はそれなりにセンスがないとできない。それは努力してどうにかなるとも限らないものだ。俺は典型的な努力派よりもセンス派だからな。センスよく動けなくなってしまったと思えば、還術できなくなってもおかしくないだろう」

「どうして、そんなことに……」

「わからない。——だから俺は探そうとしている、根本的な原因を」立ち上がり、窓の方に歩き、リデイスたちには背を向ける形となる。ちょうど夕陽が窓から差し込み始めており、ファヴニールを照らしていた。

「還術については、知らないことが多すぎる。モンスターをどこに還すのかさえ知られていない。なぜなら、還すために必要なものを生み出す、樹がなくなつたからだ」

ドラシル大陸の中心部にある、魔宝珠を生み出していると言われた樹だが、それは数十年前に忽然と姿を消していた。

「樹を探すことは無理かもしれないが、樹について残っている伝承を探れば、少なからずとも還すことについてはわかるかもしれない。そしたら、俺がなくなつた還術も元に戻せるかもしれないだろう。ただ、不確定要素が多すぎるのが現状だが」

「還術について調べる……」

今まで考えもしなかったが、根本的なことを理解すれば、リディ

スの今の状況を変えることができるのだろうか。いつもは多少自分で考え抜いてから質問するが、今は思ったことをすぐにこの場で聞かなければ後悔するような気がした。意を決して、自嘲気味に笑っているファヴニールに聞く。

「ファヴニール先生、還術をするときに、副作用なことは起こるものですか？」

すぐ横にいるフリートが目丸くして、耳を傾けている。ファヴニールは不思議そうな顔で振り向いた。

「いきなりなんだ。副作用？ 体力減少くらいだろう、集中力を使うんだから」

「いえ、違って……。還した直後に悲鳴のようなものが聞こえたり、惨い光景が脳裏をよぎったり……」

意識をして思考を遮断するが、それでも体は既に身に染みているのか、微かに震えている。

「そんな話は聞いたことがない。いつからだ？」

「数日前に結界を張り直した日に還してから……」

「最近だな。しかし残念だがわからない。だが、仮に俺が還術できなくなったのと、リデイスが変な現象にあい始めたのが、同じような原因からというのなら……。何かの前触れかもな」

「還術に関する、何かですか？」

「還術だけでなく、モンスターにもだ。最近、やつら強くなっていないか。それに人にもよく襲い始めているというか、量が増えている。——その事実に基づいているから、俺を探していたんだろう、騎士のお二人さん」

フリートとロカセナが首を縦に振る。

「これから何が起こるかわからない。だから俺は再び還せるようになるために、また旅に出るのさ。いつもふらっと数週間出かけているだけだったが、これからの旅はおそらく長期に渡る。だから今回はしっかりしておきたいのさ」

「……私の不可解なことも、還術について知ればどうにかなるので

しょうか」

「さあ、わからない。一時的なものということも、否定はできないが、可能性はあるかもな」

「なら——」

「駄目だ」

拒絶するかのように、リデイスが発しようとしていた言葉を遮った。

「探すのなら、俺とは別のやり方で探した方がいいだろう。俺は自由奔放に駆け回る。お嬢のリデイスには辛いだろう。なんなら——」
フリートとロカセナを見渡しつつも、リデイスの元に戻ってきた。
「城下に行ったらいい。あそこはいい意味で混ざりあって、様々な情報が得られる。俺は半ば無理に城から出てきた身だから行きたくないが、騎士と一緒になら行きやすいだろう」

その内容を隣にいる青年にも言われたのを覚えている。手を差し伸べてもらったが、まだちゃんと返事をできていなかった。

「それか、もう還術しないのも手じゃないのか？」

ファヴニールから提案される優しさとも取れる言葉。しばらくはうなされる日々が続くかもしれないが、日が経てば何事もなかったかのようにできるかもしれない。

だがそのような弱音にも取れる内容をあの時フリートは言わなかった。

自分らしく生きるためにはどうしたらいいか。

それは——さっき還した時点で決まっていた。

「——自分で解決策を見つけます。だからフリートにロカセナ、私を城下へ連れていって。多くのモンスターを還し続けて、人々を守るために」

フリートは決意の籠もった表情で頷き、ロカセナも穏やかな表情で頷いてくれた。

視線を戻せばファヴニールが腕を組みながら、窓枠に寄りかかっている。その表情はどこか嬉しそうだった。

「さすが俺の弟子と言ったところか。俺の方で何かわかったら、家か城に匿名で手紙を送るさ。——しかし、リデイス、オルテガさんにはどうやって説得する気だ？ 典型的な貴族の考えを持っているだろう。将来はどこかに嫁でも出す気のはずだが、許してくれるのか？」

「そ、それは……とりあえず話をしないと……」

予想外の敵を思い浮かべ、しどろもどろになってしまふ。肩をすくめて思考を巡らせつつ、何かを思いついたのか、にかつと笑みを浮かべた。

「そうだ。モンスターの攻撃で体に悪影響が及び、もう子供が産めない体になったから、それをどうにかするために——」

「誤解を招きすぎる変な妄想はやめてください！」

速効でファヴニールの考えを打ち切った。

とは言うものの、困ったことであるのにには変わらない。うむむと考え込んでいると、ロカセナが軽く肩を叩いた。

「まあそこら辺は心配しないで。僕に任せてよ」

この微笑みの貴公子はやはり口は達者なのだろうと感じた瞬間であつた。

9、光を頼りに進む道（5）

リデイスの体の調子も落ち着いてきたので、三人とそしてファヴニールは、町長の屋敷へと向かっていた。

ファヴニールはせっかくの機会だからと、オルテガに会いに来たらしい。頑なな性格と自由奔放な性格という、真逆ともいえる要素を持っている二人だが、意外にも相性は悪くないようで、ファヴニールが町を訪れたときは、よく二人で話をしているのをリデイスは見たことがあった。

屋敷に戻る頃は陽が暮れており、ちょうど夕飯時であった。お腹を刺激しそうな、いい匂いがしてくる。

ドアベルを叩くと、マデナが血相を変えて飛び出てきた。リデイスの顔を見るなり、猛烈な勢いで口を開こうとしたが、後ろにいる男三人を見て、途中で止まった。

「ロカセナ様、フリート様、それに久しくお顔を拝見していなかったファヴニール様ではありませんか。いったいどうして……」

「町で偶然リデイスさんと出会いましてね、無理を言って町の方を案内してもらっていたんです。こんな時間まで引っ張り回すことになってしまい、申し訳ありません」

ロカセナは一歩前に出て、頭を垂れた。それを見て、マデナは慌てた様子を見せる。さっきから表情がころころと変わりつぱなしだ。「顔を上げてください、ロカセナ様。皆様と一緒にいらしたのでしたら、心配などご無用だったようですね。よろしければ、夕飯を召し上がっていきませんか？ スープの方を多く作りすぎてしまったので」

「しかし、リデイスさんを連れ回しただけでなく、そのようなご好意まで……」

「以前から、オルテガ様はあなたたちとお話をしたいと仰っていました。きっと快く受け入れてくれるでしょう」

ロカセナは少し困ったような顔をリデイスに向ける。むしろ話をしにきたのだから、それは有り難く従った方がいいだろう。軽く微笑みながら、首を縦に振った。

「そこまで言っていただけなのなら、是非ともご馳走になります」

「わかりました。少しお待ちくださいね」

そしてマデナは急いでオルテガに確認を取りに、屋敷の中に戻って行った。

リデイスはちらつと横目で、にこにこしている銀髪の青年を盗み見た。流暢に紡がれる言葉に対して、感嘆してしまう部分がある。交渉等に慣れているのだろうか。

よく見れば端正な顔立ちで、思わずドキッとしてしまうほど、力ツコよく見えた。

「リデイスちゃん、僕の顔に何かについている？」

「別に……何でもない」

視線を逸らしつつ、心の中を鎮める。

——何で一瞬、見とれていたんだろう。

やがてマデナは戻ってきて、オルテガも快く承諾したということ伝えてきた。そして四人は光宝珠の明かりで包まれている屋敷の中に入ってしまった。

六人という、普段の倍の人数で食べた夕食は、食事の内容こそ特に目新しいものはなかったが、非常に美味しく感じる事ができた。会話も途切れることなく、他の人々の表情も穏やかで楽しそうである。食事を一人ではなく、大人数でした方が良いというのは、やはり雰囲気によるものなのだろうと、リデイスは感じた。

食後のデザートも済ませ、コーヒーや紅茶を頂いているときに、ロカセナは斜め前にいるオルテガの方に向き合った。リデイスはオルテガの横にいるため、少し体を動かさなければ、二人の様子を見ることはできない。

「さて、オルテガ様、少しお話を宜しいですか？」

「何だね？」

久々にファヴニールと再会したオルテガは、ワインを開けて、二人で飲んでいたため、少しほろ酔い状態である。

「最近、ミスガルド城において、様々な知識を多くの人に広めようと動きがあるのはご存じでしょうか？」

「まあ、それなりには知っている。学びの場所を作ることや、城中の情報を広くに公開しようという動きなどのことだな」

「ええ、その通りです。その動きの中で、情報や知識を積極的に得てもらうために、地方の町や村の人を受け入れも行い始めようと思っ

っているのです」

「ほう、それは思い切ったことをするものだな」

「しかし無闇に受け入れますと、どうしても城下が飽和状態になったり、治安が悪化する懸念が拭い切れません。そこで試しに移行期間を設けまして、その件に関しては検討をしたいと思っていますのです。そして、その移行期間では、城の者などに推薦された者だけを受け入れる予定となっています」

滑らかに出てくる言葉、真面目な様子で話す姿に、オルテガやマデナは聞き入っている。そしてロカセナは前置きから本論へと入った。

「——そこで、僕たちはリデイスさんを推薦しようと思っているのですが、いかがでしょうか？」

突然、名前を出されたりリデイスは思わず跳ね上がりそうになる。そして顔には出さないように、横にいるオルテガの様子を覗き見る。少し目を見開いていた。

「リデイスを——王都にということか」

「そういうことになりますね。以前から、特にルセリ祠などでお世話になった時から気づいていましたが、潜在能力は高いと思います、もちろん知識の豊富さや様々な情報の捉え方も。もしきちんとした

教育を、また多くの知識を得ることができれば、必ずシュリッセル町に良いことをもたらしてくれると思いますよ」

ハッターや嘘だとしても、リデイスは自分自身を持ち上げられるような内容を聞くのは正直恐縮してしまう。

オルテガは黙ったまま口を閉じ、言葉を返そうとしない。少し酔っている状態ではあったが、今は仕事中の気難しい表情に戻っている。やはり一筋縄ではいかないらしい。

「……リデイスはどうなんだ？」

急にオルテガから話を振られて、きょとんとする。すぐに我を戻して、前もって考えていた無難な回答をする。

「是非、王都に行ってみたいです。様々な知識の宝庫であると聞いていますから、興味は非常にあります。シュリッセル町も大きな町ではありますが、少し歴史や政治部分に関しては弱いと言いますか……」

還術という単語は出すなと言うのが、ロカセナが指摘してくれたことだ。普通に考えれば、貴族の娘が還術をやっているだけでも珍しい。オルテガもそれに対しては、あまり良い顔をしていないのは知っている。

だが知識を深めるという内容なら、何も嘘は言っていない。なぜなら書物や人からの話を聞いて、リデイスの身に起こっている現象の理由がわかれば、旅に出ることなく終わる可能性もある。リデイスが言ったことは、ただの現時点での予定であり、希望的観測の意を持って言っているのだ。

「やはり——は逆らえないのか」

不意にはつきりと聞こえなかったが、オルテガは何かを呟いた。それが耳に入ったのはリデイスだけであり、他の者はただオルテガの返答を待っている。ロカセナは真っ直ぐとした視線を向けながら、フリートは若干緊張しながら、ファヴニールはその様子を面白そうに眺めていた。

沈黙が部屋の中を駆け抜ける。

だがオルテガが大きく息を吐くと、その空気が和らいだ。

「そんな嬉しい推薦を無碍^{むげ}にするわけにも行かないだろう。――リデイス」

「は、はい」

「定期的に手紙を必ず送ること。危険なことはしないこと。そして必死に学ぶこと、それができるのなら、行ってもいい」

「本当ですか!」

案外早く折れたことに、驚きのあまり感嘆の声を上げてしまった。ただし、本当に無茶はするな。城周辺の方がしつかりした結果は張られているが、こつちよりもモンスターが襲う機会を伺っているのは確かだ。境界線上での小競り合いは絶えない。還術だって人並み程度なんだから、調子に乗って試みようとはするな」

「……わかっています」

やはり見透かされている部分はあるらしい。しかし、そのような事態に直面したら、おそらく今の約束を破って迷わず駆け出すつもりではあった。

「リデイスさんのことは僕たちにお任せください。しっかりと支えていきますので、ご安心を」

「危なそうなときには、しっかりとお守りしますので、ご心配をなさらないで下さい」

ロカセナとフリートが次々と言っていくと、肩の荷が降りたようで、オルテガの表情は緩んでいた。

そして二人に対して、深々と頭を下げた。

「娘のことを、よろしく願います」

リデイスはフリートとロカセナを見送るために、玄関先まで出ていた。ファヴニールはオルテガに誘われて、部屋の方で飲んでいるらしい。

「今日くらいはそっとしておきなよ。娘に旅立たれて、ショックを

受けない父親はいないから」

「そういう風に話を持っていったのは、あなただけ……」

白々しく肩をすくめているロカセナを、さりげなく突っ込む。

「たぶん大丈夫だと思うけど、ファヴニール先生がボロを出して、お父様の気が変わるようなことがありませんように」

「例え真実を知ったとしても、ロカセナが言った内容に誤りはない。城にある書物で調べることで、解決する可能性はゼロではないからな」

逆に言えば、その言い方は、おそらく書物だけでは解決できないということの意味している。

「まあ、さっきも言ったとおり、五日後にシュリッセル町出るから、準備を宜しく。歩いて行くから、物は必要最低限で頼むよ」

「ええ、わかっている」

はつきりとした声を出すと、ロカセナは嬉しそうな顔をして、フリートと一緒に宿へと戻っていった。

真っ暗な空には、雲がかかっておらず、一面星の絨毯が広がっている。しばらくこの地で、この風景を見ることはないが、まだ見たことのない風景を考えると、心が躍りそうであった。

* * *

五日などあつと言う間に過ぎてしまった。

馴染みにしている店などには、長期に渡って会えなくなるため、心配をさせてはいけないと思い、事前に挨拶をしておいた。

すると旅のお供にと、果物や保存が効く食べ物を渡してくれた。それを有り難く受け取ったが、持つて行くには多すぎたため、ほとんど屋敷に置いていった。

最低限の着替えや持ち物を肩掛けの鞆に詰め込む。別にこれが最

後ではないのだから、極力荷物は減らしたいが、傍に置いておきたい物も少しだけ詰め込んだ。

出発は朝早いため、前日の夜は早めに食事をとった。

やがて寝る前にリデイスは食事の後にも仕事をしているオルテガの元を訪れた。

「早く寝ないのか？」

「もう寝ますが、一応ご挨拶をと思って」

「明日の朝もあるだろう」

素っ気なく返されると、リデイスとオルテガの視線の間に一枚の紙が入った。しかしその先にある表情など、わかりきっていた。

それに対して、何を言い出せばいいかわからず、困ったような顔をしてしまう。しばらくしてオルテガは紙を下ろすと、仕事用の隙のない視線を貫いていた。

「——王都はだんだんと危険な場所になってくるだろう。だが王様は非常に優秀で、賢い人だ。必ず彼の指示に従えば、道は開けるはずだ。それだけは覚えておけ」

「……お父様、王様とはお会いになったことがあるのですか？」

「貴族として、謁見は何度かしたことはある」

どこか遠くを見ながらも、その表情は非常に穏やかであった。

「早く寝なさい」

「はい、おやすみなさい。ではまた明日」

一礼をして、ドアを閉じようとしたとき、オルテガは引き出しから何かを取り出していた。それは羊皮紙であった。誰かに手紙でも書くのかもしれない。

翌朝、夜も明けて、少しずつ町全体が起き始める時間帯に、リデイスはフリートとロカセナと共に南門の前を歩いていた。

ここで二人と出会い、リデイスの運命は新たな道へと繋がることになった。あれからまだあまり日数は経っていないが、きっかけと

しては平坦な人生であるリデイスにとっては十分であった。

あと一歩で門を出るところで、最後に頭を下げながら、朝早くから見送りに来てくれた、オルテガとマデナに挨拶をする。

「では、お父様、マデナ、行ってきます」

「ああ、気を付けて行って来い。お二人とも、娘が世話になります
が、どうかよろしくお願いします」

その言葉に対して、フリートとロカセナは、快く頷いた。

門から出ると、見送りはそこまでである。名残惜しそうな視線で送られながら、リデイスはフリートとロカセナに導かれてシュリッセル町から旅立った。

10、広がる外の世界（1）

ミスガルド城がある城下町までは、徒歩で十日程度かかるらしい。その間にいくつか村や町に泊まりつつも、着実に進むそうだ。

久々に出る町の外の世界に、リデイスはきよきよと目を動かしてしまふ。だが外の世界は常にモンスターと背中合わせの場所。

結界を張るための結宝珠けつほうじゅの携帯用のものを片手に持っているが、あまりに強い相手に対しては効き目がなく、これだけで道中無事に過ごせるかは疑問である。だから常に前と後ろにいる、フリートと口セナは警戒を解いていなかった。

「毎晩、宿に泊まれるとは限らないからな。野宿だって大いにあり得る」

「大丈夫よ。それくらいわかってる」

「お嬢様なのにその台詞は意外だな」

「ちよつと機会が重なって、野宿ぐらいしたことはある。世間一般に言える、箱入り娘ではないのよ」

口を尖らせながら言うつと、フリートはただふーんと返したただけであつた。張り合いのない人だと思つたが、手には結宝珠を持っているのを見て口をつぐんだ。

比較的整備された道を通っているので、足に負担はあまりかからない。まだまだ進めそうだとリデイスは思っているが、それでも定期的に休憩は取られている。

「別にもう少し歩けるけど……」

「それはまだ興奮状態が冷めていないからだよ。そのうち疲れが出てくる。それに僕たちもいちいち気を張ってられないからね」

移動しながら結宝珠を扱うのは、より敏感に神経を尖らせるため、意外にも難しい。だから止まりながら進むことも重要なのである。

またあまり無理をして使えば、そして長年使っている宝珠であれば、割れる可能性もあつたのだ。

結宝珠のおかげか、シュリッセル町を出てからはモンスターと遭遇していない。しかし割れては今後の道中が不安になるため、慎重に使う必要がある。

そのことを理解したりデイスは、それ以後、フリートやロカセナの指示に対しては、口など挟まずに大人しく従うようにした。

五日ほど経過し、予定通り、シュリッセル町と城の半分くらいの位置にまで辿り着いていた。

フリートは時々ロカセナと位置を変えつつも、大抵先頭を歩いていた。なるべく草木が生えていない、それなりに使われている道を選びながら前に進む。

速度には気を使っているとは言え、遅れず後ろを付いてくる少女の意外な体力に驚いてしまう。さすがにモンスターと対峙して、還術をやっているだけはある。

だが出発当初よりも口数が少なくなっていた。進むのを意識しすぎて、二日連続野宿というのが多少影響はあるだろう。

「おい、リデイス、大丈夫か？」

「大丈夫よ。まだ半分でしょ」

「リデイスちゃん、無理はしないでね」

「まだまだ歩けるから、心配しないで」

どうしたことが、フリートとロカセナへの話し方が明らかに違う。仏頂面と人から言われているように、あまり人懐っこい表情はしていないが、それでも少し心外ではある。

多少不機嫌になりつつも、しばらく進むと、湖の畔に着いた。そこで一時休憩をしようと提案すると、二人とも頷いた。

丸い湖ではなく、楕円状の少し入り組んだ状態の湖であるため、向かい側までは見られなかった。

湖面は静かに揺れており、穏やかな時が過ごせそうだ。

「いい湖だね。こんなところでモンスターに襲われたら、イメージ

が崩れるけど」

涼しい顔をしながらも恐ろしい内容をさらりと言うロカセナの神経が、たまによくわからない。それはつまり油断せず常に構えている状態でいると言うことだろう。

依然として警戒は解かないようにし、リデイスを見ると、近くにあった切り株に座り、足を伸ばしていた。口では何も言わないが、表情から疲労が溜まっているのは目に見えている。

そんな彼女はロカセナが差し出した水筒を有り難く受け取っていた。そして嬉しそうに水を喉に通す。

まだ半分なのか、もう半分なのか。

正直言つて、フリートはあまり一般人と行動はしたことがないため、判断が難しいところである。

——どこかで荷馬車でも便乗できれば、まだ楽なんだが。

ふと湖の右側の方に視線を向けると、木々の間から業者だろうか、中年の男性がリデイスと同じように水を飲みながら休憩していた。よく見れば木の陰から、馬が顔を覗かしている。偶然だろうか。しかしこの機会を逃すわけには行かない。

「ロカセナ、少し周りを見てくる」

「交渉でもするの？ 先に言っておくけど、そんなにお金は払えないから」

フリートの思惑を読みとり、ぴしゃりと言い返された。洞察力が良すぎるロカセナには本当に敵わない。

リデイスを彼に任せつつ、フリートは湖沿いを歩きながら、荷馬車の方へと向かった。

結宝珠けつほうしゅうはロカセナが持っているため、今は丸腰の状態だ。まあ相当強い相手でない限り、負ける気などさらさない。

視界にはつきりと中年の男性の顔が見えてきた。

もう少しで着くだろうと時に、フリートの周りを覆っていた空気が変わった。

微かではあるが張りつめている空気、木々のざわめき、そして持

っている魔宝珠の温もりが――。

その気配を感じた瞬間、魔宝珠を握り、バスタードソードを召還し、荷馬車の前へと飛び出した。

突然現れた男に驚いた中年の男性など気にせず、森の中から出現したモンスターと対峙した。

相手はシュリッセル町を襲ったのと同じ種類――人の二倍ほどある、真つ黒な毛と突き出した鼻と耳が印象的な獣型であり、大きさや皮膚の状態からして親の方だろう。

倒すのは造作もないが、少し様子がおかしい。何かに対して怒りを向けているようである。

そして本来単独で行動はしないのも特徴のモンスターだ。群れか、少なくとも親子か雌雄と言った、二匹以上で行動しているのが普通である。

ちらつと中年の男性へと視線を向けた。見られた男性は、ひどく脅えていた。フリートを見ても、その様子は変わらない。

怒り狂っているモンスターの親と男性の何かを隠している様子――推測するのは簡単であった。

「……お前、モンスターの子を捕まえたのか？」

探りもせず、直球で聞くと、顔を強張らせながら視線を逸らされた。分かりやすすぎる。

モンスターと人間は相入れない存在だ。そもそも生まれた場所が違つとさえ言われている。そのため昔ならば、衝突することはあまりなかった。

しかし意図的に人間側が接触しようとする例は後を絶たない。モンスターの皮や毛などは、闇売買で高値が付くらしい。生きているものを売るなら尚更だ。

最近ではモンスターが凶暴化してきている関係で、そのような愚かなことをする人は減ったが、依然として多いのが現状である。

皮や毛が残っているだけでも、含まれていた毒素が残っている可能性があり、非常に危険だ。そして生きていたらその脅威は計り知

れない。

モンスターは殺すのではなく、還す存在――。

それは人間のために想って、決めていることなのだ。

「おい、子はどこだ。お前、俺が何もしなければ、このままだと死ぬぞ」

冷たく突き放すかのように、中年の男性に言う。だがしゃがみ込み、頭を抱えているだけで、動こうとはしない。

モンスターが一步、一步、値踏みするような状態で近づいてくる。

「おい！」

苛立ちながら叫んでも、効果はなかった。

舌打ちをしながら、鞘に収まっている剣の柄を握りしめ、すぐに抜けるようにした。

人間側の悪意から起こってしまったことだが、身を守るためには斬るしかない。

あと少し近づけば、すぐに飛び出して斬れる距離になる。それまでじっと耐え――。

「お待ちなさい」

急に凜とした声がした。

耳に入れば、一瞬手を動かすのを止めて、その方へとすぐに向いてしまうような、そんな声が。

荷馬車から一人の女性が腰の高さほどある籠を持って現れた。その籠の中にいるのは今、フリートが対峙しているモンスターの子がいる。目の前にいるモンスターは子を見るなり、威嚇から、窘めるような鳴き声へと変化した。

「無闇に殺せばいいというわけではありません」

腰まである紺色の長い髪を下の方で軽く結っている女性は、毅然とした表情をフリートへと向けた。

「殺すわけではない、還すだけだ」

「どちらにしても、この子にとっては、親がいなくなるのには変わらないわ」

細めた目で睨みつけながら、女性は地面へと降り立ち、フリートの制止も聞き入れず、籠を開いた。

すると子は女性やフリートには目もくれず、一直線に親に向かって走り出した。

再会すると、無事を確認するかのように、お互いに寄り合う。

それを女性は依然として険しい表情で見つめていた。

「消えたくなければ、早くお行きなさい。もう人間の前に出てこないように」

そう言つと、二匹は耳をぴんと尖らせて、女性やフリートの方をきよるきよる見た。そしてゆっくり後ろに下がり始めたと思つたら、一目散に背を向けて走り去って行つてしまった。

予想外のことにフリートは呆氣に取られてしまう。

モンスターが逃げてしまったことは不覚ではあるが、人間に危害を加えなかったため深追いをする必要はない。召還した剣を魔宝珠に戻すと、あの女性が近づいてきた。

フリルで袖の先をあしらっている白いブラウスと髪と同じような色合いの紺色のロングスカート。その服装を見ただけでは、物腰の柔らかそうな大人の女性に見える。

だが切れの長い目、モンスターに対して物怖じしない行動、そして静かに近づいてくる姿は、いったい何者かと身構えてしまいそうだ。

「あなたはミスガルド城に仕える、騎士団の一人ね」

服装から見て判断したのだらう、辛うじて首を縦に振る。すぐ横まで来られると、じつと横顔を見つめられた。振り向こうとしたが、なぜか動けなかった。

「——そして鍵を導く一人」

視線を逸らされると、急に呼吸が荒くなった。そして振り返つて、女性の背中を見る。彼女の静かな威圧によつて、動きを止められたのだらうか。まさかそんなことはあるはずがない——そう思いつつも、体は正直で一氣に疲労が出てきた。

どうにか立っていると、女性は背中越しからちらつと見てきた。

「あら、ごめんなさい。そのようなつもりはなかったけれど、あなた意外と弱いよね」

「何だと……！」

「怒りっぽいと、いざというときに、取り返しの付かないことになるわ」

「……お前はいい……」

女性は回れ右をして、フリートの方に向いた。そして妖艶な笑みを浮かべる。

「またすぐに出会うことでしょうか、その時にお嬢さんや相手さんと一緒にご挨拶をするわ。さあ、その荷馬車を利用して、城へ向かいなさい」

歳は数歳上だろうが、その歳以上のオーラを漂わせている。女性相手ではあるが、圧倒されるとはこのようなことなのだろうか。

彼女が再び歩き出したのを見て、慌てて追いかけようとしたが、たった一文で足を止めさせられた。

「またお会いしましょう、騎士団三番隊のフリート・シグムンド、リデイス・ユングリガとロカセナ・ラズニールと共に」

びつくりさせ、動きを止めるには十分な一言であった。

いったい、いつ、どこで彼女はフリートたちのことを知ったのか。騎士団でも平のフリートやロカセナ、そして町貴族の少女の名までその背中を追いかけることもできず、ただ森の中へと消えていくのを眺めるしかできなかった。

「誰なんだ……？ また出会うって、いったい何者なんだ？」

悔しいがまったく何も思い当たらなかった。

しばらく突っ立っていると、草木の間から人が近づいてくる気配がする。一瞬身構えたが、声を聞いて、警戒を解いた。

「フリート、どうだった？」

「どうだったって……」

ロカセナがきよとした表情をしている。それを見て、我に戻

ったフリートは心の中で舌打ちをした。女性の存在に気を取られて、本来の目的を忘れていたのだ。

ロカセナやリデイスに背中を向け、その先で腰を抜かしている荷馬車の主に近づいた。

逃げようとしたのか、後ずさったが、すぐ後ろは湖である。そのまま動けずに固まっていた。

フリートは屈んで、中年の男性に小さく、低い声を発した。

「モンスターのことは見なかったことにしてやる。その代わりに、俺たちを城下へと連れていけ」

脅しというのはあまり好きではないが、使うときも必要ではあると思っっている。こくこくと頷かれると、ふうつと息を吐きながら、立ち上がった。

不思議な女性であった――。その一言に尽きるだろう。リデイスやロカセナにも伝えるべきだろうか、だが今回の件は胸の内に秘めておけと言っている自分がいた。

「また……か」

それはこれから何か起こるのかと思わざるを得ない出会いであった。

11、広がる外の世界（2）

フリートがどうにか交渉して、馬車の荷台に乗り込むことになったりデイスたち。他にも荷物があるため狭い空間ではあるが、動き出すのを感じると、少し嬉しくなった。自分の足を動かしていないのに進む喜びと、馬車という滅多に使わないものに乗っている楽しさによって。

始めは振動が大きかったが、滑らかな道に入れたため一定の動きをする。布の隙間から外を見ると、森から抜け、街道に出たようだ。少しずつ移り行く景色を眺めつつも、フリートの方にリデイスは目を向けた。さっきから何かを考え込んでいるようで、俯きがちである。

「フリート、何かあったの？」

「別に何でもない」

心配に思って声をかけたが、素っ気なく返される。そして目を閉じられて、完全に拒絶の反応を示された。若干頬を膨らませていると、ロカセナが困ったような表情を向ける。

「まあ、疲れているんだよ。多めに見てあげて」

小声で諭されて、仕方なく首を縦に振る。

「しばらく同じような風景が続くから、見ていてもあまり面白くはない。城に行った方がより大変だろうから、今のうちに休んでいたほうがいいよ」

体力を使うよりも、気疲れでも多くなるのだろうか。確かに慣れない地に踏み入れたときは、その時は気を張っているから感じないが、自宅に帰ってくるとどっと疲れが押し寄せてくるものだ。

ロカセナの言うとおり、とりあえず目だけは閉じておくことにする。

一定に車輪が動く音、馬が走る音、穏やかな日常を感じる時間――
――。

思った以上に疲れていたのだろう、いつしかリデイスの意識は微^ま睡^{どろ}みの中へと消えていった。まだ見ぬ城に期待を抱きながら。

* * *

馬車に乗り始めて四日ほど経過した。少しずつ他の馬車との往来も多くなり、いよいよ人が多く住んでいる場所が近くなったと感じられる。

途中から徒歩ではなく馬車移動に切り替えたため、あまり体力は消耗せずに進むことはできたが、逆に動かないのも退屈ではあった。そのためロカセナが途中で休憩した町で、本を購入しようと提案したのに従ったのは正解であったのだ。それを読んではいなければ、ぼんやりとゆっくり流れゆく時間を耐えていただろう。

またフリートの様子もよく見ていたが、どうやら馬車の揺れに酔っていたらしい。それを思わず声に漏らす。

「意外に弱いんだ……」

「違う、眠いから寝ているだけだ！」

強がりもいいところで、顔の青さはそれを肯定する充分なものであった。

昼過ぎの時間帯、急におじさんに言われて、馬車から降ろされた。その存外な扱いに、フリートは目を剥ける。その威圧に彼は後ずさりした。

「そんな怖い顔をするなよ。馬車のままで入る場合、手続きに時間かかるから、徒歩で入った方がいいだろうって。もうそこまで城下が見えるんだから、良いだろう」

「お前……」

何かを考えながら、言葉を選んでいる。どうしてそれだけ憤っているのか、リデイスには理解できなかった。

「なあ、頼むよ」

すぐるような目線に、フリートは一瞬リデイスの顔色を見ると、息を吐いた。

「……わかった。今回だけだ。今度会うときは、一緒に入ろうか。是非ともお礼はたつぷりしたいと思っっているからな」

「そんなお礼なんて、ついでだから構わないさ！」

おじさんは乾いた笑い声を出している。道中、どこかよそそしい雰囲気であったのには気づいていた。その理由を聞きだそうとしたが、ロカセナが静かに制止してくれたため、なぜ拳動不審なのかは知らずに別れることになる。

少し休憩をしてから城下に入ると、先に進むよう言われたのが、おじさんとの最後の会話となった。

降りた場所は見晴らしのいい草原である。周りには何もなくて、奇襲でもするようなら、目立ちすぎてむしろできない場所だ。

「ねえ、フリート、おじさんは何を隠しているの？」

歩き始めて、しばらく進んだところで、目がつり上がっている青年に尋ねる。

「別にたいしたことじゃない。それよりも前をしてみる。初めてだろ？」

無理矢理話題を変えられたのが腑に落ちないが、とりあえず視線を前に向けた。

草原が広がる中で、一際目立つ地帯がある。石でできた城壁で囲まれており、辛うじて城の上部は見えるが、城下町の様子はまったく見られない。それはモンスターだけでなく、人間さえも近づくのが一瞬怯んでしまうほどだ。

「なんか、もつと華やかなイメージがあったんだけど」

「どんなイメージだ。勝手に作り上げるな。中は予想しているとおり、華やかなはずだ。外壁がこうなのは、中で安心して過ごせるための、手段に過ぎない」

「それってつまり、モンスターが襲ってくるって言うこと？」

「それも一理ある。ミスガラム領域の中心地である城を守るために、防壁を作った。モンスターにも少しは頭が働くやつがいて、必然的に狙われる対象となったんだ。見えない結界だけではどうしても弱い部分があるから、結宝珠を防壁に埋め込むことで、侵入を防いでいる」

フリートの話を頷きながら、聞いていた。ミスガラム城には、この領域だけでなく、大陸全体に影響力を持っている王様がいる。統率力だけでなく、強力な召還をできる魔宝珠を持っているとして、注目が集まっているのだ。

今、特に話題には出されなかったが、おそらくあの防壁は人にもある程度の牽制を施すために作られたものだろう。それほど城下には人が集まってくる。

他にも城下に関する基本的なことを聞きながらも着実に歩は進んでおり、気が付けば城下全体が視界を埋め尽くす。

やがて入り口の門まで見えてくると、近くで人が一列に並べられて中に入っているのが見えた。

「検問だ。一般人は中にはいるまで、少し時間がとられる。だが俺たちが通る門はそこではない」

そう言われ、少し道から外れて行く。見る見るうちに入り口から逸れていく。やがてまた別の門が見えてきた。そっちの方はほとんど人がいない。

そこに近づいていくと、きりつとした顔の門番がいる。騎士の一人だろうが、槍の柄の部分の地面に突き刺し、無駄のない様子で立っていた。そしてフリートが近づくと、彼は左手で敬礼してきたのだ。フリートたちと同年代が少し上くらいの青年である。

「お疲れさまです！ 身分証の提示をお願いします」

二人は胸ポケットから、何も書かれていない手のひらほどの大きさの真っ白なカードを取り出す。そして力を込めると、急にカードが淡い緑色を発し、文字が浮かび上がってきたのだ。

その文字は日常使用されているものではなかったため、すぐに読

むことはできない。だが勉強している最中に少しでも読んだことがある——古代文字ということには気づいていた。

「ありがとうございます！」

確認後、はきはきした様子で言うと、二人は再び身分証を元に戻した。そして彼の視線はリデイスの方に向く。

「後ろの方は……」

「連れだ。身元は保証するし、事前に入城できるよう、封書も送つてある」

「そうでしたか、申し訳ありません。ではどうぞお入りください」
そう言うと、青年はドアに備え付けられている小窓を開け、そこから何かを指示し始める。

その間にリデイスは近くにいたロカセナの肩をつついた。

「どうしたの？」

「封書つて、いつ送ったの？」

「シュリッセル町を出たときだよ。入城するには必要な手続きだからね。城に関係する人が送ればたいい大丈夫だから、僕たちでも構わなかったけど、オルテガ様が直にお書きになって、送ってくれたんだ」

「お父様が……」

少し意外であつた。あまり賛成しているようには見えなかったが、城へ封書を送ったということは、多少なりとも、リデイスの気持ちをおわかつてくれているのかもしれない。

やがて軋んだ音と共に、人が通れるドアが開いた。さらに何倍もの大きなドアはおそらく馬車などのもっと大きなものを通すときであろう。

フリートが歩き始め、リデイスはロカセナに促されながら門をくぐった。

そしてその先に見たものは、視界から飛び出るほどの大きな城。白く明るめの石を用いた城壁で、何十年もずっとそこに建っているはずだが、汚れることなく非常に綺麗だ。

「あとでゆつくり見られるだろう。今、無理に見る必要はない」

立ち止まっていたリデイスに対し、フリートは注意をする。そして背を向けながら、さらに追い打ちをかけた。

「仮にも貴族なんだろう。そんな様子で突っ立っていると、そこら辺の田舎者と変わらないぞ」

「な……っ！ 初めてなんだから、良いじゃない！」

「一応、シュリッセル町の名を背負っているんだ。少しぐらいお淑やかに振る舞っておいた方がいい」

啞然としている間に、何事もなかったかのように行ってしまった。その後ろ姿を見て、口を尖らせる。一方、近くにいたロカセナはぶつと吹き出していた。

「ロカセナまで、何なのよ！」

「やり取りが面白かっただけさ。さあ、城に入ってから色々やることはあるんだ、行くよ」

どうにも納得できないところはあるが、仕方なく見るのは程々にして、進みながら眺めることにする。

どうやらさっきの門は割と城に近いところに作られたらしい。また少し離れたところから喧噪が聞こえてくる。正門の方にあり、おそらく商店街などだろう。そこを真っ直ぐに行けば城に辿り着く道となっている。

リデイスたちが入ったところは正門ではなく、城から近い西門であった。そこは城に滞在する者のみが通れる場所であり、道を歩く人も商人や農民などではなく、武装した騎士や学者など、非常に高級そうな服を着ている人ばかりだ。

ちらつとリデイスは自分の服装を見た。短いとはいえ、旅をしてきたのだから、動きやすさ重視の格好である。他の人と比べると浮いている気がしてならない。

そんなことを思っていることなど知らず、フリートは石の階段を十段ほど上がり、城の内部へと続く扉の前に立つ。そして扉の番人と話していた相手が振り返ると、彼は声を発した。

「フリートさん！」

まだ多少あどけなさが残る、栗色のくせつ毛がよく目立つ少年が顔を綻ばせながら、駆け寄ってくる。

「クリング、久しぶりだな」

「どこに行っていたんですか！ もう一ヶ月以上もフリートさんに会えなくて、もの凄く寂しかったんですよ」

「少し隊長たちに頼まれたことがあって。落ち着いたらまた稽古に付き合うから、しっかし準備しておけよ」

「はい！ ……あの、後ろの女性は？」

不審そうな視線がリデイスに向けられる。フリートへの態度とまったく違い、少したじろぐ。

「寄った町で知り合った女性だ。非常に勉強熱心で、城の蔵書に興味があると言って、連れてきた。顔を合わせることもあるだろうから、よろしく頼むな」

当たり障りのない言葉を並べて、クリングに簡単に紹介をされた。騎士と一緒に城に入ることなど珍しいことなのだろうか。別に間違ったことは言っていないため、遠慮することなどはないはずだが、彼からの若干嫌悪が感じられる視線が非常に気になる。

「そうですか、わかりました。では僕は少し用事があるのでこれで……あ、カルロット隊長が、お二人のことを探していましたよ。予定より長く離れて、いったい何をしているんだと」

「手紙を送ったはずだが……。わかった、ありがとう」

「いえ、失礼します」

クリングは頭を下げて、庭へと小走りに進む。そこで一瞬視線が合ったが、未だに警戒心はむき出しであった。

「……憧れの人とか、リデイスちゃんにも多少いるでしょう。その極端な状態がアレ」

肩をすくめながら口力セナはあえて指示語を使う。何か昔あったように見える。

「口力セナも……」

「アレがフリートに対して夢中になり始めた頃は酷かったね。僕らコンビ組むことが多いから、二人で城にいるときは、毎日監視されている感じでさ。——クリングは見習い騎士で、実戦経験として騎士と一緒にモンスター狩りに行ったときに、たまたまフリートが一人で大型獣を還したのを目の前で目撃して、心打たれたらしい」

ちらつと扉を管理する騎士と話しているフリートを見る。

「あいつも変なところでマメでさ、剣術を教えてくださいって頼まれて、快く引き受けてから……まあ、こんな感じが続いているわけ。そういうことから、城の中で妙な視線を感じても、気にしないですね」

「え、ええ……」

返事はしたが、あまり自信はなかった。別に自分自身や身分のせいでもなく、そのような仕打ちをされるのは腑に落ちない。

やがて扉が開く低い音がした。その先には内部からの明かりが漏れている。フリートに視線で促され、後ろについて、中に踏み入れた。

12、好戦的な上官（1）

城内の第一印象としては、天井が高く、廊下が非常に広い。

光宝珠が天井に括りつけられており、それが辺りを照らしていた。手を伸ばして届くわけもなく、遙か上の方にある。

石畳の上を歩くと、靴の音が反響した。それだけではあるが、場違いなところにいると思い、急に緊張してくる。

「とりあえず隊長のところに行く？ ファヴニール様のこともあるし」

「そうだな。その後にも部屋を用意してもらおう。カルロット隊長の支持を貰えば、すぐに手配してくれるだろう」

「その前に小言を聞く羽目になりそうだけど」

「仕方ない。俺たちの判断が甘かった部分もあるからな」

フリートとロカセナは同時にはあつと息を吐いた。やっと戻ってきたと言うのに、何か頭を抱える問題でもあるのだろうか。

歩を進めている間、何人かとすれ違った。フリートたちが自主的に頭を下げる相手が大多数で、相手から挨拶をしてくる者は少ない。それはそのまま二人の地位を表しているようだ。二十歳過ぎの年齢、一般的に見れば、役職を得ている立場ではない。

やがて何度か角を曲がり、ある部屋に辿り着くと、他の部屋より一回りほど大きいドアが見えた。

「ここは俺たち第三部隊が集まる場だ。普段は人もいないが、奥には隊長の個室——」

言っている途中に、ロカセナは血相を変え、反射的にリデイスの手を引いて、ドアから離れさした。フリートも数瞬遅れて下がるうとしたが、遅かった。

「どの面下げて、帰ってきやがる！」

その言葉と共にドアが勢いよく廊下側へと開け放たれた。それとほぼ同時にドアがフリートの顔に当たったのだ、壮大な音をたてて

あまりの痛さにあのフリートでさえもうずくまってしまった。

呆氣に取られながらその一部始終を見ていると、中から現れた人物に目を丸くした。

リデイスより頭一つ半以上背が高く、がっちりとした体格の四十過ぎの男性。頬に残っている傷などは、そのまま彼の業績も表しているようだった。あまりの目の鋭さと、威圧に足が竦んでしまいそうだ。だが彼はリデイスと視線が合うと、目を瞬かせる。

「お嬢さん、誰だ？」

「報告に入れたじゃないですか、例の娘さんですよ、カルロット隊長」

ロカセナが涼しそうな顔で、にこにことした表情で答える。一方、カルロットはロカセナを見るなり、不機嫌さを露わにする。

「お前……、予定よりも遅く戻ってきやがって。いったい何をしていたんだ！」

「何度も言っているじゃないですか。シュリッセル町で起こったことについての報告書はすでに送っています。そしてフリートが怪我をした——」

「そうだ、あの馬鹿はどこだ！ 魔宝珠を守るモンスターごときに怪我をするなんて、けしからん！」

その本人は今、あまりの痛さにうずくまっているのですが、とりデイスは思ったが、口には出さない。

そして少しだけ痛みから解放されたフリートは背筋を伸ばして立ち上がった。

「カルロット隊長、フリート・シグムンドはここです！ ご挨拶が遅くなつてしまい、申し訳——」

「フリート、今から特訓だ！ 俺との互角稽古に付き合え。いいか、手を抜くのは許さない。抜いたとわかった瞬間、腕が一本なくなるからな！」

「帰ってきたばかりの俺に当たるなんて、あなたはいったい何なんでしょうか！」

「いいから、黙って付いて来い！」

カルロツトは荒々しく息をしながら大きな背中を向けて、リデイスたちが来た逆側の通路を歩き始める。フリートが盛大にため息を吐きながら立ち尽くしていると、ギロリと視線が向けられた。そしてロカセナに背を押され、やむなくその後を追ったのだった。

あの気迫についていけなく啞然としていたリデイスに対し、ロカセナが肩を叩く。振り返ると苦笑いをしていた。

「ごめんね、いきなりあんな血気盛んな人と会って。びっくりしたでしょう？」

「……びっくりした。フリートは大丈夫なの？」

「大丈夫だろうけど、おそらく夜は死んだように爆睡しているだろうね。ああ、隊長にリデイスちゃんのことを説明し損ねた。あの調子じゃ、しばらく帰ってこないし……」

腕を組みながら、考え込む。その様子を見て、リデイスも少し心配になってしまふ。もはや城ではなく、適当に城下町の宿を借りて過ごした方が楽かもしれない。

「あら、ロカセナ？」

突然、凜とした口調の女性の声がした。振り向くと、ロカセナより少し低いくらいの長身で赤色の短髪の女性が寄ってきていた。引き締まった体と出るところは出ている体のラインに、同姓のリデイスでも思わずドキッとしてしまふ。二十代後半であろうか、一目で魅力的な女性だと感じる。

「セリオー又副隊長、お久しぶりです」

「ええ、しばらくぶりね。シュリッセル町の結界強化の貢献と、フアヴニール様の勧誘お疲れさま。どうやら後者は無駄足だったみたいだけど……、そうとも限らないか」

不適な笑みをリデイスに対して向けられた。だがすぐにロカセナとの話に戻る。

「ここにいるということは、隊長に会ったの？」

「会ったは会ったのですが、難癖付けてフリートを捕まえて鍛錬場

に行ってしまった。——この子が、例の少女です」

話が自分に向いたのに気づき、慌てて挨拶をする。

「初めまして。シュリッセル町を納めるオルテガの娘、リデイス・ユングリガです」

「こちらこそ初めまして。私は騎士団第三隊の副隊長をしている、セリオ・ヌ・フェリアよ。副隊長と言っても、隊長があんな感じだから、ほとんど雑用は私がやっているわ。何かあったら、遠慮なく言ってね」

「ありがとうございます」

サバサバした付き合いやすい人だなと感じた。そしてその年で副隊長と言うのだから、余程やり手の人ではないかも。

「事情からするとしばらく城に滞在するのよね。部屋を取ったら、図書室とかに挨拶に行こうか。その後の城下町の案内とかは二人に任せるけどいい？　ロカセナ」

「ええ、大丈夫ですよ、鍛錬量を減らしてくれるのなら」

「それは難しい話ね。隊長が作った鍛錬予定表を見たけど、しっかり確保されていたわよ」

「……あの隊長の馬鹿みたいに貪欲な剣術への向上心は頭が下がります」

溜息を吐きながら、がつくりとუნだれる。非常に好戦的な隊長であったから、量を減らすなどと言うことは一切しないのだろう。しかしさすがに遠出をして帰還した当日、次の日くらいは休みたいはずのため、気の毒ではある。

「ねえ、リデイスはどうやって還術しているの？　武器派？　それとも召還派？」

急にセリオ・ヌに話を振られて、一瞬きょとんとしてしまう。だが少しして、その意味合いに気づく。

還術には主に二段階あると言われている。

一つは魔宝珠を得たときからすぐにできることで、武器といったものを具現化し、それをモンスターに攻撃をして、還すもの。

もう一つは精霊と呼ばれる、人外の者を召還し、それらを利用して天変地異を起こし、還すというものである。

一般的に前者の方が多いため、還術士とは還術印が施された武器を使用する人、という考えに至るのが普通だ。

逆に後者は還術云々以前より、精霊などを召還する人はほとんどいないため、存在自体知らない人の方が多い。そのため召喚派はかなりの才能か血統の持ち主かつ、使いこなすために相当な努力を有したものだ。

リデイスはセリオア又の質問に対して苦笑しながら受け答える。

「もちろん武器派ですよ。召還派なんて、そんな恐れ多いことできません」

「あら、そうなの。母体数は全然違うけど、武器派よりも召還派の方が女性の割合が多いから、つい……。ちなみに武器は？」

「槍です。護身のために槍術をやっていた経験もあるので」

それを聞いたセリオアはにやっとした。そしてにこにこしながら、リデイスに近づいてくる。

「ねえ、疲れている？」

「まあ多少疲労は溜まっています。町を出るのは初めてだったのでただまだそこまではないのですので、動くことは可能です」

素直に言葉を出すと若干残念そうな顔をされた。だがそれは一瞬で、すぐに目を輝かせて顔を突き出される。

「ねえ、それなら少しでいいから、私の相手をしてよ！」

「え？」

「少しだけだから。槍使いなんて、隊内でも最近減っているからさ。還術できるって言うことは、それなりに扱えるんでしょう？」

「いえ、まだまだ鍛錬が必要なレベルですよ。副隊長様のお相手など、とっても……」

「私は構わないんだから、いいのよ！」

そこまで言い押されると、断るのが厳しくなってくる。視線を少しだけ口力セナの方に向けると、肩をすくめて、ちよっと前に出た。

「セリオー又さん、彼女は騎士になるために来たわけではないんですよ。もし何かあったらどうするんですか」

「別に準備運動くらいよ。私は模擬の剣で、彼女は自前の槍。怪我なんてしないわ」

「ですが、道中疲れているのに、それを強要するのは。せめて別の日にでも……」

「私、明日の午後から出かけるの、知っているでしょう。今しか機会は無いのよ。——ねえ、リデイス、いいわよね？」

その爛漫と輝いた瞳に対して、ねじ伏せる言葉は思いつかなかった。大きく息を吐きながら、首を縦に振った。

それを見たセリオー又は子供のように、声を上げて喜んだ。

「ねえ、ロカセナ、あなたたちの部隊はこのような人ばかりなの？」
すっかりとした、面倒見のいいお姉さんが第一印象であったが、それは見事に裏切られてしまった。それに対して、苦笑している。

「正直な話し、僕がこの城で出会った人たちは個性が強い、というのは否定することはできないね」

ある意味とんでもないところに来てしまったのではないかと、リデイスは思ってしまったのだった。

一方、フリートはリデイスまでもが気まぐれに振り回されているのも知らずに、半球状の鍛錬場内で、カルロットと一対一で睨み合っていた。足場は石でできているため、足元に気を取られることなく純粹な剣技だけの勝負となる、

カルロットの剣は、ファヴニールのように大振りの剣であり、それを鍛えた体で振り回す。その一振りが非常に強烈であり、しかも隙がない。正直に言ってしまうえば、普段でも相手をしたくないのに、さらに若干の疲れが残っている今など論外である。

そんな気持ちも知らずに、彼は楽しさが顔から滲み出ながら剣を召還し、立ち位置に着く。

「モンスターごときに怪我をしておつて。性根を叩き直しておくか！」
「自分を弁護する気などありませんが、なかなかの相手でしたよ、一人、二人で相手をするには、かなりきついモンスターでした」
「それはあとでじっくり聞いてやるさ」

「……聞く気なんて、ないくせいに」
深呼吸をして、心を落ち着かせる。ここはせつかくの機会だからと割り切つて、正々堂々と相手をしてもらおう。こんな自分にも分け隔てなく、接してもらえることに感謝をしながら。

開始の合図など始めから決めていない。
柄をしっかりと握りしめ、視線をカルロットに向けた。いつの間にか笑みはなくなり、戦闘状態に入っている。

目で駆け引きをし、カルロットが地面を蹴つて、走り始めたのと同時にフリートも駆け出し始めた。

剣が交わるや否や、剣にかなりの体重がかけられてくる。それを足で踏ん張って受け止めた。

カルロットの攻撃は体格からもわかる通り、力強さで一気に押し切るのが大半だ。

フリートは瞬間的に剣を引いて、数歩下がって間合いを取ろうとした。しかし、カルロットの大きな体となかなか距離がとれない。やられる方としては非常に嫌な感じだ。

カルロット自身としては、自分の得意な攻撃スタイルに持っていきたいがための行為だ。決して休むなどさせてくれない。

近づかれて、剣を振りかざされたら、それをはじく。

僅かな隙を探すために、間合いを取ろうとするが、それは徹底的に潰されていった。

至近距離で攻撃に耐えながら、カウンターで攻めるしかない。しかも体力を考えて、回数はなるべく少なく。

一瞬後ろに下がるが、その反動で勢いづけて、自らカルロットの剣にぶつかっていく。

それをされたカルロットは少し驚いたような顔をしていたが、す

ぐに嬉しそうににやける。

「そうだ、男なら自分からかかってこい！」

「勝手にあなたと同じにしないでください！」

力任せに何度も振り落としてくる剣を止めては放しを数回続いたところで、受け止めずに右にそれた。

完全に虚を突かれた表情をしたところで、一瞬で鎧をつけている部分を切り抜こうとした。

だが、それまでだった。

「何度も同じ手に引つかかるか！」

いつの間にか剣を握っていなかった左手が拳を作り、フリートの腹へと入り込んだ。

「……っ痛」

顔を歪めながら、勢いよく後ろへと投げ飛ばされたのだった。

13、好戦的な上官(2)

フリートが飛ばされた時、ちょうどリデイスたちが鍛錬場の観客席に着いたときであった。彼の流れるような隙の突き方であったが、それをカルロットは真っ向から打ちのめしたのだ。かなり深く拳が入ったのか、しばらくぴくりとも動かない。

リデイスは手を口で押さえながら、その様子をただ立ちすくんで見ていた。だがロカセナとセリオー又は溜息を吐きながら、困ったような顔をしているだけである。

「まったく……。怪我人相手でも、遠慮がないな、あの人は」

「本当に、あの戦い好きには困ったものだわ」

「副隊長が言う台詞でしようか？」

「うん？ 何かな、ロカセナ君？」

「いえ、お気づきでないのなら、いいです」

お互い笑顔であるが、その内に含まれているものは計り知れない。リデイスは少しだけ背筋がぞつとした。

「なんだ、おまえらも来ていたのか！」

自分で飛ばし、気を失っているフリートの存在など構いもせずに、カルロットは視線をリデイスたちの方に向けた。体を動かしたためか、さつきよりも生き生きとしている。

「どうだ、ロカセナ、次はお前が相手をするのか？」

「お断りします。何かあったら、リデイスちゃんの案内役は誰がやるんですか？」

「お前なあ。いつも弱腰だから、フリートに差を付けられるんだぞ」
「剣術だけではなく、僕は僕なりのやり方でやらしてもらっている
ので、それだけで差が付いたと言っただけではないですね」

受け流しているのが面白くないらしく、カルロットの眉間にしわが寄っていく。それを見たセリオー又はリデイスの肩を叩いて、小声で話しかけてくる。

「早速だけど、少し相手してもらっていい？ 隊長の機嫌が悪くなると、私でさえ收拾が面倒なのよ。けど鍛錬をしている姿を見させれば、機嫌はすぐによくなるわ」

「それって、かなり……」

「単純な性格よ。まあ、こういう場だけだね」

何かを含ませた言い方に、リデイスは目を瞬かせた。だがそれ以上セリオー又は何も言わなかった。代わりに、手を引いて、鍛錬場の中心へと降りていく。

「なんだ、セリオー又が相手をしてくれるのか？」

「昨日やったばかりなのに、何を言っているんですか。ちよつとこの子と相手をしたいんですよ」

両肩に手を置かれて、前に突き出された。リデイスを見たカルロツトは目を丸くしながら、見下ろす。

「ええつと、嬢ちゃんは……」

「隊長、さつき説明したのに忘れたんですか」

続いて下に降りてきたロカセナが呆れ気味にこぼす。

「あの時はフリートと相手をするこしか考えていなかったんだ！」

「……つまり忘れたと」

カルロツトの顔が引きつる。良くも悪くも、ロカセナは正直な人だとリデイスは思った。

「シュリッセル町から来た、リデイスちゃんですよ。ただの貴族のお嬢さんかと思えば、槍使いの還術士。しかも還術印を付けたのは、あのファヴニール様ですよ！」

「突然どこかに消えて、勝ち逃げした偏屈のファヴニールが！？」

それは、それは……」

カルロツトから好奇な目を向けられる。まさか……とは考えたくないが、さっきのフリートとの一戦を見て、思わず恐縮してしまう。その視線の間にセリオー又が割って入った。

「駄目ですよ、隊長。こんな子を虐めちゃ。さあリデイス、軽く相手をお願いね」

「は、はい」

ドギマギしながら、中央へと向かう。だが近づくにつれて、その緊張は治まってくる。今ではほとんど機会はなくなってしまったが、昔、よく槍術の相手をしてもらったときの記憶が思い出されてきた。自分を試す場、そして今まで培った力を発する場に対して、怖いと同時に楽しみなのだ。

そんなことを思い出すと、つい苦笑してしまう。リデイスは貴族という身分は被っているけれども、中身はここに入る人たちと変わらないのではないかと。

首から下げている、魔宝珠に触れて、槍を召還する。それを訓練用の模擬剣を持ち出していたセリオーヌは目を細めて見ていた。

「適当なところで打ち切るから、まあ楽に相手をしていて。ちなみに自分から攻める方？ 相手からの攻撃を返す方？」

「どちらかと言えば、相手待ちですね。ほとんど私より体格が大きい人が攻めてきますから、必然的にそうなってしまいます」

「それはそうね。けどね、状況によっては自ら攻めていくことも必要なのよ」

セリオーヌが隙のない構え方をすると、リデイスも切っ先を彼女に向ける。そしてじつくりと彼女の動向を見た。

次の瞬間、その場から消え去った。

——速い！ けどまったく気配を消しているわけではない。還術をするときに必要なのは、相手との駆け引き。だから——。

槍をいったん引っ込め、とっさに槍を縦に突きだして防御の状態に入る。

すると、目の前にセリオーヌが木刀を振りかざしていた。それを槍の柄の部分で受け止める。

予想していた動き以上の速さに息を呑んだが、槍使いに重要なのは間合い。セリオーヌを力一杯跳ね除け、半円上にぐるっと回した。そこで適切な間合いをどうにか作り出す。非常に楽しそうな顔をしているセリオーヌをリデイスは険しい顔をしながらただじっと見

つめていた。

「おい、本当に貴族の嬢ちゃんなのかい？」

「紛れもなく貴族のお父さんの娘さんですよ。まあ戦闘的な勘に関しては、下手な傭兵よりいいかもしれませんが」

カルロットが面白そうに二人の攻防を見ている。それを意識が戻り、どうにか立ち上げられる状態まで回復したフリートが説明をした。カルロットの攻防では完全に拳が入ったように見えたが、瞬時に半歩下がっていたため、大事には至らなかったのだ。

「お前が褒めるとはなかなかだな」

「還術士は常に効率的にモンスターへダメージを与えなければなりません。なぜなら還すために体力を残していく必要があるから。そのため相手をよく見るようになるのは必然のことです。ですから、どうにか捌けているんですよ、副隊長も加減していますし」

そんなことは座学でもよく聞く内容だ。フリートの頭の中には当たり前のように入っていたが、カルロットは座学など置いておいて常に自分が刺激的な戦闘ができればいいため、そんなことは考えたことがないのかもしれない。

面白そうに見ているのに対して、念のために釘を刺しておく。

「彼女の目的は還す際に表れる障害をなくすことです。決してモンスターを退治したいからここに来たというのではないので、悪しからず。万が一の事があつたら、怒られるのは俺たちなんですから、やめてください」

「……そこまで言いながら、セリオアとの攻防は黙認なんだな」

「それは……流れというものがありませんから」

適当に濁しながら返す。カルロットに対しては口が裂けても言えないことだが、リデイスの槍術をじっくりと見てみたいという気持ちもあった。

初めて会ったときに見た、獣型のモンスターに対する還し方は女

にしては見事であつた。無傷で短時間でやりこなすことは評価できる部分だ。だからこそ、ほんの少しの油断がもつたいたいとも言える。それは おそらくフリートたちと比べて、戦闘的な勘が備わっていない点もあるだろう。

セリオアの攻撃はフリートやその他の騎士と戦っているより軽い、時々本気を見せるものだから、見ている方も心臓には良くない。しかしそれを丁寧に戻しているものだから、なかなか終わらないのだ。

何度目かに間合いを取り、お互いの動向をにらみ合っていると、何の前触れもなくセリオアは警戒を解き、模擬剣を右肩に乗せた。
「……まあ今日はここら辺かな」

「はい？」

「適当なところで切るって言ったじゃない。リデイスの昨日までの状況を考えると、これ以上やったら数日くらい疲労が残る。予定が狂ってしまったら面倒だしね」

「そうですね。それではお言葉に甘えて——」

微弱にあつたセリオアからの殺気もなくなつたからか、リデイスも構えを解き、切っ先を地面に向ける。

だが血相を変えて翻り、どこからともなく飛んできた三本のナイフを弾き飛ばしたのだ。

弾かれたナイフはそのまま地面の上に転がった。

その場にいた誰もが呆然としている。奇襲もそうだが、リデイスの反射神経に目を疑つたのだ。

「あ、あの、もう構えを解いても構いませんよね？」

おどおどしながら、リデイスはセリオアを見る。彼女はセリオアが差し向けたものだと思っているらしい。普通に考えればそうだが、副隊長の性格を知っている者にとっては、それは府に落ちない行動である。

「……ええ、大丈夫よ、もちろん！　あまりにも動きがいいから、つい奇襲かけちゃった。ごめんね」

一瞬固まっていた表情をリデイスに見せることなく、あえて調子のいいノリで返す。その様子を見ると、リデイスはようやく表情が緩み、警戒心を解いた。

「ちよっとびつくりしました。軌道は外れていたので、弾かなくても良かったんですけど、つい間合いの中は手がでてしまうんです」

「そうなの。その感覚、大切にしたいわ。——さて、ウォーミングアップも終わったし、指導でも本格的にしてくるかな」

「……セリオーヌ、その前に嬢ちゃんの部屋を用意して、案内をしてやれ」

突然、低い声が割り込んでくる。隣にいたカルロットが珍しく真面目なことを話していた。しかしその内容に対して、フリートは思わず口を開いてしまう。

「カルロット隊長、書類を用意してくれば、部屋の用意と案内は俺たちが——」

「セリオーヌ、あいつらの指導は後日でいいから、リデイスを頼んだ。女同士の方が奥まった話はしやすいだろう」

「はい、隊長」

フリートの言葉などまったく相手もせずに言い切ると、セリオーヌはきょとんとしているリデイスの手を無理矢理引いて、鍛錬場からでていった。

場内に残ったのが男三人になると、未だに険しい顔をしているカルロットはリデイスが叩き落としたナイフを拾っていた。どこでも売っている大量生産品だ。

「……入口と出口の空間を召喚させて、買ったものを投げつけたのか。厄介だし、高度なことをする奴がいるものだ」

一人呟くと、フリートとロカセナの方に振り向いた。

「嬢ちゃんの身辺に変なことは起こっていないのか？ 誰かに狙われているとか」

「彼女の周りでは起こっていません。父親にも聞きましたが、何もありません」

フリートははつきりと言い切った。それが少し不満そうであったが、これは事実であるため自信を持って言える。

「——わかっていてと思うが、このナイフはセリオーヌが奇襲として放ったものではない。奇襲なんていう柄でもないし、自分が触れていない無のところからこのナイフを召還することはあいつにはできない。そして戦闘中に放った様子もない。だから誰か他の奴が投げたと決め付けられる」

その内容に対して、フリートは余計に眉間にしわが寄った。断言しきれるほど、それは明確なことなのだろう。むしろ、決定付けるには弱い部分がある。

「どうしてリデイスがこの城の中で狙われなければいけないんですか！」

「さあ、それがわかれば、いつまでも難しい表情をしてねえよ。嬢ちゃんによれば、弾かなくてもナイフに触れる可能性はなかったのだから、どこか召還の練習をしていた奴が誤ってここにきたか、もしくは——」

ごくりとつばを呑む。相方の口力セナの顔も緊張気味だ。

「わからねえが、嬢ちゃんに対する何らかの脅しか。もしこつちだった場合、何かあったらお前たちが守るんだぞ」

「はい！」

二人で声を合わせて意志を明確にした。

その声の反響が途切れる前に口力セナはあつと何かを思い出す。

「隊長、いつも一緒にいるというのは厳しい気がします。数日後に一泊程度の遠征がありますし、その後もまったく城を空けるなどということは難しいです」

「何を意味不明なことを言っている」

その言い方に目を瞬かせる。そして厳しい訓練から外れる可能性もあることを多少期待しながら待っていたが、この人にはまったく通用しないようだった。

「時間があるときは一緒にいるということだ。嬢ちゃんが一人でも、

ある程度のレベルならどうにかなるだろう。城内ならたいてい騎士たちがいるし。むしろ本当にヤバい時のために、駆けつけるくらいしろ！」

「いや、ですから離れていたら、駆けつけるのは難しい気が……」

「うだうだと言っな！ 敵なのか何なのかわからない段階で動けるか！ 本当は嬢ちゃん自信で完璧に対処できればいいが。——そうだ、それなら、いつそ隊に——」

「わかりましたよ！ とりあえず今後の動きを知るためにも、リデイスのところに行ってきます。ではまた明日にでも」

フリートが無理矢理言葉を遮る。そして一礼をすると、ロカセナとともに慌てて闘議場から出ていった。

これ以上言わせていたら、リデイスに不利益が出かねない。あくまでも彼女の目的は自信に起こっていることを解決すること。それを終えてしまえば、こんな心配もする必要もないだろう。

そんな二人の背中をカルロットは溜息を吐きながら眺めていたが、見えなくなると瞬時に戦場の目つきへと変わっていた。

14、好戦的な上官(3)

リデイスはセリオアに促されて、部屋へと向かっていた。事前に長期滞在の来客用として部屋を取っており、手続き等はもう済んでいるらしい。

「人の出入りが激しいところだからね、意外に部屋はすぐに取れるもののよ。近くに図書室もあるから、たぶん満足できると思う」

「ありがとうございます。すごく楽しみです」

顔を綻ばせながら、城内の地図を頭の中に作り出していく。それをセリオアは複雑そうな表情で眺めていた。

「どうかしましたか？」

「……リデイスは、ショートスピアを扱う普通の遺術士よね？」

「そうですが、どうしてそんな質問を？」

聞き返したときに金色の髪が揺れる。セリオアは色褪せた赤髪、他にも様々な髪の色の人が城内にはいたが、リデイスほどはつきりと金色が映えている人はいなかった。

「ちよつと確認したかっただけ。ほら、ここが図書室。ミスガラム領域ではトップの蔵書量よ」

他の部屋より一回り大きな扉がある。そこを学者らしき人たちが出入りしていた。開いたドアの隙間から見える本の量に一瞬呆気に取られる。

「詳しい説明はあとでね。それでリデイスの部屋はもう少し進んだところにある、ここ」

セリオアの言うとおり、図書室の入り口から数十歩離れたドアの前で立ち止まった。そして彼女は事前にもらっていた鍵を鍵穴に差し込んで回すと、小気味のいい音がしながら、ドアが開けられた。中に入れば、通路を進んだところにベッドと書斎がある。しわのないシートが張られており、予想以上の綺麗さと充実した部屋の様子に、リデイスは顔から嬉しさがこぼれ出ていた。

「気に入ってもらえて良かった。食事は食堂があるからそこで適当に食べて。あとこれを渡しておく」

セリオー又はポケットから魔宝珠を三種類差し出した。

「一つは知っていると思うけど、この淡い黄色いのは光宝珠^{こうほうじゅ}。この部屋を明るくするくらいの威力はあるから、自由に使って。あと結宝珠^{けっほうじゅ}。持っていてもしそんなに負担にならない軽いもの。まあ軽い攻撃を弾くぐらいできるわ。物騒な世の中だから、女の子には念のため。そして――」

リデイスも見たことがない透明な魔宝珠を差し出される。曇りもなく、水晶のようで、手のひらで握れるくらい小さい。

「これはお守りみたいなもの。小さいけど、無くさないでね」

「こんなにたくさんさんの魔宝珠、ありがとうございます。どこに入れてよう、こんなに……」

「そうか、一般人が携帯するのは自分専用の魔宝珠くらいで、そんなに持ち歩かないものね。騎士団とかはポケットが多めの服を着ているから、あまり苦ではないんだけど。……いっそ、騎士団の服借りる？」

「いえ、そんな恐れ多いことは！ あるポケットを上手く使って、入れていきます」

「あら、そう？」

にやにやしつつも少し残念そうな顔をされた。騎士団員の服はかっこいいが、別に所属しているわけでもないのに、借りるのは辛い。ドアがノックされる音が部屋の中を響く。入り口に戻り、ドアを開けると、笑顔の口力セナとどこか安堵の表情を浮かべているフリートが立っていた。

「あら、二人とも、部屋の中に入っちゃだめよ。女性の部屋に入るにはまだまだ早いお年頃なんだから」

「セリオー又さん、僕たちだって立派な成人ですよ。分別つけて行動くらいします。この後は僕たちがリデイスちゃんを案内します。セリオー又副隊長はどうぞお戻りください」

「悪いわね。——そうそう、来週に騎士団の半分を使って近場のモンスター狩りに行くから準備しておいて」

さりとて言い流したが、それを聞いた二人の表情が変わった。目をパチクリする口カセナと眉をひそめるフリート。

「来週に半分の騎士ですか、それはまた急な話ですね」

「昨日の会議で決まったわ。最近、小競り合いが絶えなくて、元を絶とうってことになったの。逆に刺激しかねないかもしれないという意見もあったから、保留にしていたんだけど、とうとうミスガルム王国から目と鼻が見える場所で一般人に死者が出てね……」

それはさらに顔を渋くさせるには充分な話題であった。移動中にモンスターに襲われ、命を落とすことは聞く話だが、これだけ強力な結界で覆われている場所の近くで殺されたということは、住民間でも不安が漂うだろう。

「もうモンスターも暴走し始めているとしか、思えない状況ね。それか……無駄に知能を持ち始めたか」

「知能を？」

「殺された人が子供や老人じゃなくて、若手の学者だったのよ。しかもこれからモンスターに関する興味深い論文を発表しようという時にね」

肩をすくめながらセリオー又は息を吐いた。偶然であるとしたら、不幸な事件として処理されるだろうが、仮に意図的であるとすれば、それは非常に恐ろしいことだ。力を持たない知識人は迂闊に外に出られなくなる。

予想以上に緊迫している情勢にリデイスの鼓動は速くなっていた。そんな様子を見たセリオー又はふと優しい顔をする。

「大丈夫よ。この城壁の中にいれば、絶対に安全だから」

「そうかもしれませんが、でも……」

急速に何かが変わりつつあるモンスターに対して、リデイスが持つ武器は、リスクを伴った還術のみ。万が一何かあった場合には、自分自身を守ることしかできないかもしれない。

再び溢れてくる、悔しいという感情――。

そして早くどうにかしなければならぬという、焦り――。

その二つの感情から、リデイスはフリートたちに胸に溜まる物を堪えながら聞いた。

「ねえ、図書室って、誰でも入っているの!？」

「通行証が必要で、これだいたいこの場は入れる」

リデイスの勢いに息を飲み込みつつも、フリートは小さな魔宝珠が埋め込まれた一枚のカードを差し出した。触れた瞬間に若干の電撃が走る。そして文字が浮かび上がってきた。それは古代文字であり、判別は付かなかったが、雰囲気であった。

「私の名前？」

「そうだ。俺たちが持っているのと似ているだろう。今、カードにリデイスの指紋や思考が反映された。もうこのカードを他の人が触っても、何も反応はしない。――通り、城内や城下町を今日、案内しようと考えていたんだが、どうしたい？」

提案ではなく、まるでリデイスが他のことを考えているのがわかっていような聞き方だ。フリートやロカセナの申し出は嬉しいし、すぐ好奇心をそそる内容であるが、それを受け入れる状態ではなかった。ロカセナがフリートの肩をぽんと叩く。

「リデイスちゃんも連日の移動に疲れているよ。食堂とか図書室とが必要なおとところだけ案内して、僕たちの時間と見比べながらまた後日にしよう」

「そうだな。リデイス、それでいいか？」

「ええ、是非それで」

ロカセナやフリートに対して、微笑みながら返す。リデイスの明確な意志は示してはいないが、察してくれたのは嬉しい。

「じゃあ、あとはよろしく、二人とも。悪いんだけど、明日からは基本的に通常通りの訓練と会議があるから、そのつもりでね。じゃあリデイス、またゆつくりとお茶でもしましょう」

軽く手を振りながら背を向けて、颯爽とセリオーヌは去っていく

た。身長もあり、引き締まった体は後ろ姿も文句なく美しい。

リデイスは荷物を部屋に置くと、フリートとロカセナに連れられて、最低限必要な場所を案内してもらった。食堂に、大広間、町へ続く道、図書室の入り方など、一部だけ簡単にと言いつつも、城自体が広いため、時間はかかる。

「他にはどんなところがあるの？」

「政治的な話し合いの場や、俺たち騎士団が訓練する場所が主だろうな。城の奥にはミスガラム領の象徴である王様と姫様がいるわけだから」

さらっと言いつしたが、それはかなりすごい場所ではないだろうか。そんな場にいるということに対して、少し恐縮してしまう。もしかしたら、何気なく歩いているときに、今まででは考えられなかった凄い人とすれ違っているのかも知れない。

「まあ身分が高い人たちの護衛は近衛騎士団に任してあるから、出会うことはそうそうない」

だが淡い期待も一瞬で潰されたのだった。

案内が終わり、まだ比較的外は明るい。夕食に行くときに寄っていくと別れ際に言われて、一度解散となった。

リデイスは早速、図書室へと向かい、所定の手続きをして入室した。天井に付くほどの棚に、びっしりと本が詰め込まれている。それは眺めているだけで圧倒される量だ。

おおまかな地図を頼りに、リデイスはまず“還術”に関する本を探し始めた。きよろきよろ見渡しながら進むが、皆は自分の本に夢中になっているため、誰も気に留めていない。

細長い通路に沿って脇の方に入ると、魔宝珠関係の本がたくさんあった。その中にはもちろん還術についてのものもあるし、数少ない資料だろう、レーラズの木についてのものもあるようだ。

リデイスはとりあえず薄めの還術についての本を一冊取り出した。

そしてばらばらと中身をめくり始める。だがそれは運悪くも古代文字だけで書かれて入るものであった。辞書があれば解読できなくもないが、今、その労力を割くわけにはいかない。通常の文字で書かれているものを探す。

ふとさらに奥の本棚に一人の女性が本をめくっているのが視界に入った。そしてあまりの美しさに、作業を止めて、目をやってしまう。

ウェーブのかかった金色の長い髪、明るめの緑色の瞳、そして整った美しい顔立ちは、すれ違った人なら誰でも立ち止まって見入ってしまうだろう。リデイスも同じ色ではあるが、あそこまで綺麗な色ではない。

ふんわりとした上質そうなスカートを着ており、どこかの地位の高い貴族のように見える。本をめくる姿も上品だ。

彼女は気に入らなかったのか、めくっていた本を本棚に戻し、他の本を選び始める。そして何冊か中身を見てから、抱えていく。だがその本が彼女の腕の中に収まらなかったのか、ちょっとした衝撃で床に落としてしまった。

リデイスは自分が持っていた本を近くの棚に入れて、少し遠くの方に落ちた本を片手に持って急いで駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

髪を邪魔にならないように押さえながら丁寧に拾っている。

「ええ、大丈夫です。すみません、お氣を使わせてしまい」

女性と一緒に何冊かその場にあつたものを拾い、最後に途中で拾った本を手渡した。

「どうもありがとうございます」

真正面から笑顔でお礼を言われて、リデイスとしてもなぜだかすごく嬉しくなる。

彼女はリデイスを見ると、ほんの少し目を丸くした。そして手を口に軽く添える。そして何かを飲み込んでから、話しかけてきた。

「あなた……、最近、城に来た人ですか？」

「はい、今日の昼頃に。この城の蔵書量を聞いて、是非とも言つて連れてきてもらいました」

「あら、それは熱心なことで、嬉しいですね。ちなみに、どこからいらしたのかしら」

「ミスガラム領域の北の方にある、シュリッセル町からです。この城下町とは比べものにならないほど、田舎のところですよ」

「シュリッセル町……」

そして何かを考えながら、視線を下にやる。だがそれも一瞬で思い出したように、顔を上げた。

「ごめんなさい、拾っていたただけでなく、立ち話まで」

「いえ、そんなことは」

こんな美しい人と話ができただけでも、リデイスにとっては幸運なことであつた。

「私、これから用事があるので、これで失礼させていただきます。

もしよろしかったら、またお会いしませんか？ 城の外での話、是非とも聞いてみたいわ」

「ええ、もちろん、私でよろしければ！」

思わぬ誘いに、顔から出る嬉しさを隠さずに返事をする。

「所定の場所はまた連絡するわ。私はミディアル。あなたは？」

「リデイス・ユングリガです。あの、また連絡するとは言いましたが、どうやってですか？」

「ある独自の方法がありましてね、リデイスさん。では、また近日中にお会いしましょう」

軽く頭を下げると、すぐ近くにあつた通路を抜けて行つてしまった。後ろ姿もとてもお淑やかであり、非常に貴族慣れしている女性だ。今度会えるのが非常に楽しみである。

再び本探しに戻ろうとしたが、不意に何かが脳内に引っかかった。今まで得た知識と最近得た情報が混在するような不快な感じに。必死にその原因を取り除こうとするが、いくら考えてもそれは無理であつた。

15、道を示す人々(1)

翌日、リデイスはフリートとロカセナが空いている時間に城下町へと連れ出された。昼休憩の時であつたが、既にフリートの顔からは疲労感が滲み出ている。うなだれながら、大陸で一番賑わっている町を歩いていった。

あまりにいつもと雰囲気の違いすぎて、リデイスは首を傾げる。

「フリート、人気者だからね。久々に現れたから、引っ張りだこで模擬試合をたくさん無理矢理やらされていたよ。昼休憩後もほぼ予約でいっぱい」

「そんなに凄いんだ……。ロカセナは？」

「僕はそこまで試合は申し込まれないよ。剣術もどうにか基礎が成り立っている程度のものだし、素直な剣捌きはできないんだ。もうモンスターとやっているときは、とにかく攻撃するだけで精一杯だし」

苦笑しながら、自嘲気味に話す。そうは言われても、外に単独行動を願い出て、もしくは頼まれたとしたら、それなりに腕は認められているのではないかとリデイスは思う。

ミスガラム城下町はシュリッセル町と比べものにならないほどの種類の店が並んでいる。食堂一つとっても、メニューがまったく同じところはない。

リデイスとしては、主要な書店と、武器防具屋を教えてもらえれば、あとは一人で行くこともできるのだが、なぜかフリートが立ち止まった場所は服飾店。しかも高そうな素材を取り扱っている。

「ねえ、行く場所間違えてない？」

「いや、ここでいい」

「私の服……。そんなに城の中では浮いているの!？」

薄々感じていたが、庶民すぎる服装が学者や高貴な貴族の中では目立っていたかもしれない。それに対してフリートは首を小さく横

に振る。

「ち、違う!」

「じゃあ何よ!」

「それは……」

言い合っていると、両者の肩に手が置かれた。微笑みの貴公子は仲裁までも慣れているようだ。

「まあまあ落ち着いて。フリートが変に意地を張っているだけだから」

「違う! 副隊長に頼まれたただけだ! もっとリデイスの服の防御力を上げろって……」

「それならローブ一枚でもいいじゃないか。それが一番手っ取り早い。……けどそれだと城内では若干浮くから、少しでも質のいい普通の服、いや高めの服を作ってもらいたいんだろう」

フリートは口力セナの言い分に反論することなく、黙り込んでしまった。そして機嫌を悪くしながら、服飾店の中に入っていく。リデイスは視線を口力セナに戻すと、フリートの方を指しながら呟く。

「……図星?」

「よくわかってきたね。あいつの性格が見えてきている証拠だ」

「うん、わかりすぎるから……」

そう言いつつ、改めて服飾店を見渡す。そこまで派手な印象ではないが、素材は並大抵のものではない。

正直言つて意外である、フリートがこんな店を知っているとは。あの堅苦しそうな雰囲気からして、戦士たちが御用達している店くらいしか、出入りをしていないと思っていた。

中に入ると、にこにこした表情をしているおばさんが出迎えてくれた。

「貴女が、フリート君が言っていたお嬢さんね」

「は、はい」

「戦闘を主としますが、社交辞令をする場になってもおかしくない服を仕立てましょう。さあさあ、奥にどうぞ」

「すみません、よろしく願います」

おばさんに促されて、カーテンの奥へと入っていった。

「フリート、お前、本当に面白すぎるよ」

ロカセナが口を押さえて笑いながら、店の隅にある椅子に座っている。その横に腕を組みながら、仏頂面のフリートが立っていた。

「だから副隊長も言っていただろう。一人でも対応できるように備えるよう促してとけて」

「まあその通りだけどさ。お前が密かに御用達にしている店でそういうことをするとは思わなかったよ」

店内は中流くらいの貴族よりの服が並んでおり、一般市民には少し奮発しなければ出せない値段である。そしてただの服ではなく、密かにモンスター避けの魔宝珠を使いながら仕立てられているため、防御力を見た目よりも格段に高い。

「昔から知っている人の方が、話は通しやすいだろう。ただそれだけだ」

薄々思っていることだが、リデイスはまた近いうちにこの地から旅立つだろう。城内の資料や、知識人たちに聞き回ることになるだろうが、おそらく何も得られない。

なぜなら、ここに入ってくる情報は、いい意味で綺麗で真つ当すぎるからだ。

もつとささやかな噂、嘘か本当か定かではない情報を求めるのなら、南に位置しており、たった一つの王国に様々な身分の人間が入りしているムスヘイム領域、もしくは小さな村が転々と点在しているが、それぞれの歴史は深い、東にあるヨトンルム領域で探し回るのが、現実的かもしれない。

もしかしたら、北にある山で覆われているニルヘイル領域も何らかの情報を持っている可能性の一つかもしれないが。

カーテンの隙間からリデイスの横顔が見える。おばさんと談笑を

しながら、服を合わせていた。
モンスターの動向が気になる中ではあるが、そこには確かに穏やかな日常があった。

* * *

リデイスが城に着いてから一週間ほど経ち、フリートとロカセナら、騎士団の半分ほどの人々が、近くのモンスターを一掃するために出かけていった。数日で戻るとはいえ、半分もの人を駆り出すのは普通のことではない。

出発する前日に二人と別れるとき、少しだけ顔を強ばらせていたのがリデイスの記憶に残っている。

完全に掃討できない場合が一番怖い。万が一逃げられて、あとで城に反撃でもされたら、最悪の展開である。

無事に終わることを願いつつ、リデイスは自分自身のために行動をし始めた。

図書室には毎日出入りし、本も数多く目を通しているが、まだまだ見通しは立たない。フリートたちに連れられて、今は引退しているが、かつては還術で活躍した老人からも話は聞いたが、これと言つて収穫はなかった。

少しずつでも構わないから、毎日前進し続けたかったが、なかなか難しいものである。

いつものように図書室で本を読んでいると、侍女らしい女性が一通の手紙を差し出した。

「リデイス・ユングリガ様ですよね？」

「そうですか……」

「ミディアル様よりお手紙を預かっております。お早めに中身を確認してください」

そう言うと、一礼して彼女はそこから立ち去った。

ミディラルと聞いて、あの美しい女性のことを思い出す。急いで中身を開封すると、そこには城のある場所と時間を示した、簡潔な手紙であった。

「また、お会いしませんか？」

あの声が蘇ってくる。まだ約束までは時間があるが、今から楽しみで、本を読むのも上の空になりつつあった。

城には西と東で庭があり、東は一般の人にも解放されているが、西は城内の人のみしか入ってはいけない。そのため足を踏み入れると、いつもと違った空気が漂っていた。

「リデイス・ユングリガ様でしょうか」

「は、はい」

「お待ちしておりました。着いてきてください」

入り口の近衛騎士に話しかけられる。何か悪いことでもしたかと思っただ、彼は少し進み、リデイスが着いてくるよう促した。

整理された庭を進み、辿り着いたところは籠のような形をした屋根付きの小さな場所。ベンチとテーブルがあり、そのベンチの一つにミディラルが優雅に本を読んでいた。まだこちらには気づいていないようで、顔は本に向けたままだ。

近衛騎士は立ち止まるが、前に進むよう促された。それを受けて、リデイスは彼女に近づくと、ようやくミディラルは顔を上げる。リデイスを見ると、嬉しそうに微笑んだ。

「こんにちは。来てくださり、ありがとうございます。すみません、貴女の予定も何も聞かずに、このような手を打ってしまい」

「いえ、暇ですから、いつでも大丈夫でした。こちらこそ、呼んでいただきありがとうございます」

ミディラルに椅子を勧められると、そこに座った。机の上にはティーポットだけでなく、クッキーなどの菓子類まで置かれている。

「お時間は大丈夫ですか？　大丈夫なら、お茶でも飲みながらお話でもしましょう。私、同年代や外から訪れた人の話はあまり聞いたことがないから、是非とも貴女のお話を聞きたいわ」

「予定はないので大丈夫です。私程度の話でよければ、いくらでもお話しますよ」

それから二人は、お茶を飲みながら、話に華を咲かせた。出会って間もないが、ミディラルの話の進め方非常に上手であり、雰囲気も素敵なため、話しやすい。まるで親友か、姉とでも錯覚してしまいそうな、落ち着き感があった。

話は気がつけば、リデイスが還術士という方向へ転がっていた。「女性なのに還術士なんて、凄いですわ。しかもファヴニール様から直々に術印を押してもらったとなれば、それは自信を持っていたことですよ」

「ミディラルさんは、ファヴニール先生をご存じなのですか？　数年前に城を出たと聞きましたけど……」

「私、城にいる期間は長いのです。何度かお会いしたことがありますわ、人の良いおじさまでしたから」

ふふつと口元を押さえて笑う。両親が城内の関係者で、産まれたときからここにずっといるのかもしれない。それにしても、あのファヴニールを人の良いおじさんと言うのだから、少し笑ってしまいたいそうになる。

不意に生ぬるい風が吹き抜けた。それをミディラルは感じると、目を細めながら髪をいじる。

「嫌な風ですわ。——ねえ、貴女は、モンスターはこれからどうなると思います？」

まったく別の質問をされて、返答に一瞬窮した。頭の中を整理しつつ、答える。

「あまり考えたくはないですけど、モンスターから受ける被害が多くなる気がします。最近の動きは本当に読めませんから、はっきりとは言えませんが」

「……そうですね。今は綻びだけですんですが、いつかはそれが一気に開く可能性もありますわ。それを今、彼らは修繕しに行っているわけですが……」

彼らと聞いて、すぐにリデイスはフリートたちのことを思い出した。その後に続くミディアルの表情は暗い。

「……無事に帰ってきてなんて、ただここにいただけの人がおこがましい。望むのは生きて帰ってきてほしい。……ただ、きっと今はまだ“その時”ではないのだから、おそらく大丈夫だと思いますが」沈痛な表情である彼女に、その話の根拠はなどと聞くことはできなかった。

漠然とした不安は広がり始めているのは、リデイスもそうだ。

吹き抜ける風が、気持ち悪い。

降り落ちる雨が、いつもよりも重苦しい――。

16、道を示す人々(2)

ミスガルド城の騎士団は、主に城内を護るための近衛騎士隊と城外を中心として活動している騎士隊がいる。通常、騎士団と言えば、騎士隊の方を指すことが多い。

その騎士隊は、さらに六部隊に分かれて編成されている。その隊ごとに特色があり、還術を重点に置いている部隊、結術を始めとするサポートを主体とする部隊、弓などを使って後方からの攻撃を主とした部隊などがある。もちろんバランスに取れた部隊もあり、特色があるとは言っても、その一部隊で充分活動はできる。

今回は徹底的にモンスターを還すため、還術部隊や特攻部隊が中心となっていた。

フリートやロカセナが所属している第三部隊は特攻よりのバランス型だ。隊長を見ててもわかるとおり、血気盛んな好戦的な人から、ロカセナのようなそつなくこなす人など様々である。

現在、フリートたち第三部隊は第五部隊の後ろを歩きながら、目的の場所へと向かっていた。

今回の目的はモンスターの巣と言われるところの掃討。久々の徹底的な抗戦である。

「さて、今回の獲物はどいつだ」

カルロットが意気揚々と先頭を歩いている。この規模の抗争は彼にとつては多くの相手と対峙できるため、嬉しいらしい。朝から非常に機嫌がよかったのが目に入った。

「隊長、今回は掃討が目的です。間違つても、強い相手を自分だけで対峙しないでください」

セリオーヌが警戒心を働かし、左右を見渡しながら、カルロットに指摘する。

「俺が負けるとでも思っているのか？」

「思っていないません。ただ、隊長がもたもた相手をしていると、こっ

ちが持たない可能性があります。速攻で倒すように指示を出しますので、勝手に暴走しないでください」

「何だよ、その言い方は。俺が信用されてないみたいじゃないか」「信用していません。そんなことも気づかなかったのですか？」

直球と変化球で皮肉を言うと、さすがのカルロットも苦虫を潰したような顔をした。そしてぼそつと呟く。

「……お前、良い旦那が見つからないぞ」

「隊長に心配される筋合いはありません。この前、奥様があまりの扱われように嘆きに來ましたよ」

涼しい顔で流れるように言ったが、それはカルロットにとっては一番突かれたくないところであつたらしい。さらに眉間にしわを寄せる。

その時、草むらが音を立てて揺れ始めた。隊の中に緊張が走り、即戦闘モードに移る。

だがそこからでてきたのは、耳の長い小動物であつた。安堵の息を吐き、警戒心を解除する。

ただフリートを除いては。

ロカセナがすぐにでも剣を抜けるようにしているフリートに対して、首を傾げる。

「どうしたんだ？」

「……召還タイプの還術士が隊に入ればよかった。いるのは第五部隊の還術隊に数名か。——どうやら、間に合わないな」

そしてフリートはできる限り速く剣を抜いた。その時できた衝撃波が森の向こう側へと放たれる。

次の瞬間、奇声のようなけたたましい鳴き声が耳に突き刺さってきた。

衝撃波が当たったあたりから、突然、羽を生やしたモンスターが現れたのだ。フリートたちよりも一回り大きい。鉤爪は鋭く、擦っただけでもだいぶダメージは受けるだろう。

「……属性は風の鳥型のモンスター。目の錯覚と風によって作られ

た膜によって、今の今まで気づかなかったのね」

セリオーヌは右手にショートソードを握っていたが、さらに左手にも同じ剣を鞘から抜いた。彼女の大きな長所としては、即座にモンスターの性質を捉えること。それは幼い頃から蓄積した知識と経験によるものだ。

鳥形のモンスターの周りに隠れていたのか、様々なモンスターが現れる。鳥系、獣系、魚系、そして火を燃やしているものまで、多種に飛んでいた。

「風、土、水、火——すべての属性のモンスターがいるわ。こんな近くにこの種類。なぜ気づかなかったのか、悔やまれる」

「副隊長、分析はいいですから、今は殲滅しましょう。後ろがこれでは、一番前はもっと危険なはずですよ」

「その通りよ、フリート。ああ、隊長が指揮してくれれば楽なのに……」

ちらつとセリオーヌが横目で見た先には、カルロットが一番大きな鳥型のモンスターを舐めるように見ていた。どうやら獲物を定めたようだ。

「フリート、あれは還せる？」

第三部隊の中ではフリートの還術はトップクラスに当たる。かつ、適切な判断が取れるということで、この若さながら重宝されていた。フリートはしっかり首を縦に振る。

「無傷はさすがにきついですが、ある程度傷を負わせてくれれば、還せます。安心してください、この前、これより大物を相手しましたから」

あの少女の力がなければ難しかっただろうが。などと、心の中で付け加えて。

モンスターたちが少しずつ近づいてくる。

昼間のはずなのに、陽が雲に覆われているためか、暗かった。

冷たい風が吹き、身も心も寒気が走る。

カルロットが一步前にでると、大声で叫んだ。

「野郎ども、行くぞ！」

その言葉を皮切りに、一同は一気にモンスターに斬りかかった。先頭はカルロットで、容赦なく斬り抜けていく。

「普通、トップは後ろで指示を出すのに……。毎回思うけど、あの人が隊長になれた理由がわからないわ」

セリオー又はカルロットが出ていても、特に微動だにせず、戦況を眺めている。そしてこちらが不利になりそうな場所や、まとめてかかった方がいい場所へと、即座に判断し、指示を出していった。

モンスター掃討を始めた第三部隊だが、ふとフリートは奇妙な感覚を得ていた。ある程度ダメージを追わした相手を次々に還していくが、いつもよりも体にかかる負担が軽い。モンスターを還すと体に負担がかかり、それは大きさや強さによって比例するが、それがそこまで感じないのである。

——モンスター自体のレベルが低い場合ならわかるが、やり合った感じはそう弱い相手ではないのに、なぜだ？

同じく還術に長けている先輩の騎士に聞いたかったが、あいにく近くにはいないため、それはできなかった。しかし軽いとは言っても、量が半端ない。体力が保つかどうかの問題である。近くにいた獣型のモンスターを還すと、ふとある言葉に思い当たった。

——まるで中身が空っぽのモンスターで、大量に産み出されたようだ。

その言葉が一番しっくりくるものであった。

何匹か還していくと、やがてその一団のボスと思われる、一番初めに現れた羽が生えたモンスターの前へと辿り着く。威嚇するかのように、低い鳴き声を出す、そこまで圧力となつてのし掛からない。

モンスターの血が滴る剣を持ったカルロットは嬉しそうに、そいつへと斬りかかった。だが、とっさに避けられてしまい、空振りを

する。

「この、ちょこまかと！」

すれすれのところで回避しているモンスター。しかし、その様子が奇妙に思えた。他の戦況を見ても、決してモンスター自ら攻撃は仕掛けてこないようで、違和感がさらに募る。巢を突かれたのなら、動物でさえ怒りを露わにして攻めてくるだろう。それがあの凶暴と言われているモンスターが、この状態というのは――。

「副隊長、とりあえず還しますよ」

「ええ、お願い！」

羽を広げれば、人間などたやすく攻撃できるモンスターに対して、フリートは真正面から突っ込んでいく。そのサポートを他の隊員がする。

だがモンスターは近づいてきたサポート隊員たちを適当に蹴散らすだけで、フリート自体には興味を持っていない。

「魔宝珠は樹の元へ、魂は天の元へ」

剣が輝き始める。そしてようやくモンスターはフリートの存在に気づいた。だがその時には既に懐に入り込んでいた。

――遅い！

「生まれしすべてものよ、在るべき処へ――還れ！」

歩幅を寸前で変え、羽でフリートを飛ばそうとする間をすり抜けて、細長い首へと一線を入れた。

生温い血が溢れたのも束の間、羽を生やしたモンスターは光に包み込まれる。そして空へと光とともに消え去って行った。

次の瞬間、他のモンスターたちの動きも鈍くなる。それをそれなりに還術が使える人々で還していくと、あっと言う間にモンスターはいなくなった。

静寂の中に風が吹き抜ける――。

安堵の雰囲気広がるが、フリートは気を緩めず、一瞬だけ感じた気配に対して、振り返ってナイフを投げた。隊員たちがいるよりも奥にある木の真ん中に当たり、その脇からまだあどけなさが残っ

ている一人の少年が顔を出す。

「お前は――」

赤色の肩に掛かるくらいの髪をした少年はうつすらと笑みを浮かべた。背はあまり高くなく、小柄という印象を受ける。

「これだけ離れているのに、気づくとは少し意外だ」

挑戦的な言い方と表情に、フリートは年下の相手に言葉を選びつつ返す。

「……今いたモンスターと何か関係があるのか」

「何それ、どこにそんな証拠があるの？」

目を細めながら、赤色の髪の少年はフリートを見つめる。

「お前の手に持っているのは魔宝珠だろう。ここら辺にはモンスターの巣があるというのは、周知の事実だ。それなら、なぜ召還しない？」

「そうなの？ たまたま通り過ぎただけなんだけど」

笑いながら誤魔化そうとしているが、何か裏を含んでいるのはわかってる。

「その魔宝珠を使って、何を召還するんだ」

「知りたいの？ 何が起こつても知らないよ」

挑発めいた言葉に、カルロットが苛立っている雰囲気を漂わせている。それをセリオーヌが止めようとしていることも。

召還したものが何であれ、もし身に危険が及ぶようなら還せばいい。そう思い、剣を握りしめた。

「知りたいな。是非とも召還してもらおう」

「――わかった」

少年が持っていた掌に乗るほどの魔宝珠が、黒々とした光を発生始める。気温が一気に冷え込んだのがわかった。

――精霊召還にしては、様子がおかしい。

風、土、火、水の精霊を操る際には、魔宝珠はそれと同色の色を発する。すなわち、緑、茶、赤、青と。しかし黒というのは見たことがない。

「さあ——僕の魔宝珠よ、彼らにその姿を——」

「はい、そこまで」

少年の言葉が若い女の声によって遮られる。腰にまで伸びた黒い髪を二つで結び、ブラウスもスカートも黒色の、まさに上から下まで真っ黒な女性がその場にいた。その異様な姿、そして現れ方に、呼吸が早くなっていく。

「こら、もう終わりでしょう。それ以上、君には余裕がないんだから」

「でもさ、こいつら僕のことを馬鹿にしているんだよ」

「馬鹿にしているの？ 何も知らないから、そんなことを言えるだけよ」

少年をあやすように言うが、それがどこか白々しい。ふと女性がフリートたちの方を向く。

「私の仲間が失礼したわ。もうこれで引くから安心して、前の隊と合流しなさい」

「待て。あなたたちはいったい何者だ！」

女性はフリートを値文するかのようにじろじろと見る。

「黒髪で還術に優れた、ちよつと特殊な立場である騎士の男。——詳しくは言えないけど、私たちは無害の者よ、今は。でもね、時が経てば、対立するかもしれない。それはそちらが受け入れられない場合だけよ」

「何を言っているんだ？」

以前、湖であつた女性が明らかに圧力をかけて言っていたため、はつきり感じ取れた。一方、表面上ではとぼけたように適当にあしらつた様な言葉を出しているが、内心はかなり企んでいることがある。

「そうだ。あなた、今からこちらに加わるのもありだと思うわ。還術が結構使える人は重宝するのよ。それに大切な人の傍にいたいのなら、是非とも」

「——お前ら、予言者か？」

頭が混乱状態であるフリートをよそに、セリオー又は適格に突いてきた。だが女性は笑顔で首を横に振る。

「いいえ、そんな高度な能力はないわ。私は普通の人と同じで、ただ魔宝珠を使って召還するだけよ。その召還する媒体が少し違うだけかしら」

「――モンスターか」

フリートが怒気を含んだ声で呟く。隣にいたセリオー又はびくつとした。女性を包んでいた雰囲気は少し変わる。

「あら、無知なのにモンスターをそんなに上から目線で言うのは良くないわ。本来なら対等な立場であるはずなのに」

「どうして人を襲うやつらが対等な立場なんだ！」

「そんなの自分で調べてみれば？ どうせわからないんだろうけど」人を小馬鹿にしたような言い方が癪に障るが、これ以上突っかかっていたら、思わず剣を振りかざす恐れがある。それだけは抑え込んだ、相手は人間なのだから。

「あら、立ち話をしていたら、もう時間が過ぎてしまったわ。今回はこれくらいで。では、失礼します。騎士団の皆さん、無駄な努力、お疲れさまでした」

にこりと笑いつつ、女性と少年は背を向ける。

その瞬間、カルロットが剣を片手に動いた。横顔をちらりと見たが、怒りで満ち溢れていた。

だが、女性や少年の元に辿り着く前に立ち止まる。

「……結界か」

カルロットと二人の間には目を凝らせばわかるほどに、結界が張られていたのだ。非常に分厚く、そう簡単に突破でないことを物語っている。苦々しく吐き捨てながら、カルロットら第三隊は二人を見送るしかなかった。

やがて姿が見えなくなると、急にフリートの近くにいた若めの騎士が静かに倒れた。それに続いて、数人の騎士が倒れたり、激しく呼吸をし始める。

「大丈夫か!？」

呼吸が荒くなっている騎士に話しかけると、辛うじて頷かれた。

「……ご親切にも、ある程度の体力や能力がない者は、早めに切れて忠告をしたのか」

「どういうことですか、カルロツト隊長」

調子を崩した騎士を横にしながら、眉をひそめて戻ってきたカルロツトを見る。

「フリートも気づいているだろうだろ。あの二人の潜在能力。そしていつかは対立するということに。——お前なら、二人がどういう能力を使うかわかっているんじゃないのか？」

顔を俯かせながら、口を一字にする。その時、肩に軽く手が乗せられた。その人物を見ると、口力セナであった。

「あまり一人で考えすぎない方がいいんじゃない。推測でも構わないから、言ってみなよ」

「……ああ、そうだな」

促された相方に対して、軽く頷き、並んで立っているカルロツトとセリオーヌに対して口を開いた。

「あくまで推論です。そして今まで俺が勉強した範囲だけから導いた考えですが。——どちらか、もしくは両者かもしれませんが、魔宝珠による召還物は——モンスターの可能性があります」

一同が息を呑むのがわかった。セリオーヌは眉をひそめているが、カルロツトは険しい表情のまま変えていない。

肌べつとりと付くような、生温い風が吹く。

不穏な気配はまだ消え去ってはいなかった。

17、道を示す人々(3)

フリートたちがモンスター掃討に出かけてから、三日ほど経過した頃、予定通り騎士団たちは帰ってきた。第一、五部隊は意気揚々としており、見事モンスターを掃討できたと言っているが、フリートたち所属の第三部隊は、掃討したものの、表情は暗かった。

「フリート、ロカセナ……？」

第三部隊の部屋にリデイスは顔を出すと、難しい顔をしたまま二人は椅子に座っていた。近づこうとすると、カルロットが気さくに話しかけてくる。

「おお、嬢ちゃんじゃないか。騎士団に入る気にもなったのか？」
「違いますよ。皆さんが帰還したと聞いて、会いに来たのです。ご無事そうでなによりです」

リデイスはそう言ったが、この重い空気は只ならぬことがあった
としか思えない。

ロカセナがおもむろに顔を上げると、リデイスと視線があった。
そして微笑みながら、話しかけてくる。

「リデイスちゃんは元気そうだね。何かいいことでもあった？ 還術について何か有益な情報でも得たの？」

「いや、情報に関しては、これと言ってまったく……。けどこの図書室はすごいね、蔵書量が半端なくある。断片でしかなかった知識が繋がっているのは確かだよ」

「それは良かったね」

「あと素敵なお姉さんと話したりして。あちらが忙しそうだからあまり会えないけど」

「お姉さん？ 誰だろう、知っている人かな」

「金色の髪のお姉さんで、名前はミ——」

名前を言い切る前に、部屋をノックする音でかき消された。カルロットが大きな声で返事をする、近衛騎士らしき服装の青年が立

っていた。

「カルロット第三部隊長、王と姫がお呼びです。同行してもらえますか？」

王と姫という単語を出した瞬間、部屋の空気が引き締まった。カルロットの表情も幾分堅くなっている。

「お、おう、大丈夫だ。王様や姫様がいったい何の用だ？」

「それはご本人に直接聞いてください」

もったもたたを返されて、近衛騎士はカルロットを連れて出ていってしまった。ドアが閉まると同時に空気も和らぐ。

「ねえ、ロカセナ、王様やお姫様がお呼びだしするなんて、そう滅多にあることではないよね」

「そうやたら滅多にないね。護衛とかなら、近衛騎士に頼むのが普通だし。……ごめん、僕もよくわからない」

申し訳なさそうな表情をされるが、リデイスは首を横に振った。

あまりに特異な状態であるということは、表情や感じている雰囲気で行く。

「……そうだリデイス」

フリートが重い腰を上げて、近づいてくる。眉間にさらにしわが寄っているのは、ずっと考えことをしていたからか。

「何？」

「時間があるのなら、今から第五部隊の部屋に行くぞ」

「第五部隊？」

「還術士を中心に編成された部隊だ。いつもは色々な部隊と共にだいたいの人々が外に出払っているが、今日ならいるはずだ。特に第五部隊長なら、還術にも長けているし、何か知っているかもしれない」

「本当！？」

思わず声を発する。だが周りに他にも人がいるため、恥ずかしそうにすぐに口を手で覆った。

「まああまり期待しない方がいいかもしれないがな」

そう言いながら、リデイスの脇を通って、入り口へと向かってい

た。それを慌てて後を追いながら、僅かな可能性を求めて廊下へと出ていった。

第五部隊長と接触しなかったのは、リデイスのためだけではなく、フリート自信も魔宝珠について知りたいことがあったため、それを一番利用し、モンスターを還す機会が多い、還術部隊とも接触したかったのだ。ロカセナはそれまでも見切っているようで、笑みを浮かべている。

「フリートも疲れているのに、気が利くね」

「そういうことじゃないって、わかっているだろう。まあ、俺に関しては魔宝珠を調べているやつの方がいいかもしれないが……」

第三部隊が集まっている部屋から、入り口よりに進んだところに第五部隊の部屋はある。

そのドアをノックすると、何の予告もなしに開かれた。長身で眼鏡をかけた、フリートたちよりも年上の青年がドアを開けたのだ。服装は着崩したローブを着ており、騎士の人には見えない。

彼は目を瞬かせながら、三人を一通り見ると、少しだけドアを広く開けた。

「クラル隊長に用かな？」

「はい、特に約束は取り付けていないのですが、大丈夫でしょうか？」

「さっき僕が話していたときは、特にこの後の用事はないって言うていたから、大丈夫だろう。どうぞ入りなさい」

そう言っ、長い髪を束ねている青年に促されて中に入った。それと同時に彼は廊下へと出る。

「それじゃあ、ごゆっくり」

にこりと微笑みながら、青年は行ってしまった。雰囲気や言動からして、騎士ではなく貴族の人かもしれない。

第五部隊の部屋の中は、雑然とした第三部隊の部屋と比べて、綺

麗に整頓されていた。むしろ人などほとんどいないかのように、物がなさ過ぎる。実際、日中であるにも関わらず人もいなく、騎士たちが待機している部屋には誰もいなかった。

奥に行くと、眼鏡をかけたさらさらとした薄茶色の髪の三十代の男性が報告書を記している。童顔であるため、初めてあった人は十歳くらい若く、捉えてしまっだろう。机の目の前にまで来ると、ようやく気づいたのか彼は顔を上げた。カルロットとは真逆の性格をしており、見た目通り穏和で優しい隊長だ。

「おや、第三部隊のフリート君とロカセナ君じゃないか」

「こんにちは、クラル隊長。少しお時間を頂いてもよろしいですか？」

「——彼女の還術のことか？」

リデイスは自分がすぐに話題に出されたことに対して、若干ながら驚きの顔をする。フリートたちは予想されていたことであつたので、そのまま話を続けた。

「隊長から聞きましたか。そうです、彼女関係です」

何かを知っているかと期待して様子を見ていたが、彼の眉間にしわが寄るだけであつた。

「……結論から言えば、期待できるような返答は持ち合わせていない。彼女の身に起こっていることが、偶然なのか必然なのかということさえ、わからないことだ。数週間前に突如現れたものだろう。一過性ということも否定はできない」

「つまり、クラル隊長はそのような状態に陥った人は知らない」「簡単に言えばそうなる」

リデイスの表情がしぼんでいるのが雰囲気だけでも感じる事ができる。一瞬でも期待させてしまった、自分の浅はかな行動が馬鹿らしい。

「しばらく還していないのかい？」

クラルはリデイスに話を向けた。それを彼女は首を縦に振る。

「町を出る前に還したのが最後ですね。およそ二十日前くらいです。」

移動中にモンスターと遭遇しても、二人が対処してくれましたので」
「どういう状態に陥るんだい？」

話の流れとして、そこに行き着くのは当然である。だが急激にリデイスの顔が青くなっていた。どんなに強いモンスターにも果敢に相手をする少女であるが、あれだけ脅えている様子を見せられたら、その光景がいかに恐ろしいことだったというのが勘づくことができる。

「……無理しなくてもいい。俺から話しても——」

「大丈夫……。どうせこれから嫌でも多くの人に話す羽目になるから、いちいち頼ってられない」

助け船を出そうとしたが、毅然とした表情で突っぱねられた。

「——人間の恐ろしい悲鳴が聞こえ、血が飛び散った惨状ともいえる光景が広がっているのが、脳内を駆け巡る状態です。しばらくすれば収まりますが、還した直後にその状態になり、しばらくは思うように動けません」

なるべくその光景を思い出さないように、一気に言いきったが表情は暗い。クラルは簡単にメモをしただけで、それ以上聞いてこようとはしなかった。

彼は考えをまとめているのか、しばらくペンを走らせたり、止まったりと、しばらく繰り返す。

「ふむ、正直言って、推測するにも事象が少なすぎる。還術をするときの周りの状況、誰がいたか、どんな雰囲気だったか、という情報がないと迂闊に思考は広げられない。……その様子だと、あまり還したくないよね」

リデイスは辛うじて頷いた。クラルとしては、自分の目の前で還術をしたリデイスを見たいのかもしれない。

「既に図書室で調べてはいたらしいけど、それらしい情報はまったくなかっただろう。これ以上探しても無駄だよ、僕は還術に関しては全部読んだけど、そんな内容は見たことがない」

はつきりと言われると、リデイスは驚愕の顔をしていた。これは

十日程度ではあるが、彼女の努力も意味がなかったということを示している。もはやこの城に來たこと事態も――。

「けど、それは記録として残っているものの中だけの話だ。誰かが記憶の中で有益な情報を持っているかもしれない」

「誰ですか!？」

「仮定の話だよ、リデイスさん。それは君たちが探すんだ。一番いそうなのは、町に入るのにまったく制限をかけてない、ムスヘイム領域にあるヘイム王国だろう」

やはり――とフリートは内心思っていた。港町として栄えているその王国は、身分に関係なく、様々な人種で溢れている。そこに行けば、ここではないなかった、己のためだけに没頭して還術に関して研究している人がいるかもしれない。

「それとあくまで推測だけなら、予言者に頼ってみてもいいかもしれない。何かしら方向性は見えてくるだろう」

「予言者……」

「ただ予言者は良くも悪くも、気まぐれな人が多い。ちゃんとした予言を求めるのなら、いい人を見つけることが必要だ」

リデイスの顔には少しずつ精気が戻り始めている。少しずつ方向性は見えてきた。フリートはロカセナの方を見ると、しっかりと首を縦に振る。考えていることは同じだろう。

「ヘイム王国に行く必要があるそうだな。予言者に関しては、じいやに頼むのはどうだ？」

城に直属の予言者がおり、その人をフリートは示していた。だがその思惑とは裏腹に、残念そうにロカセナは首を横に振る。

「考えは悪くないけど、最近、たいそうな予言をして、体力の消耗も激しく、しばらくは休息しているって聞いたよ。老体だから、いつ元通りになるかはわからないらしい。自力で良い人を見つけた方がいいだろう」

「そうか……」

「予言者に頼る前に、還術について知っている人を探した方が早い

よ。隊長に言つて、休暇を取つてこよう」

「そうだな」

ロカセナに背中を押される形となり、考えがまとまった。クラルに軽く礼を言つて、急いで戻ろうとしたが、フリートはもう一つ案件があつたのを思い出す。二人を先に第三部隊の部屋へと戻し、再びクラルの前に立つた。

「どうしたんだい？」

「還術ではないのですが、クラル隊長はモンスターと接触する機会が多い人ですね。それに関して、少し魔宝珠の召還について聞きたいことがあります」

「召還に関してなら、ルーズニルに聞くのが一番いいよ」

再び書類に目を通し始めたクラルは慣れたように返す。

「ルーズニル？」

「知らないのかい？ 文官貴族の中では最近だが、かなり有名だ。そうか、フリートはすっかり武官の一員になったから、情報が入つてこないんだね」

「その件はもういいでしょう。その人は、どこにいるんですか？」

クラルは目を丸くした。だがすぐにバツが悪そうな顔をする。

「そうか。名前が知らないのなら、顔も知らないな。ルーズニルなら――」

その先を聞くと、フリートは慌てて部屋から飛び出していった。

18、道を示す人々(4)

「ルーズニルさん！」

城の入り口にある石段で、ようやくその人物の背中を見つけて呼び止めた。フリートは息があがっている状態であったため、速度を遅めながら少しずつ呼吸を整えて、石段を下りる。

男としては長めの亜麻色の髪を束ねて、左腕に本を抱えている青年が石段の途中で立っていた。丸縁の眼鏡がよく似合っている。

「君はさっきの……」

「第五部隊の入り口でお会いしました、第三部隊所属のフリート・シグムンドです。すみません、呼び止めてしまい。少しお時間よろしいですか？」

「大丈夫だよ。クラル隊長との話はもういいの？」

「はい、おかげさまで」

「そう、なら良かった」

遠慮深げにルーズニルは微笑んだ。そして彼に促されて石段の一番下まで降りると、脇にあるベンチに座った。文官の貴族相手に、こうして話すのは久々だ。

貴族を大きく区別するのなら、二つに分けられる。たいてい貴族と言えば体を動かすことよりも頭を働かすことに重点の置く、政治界などで活躍している文官を表すが、一部では戦いの場で前線に立つ、武官と呼ばれる貴族もいる。最たる例がクラルで、戦いに身を起きながらも、貴族としての心得は持っている人だ。

「それで、例のあれ以来、文官にはあまり近づこうとはしなかった君が、僕に何の用？」

——この人は、俺のことを知っている。

ある意味、貴族界で有名であるというのは知っていたが、まったく顔も名前も知らなかった人にまで、知られているのは若干気が引ける。真っ向から言い返すと、根も葉もない噂にさらに尾ひれが付

くかもしれない。それを防ぐために、平静を装いながら聞き流して、早速本論に入る。

「クラル隊長から聞きました。魔宝珠に関して、お詳しいと」

「詳しい方ではあるかな。昔から調べるのは好きだったから。でも僕程度なら、長年やっているおじさんたちの方が、ずっと知識はあるよ」

「そうですね。でもそういう人たちは、柔軟な発想が欠けています」

「結構、厳しいことを言うね。そういう人たちに会ったことあるの？」

「……蘊蓄おじさんなら、両手の指で数えられる以上に会ったことはあります」

その誰もが、昔からの魔宝珠に関する仮定を崩そうとはしない男たちだった。だから、フリートが今考えている仮定など、即否定するだろう。そんな考えを、ルーズニルに対して打ち明ける。

「ルーズニルさんは、こういう考えを持ったことがありますか？魔宝珠で——モンスターを召還する人がいるかもしれないということ」

笑い飛ばされるか、沈黙が長く続くだろうと覚悟していた。

だが、そんなことはまったくなかった。

「——あるよ、その考え」

速い返答と、思わぬ肯定の言葉に、フリートは目を丸くした。ルーズニルはそんな様子を見て、苦笑する。

「君、肯定の意見を求めているながら、その表情はないでしょう」

「すみません……」

「仮定ただけだよ、僕も実際にその瞬間を見たことがあるわけでもないし。一般的に、かなりの鍛錬を積み、精霊を召還できる。精霊でなくても、自分の動物を召還する人は農家さんとかに多い。だからモンスターという、特殊な生き物を召還する人がいてもおかしくないだろう」

「しかし、それは……」

「すぐには受け入れられない、相入れないもの同士が手を組んでいる姿など。だから思い浮かんでも、真っ先に思考を止める人が多いのが現状だね」

ルーズニルが眼鏡の奥の瞳から、フリートを覗き込んできた。

「君はそこの騎士より、教養もあるし、言ってはいけないことは言わないと自覚している。きちんと分別が付いているはずの君が、その考えを僕に打ち明けたのはなぜだい？ 普通なら笑い飛ばす話だよ」

話を振ったのはフリートのはずだったが、いつの間にか完全に主導権はルーズニルに握られていた。これから先のことは初対面の相手に話していい内容ではない。だが、この青年なら、笑い飛ばしめせず同じ意見を持つてくれると言ってくれた彼なら、伝えるべきないようだと思い、簡潔にあの時のことを話した。

「先日、近くにあるモンスターの巢の掃討に行ってきました。そこで掃討した後に、少年と女性が現れたのです。ただ者ではない雰囲気、魔宝珠から何かを召還をするとき、かなりの精神的圧力を受けました。モンスターがいなくなつてすぐに現れるなど、偶然にしては出来すぎている——」

「だからその人たちが召還したのではないかと。まあお堅い考えの持ち主ではないのなら、妥当だろうね。その人たちは、何か言っていた？」

「印象に残っている言葉は——時が立てば、対立するだろう。それと無駄な努力、お疲れさま」

それを言うと、ルーズニルはにやつと笑みを浮かべた。

「仮定を強調するにはいい言葉だね。——この仮定、誰かに言ったの？」

「その場にいた、第三部隊には。あとは言っていないません」

「まあ少し多すぎるけど、しょうがないか、その場の流れとしては」
ルーズニルは楽しそうな顔をしながら、立ち上がった。

「面白い話を聞かせてくれて、ありがとう」

突然の打ち切りの言葉に、呆気にとられた。その様子を見ながら、ルーズニルはくすくすと笑っている。

「君ね、戦いに力を入れすぎになっていない？ 昔の方がもっと話術には長けていたって聞いたよ」

否定の言葉も出せなかった。

「しばらくそれに関して、調べてみるよ。僕、これから適当にぶらりと旅立とうと思っていたから、何か情報が得られれば何らかの形で伝える。どうせ君も城を空けるつもりなんだろう、彼女と一緒に」

「……彼女のことも知っているのですか」

若干ながら怒気を含んだ声を出してしまう。ルーズニルは手を振りながら笑って流す。

「怖い顔しないで、裏で調べたとかそういうのではなくて、クラル隊長経由だよ。還術はそもそも魔宝珠から召還したものを使って起こしていること。魔宝珠を調べている僕に意見を求めるのは間違っているではないでしょう」

「なら、何か知っているのですか!？」

思わぬところでディスプレイに対しての情報が引かかったかと思っただ。だが相変わらず難しい顔をしながらルーズニルは手を振っている。

「残念ながらないよ、わからない。たまたまそのモンスターが悪影響を及ぼす波長を持っていた程度しか考えられないよ。僕に考えさせるより、根本的な還すことについて調べた方が解決策としては早い」

「そうですか……」

今日で何回目かになる落胆だ。ルーズニルは目を細めながら、青く続く空を見上げていた。

「でもさ、不思議だと思わない？ 君も還したことはあるんだろう」
何が言いたいのだろうか。フリートもつられて立ち上がって、同じ方向に視線を向けた。

「モンスターはどこから来ているんだろう。そして還した先には何

があるんだろうって」

ルーズニルが見ている風景と、フリートが見ている風景は違うのかもしれない。彼は今ではなく、さらに先のことまで見ている気がした。

フリートがリディスたちとだいぶ遅れて、第三部隊が集う部屋に戻ってきた。彼が少しだけ解放されたような顔をしていたのを見て、胸をなで下ろす。さっきまでの表情はどこか思い詰めたような雰囲気漂っており、話しかけにくかったのだ。

だが一方、剣幕な表情のカルロットに一喝された。

「遅い！」

「カルロット隊長、待っていたんですか？」

フリートが目を丸くしていると、ついさっき戻ってきたカルロットは勢いに嘯ませて言葉を吐き散らす。

「そつだ、お前等三人に用がある！ にもかかわらず、遅く登場とはいいい度胸だな。おい、フリート、今から鍛錬場——」

「そんな時間はないでしょう！」

隣にいたセリオーヌから脇腹に蹴りを入れられた。特にビクとしなかったが、喋る勢いだけは途切れさせている。

「いきなり蹴りを入れるなよ。お前と一緒にいる相手が可哀想だぜ」

「私が蹴りを入れるのは、自分勝手に動く上官だけです。話を続けてください」

強制的に話すよう促す。それを渋々カルロットは従った。これではどちらが隊長なのか、わからない。

「さつき、王様と姫様から話があつてな、頼まれたんだ。貴族としての嗜みを持ち合わせている女性と、その護衛の男性たちにムスヘイム領域のヘイム王国に行つて、そこにいる領主から物を受け取つて欲しいってな」

三人は目を丸くした。まったく予想外からのムスヘイム行きであ

る。リデイスは慌てたように、言葉を発した。

「ちょ、ちょっと待ってください！　どうして、私なんですか。城の中にはもつと身分の高い貴族はいらっしゃるでしょうし、別に騎士団の女性の方でもいいじゃないですか！」

「何がいるかわからない場所だから、自己防衛くらいできる女性が良いらしい。だからのはほんとと過ごしていた貴族の嬢ちゃん方は却下だ。あと言っちゃうが、今現在残っている騎士団の女で、貴族らしいやつはいねえ。みんな、元は商家や農民出身のがさつな女だけだ」

「……ねえ、それって私のことも指しているの？」

セリオーナが横から睨み付けている。

「突然蹴りをいれる女、がさつ以外になんでもないだろう」

言った直後に、再び蹴りが入ったのは言うまでもない。

リデイスは困惑した表情を浮かべた。そして首を小刻みに横に降る。

「そんな、ここに来て十日足らずの田舎町の貴族娘ですよ！　そんな大役……」

「シュリッセル町を田舎町っていうのは、嫌みもいいところだろう。ミスガラム王国以外、全部田舎町になる。それに適正かどうかテストもしたらしい。それだけされても大丈夫だと言われたんだから、充分だろう」

聞き捨てならない言葉に思わず手で口を覆った。そして視線をさまよわせながら、この十日間でしたことを思い出す。

「——待ってください。いつテストしたんですか。そんな記憶、まったくありません！」

しつこいくらいに食いついたためか、カルロットは肩をすくめていた。

「知らないようだから言うておく。この城で一番の策士は王様と姫様だ。何をしてもおかしくねえぞ、以上だ。——他に質問のあるやつ——なんだ、フリート」

手を真つ直ぐ挙げたフリートをカルロットは退屈そうな目で見る。
「リデイスのことはとりあえず納得しました。ですが、俺たち二人
というのはなぜですか。あくまで護衛でしょう。それなら他の人で
も――」

「これは一つの外交だ。とつさに素を出してもおかしくない、出身
が礼儀正しい家のやつがいいだろう。文官の家出身にも関わらず、
その立場を切り捨てて騎士団に入団した希有な存在。それとよくコ
ンビを組んでいるやつと考えれば、お前たちが選ばれてもおかしく
ない。あとは嬢ちゃんと親しい奴つてところだな」

フリートはとつさに視線を下に向ける。握り拳を作り、何かに対
して耐えているその姿をリデイスはまた違った驚きで見ていた。様
子から察すると、カルロットが言ったことは嘘ではないだろう。ま
さかフリートは文官の貴族であつたとは――。

「どうせムスヘイムに行く予定だつたんだろう。金も出してくれる
し、待遇もいいぞ。いい話じゃないか」

「お忙しそうにしていたのに、クラル隊長と話して、俺たちをそう
いう方向に誘導したのはどこの誰ですか」

呆れながら突つ込む姿は若干ながら元気がなさそうに見える。文
官から武官に転身するなど、確かに珍しいことではあるが、まった
くないことではなかった。もしかしたら転身する過程が触れて欲し
くないことであり、その話題を出されるのが好んでいないかもしれ
ない。知りたいという想いもリデイスの中にはあつたが、明らかな
る拒絶を示している彼には聞くことはできなかった。

ロ力セナはただ無表情にその二人の様子を眺めているだけだった。

運命の扉が開くまではもうしばらく先――。

18、道を示す人々（4）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

今回の話で第一章は終了となります。三人の出会いから、新たな旅立ちへと向かう話でした。

久々に長編を書いているため、たくさん伏線を張ってしまいました。きちんと回収しますので、疑問の点は疑問のままお待ちください。

第二章以降はさらに周りを取り囲む人物たちも登場し、一気に話は動き出し始めるでしょう。

拍手等、いつもありがとうございます。いつも励みにさせていただいています。

今後も頑張って執筆しますので、宜しければ、引き続きお読みいただけると幸いです。

1、船上での邂逅（1）（前書き）

今回の話から、「第二章 夢と現の間での予言」に突入します。
三人をめぐる世界に付いてくる、予言というもの。
そして新たな登場人物とともに広がる話――。
宜しければ、引き続きお読みいただけると幸いです。

1、船上での邂逅（1）

ドラシル大陸では、十八歳の誕生日と同時に自分専用の魔宝珠を持つことになる。まだ何も息を吹き込まれていない——つまり何を召喚するか決まっていらない珠であり、初めて自分だけの宝珠を持つということだ。胸が高鳴るものだ。

たいていの人は魔宝珠を持つまでに、何を召喚するかは決めているものだが、先々のことを思い描けない人は何もせずに保管している人もいた。

何を召還するかは人それぞれであり、例えば職人を志すものであれば、それ相応の自分にあつた工具、医者を目指すものであれば、医療器具や愛用している書物、探検家を目指しているものであれば、自衛をするための道具を召還するだろう。もちろん騎士や傭兵を考えているものは、剣などの武器を召還物とするのが普通である。

つまり召還物を決めた時点で、自ずと先に続く道は決まってくるのだ。

一方、ドラシル大陸では、非常に重宝されている職業の一つとして、予言者というものがある。

これは水晶玉等を召還物とし、それを利用して、未来を見ようと言うものだ。もちろん過去に起こったことも映し出すこともできるが、どちらにしてもある一定の才能がなければ先を見ることはできない。

そんな予言者は、城などでは専属としているが、性格的に気まぐれな人が多く、たいていは自由気ままな生活を送っているため、接触することが難しい。たまに資金調達にと、道の脇で予言をしているものもいるが、質にはばらつきがある。

ほとんど表舞台には立たない予言者ではあるが、なぜ重宝されて

いるのだろうか。

それは消えてしまったレーラズの樹とドラシル大陸を繋ぐ問題を
予言できると言われているからだ。

レーラズの樹については、わからないことが多いため、予言とい
う、若干ながら不安要素もあるものに頼らざるを得ない。また、樹
が消えることも予言ができていたというから、逆に樹が現れること
も予言できるのではないかとされているのだ。

そんな中、大陸でも優秀な予言者の一人でありミスガラム城に遣
える、アルヴィースは先日、ある予言をしたという。

だがその直後から、酷く体調を崩し、その予言を聞いた人は数少
ない。さらにその内容に関しては、機密事項になったためほとんど
知られていなかった。

いったい何を予言したのだろうか。正確にはわからないが、おそ
らくレーラズの樹に関することだろうとは、大方の人は予想が付い
ていた。しかし詳細に関してはまったく推測することはできず、い
つしか噂は宙に浮いた状態になっていた。

一方、予言を聞いた数少ないものはそれを受けて、城内では少し
ずつ動きが出てきたという。

それが影響し、リデイスたちや大陸の人々が知るには、もう少し
先の話であるが。

* * *

リデイスは鏡の前で仕立てた服に袖を通した。動き易さを重視で作
ったため、それほど普段着ているものとは変わりない。だが、より
もすっかりした生地で出来ており、思いの他に軽かった。そして今

回は長袖のシャツではなく、半袖を手取る。

フリートから言われたことで、ムスヘイム領域はここよりも暑い
ため、重ね着ができる格好の方がいいと言われたのだ。

スカートをはき、最後にベストを羽織り、多めに作ってもらった
ポケットにセリオールから受け取った魔宝珠を入れた。あとは必要
となりそうなものを肩掛け鞆に最小限に詰め込み、準備は完了だ。
まだこの地域では半袖では寒いため、上着を手に取り、ベッドに腰
を下ろした。

突然言われた大役に、正直に言っしまえば非常に戸惑っている。
買い物などを頼まれてムスヘイム領域に行くならまだしも、城を代
表として領主からの物を取りに行くなど、予想を遙かに通り越した
展開であつた。

ここ最近で目まぐるしく様々なことが起こりすぎている。

リデイスの意図に反したような展開の先にいったい何があるのか。
それともただ単に、偶然が重なっただけであろうか。

予言者とやらに会えば、少しはその理由がわかるかもしれない。
好奇心と不安が混じりあいながらも、ドアの向こうで待っている同
行者の元へと訪れた。

ミスガルム領域の中は馬車で移動するため、城下町の脇にある馬
車乗り場へと向かつていた。フリートとロカセナもいつもより薄手
の素材を使った服を着ており、堅苦しい雰囲気から少し抜けたよう
に見える。

「一般人と同じ馬車だね。僕らみたいな、平の騎士なら使っても
おかしくないけど、もっと上の身分の人だったら、どうするつもり
だったんだろう」

ロカセナが首を傾げながら、まだ明け方で人通りが多くない道を
後ろから歩いてくる。

「経費の削減だろう。あとは護衛も兼ねて。掃討が一応できたとは

いえ、モンスターの巣があつた場所に最も近づく道を通る。話によれば、必ず騎士は一人乗せて、往復しているらしい」

「なるほど。そういうことか」

納得したようで、ロカセナは頷いた。リデイスも話を聞きつつ、ふとあることが思い浮かんだ。何気なく質問を試みる。

「ねえ、騎士なのに、馬には乗らないの？」

「乗るときは乗るけど、今回は別に戦いに行くわけじゃないから必要はないっていうのかな。それにどうせミスガルド領域内で別れるから、二度手間を省くというか」

「二度手間？」

リデイスが不思議そうに思っていると、ロカセナはドラシル大陸の小さい地図を広げた。指で今回通るところをなぞっていくと、途中であるところを見て、あつと声を漏らす。

「この二つの領域を隔てているのは、大きな川と山。行くには小舟を使って川を渡るか、定期便を使って海上のルートを通らなければいけない。今回は定期便が行ったばかりだから、こっちのルートをとっているわけ」

「そうなんだ、ありがとう」

お礼を言つと、「こちらこそ」と、優しい笑顔を浮かべながら返してくれた。

たわいもない話をしているうちに、馬車が停められている場所に着いた。そこには既に数人が待つており、商人らしき人や家族連れ、そして紺色の髪綺麗な女性などがいた。ふとフリートを見ると、目を丸くしている。何か驚くべきことでもあつたのだろうか。毅然とした表情を崩すことなど、あまりない気がする。

「間もなくムスヘイム方面行き、ミスガルド領域の定期馬車が出ます。ご乗車の方はお乗りください」

アナウンスが入ると、皆は急いで乗り込み始めた。リデイスたちを含めて、全部で八人。中は前と後ろでブロックが分かれており、それぞれ六人以上は乗れそうな状態である。

中にも椅子があり、客を乗せるスペースを確保されている馬車であつたため、ミスガラム城に来る際に乗せてもらった、荷馬車との違いに幾分驚く。

前と後ろで四人ずつ分かれ、リデイスたちの側に、紺色の髪的女性が加わつた。特に表情を変えず、軽く会釈をしただけで、窓の外に視線を向けてしまった。そこから見える横顔は非常に綺麗で、整つた顔である。

同姓ではあるが、一瞬だけリデイスは呆けてしまう。だが動き出すとすぐに視線を向かい側に座っているフリートや、隣にいる口力セナに向ける。呆けていたのを見られていたのか、じつと二人の視線が向けられていた。

頬を赤らめつつも気を紛らわすために、リデイスはある一冊の本を取り出した。ムスヘイム領域の歴史という、薄めの本である。

急に話がまとまつたことで、事前に勉強をしていくというのができなくなつたため、どうにかして知識を得たいと思つていたのだ。探す時間も惜しかったため、図書室もほんの少ししか行けなかったのだが、そこで再会したミディアルがこれを選んでくれたのだ。短く、簡潔に載っており、最低限の知識が得られるということとで渡してくれた。それを有り難く受け取り、この場に持つてきているのである。

「その本は自分で選んだのか？」

フリートが表紙を見ると、目を瞬かせている。

「違って、城内で出会つた方から薦められた」

「そうか。いや、俺も薦められて読んだことがあるから。その本、簡潔で内容も不足長くていい本だが、薄いせいで目立たないから、知っている人が少ないんだ。まあ図書室の常連の人なら何人か知っているだろう」

「そうなの。早速読んでみる」

少し古びた表紙に、日に焼けた紙をめくりながら、読み始める。最初のページはムスヘイム領域の地図であつた。南には海が、西

にはミスガルド領域を分ける川と山が、そして東にあるヨトンルム領域との境界には、川だけでなく広大な砂漠が広がっている。砂漠は広範囲に渡っているため、ミスガルド領域を行き来するよりも、かなり骨が折れる行程らしい。

太文字や重要そうなところを中心に読みながら、ページを次々とめくっていった。

フリートはリデイスが本に集中しているのを見て、そしてその横にいる相手はすでに腕を組んで目を瞑っていることを確認して、こっそりと視線を横にいる女性へと向けた。彼女は何を考えているのかわからない表情で、外を眺めている。

フリートの記憶が間違いでなければ、彼女は城に向かう途中の湖であつた、殺気とも言える、威圧で押されたあの女性である。紺色の長い髪を下の方でくくっており、白いブラウスにロングスカートを着ている、見る目麗しい美しい女性。どこの貴族かと思ってしまう容姿であるが、その中には得体の知れないものが隠されている。

彼女はいったいいつミスガルド王国に来たのだろうか。

そしてこれからどこに行くのだろうか。

表情を覗き見しつつ、素性が明らかでない彼女を警戒しながら、不意に視線が窓の先へと向いた。そこに広がる風景は、見覚えのあるものだつた。

「……リデイス」

「何？」

「あの先がこの前俺たちが出向いたところだ」

鬱蒼と覆われた森——。まるで予言ともとれる内容を去り際に言つた、女性や少年のことが思い出される。

リデイスは神妙そうな顔で、森を見ていた。この森はかつてアースガルド領域があつた部分との境界としてあるものだ。さらに何日も歩けば、見えるのはぼつかりと空いてしまった空間のみ。昔はそ

の領域を行き来していたため、整備された道があつたらしいが、さすがに何十年と経過したため使用する人などいなくなり、ほとんど雑多な環境になっていた。

「モンスター掃討をした割には、雰囲気は良くなっていない気がするけど」

「そうかもな。ただ完全に掃討はしたはずだ。ただ端に残存した気配が残っているだけだろう」

鋭い指摘を受けたが、それをやんわりと受け流した。リデイスには掃討直後のモンスターを召喚したかもしれないあの女性や少年については言っていない。

* * *

馬車に乗り続けて三日経過した昼、ようやく目的としていた町であり、この馬車の終点である町に辿り着いた。

すでに前方に乗っていた家族連れや商人たちは降りており、代わりに他の町から乗ってきた客で埋め尽くされていた。満杯になった馬車は入り口付近で停まり、次々と乗客を降ろしていく。最後にリデイスたちが降りると、馬車は馬の休憩のためにどこかに行ってしまった。

それを見届けると、軽く食事をしてからムス Heim 領域に渡ろうと、ロカセナは提案した。

「観光する時間はないけど、軽く見ていこうか」

ロカセナにそう言われながら、リデイスたちはキーカワ町へと入った。

ムス Heim 領域とミスガルム領域を境界とする川の町であり、唯一その間を移動する船を出しているところでもある。交易の場の一つとして栄えており、店を出している多くは新鮮な魚介類や見たこ

ともない果物などが売られていた。

そして見慣れない日焼けした肌の人がちらほらと見える。おそろくムスヘイム領域の人たちだろう。土地柄、日光が強く、その上雨もあまり降らないため、日に焼けやすいのだ。ミスガルム領域の住民は薄めの肌の色なので、ここにいる彼らはより目立って見える。

この川の先を超えた先にはここでの比率は逆転するのだろう——
そう思いながら、食堂に入ってしまった。

2、船上での邂逅（2）

昼食を採った後は、川を突っ切るために用意された帆船と目指す町を抜けるとすぐそこは港であり、川沿いに船がいくつも停泊していた。ほとんどが商船や漁船であり、その中に混じって、人間の送迎を主とする旅客船もある。

日に五回ほど往復しているその船は、先ほどミスガラム領の岸边に着いたところだった。他の船よりも少しだけ洒落た外観であり、商船などとの判別は簡単であった。川の先に朧気に見えるムスヘイム領までもう少しである。

旅客船の近くに行くと、リデイスはある女性を見て、目を丸くした。白い肌に紺色の髪がよく栄えている、馬車で道中をともした女性――。そこにいておかしくはないが、あんなに綺麗で白い肌の女性が、日に焼けることが避けられないムスヘイム領に行くなど、人は見かけにはよらないものだ。

フリートが船員に船を乗る手続きを済ませると、船へと乗り込んだ。ムスヘイム領の人間であろう日焼けした肌の人たちも大勢乗っており、皆、穏やかな表情で船の上をくつろいでいる。

リデイスは船の縁に体をつけて底が見えない川の先を見つめると、少しだけ難しい顔をした。

「ねえ、この場所にモンスターはでないの？ 町の周りは基本的に結宝珠で結界を張っているからいいけど、こんな川のだ真ん中に行ったら効果が……」

「もちろんその備えはしているさ！」

後ろからおおらかな声が聞こえてくる。振り返ると、船主らしき人が手を腰に当てて立っていた。

「一番上に立派な宝珠があるのは気づかないか？ あれが船を守っているんだ」

「それって、川にモンスターは生息しているんですね？」

「生息はしているが、この宝珠以外にも避ける術は持っている。安心していいぞ」

「はあ……」

自信満々に言うくらいであるから、それは期待してもいいのだろう。快活に笑いながら、船主は操舵輪がある場所へと戻っていった。

「リデイス、そんなに心配なのか？」

「いや、そういう訳じゃ……」

フリートが真剣な顔で覗き込んでくるので、とっさに否定した。あまりに近すぎて、つい思ってもいない簡単な回答をしてしまう。正直に言ってしまうえば、若干ながら心配ではある。この岸に行くときに、ほんの少しだけ見えてしまったのだ、無惨にも打ち放たれた船が。川の氾濫によるものか、それともモンスターによるものなのか――。

モンスターの動きが最近奇妙だということは口を酸っぱくして言われている。だからすぐに原因がモンスターの方へと考えが及んでしまうのだ。

穏やかで雄大な川が目の前に広がっている。ムスヘイム領に着くまで、長針が一回りするほど。その短い間に何もなかったことを祈るのみだ。船上での戦いになったら、武器でしか還せないリデイスたちは非常に不利である。

「リデイスちゃん、そろそろ船が出るよ。揺れるだろうから、気を付けて」

ロカセナが辺りを見渡しながら近づいてきた。その言葉通りに、激しく揺れながらもムスヘイム領に向けて進み始めた。空はどこか鬱々とした雰囲気醸し出している。

やがて数十分も経たないうちに、リデイスの頭の中からはモンスターのことなどすっかり消え去り、船の端でうずくまるフリートの背中をさすっていた。

「どうして酔うのかな……」

「酔ってなんかいない。ちょっと疲れただけだ！」

「そうですか。……あ、もしかして海側を通りたくなかったのは、フリートの提案？　海はもっと荒れるっていうし、時間も長いからね」

「違う、姫様がこっちのルートを指定したんだ！」

必死に弁解する姿が新鮮ですごく面白い。いつも澄ました顔ですべての物事をやりこなしており、弱点などないかと思っただが、まさか相当な酔い易い体質とは――。世の中には完全な人はいないということだ。

「いや、姫様の提案でしょう。彼女、フリートが酔いやすい体質だって知っているし」

ロカセナが船員から受け取った小さなバケツを持って近づいてくる。だがその前に、フリートは立ち上がり、川に向かって、胃の中に溜まっているものを吐き出してしまった。

肩をすくめながらリデイスは、おそらく使われないだろうが、持ってきたロカセナからバケツを受け取る。

「ねえ、お姫様はどうしてフリートのこと知っているの？」

城の姫がどうして平の騎士のことを知っているのだろうか、疑問に感じた。

「彼女、僕たちと同じ年くらいで、たまに話し相手になっているんだ。その時にそんな話題が出たことがあって」

「ええ、お姫様と話し相手！？」

同じ城の下で生活しているのだから、あり得なくはないが、少し突飛なことである。フリートがおぼつかない足取りで、振り返った。「リデイス、あの姫のことを、物語とかで出てくるお淑やかで、物静かな女性だと思わない方がいい。非常に気が強く、好奇心旺盛で、世が世なら、自ら武器を持って、騎士団の頭を突っ走る人だぞ。――もしかしたら、どこかで通り過ぎているかもしれないな」

「まさか。だって、姫様とかそういう人はもっと奥まった場所にい

るって言っていたじゃない」

「姫は例外だ」

それだけ言い切ると、フリートは再び海へ向かって顔を俯かせた。抱いていたイメージがごとく崩れさっていく。騎士団の頭を突つ走る人など、どれだけ行動的な人なのだろうか。

フリートたちが忙しかったため、なかなか城内の人とは会えなかったが、帰ったら思い切って紹介をしてもらおうと、リデイスは心の中で思った。

そう決心した矢先、突然空気の雰囲気が変わったことに、表情を曇らせる。そして縁をすっかり掴んで、遠くの方に目を凝らして見つめた。

「どうしたの、リデイスちゃん？」

「リデイス、まだムスヘイム領には着かないぞ」

ロカセナ、フリートが次々と言っていくが、ほとんど頭の中に入ってこなかった。

肌が突き刺さるような冷たい風、そして独特の異質な雰囲気——それが近づいてくる。

ようやく二人も異常さに気づいたのか、フリートとロカセナの表情が険しくなった。それと同時にリデイスは既に槍を召還していた。「おい、リデイス、早まるな。仮にも結界で守られているんだ。下手に動くな」

「わかつている」

口を一字にして言い切る。やがて川は大きくうねり始め、泡が出始めたかと思うと、一気に水が浮き上がった。

そして蛇のような体格で鋭い牙を露わにした、船などゆうに囲んでしまいそうな長さの大蛇だいじやが現れたのだ。

それが一匹ならまだしも、船を取り囲むように五匹も出てきた。遙かに上に頭がある大蛇を見上げ、啞然とする。それはフリートとロカセナも例外ではなく、固まっていた。

「これ……普通なの？ 川でこれだけのモンスターが出るって」

「いや、普通じゃないだろう。五匹が一気に現れるなんて、聞いたことがない」

「ねえ、逃げきれんの？」

「それは——」

操舵輪辺りの慌ただしい音でフリートの言葉は遮られる。そしてある船員が急いでマストに駆け上っていた。その上には船長が自慢していた魔宝珠——船を守るための結宝珠がある。その帆の下では、すぐに上げ下げをできるように待機し始める人がでてきた。

「いいか、ゆつくりとモンスターに当たらないよう、ゆつくり移動するんだ！」

切羽詰まった声を発するのはさっきまで余裕しゃくしゃくとしていた船長。異常なことであるということが、一目瞭然であった。それを察し、船室にいた客も看板に現れ始め、人によっては悲鳴を上げていた。

「刺激を与えるな！ 辛うじて結宝珠の結界は成り立っている。まだやつらに俺たちの存在は気づかれていない！」

怒鳴る声が余計に不安を煽られる。帆の上げ下げを試みていた船員たちが何人が抜けて、客を船室に戻るよう促していた。

ゆつくりとモンスターとの合間を縫いながら進む船であるが、その距離が縮まっていけない気がする。よく見れば船が動くにつれて、モンスターも動いているのだ。

まるで隙を伺うのかのように、じつくりと見定められている気分に陥る。それでもまだ襲ってこないということは、気づかれていないと考えていいのだろうか。

だがその時、この場で最も聞きたくない言葉が飛び込んできた。

「船長、結宝珠にヒビが……！」

それを聞いた全員の表情が色を失う。

一方で、フリートやロカセナは召還していた剣を握りしめていた。その表情は強張っている。

「俺が三匹相手をするから、お前は二匹をしとめろ」

「船上で、しかも結構大きいのに、一匹でもきついよ。フリートだって、かなり無茶な発言しているんじゃないか」

「やらなければ、沈むまでだ」

フリートの額から冷や汗が流れる。リデイスも心臓が激しく鳴りながらも、槍を握るが、今の会話で触れられなかったことに気づく。「待つて、私は？ 私も相手する！」

「一匹還して、動けなくなったら、その後、集中的に狙われるだろう。お前は船員や乗客を守れ。やつらが向かってきたら、適当に攻撃を仕掛けて、牽制させろ」

「でも一人でも多い方が——」

「いいから、言うことを聞け！」

声を荒げられ、リデイスはびくつとした。こんなにもきつく言われたことはない。フリートはリデイスの方に背を向けて、モンスターの動きを凝視していた。

ふと優しく肩に手が乗せられた。ロカセナが少し寂しそうな顔をしている。

「フリートのこと、わかってあげて。それに、人を守ることもすごく重要なことなんだから」

「……わかってるよ、そんなこと」

船員の悲鳴に近い声が聞こえる。結宝珠にさらにヒビが入ったのだろう、死闘が始まるカウントダウンまで残り僅か——。

「——争いごとは嫌いなよね」

しかし不意に、凜とした女性の声が聞こえた。その声の持ち主も方を見ると、馬車でも同席した、あの紺色の髪の女性であった。一歩、一歩、リデイスたちがいる船尾へと向かっている。優雅に紺色のロングスカートを着ている女性が歩いてくる姿は、あまりにもその場に合わなすぎる。

「無闇に殺したくないけど、もう理性がないのなら、しょうがないわ」

リデイスたちには目もくれず、船尾へと辿り着くと、目の前には

一匹の大蛇がいた。

「危ないです、下がっててください！」

突然現れた女性を下げようとしたが、彼女は視線をやり、むしろリデイスを目で制す。それだけでリデイスは動くのをやめてしまった。いや、動けなくなってしまった。

「下がっているのは、あなたたちよ」

整った顔で笑みを浮かべられたが、それが返ってぞっとした。美しすぎるその表情に魅せられてしまう。

「球が割れた——！」

絶叫を上げるのと同時に、覆っていた光の僅かな希望が消え去る。そして目の前に獲物を発見した大蛇の形をしたモンスターは一気に攻め込んできた。

船員や乗客たちが悲鳴を上げる。一瞬で船は沈み、もしくは船上は血の嵐に——なると思っていた。

だが一定のところでモンスターは攻め込むのをやめてしまう。船や人間をぎりぎり覆おうくらいの薄い膜が現れたのだ。色は薄い水色——、どこか寒々とした色である。

リデイスが呆然と見つめる先には、女性が眉をひそめながら、右手をモンスターに突き出している状態。そのモンスターも膜から中は入ってこられない。

「水は生きるものすべてに必要なもの。生きるものすべてに潤いを与えるもの。その源よ、^{ウンディーネ}我の元に現れよ。魔宝珠よ、我が想いに応えよ。——召還、水の精霊！」

右手からは船や人々を守る水の膜が、そして左手からは水の球が現れた。そして、その球は唐突に割れ、中から見る目麗しい青色の長い髪の美女が出てきたのだ。手のひらに乗るサイズの小さな美女で、薄い白い服を着ているが、出た瞬間、リデイスたちの背筋に戦慄が走った。

「ありがとう、出てきてくれて、^{ウンディーネ}水の精霊。少し力を借りるわ、お願いね」

水の精霊は無表情のまま軽く首を縦に振ると、手から離れて舞い上がった。

そして次の瞬間、大蛇の形をしたモンスターの全匹に氷の刃がいくつも突き刺されたのだ。

鼓膜を突き破るような甲高い叫び声がある。それと同時にモンスターの血の雨が降った。膜で覆われているため、直接降ってはこないが、どことなく不気味である。

やがてモンスターやその血は黒い霧となり、一瞬で霧散してしまっただ。

呆気に取られながら、その一部始終を三人は見ていた。女性は戻ってきた水の精霊にお礼を言うと、召還を解き、自らの手も閉じた。そして呆然としている三人に、まったく汗もかいていない顔を向ける。そして小馬鹿にしたような笑いを吐き出す。

「これくらいの相手もかわせないの。先行きが不安ね」

「あなたは、還術士……？」

硬直状態が溶けたリディアがようやく声を発する。女性は前に出ていた髪を払いながら、一歩近づいた。

「還術士ではないわ。ただ水の精霊を召還する者よ。還すのは私の主目的ではない。——初めまして、魔宝珠を持つものよ、そして開ける者たちよ」

突然現れた圧倒的な力を持ってして、還術士ではないという女性ならばいったい何なのか——。

疑問が渦巻くが、今はただ立ち尽くしているしかできなかった。

3、船上での邂逅（3）

紺色の髪の女性から発せられる威圧により、リデイスが倒れそうになるのをフリートは支えていた。フリート自身も辛い部分はあるが、騎士として鍛えられた精神が見ず知らずの女に威圧だけで負けるのは癪である。平静を装いながら、睨み付けた。

「お前はいつたい誰だ？」

「それを知るのもう少し先よ、フリート・シグムンド。果たして私に構っている暇なんて、今、あるのかしら？」

「はあ？」

今こそ色々と問いつめるべきだろう——そう思った矢先、人が駆け寄る激しい足音が聞こえた。振り向けば、一人二人ではない、船長を含めて五、六人ほどいる。安堵の表情を浮かべつつも、どこか顔をひきつらせていた。

「今のはお前たちがやったのか、城の騎士さんたちよ」

「モンスターの件ですか？ いえ、俺たちではなく——」

フリートが視線を女性がいた方向に向けたが、そこには彼女の姿はなかった。意識が逸れていた隙に、いなくなってしまったのだ。

「お前たちなのか？ あんな絶望的な状況を一瞬で」

「それは先ほどそこにいた女性が——」

「どうやったらあんなに神懸かり的なことができるんだ。俺たちにもできるのか！？」

「いや、ですから、あれは俺たちでは——」

詰め寄ってくる船長を宥め様としたが、聞く耳を持たない。がいいタイミングで助太刀が入った。

「船長さん、今は詮索よりも、一刻も早く陸地に着くことではないんですか？ 結宝珠が壊れた今、もたもたしている暇はありません。他のモンスターが襲ってくる必要があるんですよ」

ロカセナが困り果てたフリートと船長の間に割って入ってくれた

のだ。その言葉を聞いた船長は目の色を変え、慌てて操縦席へと戻って行った。全速力でここから逃れるために、船員たちも速度を上げるために帆を張り直しに急ぐ。おかげであれだけフリートたちの周りを囲んでいた人々はいなくなってしまうた。

「ありがとう、ロカセナ」

冷静に指摘をしてくれる相方がいると心強い。一方で、ロカセナはフリートの顔をじろじろ見てきた。

「疲れているみたいだよ、彼女にやられた？」

「多少は。お前は大丈夫なんだな」

「いや、多少きつかったけど、少し離れていたからそこまでじゃない。それに彼女が特に意識をしていたのは、二人だったからのもある」

「俺たち二人……？」

傍にいたリデイスと目を合わす。それと同時にリデイスは頬を赤らめて、支えられていた腕の中から飛び出した。女性がいなくなっ
てから、もう立つのに支障はなかったはずだが、つい離すのを忘れてしまったのだ。そんな様子をロカセナは若干にやけながら見ていた。

「とりあえず女性からもつと話を聞きたいね。探してこようか」

「そうだな。おそらく面倒事を避けるために、混乱に乗じて去ったんだろ。船室に行こう」

慌ただしく動き回る船員たちを横目で見ながら、船室へと踏み入れる。結宝珠がないのは致命的ではあるが、おそらくフリートの直感としては、もうこの船にモンスターは表れないだろうと踏んでいる。

仮にモンスターが知能を持っているとするのならば、五匹もの相手を一瞬で還した船を襲うにはリスクが高いと考えているはず。また逆に仲間を増やして襲おうとするのならば、多少時間はかかるはずだ。また知能を持っていなくても、五匹ものモンスターの残り香を纏っている船になど、進んで近づくのも少ないだろう。

それらから考えて、どうにかムスヘイム領の港に着くまでは保てるはずだ。

だから今はあの女性の行方を探す方が先決であった。

船の中央に位置する小さな船室に入ると、並べられている椅子に乗客が何人か座っているだけである。その中にあの女性の姿はいなかった。

あくまで川の往復のみに重点を置いている船。それ以上に部屋はないため、そこにいなければいったいどこにいるのだろうか。

「リデイスはここにいてくれ。外は俺たちで見てる」

「……わかった」

素直な返事に少しだけ面を食らった。意図した思惑付きの内容をさり気に加えたが、反発することなく頷かれたのだ。顔を伺うと元気がなさそうに見える。無理もない、鍛えているフリートでさえ、モンスターや女性の圧倒的な威圧を堪えるのが精一杯なのだ。ましてや一般人の少女にそれができるというのも期待しすぎた話である。外回りもすぐに終わるだろうと思いつつも、リデイスを置いて、外へと出ていった。

フリートたちが出ていくのを見届けると、リデイスは船室にいる人々の顔を確認しながら、奥へと歩いていく。改めて狭い船室の中をぱっと見渡したが、どこにもあの女性の姿は見えなかった。隠れているのかと思い、椅子の間を丁寧に見たがそんな人物はいない。女性の気配の圧迫から解放されたのに、まだ何かが心に重くのしかかっており、それがより憂鬱な気分にならせていた。奥まで行き、全員の顔をこの目でしっかり見たが成果はない。うなだれながら、入り口へと戻ろうとした時だった。

「——一人の還術士として、一人の戦闘ができる者として見られていなくて、悔しいのかしら？」

反射的にすぐに振り返った。女性が姿勢正しく立っていたのだ。

もしかしたら外にいて、リデイスたちの視界から逃れるように行動をしていたのかもしれない。だが、それならば一つ大きな疑問があった。出入りしたり、近づいてくる気配がまったくしなかったのである。

「あなた、いったい何者なの？ 何がしたいの？」

リデイスの声が若干上擦っていた。汗が額から流れ落ちる。

「少しあなただけに伝えたいことがありまして、リデイス・ユングリガさん」

「……どうして名前を」

「他の人よりも、情報を多く持っているからというところかしら」

そしてにやりと笑った女性は、リデイスに視線を突き刺した。

「今はただ、後悔しないように思うがままに行動をすればいい。なぜならあなたがどう動いても、最終的には決まっているから」

「何が決まっているの……？」

「それ以上は言える範囲ではなくてよ。——もう少し心も体も強くなれたのなら、またムスヘイム領にて会いましょう」

女性は颯爽と背中を向けて、立ち尽くしているリデイスなど気にも留めずに、再び船外へと出て行ってしまった。

何の根拠もない、まるで予言めいた言葉を深く考え込んでしまう。そう、予言——。

まさかと思い、とっさに女性が出ていった後を追いかけようとドアを開けようとしたが、その前にノブが動き、開いたのだ。そこには口力セナがきょとんとした顔で立っていた。

「リデイスちゃん、どうしたの？」

「あの女性は？ さっき、外に出ていったばかりなの！」

「さっき？ おかしいなあ、僕は見ていないよ」

「そんな……。あの人、もしかしたら予言者かもしれないのに……」
悔しそうな顔をしながら俯く。あちらから接してきたが、それとも簡単に手放してしまって、落胆は隠しきれない。口力セナは困ったような顔をしながら、フリートが戻ってくるまでただじつと

リデイスの近くに立っていた。

そしてフリートの口から、女性の姿はいつさい見なかったと言われたとき、もしかしたら幻ではないかという意見まで飛び出そうとしていたのだった。

やがてやっとの思いで、ムスヘイム領に辿り着くことができた。

実際の時間にしてみればたいしたことはなかったが、精神的な疲労はそれをさらに上乘せしてくる。あ後は特にモンスターからの接触はなく、結宝珠がなくてもどうにか川を渡ることができた。

あのモンスターの還し方について、船長たちから散々尋ねられたが、あの女性の姿が見えない今、話題に挙げるのはばかれる。結宝珠の結界は若干残っており、壊れる寸前で当たった衝撃で還された、という苦しい理由をでっち上げるしかなかった。

せめてもの救いは魔宝珠についてはわからない部分も多々あるため、推測だけでも首を頷かせることはできたと言うところだろう。

事情聴取が終わった時には他の乗客たちは既にいなくなっており、リデイスたちが最後に船を降りた。そしてその船は降ろしたのちに新たに結宝珠を取り付けるため、別の場所へと移動してしまった。

「――あの女が降りたかどうか、確認できなかったな」

フリートが悔しそうに呟く。だがリデイスはあまり気にしていなかった。あの女性の言葉は不思議と信憑性があり、近いうちにリデイスが強くなれば再開すると思えたからだ。

船から降りると若干だが気温が高くなったように感じられた。ミスガルム領とあまり離れていないが、ほんの少しかだけ汗ばむ。

そんな中、赤茶色の髪で褐色の肌をした青年が大きく手を振っていた。訝しげに見ると、その手にはリデイスたち三人の名前が書かれた紙を持っている。あまりに怪しすぎる立ち回りにおののくが青年は笑顔で自ら駆け寄ってきた。

フリートはとっさにリデイスを後ろに下げ、警戒を強める。その

雰囲気に気づいた青年は一定の距離を保ったところで、立ち止まった。ボサボサの髪にオレンジ色のバンダナを締めており、服はラフな格好で、上半身はよれたシャツを、下半身もだぼだぼのズボンをはいている。明らかに緩い恰好ではあったが、その間からは鍛えられた筋肉が垣間見えた。

「初めまして、ミスガルム城からの遣いの人。お待ちしていました！」

「お前、俺たちのことを知っているようだが、まずは自ら名を乗るのが礼儀じゃないのか？」

「ごめんな、気が利かなくて。俺はトル・ヨルズ。ヘイム王国に所属している傭兵だ。今回は領主に頼まれて、お前等の道案内をすることになった。よろしくな」

あっけらかんと言ったが、三人は言葉を失った。

——こんな風体で、王国の衛兵を務めている！？

確かにムスヘイム領に住んでいる者は、その土地の気温が高いため、薄着であるとは聞いている。だが、ここまで着崩した格好をしている者が傭兵に所属しているなど、いったいどんな国だろうかと疑ってしまう・

「ああ、お前等の考えていること、何となくわかるよ。俺、王国に所属している傭兵には見えないってところだろう」

「……そうだ。王国のために働くのであれば——」

「それはミスガルム領での考えだろう。そして騎士という中での」
トルは肩をすくめながら、言い倒そうとするフリートの言葉に割り込む。

「ムスヘイム領には色々な住民がいる。そして人の流入が激しいのも特徴だ。そんな中で、ある一定以上の能力を持った人間を常に王国に置くのは難しいのが現状さ。だから契約という形で自由に動ける傭兵が、この国の軍の主流というわけさ。規律は特にない。動けるときに動いてくれればそれでいい。そして強ければなおいい、それが傭兵のすべてだ」

ミスガルド領とはまったく違った考えにフリートは絶句していた。あれだけ事細かに規律を守っているような人にとっては、受け入れられない事実だろう。

「ねえ、君が王国直属の傭兵っていう証拠はあるの？」

ロカセナが涼しい顔で物騒なことを聞いてきた。確かに傍から見れば、トルはただの町民にも見える。

トルは頭をかきながら、首からぶら下がっている赤色の魔宝珠をロカセナに向かって投げた。それを受け取ると、躊躇いもなく陽に当ててみる。薄らとであるが、中に何かが書かれているのがわかった。

「——火のマーク。ムスヘイム領の象徴は火。なるほど、傭兵になった人はそれぞれの魔宝珠にこの印を押してもらっわけか」

「そういうこと」

ロカセナは近づいてきたトルにその魔宝珠を返した。信用されたと踏んだのか、満足そうな顔をしている。

「とりあえず自己紹介はこころ辺でいいかな。時間もないし、移動しよう。早くしないと、中途半端なところで野宿行きだ」

にやりと笑みを浮かべるトルを、苦笑いしながら受け流す。

南の方から吹く風は生ぬるく、いつもとは違う雰囲気が漂っている。川を越えただけで、向こう岸とは別の文化が広がっていた。

その先にはいったい何があるのか——。

まだリデイスたちは知らない。

4、火の加護を受ける国（1）

どのようにヘイム王国まで行くかと尋ねると、トルは顔色一つ変えずに「徒歩」と答える。それを聞いたリデイスは若干顔がひきつったのをフリートは見逃さなかった。以前、五日程度歩き通したのだから体力はあるだろうが、あの表情から察すると、できれば避けたいと言うところだろう。

いい案はとないかと考えながら町から出ようとした際、乗馬用の馬が並べられているのが見えた。特定の持ち主がいなそうな馬である。一番手前には椅子に座った男性がどっしりと構えていた。もしやと思い、トルに確認を取ってみる。

「あれを借りることはできないのか？」

「ああ、貸馬屋ね、できるよ。一定のお金を渡して馬を借りるところで、乗れる人は使っているから、使用者はそれなりにいる方かな。まあたまに馬を連れてどこかの山に逃亡するとかあるが……。この領、地形の関係上、ミスガルム領よりも町が少なくて、一つ一つの町の間の距離が長いから、だいたい移動の仕方が他よりも多いらしいな」

「船が発達したのもそのせいかな」

「そうそう。ほとんど町が海岸寄りにあるから、水上関係が発達するのは必然だろう？」

話では聞いていたが、改めてこの地に降り立ち、地元の者から聞き、見ることで、脳内への情報の入り方がまた違う。やはり実際にその土地に行くことが一番いい。

「地図で見た限り、この町からヘイム王国までは砂漠はないはずだ。馬で行った方が早い」

「確かにそうだが……俺、乗れないぜ」

予想されたことだったので、あまり驚きはしなかった。騎士団員は基本的に全員乗れるが、他の一般人で乗馬をできる人はなかなか

聞いたことがない。

気が付くと、マントを脱いだロカセナが二頭の馬を連れてやってきた。いつの間にか手続きをしたらしく、大きめの馬の手綱を握っている。

「僕とフリートで、リデイスちゃんとトルを相乗りしてもらえばいいんですよ。二人乗りでも可能なのを借りてきた」

「すまないな。……さて、急ぐんだろう。詳しいことは道中話してもらおうか」

突然現れた自称案内人に対して、上から目線で言いつつ、フリートはロカセナから手綱を一つ受け取った。

フリートが走らせる馬にトルを乗せ、ロカセナの方にはリデイスを乗せた。フリートにとっては自分より大きな相手が前にいるのはいささか動かしにくい、後ろで腰に手を回されるのよりはマシである。

「少し屈んでくれよ。そうしないと、木に衝突する」

「はいよ。……まったく、もし俺が馬に乗れたのなら、お嬢さんと一緒に乗るのに」

トルが右側をちらつと見ながら、つまらなそうに呟く。その先には、幾分緊張した表情をしているリデイスがいたが、後ろに乗って支えているロカセナの言葉を聞くと少しだけ表情が和らいでいた。ロカセナはロカセナでいつも通りにこにこしているので、真意は読めないが、嬉しいのではないだろうか。

フリートにもはっきりわかるくらいに、トルは盛大に肩を上下させて溜息を吐いた。

「いい雰囲気だな。羨ましいのか？」

「茶化すな。あまりに変なこと言い過ぎると、ここから落として、馬で踏むぞ」

真顔で言つと、本気だと捉えたのか、トルの表情が引きつった。

「おお、怖っ！ まあ、誰だつて、男二人で乗りたくはないな」

「そういう台詞を言うのなら、乗れるようになれ。便利だぞ、傭兵としての仕事が増えるかもしれない」

「考えておくさ。どのみちそこまで必要でもない技術かもしれないし」

「どういうことだ？」

「この領には、馬が颯爽と走れる、ただの平野だけが広がっているわけではないと言うことさ」

そう言われて、地図を思い出した。確かにトルの言うことももつともである。ドラシル大陸の南側に位置するムスヘイム領は、中央を山脈で覆われており、その間から川が流れ始めている。それは幾重もあり、簡単に飛び越えられるところから、さっきのように大がかりな船を出さなければ越えられないところなどあった。

また、西側は比較的雨が降るため草木で覆われているが、東側は気流や土地の関係上、雨が降りにくく、場所によれば砂漠となっている。

そのため馬が使える平坦な道などごく一部。かつ様々な移動手段が用いられる領なのである。

そんな移動が面倒なところに、わざわざ姫や王は往路を海上からではなく、内陸移動を指定してきた。あの二人のことだ、理由があつてこの道を取ってきただろうが、少しはこちらの体力と言つものを考えて欲しい。移りゆく景色に気を使いつつも、手綱をひっぱたいて、徐々に速度を上げ始めた。

一方、フリートたちが乗った走り始めた馬の後ろに付いていたりデイスは、ロカセナに支えられながら馬に乗っていた。初めての乗馬であつたが、しっかり支えてくれるため安心できる。そしていつもより近い距離にいるためか、彼の温もりを感じることができた。その事実気づくと、ほんの少しだけ心拍数が上がる。

——何でこんなにドキドキしているんだろう。

ロカセナは特に表情を変えずに、フリートたちを乗せている馬と道を交互に見つつ、適度に手綱を用いて速度の調節していた。妙な考えを抱いているのは、リデイスだけだと思うと、なぜか恥ずかしくなる。どうにか気を紛らわすために、適当な話題とともに口を開いた。

「騎士団に入団するには、馬が乗れることが必須なの？」

「必須ではないけど、見習いの時に習うから、ほとんどの人は乗れるよ。余程の実力者でスカウトでもされない限り、騎士になるには剣術や体術等の基礎を厳しく教えられる見習いの段階をまず踏まなければならぬからね。その時の一貫として乗馬も習うんだ」

「見習い……、ああ、あの子も」

城に入る前に会った、フリートを追いかけている少年のことを思い出した。

「見習い期間は結構ハードだから、実際の騎士になるころにはだいぶ人は少なくなってしまうんだ。まあ適度な剣術ができれば、町に住む貴族の護衛程度ならできる——そういうのを目的としている人も結構いるから、適当なところでやめてしまうのが現状だね」

「そうなんだ。ねえ、ロカセナはどうして騎士に？」

何気ない言葉を発しながら、少しだけ振り向く。それを見たロカセナはにこりと微笑んだ。

「精神的にも肉体的にも強くなりたいのもあるけど、ある人を捜しているんだ。騎士になれば、ミスガルド領だけでなく、幅広いところに行くことができるし、何より城内に入れば情報が入りやすい。そこに入れば、思ったよりも早く会えるんじゃないかって」

「それは……大切な人なの？」

そこまで執着している人なのだから、そう思ってしまうのは自然な考えだろう。だがその考えに反して、ロカセナは軽く首を横に振った。

「いや、その人自身よりも、ある理由があってその人を捜している

んだ。だから大切な人というのは行き過ぎているかな」

「そうなんだ……。早く見つかるといいね」

「うん、ありがとう」

ちょうど登り道に入ったため、少しロカセナが手綱を握る手が強くなる。

人を捜すために騎士団に入団したなど、珍しい話だと思う。確かに情報は入りやすいと思うが、動きにくくなったのも事実だ。騎士団や城に関係ある人なのだろうかと思いつつ、少し前にいる黒髪の青年を見た。

フリートは文官から武官になった変わり者と呼ばれているらしい。おそらくそれ相応の理由があるのだと思うが、彼が自ら口を開くとは思えなかった。ロカセナに聞けば教えてくれるかもしれないが、それはどこか卑怯な気がしてならなかったので、聞きたい気持ちをどうにか押さえた。

軽やかに馬を走らせつつ、登り道を駆け上ると、そこからは一気に景色が広がった。壮大な光景を目の当たりにして、息を飲んだ。

どこまでも続きそうな広大な草原が広がり、その先に見える山から左右に流れ出ている二本の川。そしてさらに向こう側にはうつすらと家が見えた。

「あれがヘイム王国。自由と商売の国さ」

トルが腕を組み、胸を張って紹介をする。ヘイム王国がそのように述べるのなら、ミスガム王国は秩序と政治の国と言えるだろう。考え方の違う、まだ見ぬ世界に心が躍りそうである。

「まあ、とつとと行こうぜ。馬を飛ばせば明日の夕方には着ける――」

「ねえ、あれを見て！」

トルの声を遮って、リデイスは草原の中に広がる異様な光景を指した。緑で覆われた土地の中に一際目立ち、赤くなっている部分があるのだ。そしてそこからは黒々とした煙がくすぶっている。

「火事じゃないの。消さなきゃ！」

「あれくらい大丈夫さ。もしかしたら焼き畑かもしれないし」

トルが特に聞き流しながら、慌てることなく答える。だがリデイスにはそれが納得できなかった。

「焼き畑じゃなかったら、どうするの!？」

「それでも大丈夫なのさ、この国では。それじゃあ聞くけど、もし消す必要があるとするなら、リデイスは何かできるのか？」

思わぬ言葉に言葉を詰まらす。痛いところを突かれた。指摘をしただけで、そのような力は持ち合わせていなかった。船上であった水の精霊を操る女性ならどうにかなったかもしれないが。

とつさに返すことができず、思わず視線を下げてしまう。その様子を肩をすくめながらトルは見ていた。

「あそこは通り道の近く。少し寄り道しても大丈夫だから、行ってみるか。ついでにムスヘイム領に置かれている加護を目の当たりにするといい」

「加護？」

「自由とか言いつつも、自然と信じてしまっただよ、精霊の加護っていうやつを」

目を瞬かせながら、その台詞は脳内の中に残った。

先ほどよりも速く馬を走らせたため、すぐにその炎の元へと辿り着いた。そこにはリデイスが危惧していたことが起こっており、燃え盛る炎は農作物たちを巻き込んでいたのだ。風が吹く度に炎は勢いを増す。

一方で、畑の主であろう男性が呆然と立ち尽くしている。それを見たりデイスは、特に表情を変えていないトルを睨み付けた。

「話が違っじゃない!」

「でも俺も、お前等も何もできないだろう。だから待って、それでも無理なら――」

急にトルの言葉を遮るようなくらいの激しい風が吹いたのだ。

リデイスは屈みながら顔を手で覆い、ごみが目に入らないようにする。しかし上半身に気が行き過ぎていたため、足を滑らされた事実気づくのが遅かった。火が燃え移っていない畑の中に落ちる——かと思ったとき、力強い手で腕を握られ、一気に道へと引き戻される。

風はすぐに収まり、目を開けると、安堵の表情を浮かべている黒髪の青年が目に入った。だがすぐに視線を逸らされる。

「……気を付ける。行く前に汚れたとか、話にならない」

「……ありがとう」

重い口を開きつつ、どうにかお礼だけはリデイスは言った。

一方、風は勢いよく吹いたが、炎の規模は変わらず、ひたすらに燃え盛っている。しかしその目の前にさっきまではいなかった、リデイスの半分ほどの背の高さである、赤い長い髪の妖艶な女性が浮かんでいた。豊満な胸に、露出の高い服を着ているため、思わず目のやり場に困りそうだ。

だがそれよりも見た目から、その女性が人ではないということに気づく。彼女は畑の主に向かって語りかける。

『——畑が惜しいか』

「無くなってしまうっては生活できません。すべて燃やすわけにはいかないのです！」

『そうか、わかった。我が火の精霊サラムンダーの力を用いて、止めてやろう。

だが次に己の不注意で燃えたとしても何もしないからな』

そう言い放つと畑主の顔からは一気に血の気が引いていた。

やがて女性——火の精霊サラムンダーは赤い光に包まれ、炎の中心地へと向かう。そしてそこから一気に激しい光が飛び散った。

またも目を守るために瞑るが、今度は足をしっかりと踏ん張って立つようにする。

そして光が収まり、目を開けると、くすぶった臭いが立ちこめていたのだ。

赤々とした炎はなくなり、代わりに黒焦げた畑だけが残っていた。

一瞬で——炎は無くなってしまったのだ。

「おっさんの不注意だったとは言え、火の精霊サラマンダーの加護が働いたみたいだ。良かった、良かった」

陽気に笑うトルだが、初めて見た光景にミスガルド領の三人は目を丸くしているばかりである。

「加護つて、火を操る精霊がいるってこと？」

「そうさ。雨がそこまで頻繁に降らないからな、こういう事故も多いんだ。他にも火に関して困ったことがあったら、助けてもらっている」

「すごい信用のされ方。けどそれって精霊の気まぐれによるわけ？」

「ああ。だからこそ、皆、信仰しているんだ。いざとなったときに助けてもらいうように。流れものは別だが、昔からいる人は、火の精霊サラマンを信仰しているのが、領の特徴の一つさ」

手を腰に付けながら、嬉しそうな表情で堂々と言う。そういう彼も相当な信仰者なのだろうと思ったのだった。

5、火の加護を受ける国（2）

サラマンダー

火の精霊の加護を目の当たりにした後、再びリデイスたちはヘイム王国に向かつて、馬を走らせ始めた。体に当たる風は少しずつ熱気を帯びていき、額にはうっすら汗が浮かんでいる。やがて暑さや長時間の移動により、会話の数も少なくなってきた。リデイス自身を感じる疲労も半端ない。

「帰りもこんな感じ？」

「帰りは船の予定だよ。ちょうどいい時期に定期便が出るから。まあフリートには辛いだろうけど」

「そうなんだ。なら安心——」

馬に触れていた右手が汗の影響で滑り、そのまま体がずり落ちそうになる。だが間一髪のところ、ロカセナが支えてくれた。大きく綺麗な手がしっかり腕を掴み、元の位置に戻してくれる。一見、フリートよりも華奢に見えるため、力はあまりないだろうと思っていたが、それは間違った考えであったようだ。

「あ、ありがとう……」

「気を付けてね。あとあまり無理しちゃ駄目。道端で倒れられたら、こつちも大変なんだから」

「ごめんなさい」

「慣れない道中に疲れているみたいだね。環境が変わると体調崩すのはよくあることだから。何かあったらすぐに言ってね」

「……わかった。心配かけて、ごめん」

「良かったら、寄りかかって構わないよ。その方が楽だし」

そう言われ、ほんの少し体を後ろに倒すと、ロカセナが体を近づけてくれて、背中が彼の胸にあたった。背中が何かに対して寄りかかれたことで、負担が軽くなる。だがそれは同時にすぐ傍にロカセナがいると言うことでもあり、逆に緊張してしまう。べとついた肌
の存在を気にしてしまうとはどうかしている。

「また坂道だね。しっかりと握っていて」

だがそんなリデイスの想いとは裏腹に口力セナはまったく気にすることなく、馬を勢いよく駆け登らせる。いつもは仏頂面の青年の傍で穏やかな表情で振る舞っているだけであつたが、その勢いの良さも新鮮なことであつた。

若干寄り道をしたとはいえ、速度は上げていたため、夕方には、ヘイム王国を囲む川の傍へと着いた。そこで馬は返し、今日最後の定期船と急いで乗り込んだ。

さっきの川よりも短い時間しか乗っていないが、川の広さの割に流れがあるため、小舟ではかえって危険であるため、あえて船を出しているらしい。遠く離れているが、ここからでもはっきり見えるほどの大きな山の裾野から川は両側から流れ出ている。ヘイム王国は自然の要塞で守られていると言われており、その文字通り、北側は山と川があるが、山を越えるには厳しく、川を渡るにはどうしても目立ってしまう。また南側は海に囲まれているため、攻めようとしても、逆に迎え討たれてしまうと考えられている。

ほとんど休みなく走らせていたため、馬を返したのちに、トルから今後の詳細について聞くことになった。船室の一角で座りながらトルが口を開いた。

「宿を取るのも面倒だから、すぐに屋敷に案内しても大丈夫だろう。予定より早い、遅いよりいいだろうし。食事とかは適当にしてもらって、後日歓迎式つてところかな」

「なんだ、その不確定要素ばかりの言い方は」

フリートが中途半端な物言いに若干語尾に苛立ちを込める。トルは肩をすくめながら、言い返す。

「だってさ、馬を使つたおかげでだいぶ日数が縮んだんだぜ。俺だつて、別に貴族のお偉いさんでもないし、そこら辺の事情はわからなえよ」

「なら色々と面倒なら、宿を一泊くらい——」

トルがちらりと虚ろな目をしているリデイスの方に向けた。

「スルト領主はすごくいい人だ。急な用でも対応してくれる。町の宿のレベルの上下も激しくてな、それなりにいい宿で夜中に受け付けてくれるところ、俺は知らない。半分以上が雑多な宿、疲れなくてとれるわけない。それに——」

トルが急に声をひそめてフリートとロカセナに近づく。

「ムスヘイム領に入ってからわかると思うが、お前たちみたいな肌が白い人間は少ない。ましてや金色の髪なんてほとんど見ない。そんな女を連れて何かあったらマズいだろう。ここに住む者として言いにくいが、けっして治安のいい領じゃない。盗みの被害もよく聞く、人間も含めてな。戦闘には自信があるって聞いていたが、相当疲れているぞ。何かしたのか？」

フリートはきょとんとしているリデイスを肩越しから見る。いつもより表情に覇気がなく、一人にさせるのは心配な状態である。慣れない土地を移動したことによる体力の急激な減少だろう。気を配っていたはいえ、ここまでの状態にさせてしまったのは申し訳ない。もしかしたらまだフリートたちには気を許したわけでもないかもしれない——そういう考えも浮かび上がっていた。

フリートはロカセナと軽く頷きあうと、意見を一致させる。そしてトルにそれを伝えた。

「すまないが、時間が遅くなってしまうが、着いたら領主の屋敷へと案内してくれ。俺たちが謝罪するから」

「わかった。まあ謝罪しなくても、その状況を見せれば納得してもらえと思うがな」

さりげなくロカセナがリデイスの左隣に座り、左手で背中を支え、そつと右手を額に手を当てる。そして触れるなり、ロカセナの眉間にしわが寄った。

「ロカセナ、何、急に……？」

「……無理しないって、すぐに何かあったら言ってねって伝えたよ

ね」

「別に大丈夫だよ。元気だって、普通に歩けるし……」

「精神的に気を張っているだけでしょ。体はもう限界みたいだよ。少し寝なさい、僕たちが付いているから」

「……ごめん」

元気のない声を発すると、寄りかかるようにしてリデイスは目を閉じる。そしてすぐに小さな呼吸をしながら、眠りついてしまった。そんな彼女の頭をロカセナは優しく撫でる。

「すまないな、トル。変に気を使わせてしまい」

リデイスの様子を横目で見ながら、フリートは沈痛な表情をする。だがそれを飄々とした様子で受け流す。

「いいってことよ。俺、他の領から来たばかりの人と何人が会っているけど、鍛えられた人以外はたいして調子悪そうだったし。いいとこの嬢ちゃんなんか、真っ先に参って当然だ。それに領同士を隔てる川で一悶着あったんだろう？」

振られた話は大蛇の大群のことだろう。さすがにあれだけの事件、一瞬で町に噂が広がったらしい。

「まあ生きているだけ良かったんじゃないか。船が沈められて生きて辿り着けませんでした、の方がよっぽど質^{たち}が悪い」

笑って言うてくれたが、耳が痛い内容である。自分たちだけではほぼ何もできず、あの女性がいなければ、そういう風になっていたかもしれないのだ。

やがて船の速度が遅くなってきた。岸边に着くらしく、到着する前に若干ながらの振動があった。それによってリデイスは目を覚まし、ロカセナに支えられながら船室を出る。

そこに広がったのは、星が微かに輝く夜空の下に、煌めく炎や光宝珠の明かり。そして人々が道に溢れる様子。まるで昼間のような様子にびっくりしてしまう。この時間帯であれば、ミスガルド城下町ではほとんどの人が家の中に入っている。

「知っているか？ ヘイム王国は夜の方が人々は活発になるんだぜ。

食事とか家で食べないで、そこら辺の露店で食べる。のんびり家で過ごすっていう風習がないのさ」

「話には聞いていたが、実際に見ると凄いな」

「リデイスの容体が落ち着いたら行ってみるといい。それじゃ、行くぜ」

船が停泊すると、トルはさっさと歩いて行ってしまった。ロカセナがリデイスの腰に手を当てて歩き始める後ろ姿を見ながら、フリートは周りに気を使いつつ、後を追う。

確かにトルが言っていたとおり、褐色の肌の人がほとんどであり、その上服装も薄手の軽装の者が多かったため、マントや上着を脱いだとしてもまだまだかつちりとした様子が抜けきれないフリートたちは浮いて見える。道すがら好奇心な視線が感じられた。

領主の屋敷は船からさほど遠くなく、充分な徒歩圏内であった。すぐにその一角は見え始め、荘厳に光が照らされているただっ広い屋敷が目に入る。その周りを囲んでいる塀をぐるりと周りながら、入り口へと辿り着いた。

トルは少し離れたところに三人を待機させ、入り口にいる門番である傭兵らしき二人の男に話を付けにいった。ちらっとフリートたちに目を向けられつつ、何度か相槌を打つ。そして男の一人が屋敷の中へと入り、しばらくして戻ってくるとトルの表情は和らいだ。手続きが終わったのか、トルは入り口に来るように促す。

歩きだそうとした矢先、リデイスが支えようとしていたロカセナの手を払った。目を丸くして、その手を見つめる。

「リデイスちゃん、無理しない方が……」

「領主様に会うのに無様な格好は見せられない……。私だって一貴族の娘よ。これくらいの体調なら挨拶くらいできる」

肩で呼吸しており、強がっているのはよくわかる。だがそれでもさつきよりは目には力が入っているため、無理に止めることはできなかった。

リデイスが一人で歩いてトルの下に近づいてきたのを見ると、目

を瞬かせた。その理由を聞くために、視線をやられたが曖昧な表情で返すしかない。

「領主様は……」

「こつちから言っただけで遣わしてもらったミスガルド城からの使者だ、もちろん屋敷に招待してくれるってさ。ただ歓迎の食事は明日以降になるとのことだ」

「ありがとう。お気持ちだけで充分と伝えて。一言挨拶だけしたいから、案内してくれる？」

「ああ、無理はするなよ」

そして一同は塀に囲まれた屋敷の中へと入っていった。屋敷よりもその庭が非常に広く、人工的に作られた池も見られた。その周りを光宝珠で照らしているため、夜であってもはっきりと形が見える。「ねえ、フリート、貴族ってみんなあんな感じなの？」

ロカセナがしっかりとした足取りでリデイスに目を配らせながら、隣にいた相棒に話しかける。

「人によるだろう、意地の度合いは。リデイスはずっと町を治める貴族の一人娘だった。あんなに嫌がっていても、幼い頃に備わったプライドとかはなかなか抜けられない」

「フリートも？」

「……否定はしないな。お前だから言うが、適当な振る舞いをしていいる文官貴族を見ると腹立たしく思うこともあるよ」

地位も、何もかもすべて過去に置いてこようとしたが、周りがそうさせなかった。

付いて回るのは『由緒正しい文官貴族の家から、武官である騎士になることを決めた希有な存在』。その過程で大喧嘩をしたという事実も、噂には流れている。城でも優秀な文官の一人である父を持つフリートは、小さな頃からその跡を続くよう言われていた。だが、ある事件を発端にその将来の考えについて疑問を抱くようになったのだ。

「リデイスちゃんを自分と比べているの？　一貴族として生きるか、

還術士として生きるかつていう間逆の可能性を持つ彼女を」

「……さあな。そんなの俺には関係ない」

胸がざわついたが、これ以上話をさせると、領主との謁見の際に気が散る可能性がある。ロカセナは良くも悪くも、的確に物事を突いてくるため、中途半端な言い方はばれてしまう。強制的に話を終わらせると、いよいよ屋敷に入るところであつた。

松明が左右に焚かれていた扉をトルが押すと、これまた荘厳な様子が目に飛びこんできた。明るい色の壁に、廊下の至る所にまで光が行き届いている空間。昼も夜も関係なく、むしろ眩しいくらいだ。しかし屋敷内は人の姿はあまり見当たらず、どこことなくその明るさが浮いているようにも見える。

トルは目の前にある左右に分かれて上に続いている階段のうち、右側の方を上り始める。そして二階に上がったところにある扉へと手をかけた。

「スルト領主はこの先にいる。まあそう肩を入れないで入ってくれ」
軽く扉を叩くと、中から扉は開かれた。

その先には大きな机が真正面にあり、その後ろに一人の男性が座っている。頭に布を巻き付けた、白い髭を伸ばしている男性が、トルやリデイスたちを見ると書き物をやめて立ち上がり、近寄ってきた。薄い布の服の上にある一枚の布にひだが入っているものを巻き付けている。

「スルト領主、ミスガルム城からの使者を連れて参りました」

さすがにトルも領主相手には緊張気味であつた。

スルトはリデイスたちを見ると、にこりと微笑んだ。

「ようこそ、お三方。遠いところからよくぞおいでくださった。何も無いところだが、心より歓迎する」

歓迎の言葉を出されると、リデイスはトルを差し置いて前に出る。そして丁寧に頭を垂れると、スルトにも負けないくらいの穏やかな表情を浮かべた。

「初めまして、ムスハイム領の領主様。ミスガルム城より参りまし

た、リデイス・ユングリガと黒髪がフリート・シグムンド、そして銀髪がロカセナ・ラズニールでございます。まずは夜分遅く、また予定よりも早い到着のご挨拶を申し訳ありません。文の一通でも送れば良かったのですが、お時間もなく、それよりも歩を進めることを優先してしまいました。心より謝罪をお伝え申し上げます」

そして再び深々と頭を下げた。それにならってフリートたちも頭を下げる。

「頭を上げてください。無理を言って頼んで、来てもらったのはこっちです。それにも関わらず、さらに急いで来ていただいたのだから、謝る必要はどこにあるのでしょうか」

リデイスは申し訳なさそうな表情で頭を上げた。

「そのように言って頂き、ありがとうございます。有り難くそのお言葉を頂戴させて頂きます」

流れるようなはつきりとした物言いにフリートは内心驚いていた。さつきまで歩くこともままならなかった少女が、堂々と領主相手に話をしているのだ。

「さて、折角ですから是非とも歓迎の会を開きたいと思っています。ただ私も少々予定が立て込んでいるため、予定到着時である明後日の夜にと考えているのですが、どうでしょう？」

「私たちは特に予定もございませんので、領主様のお言葉通りの日程で構いません。むしろそのような会を開いていただき、有り難き幸せでございます」

「ではそのように手配します。その間は、どうぞヘイム王国を探索でもしてみてください。さて――」

不意にスルト領主の声色が若干ながら低く変わった。そして徐々にリデイスへと近づいてくる。彼女もその気配の違いに察知し、ほんの少しだけ目を細めた。

「ミスガラム国王から文を事前に頂いたのですが、あなたは女の身でありながらたいそうな還術士であるそうですね」

「どのような内容を書かれたか存じ上げませんが、たいそうという

のは過大評価をしすぎです。ただの一介の駆け出しの還術士。私以上の方など大勢いらっしゃいます」

「——そうか。それならば少し試させて頂こう」

殺気が強くなったその瞬間、スルトは左腰にあった剣を抜き、リデイスへと振り下ろした——。

6、火の加護を受ける国（3）

何かがあるだろうとは、妙な気配が見え隠れしていることから気づいていた。じつくりとスルトの様子を見ながらも、言葉では粗相のないようにリデイスは返していた。そして明らかに意図的とも言える殺気が出たことで、無意識にリデイスも右手で短剣^{ダガー}を引き抜いていた。

だが急に黒髪と銀髪の青年の背中が視界に入る。二人とも腰からぶら下がっていたショートソードとサーベルを抜いていた。

息を吐くまもないわずかな時間に、四人が剣を抜いた場面――。その状態がどれくらい続くのかと思ったが、すぐにスルトの殺気がなくなつた。

よく見ればスルトは剣をリデイスに向かって振り下ろした途中で止めている。それをそのまま下ろさずに鞘へと剣を戻した。

それでも用心していたフリートたちは剣を下げようとしなかった。「スルト領主、いったい何のつもりですか？　場合によっては領主といえども容赦はしません」

苛立つている声を出すフリートを背中越しからリデイスは見る。口を一字にして、回答を待っていた。

「すまなかつたな、つい試してみたくて。まあ最低限の警戒心はあるようで、安心した。ついでに護衛の二人の怖さもな」

「試す？　リデイスの力量をはかつたのですか？　領主といえども、なかなか手荒いことをするんですね」

「トルから多少は話を聞いているだろう。ミスガラム領よりもここが治安は良くないのは認めている。だから試した、自分の身を守れる娘かどうか。――いい加減下ろしてくれないか？　短剣^{ダガー}ならまだしも、そんな剣を向けられては、安心して話せない」

ロカセナはちらちらとリデイスの様子も見ていたが、フリートは真っ直ぐにスルトを睨み付けている。敵と認識した者の意見は耳に

入らないのだろうか。改めてきちんとした言葉を出す必要があるようだ。

「——フリート、ロカセナ、剣を下ろしなさい。今回は私の護衛で来ているのでしよう。決定権は私にあります」

いつもの軽い調子ではなく、少し強めに言うと、ロカセナは肩を撫で下ろして素直に鞘に入れ、フリートは躊躇いながらも剣を戻し、一歩下がった。再びリデイスはスルトと向き合うことになる。

「改めて、先ほどはすまなかった。それなりに場数は踏んでいるようで安心した。だが極力一人で出歩かない方がいい。——その髪と目の色は非常に目立つ」

真っ直ぐと貫く視線がリデイスの目に映った。つい金色の髪に触れる。シュリッセル町でも目立つと言われたこの色——やはりどこに行っても同じなのだろうか。

それを氣遣ってか、スルトは穏やかな目をしながら、自身の頭を指した。

「だがヘイム王国はこのように頭に布を巻いている者が多い。希望があれば、侍女に手配させる。だが今は休みたいだろう。今日はこれくらいにして、明日にでもトルや侍女に聞くがいい」

リデイスの気持ちを汲み取った言い方に、どことなく嬉しかった。正直に言えば、気を抜いてしまえば立っているのさえ辛い。聞いたこともたくさんあるが、今は休むことを優先しようとしてリデイスは思う。

「ではお言葉に甘えまして、今晚は休ませて頂きます。お忙しい中、お時間を割いていただき、ありがとうございます。また後日、よろしくお願い致します」

再び頭を下げると、フリートとロカセナも後に続いた。やがて頭を上げると、トルが部屋に案内をするといい、それに着いていく。スルトは終始穏やかな顔でリデイスたちが出るまで見守っていた。

部屋から出ると、階段を降り、客間へと連れていくため、トルは右に進んだ。屋敷全体の説明をしているようで、明るい口調で何か

を発しているが、リデイスの頭にはなかなか入ってこなかった。気が付けば歩調が遅くなり、視線が下に向いていく。体が思うように動かない。呼吸が速くなっている気がする。

やがてどこからか呼び声が聞こえる——そう思ったときには、意識が途切れた。最後に感じたのは誰かが抱える温もりであった。

* * *

トルに案内をされた部屋は大きな客間であり、三人など余裕で寝られる広さであった。フリートはリデイスを抱えて、三つ並んでいるベッドに寝かしつける。それを見届けたトルとロカセナは、氷水を持ってくると言い、部屋を去ってしまった。

その間にフリートは部屋にあったタオルを拝借し、汗が出ているリデイスの顔を拭いてやった。そして意識を失ってしまった彼女の顔をじつと見る。

スルトと話している際はかなり無理をしていたのだろう。さつきよりも格段に容体は悪くなっており、小刻みに呼吸しているのがよくわかる。疲労による発熱——それが妥当な診断だ。

本当なら医者ですぐにでも超越してもらいたいところだが、夜も更けてきたため、無理に発言するのは躊躇われた。今は氷水の到着を待つくらいしかできない。

眠っていてもどこことなく辛そうな表情をしており、それを見る度にフリートの胸は締め付けられる思いだ。いくら体力はあっても、所詮は一般の女性。こういうことになるのなら、自分の船酔いなど我慢して、海を渡る船に乗せれば良かったのかもしれない。

不意にフリートは自分がリデイスのような状況に置かれたことがあったのを思い出した。まだ小さい頃、十歳前後の記憶であるが、高熱を出したことがあった。もっと酷い状況であり、数日間ずっと

喘いでいた。本当に治るのか、自分はこのまま死んでしまうのではないかと思っただ、そんな弱気になったときに、傍にいた母は手を握りながらいつも言葉を掛けてくれたのだ。

大丈夫、ずっといるから頑張りましょう——と。

その言葉が何よりも励みになり、無事に熱が下がったものだ。

ふとりデイスの手が何かを掴みたがっているのを見た。誰かにすがりたいのだろうか。それは父親であるオルテガか、仲良く楽しそうに乗馬をしていた相棒のロカセナか、それとも——。

フリートにとっては小さな手である、その少女の手を取ろうとする。だがそれをする前に、廊下を走ってくる音が聞こえた。

我に戻り、布団を掛け直していると、ロカセナとトルが部屋の中に入ってきた。珍しく呼吸を乱しているロカセナから氷が入った袋を手渡された。

「厨房に行ったら、厨房主がいなくて、探してきてさ。とりあえずこれだけ貰ってきた。溶けたらまた貰ってくる」

「ありがとう。額と脇に分けて冷やそう」

「僕も手伝うよ」

フリートと向かい合うようにして立ったロカセナに、薄い布袋を手渡した。その中に氷をいくつか入れて、脇の下に入れる。とにかく今は熱を下げるのが先決だ。基本的な応急処置を思い出しながら、事を進めていく。

「俺はもう大丈夫か？」

手持無沙汰になったトルが申し訳なさそうに顔を出す。フリートとロカセナは頷きながら次々にお礼を言った。

「すまなかった、夜更けまで付き合わせて。明日以降も世話になったときは、よろしくな」

「ありがとう。トルのおかげで助かったよ。今日はゆっくり休んでまた後日에도」

「おう。また明日も顔出すから、何かあったら言ってくれ。それじゃ」

そう言つて、笑顔で挨拶をすると、トルは部屋から出ていった。

そして二人はまた作業に移る。氷詰めはすぐに終わったが、額の氷はずつと持つていなければならぬ。フリートは持ちながら、前でリデイスの顔を眺めている相方に声をかけた。

「寝ていいんだぞ。お前だつて疲れているだろう。リデイスだけでなく、お前まで倒れたら洒落にならない」

「条件はフリートと同じ。むしろ船酔いのこととも考慮したら、そっちの方が体力なくなっているはずだよ。無理しなくてもいい。何のための二人組なんだい？」

ロカセナが頬を緩ませながら、フリートを見ってくる。だが思わずそこから視線を逸らした。どうにも悟らせている時のロカセナは苦手なのである、彼の思惑通りに事が進みそう。妥協案をすぐに考えて伝えた。

「……じゃあ交代制にしよう。だから先にお前が寝ている。時間が経ったら起こす」

「そう言つて、朝まで起こさなかったら怒るからね？」

珍しく今回は食つてこられず、あっさりと退いてくれた。そして肩を竦めながらベッドから離れようとしたときに、リデイスがもぞもぞと動き、また何かを握ろうと手を動かしている。それをロカセナは何の躊躇いもなく握り返した。

「——大丈夫。近くににいるから、安心して」

そう言つてリデイスの手をそつと下ろすと、彼女は動かすのをやめて、少しだけ落ち着いたように見えた。

その様子を半ば啞然として見てみると、ロカセナがくすつと含んだ笑いを浮かべる。

「リデイスちゃんつてさ、ついつい守りなくなっちゃう子だよな。

必死に頑張っている姿は眩しいけど、時として弱い一面も持っている」

「何が言いたいんだ？」

「二人で守ろうねつてところ。まだそんなに深い意味は持たせてい

るつもりはないから。じゃあ、おやすみ」

最後の方はまったく顔も合わさないで一方的に言ってから、ベッドの毛布を一枚取って、ソファアへと横になった。別にベッドで寝てもいいだろう、と言おうとしたが、すぐに肩を上下し始めたので、何も言えなかった。あんなに早く寝るとは、ロカセナもだいぶ疲れていたようである。

気を抜いてしまえばフリートの意識も微睡の中に消えてしまう。だがそんなことをしたら、リデイスの回復が遅くなってしまうだろう。改めて気合いを入れつつ、彼女の前髪をかきあげながら、その上に氷水が入った袋を乗せた。

「——早く元気になれよ」

* * *

誰かの声が聞こえる——。

それと同時に、はっと目を覚まして、リデイスは横になっていた体を持ち上げると、一面に白い靄が続いている空間が広がっていた。地面は芝生で覆われており、そこに横になっていたらしい。

「あれ、ここどこ？ 私、廊下で意識を失ったような気がするけど……」

頭の中を疑問符が覆いつくす。体調のこととも考慮して、ゆっくり立ち上がったが、特に違和感はなかった。頭痛もせず、体のだるさもない。もう治ったのかと思っていたが、何もない空間ではすぐに納得できなかった。とにかく周りの状況を確認しようと、辺りを見渡しつつ歩き始める。

しかし歩いて、歩いても、靄と芝生しか見ることはできない。もはや理解できない状況にあった。

ふと他の誰かが草を踏む音がして、そっちのほうに顔を上げる。

茶色の靴が見えた。それ以外は靄でだいたいが覆われていて見えな
いが、なんとなく口元だけは見ることができた。

「ここは貴女の夢の空間。そこに私が入り込ませていただきました」
大人びた女性の声が耳に入ってくる。

「つまり夢の中ですか？ それじゃあ、私は——」

「まだ体調は回復していません。以前の状態に戻るには少し時間か
かるでしょう」

「そうですか……」

ほっとしたような、残念なようなそんな感情が渦巻く。それと同
時に目の前にいる女性に対して疑問が湧く。

「あの、私の夢の中に入り込むって、あなたは何者ですか？」

女性の口元が笑みを浮かべる。

「少しばかり導きをしようかと思い。——貴女、還術について知り
たいのよね」

その言葉を聞いて目を見開いた。女性に対して、少しだけ警戒し
ながら見る。

「——私は貴女。貴女は私。だからそんなに怖い顔で見ないで」

「意味が分かりません」

「分からなくていい。今は“その時”ではないから」

誰かも言ったような台詞にリデイスは同時に脳内を巡らせた。そ
れにも構わず、女性は話を進める。

「還術について調べるのもいいけれど、もつと的を絞った方がいい
と思うわ。——ねえ、還したモンスターってどこに行くのかしら。

そもそもモンスターって何ものなのかしら？」

突然出された質問に眉をひそめる。

「モンスターは人間と相入れない生き物じゃないんですか？ 還せ
ば、モンスターが本当に生きる場所へと戻ると言われています」

それは還術を始めた時から——いや、もつと昔から教えられてい
ることでもある。周知の事実であり、それを敢えて聞いてくる理由
が分からない。

「一般的にはそうでしょうね。それなら本当に生きる場所とは、どこ？」

「それは――」

言葉を濁すようにして、飲み込んでしまう。

それに関しては、答えられなかった。

多くの書物を読んでも、その部分に関してはぼやかして書いているか、触れていないため、わからないのだ。リデイス自身の推論があればいいのだが、考えつくほど知識が少ないため、厳しすぎる。

沈黙を一つの回答と受け取った女性は脳内の中にいつまでも残るような、印象深い声質に変えて、声を出した。

「その場所がわかれば、なぜ還術というものがあるのかもわかるはず。それは今、貴女が抱えている問題を解決するヒントにもなるかもしれない。――もっとも、根本的な――」

すべてを言い切る前に女性の全身は靄に包まれてしまった。

そしてリデイスの視界も暗転した。

7、連鎖する事件（1）

倒れた翌日、リデイスの容態は比較的落ち着きを見せていた。

夜明け前にロカセナと交代をしたフリートは、横になるなり、予想通り一瞬で寝入ってしまい、起こされるまで目を覚めることはなかった。ぼんやり目が覚めると、どこかさっぱりしたロカセナに勧められて、フリートはシャワーを浴びた。全身に血が行き渡るような感触を持つことができ、ようやく覚醒できたのだ。

そして覚醒と同時に、腹が空いていることに気づく。いつもより軽装のロカセナがそのタイミングで朝食に行こうと言ったのは、彼も同様の状況に陥っていたからだろう。

だがリデイスの胸が規則正しく上下しているとはいえ、彼女を一人にするのははばかられる。交代で食事に行こうかと話していた際に、ドアがノックされた。ロカセナがドアをあけると、白いタオルを抱えたフリートたちと同年くらいの侍女が軽く会釈をして、寄ってきた。

「ミスガウム城からお越しの、フリート・シグムンド様とロカセナ・ラズニール様ですよね？ わたくし、この屋敷で働いている侍女のレイイでございます。スルト領主から、リデイス・ユングリガ様のご容体の確認、またその他のお手伝いをするよう命じられました」

トルが言ったのか、スルトが元々察していたのかはわからないが、既にリデイスの状態に領主は気づいていたらしい。侍女の言葉を聞くなり、ロカセナがにこりと微笑んだ。

「それは嬉しいことです。どうしても異性では対応できないことがありますので。僕たち、今から朝食を食べに行きたいので、その間彼女のことをお願いできますか？」

「はい、大丈夫でございます。汗もかいているでしょうから、着替えさせたいと思います。朝食なら、屋敷東側にある食堂をご利用ください。外でも出店等は既に開いています、少しはのんびりされ

ても宜しいのではないかと」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、食堂の方を利用させていただきます。では、彼女のことをよろしく願います」

ロカセナが挨拶を済ませると、フリートも軽くだが会釈をして、東へと向かう彼の後ろを着いていく。侍女はしばらく二人を見ていたが、やがて部屋の中へと入っていった。それを見ると頬が緩み、ほっと胸をなで下ろした。

「……これからどうする？」

今まで言いたくても言わなかった内容を、相方はぽつりと呟いた。リデイスがいる前では控えていた結果だろう。それはフリートにとっても同じだ。夜中に看病をしながらずっと考えていたことを伝える。

「俺たちの目的は領主から品を受け取って、城に戻ることだ。リデイスが完治しなくても、そちらを優先するべきだろう。確かに今回は外交目的も多少は含んでいたが……俺の感じたところだと、あいつの対応は良かったはずだ。だがこれ以上、病気の状態を前に出すわけにはいかないだろう。俺たちから色々な断りを入れておこう」

「それが妥当なところかな。リデイスちゃんが聞いていたら、目を剥いて飛びかかってきそうな話でもあるけど」

「そんなことはしばらくできないから、安心しろ」

「そう言って、本当は飛びかかってきて欲しいんでしょう。まあ僕としても元氣なリデイスちゃんのほうが良いけどね」

さりげなく気に留めることを言って、眉をひそめたフリートをよそに食堂へと入っていった。二十人ほど入れる、屋敷の一角とは思えないほどの食堂の広さである。

だがそこにいた先客を見て、さらに不機嫌さが増してしまう。

「お前、一介の傭兵がどうして屋敷の食堂で食べているんだ！」

オレンジ色のバンダナが特徴の青年に対して、口を尖らせる。それをうるさそうに聞きながら、青年はスープ飲む。

「金さえ払えば、出入りする人は誰でも使っていいんだよ。値段は

多少張るけど、旨いからな」

そしてまたスープを口に含ませる。トルの言ったとおり、屋敷に住んでいるようには見えない人が何人か目に入った。

意図的に離れようとしていたフリートであったが、ロカセナに無理矢理背中を押されて、トルの前に嫌々ながらも腰をかける。

「——リデイスは大丈夫か？」

「だいぶ落ち着いた。数日もすれば、熱は下がるだろう。どちらにしてもスルト領主から品を受け取り次第、ここを離れる。あまり長居をしても、面倒なことを言うてくる上司がいるからな」

わざわざ手紙で伝えたのにも関わらず、再会するなり、文句をぶちまけ、ついでに無理矢理鍛錬場に連れていった上司を思い浮かべる。それを聞いたロカセナも苦笑していた。

「リデイスちゃんの体調の件はあるけど、それを優先して事は動かないっていう意味。そうそう、この町では医者の方診つてやっている？ できれば一度見せてあげたいんだけど……」

スープを飲み干したトルは、視線を料理からロカセナに向けた。

「その件については、俺も話があつてな。今日、屋敷の専属の医者が来るから、その時に見てもらったらどうだ？」

「それは有り難い話だね。是非とも診てもらおう。トル、手配とかしてもらつてもいい？」

「そのつもりさ。出会ったよしみてところで、手伝つてやるよ。」

スルト領主からも滞在中の手配もしてほしいって、言われたからな」

「……もしかしてつまらない？ 傭兵が観光案内や雑用をやつて」

ロカセナが心の中を探るように、目を細めながらスルトを見る。

だがそれに対して特に気分を害した方でもなく、変わらない口調で返す。

「傭兵つて言っているけど、俺、もともと商家の息子さ。まあそれなりに戦闘能力はあるらしいが、雑用の方が慣れている」

水を一気に飲みきり、ポットでまた注いだ。その頃にはフリートたちの目の前には朝食が一式に並べられていた。冷めないうちに食

べようと、早速口に入れ始める。野菜スープをまず飲んだが、かなりいい味がでている。無言で食を進めていると、食事を終えたトルは椅子をひいて立ち上がった。

「じゃあ、また後でな」

簡潔に挨拶をすると、ポケットに手を入れながら出ていった。案外気が利く、いいやつかもしれない、思いながらフリートはパンを口の中に入れた。食べ物が腹に溜まっていくと、どことなく力が漲ってくるかのように感じる。しばらくは自信の栄養採りに摂取した――。

だが、まるで穏やかな時間などもうないとも言つかのように、ドアが勢いよく開かれた。トルが血相を変えて飛び込んでくる。

「何かあったのか。食べ物がある場で埃をまき散らすのは良くないぞ」

「そんな悠長なこと言っていられるか！――いいか落ち着いて聞けよ」

トル自身にも言い聞かせるような内容に、眉間にしわを寄せた。

「まず入り口で門番が二人斬られて重傷だった。誰かが侵入したらしい。それでリデイスの部屋に行ったら――いなかった」

「何を寝ぼけたこと言っている。部屋を間違えたんだろう」

「だからいなかったんだ！ 侍女が部屋の隅で倒れていて、他は誰も――」

トルが言い切る前に、脱兎のごとくフリートは食堂から飛び出していった。

部屋のドアを勢いよく開け放ち、ずかずかと入り込んでいく。そしてそこにあつた乱れ、シャツが切り裂かれたベッドを見て呆然とした。さっきまで一人の少女が横になっていた場所だが、誰もいなかったのだ。

「――トル、領主に言っただけ緊急手配とかできる？ これは明らかな

誘拐だよ。おそらく門番を斬った人たちだろう」

ロカセナが静かに言うつと、返事をしてトルはきびすを返して、領主の元へと急いだ。

立ち尽くすフリートには声をかけず、ロカセナは開け放たれている窓をちら見して、部屋の隅で倒れている侍女を起こした。外傷はないようで、少しだけ安堵する。体を揺さぶらせながら刺激を与えると、侍女はうつすらと目を開けた。

「大丈夫？」

「はい……。あ……リデイス様は！？」

ロカセナが残念そうに軽く首を横に振ると、侍女はがつくりとなだれた。目からは涙が漏れている。

「わ、わたくしのせいで……。何て事を……」

「安心して、すぐに取り返すから。だから襲われたときの事情を教えてください？」

がくがくと首を縦に振る。

「リデイス様のお洋服の方を替えさせ、氷を用いて冷やそうと思つた時でした。リデイス様は目を覚まされていたのですが、急に起きあがって、わたくしを横に突き飛ばしたのです。何事かと思いましたが、わたくしがいたところに、顔を布で覆った男が剣を斬りつけていたのです。ぞつとしました、リデイス様が押してくれなければ、わたくしは斬られていたことでしょう」

小刻みに震える体はそのためらしい。一般人にとってはかなり恐怖であつただろう。

「リデイス様はご自分の短剣ダガーで襲ってくる相手に対抗しておりました。ですが、まだ本調子ではないお体。隙を付かれて、肩の方を刺されまして、状況的にもかなり不利になりました」

小ぎれいな部屋に場違いな赤い滴が点々と落ちている。

「そして男の一人が私に再度刃を向けたのですが、リデイス様が『大人しくするから、その人に手を出さないで！』とおっしゃり、抵抗するのをおやめになったのです。そしてリデイス様のお腹に拳を

入れるとお静かになり、持ってきたロープで手を、布を体全体で巻き付けて……。その後、私も気を失わせられたので、よくわかりません。申し訳ありません……戸締まりをきちんとしていれば良かったのですが」

恐怖に怯え、縮こまる侍女を責めることはできなかった。口力セナは努めて優しい声を出す。

「ありがとうございます。またスルト領主にでもお話を伺われるかと思いますが、そのときはよろしく願います」

フリートは進みながら、窓の傍に寄った。横長に広い屋敷の西側の奥に位置するこの部屋――。すぐ近くの塀へいの外側は人通りが少ない場所らしい。病人がいるため、静かな環境を意識して用意された部屋であつたが、それが完全に裏目に出た。

窓の縁に力を込める。歯噛みをしながら溢れる想いを押し留めた。

「――動くのは最低限領主から命じられてからだ。下手に動いて、ミスガルド城の信用を落とすたくない」

「わかっている。場所や目的の検討が付かない今、動けるはずがないだろう」

だが言葉と裏腹に、体はその縁と、その先に続く塀を飛び越えてくた仕方なかった。

8、連鎖する事件（2）

「犯人は最近明るみに行動している、ギウルヴィ団だろう。まさか屋敷にまで侵入してくるとは……、舐められたものだ」

スルトの部屋で、忌々しくその部屋の主は吐き捨てた。どうにか自我を押さえつけながら、フリートはロカセナやトルとともに、その部屋に来ていた。

犯人は二人組の男。だがその腕は相当立ち、門番たちは何も反撃ができずに、戦闘不能にされた。そして始めからリデイスを誘拐することに焦点を置いていたようで、他には荒らされた部屋はなく、実際に屋敷で事を起こしていたのは数分と言われている。

「スルト領主、ギウルヴィ団とは何なのですか？」

ロカセナが聞くと、スルトは思い出したように目を見開いた。

「そうか、まだそこまで話はしていなかったな。ギウルヴィ団とは特に最近犯罪を繰り返している集団のことだ。その内容としては強盗、誘拐、殺人——とにかく何でもする」

フリートの体がびくりと動く。そして思わず荒ぶった声を出す。

「そんな集団、どうして野放しにしているんですか。貴方はこの領をまとめる人でしょう！」

「お恥ずかしながら、耳が痛い話だ。実は近々、行動に移す予定だったが、どこから聞きつけたのか、傭兵たちを集めた家に魔宝珠に似せた爆弾が送り込まれ……」

「それでまだ行動ができていないわけですか。ではそいつらの目的は何なんですか。すべて金目的なのですか？」

「だいたいがそうだ。誘拐する相手も資産家の女、子供を狙っている」

「金か……」

ほんの少しだけ、ゆっくり息を吐くことはできた。金が主目的なら手荒な真似はしないはずだ。そして頭も切れる軍団。少しばかり

は猶予はある気がした。

危険を侵してまで、リデイスを狙ったのは何となくわかった。だが、腑に落ちない点はたくさんある。

「しかし待つてくださいよ。そもそも、この屋敷にミスガルム城の遣いが来るって言うことは、誰が知っていたのですか？ それにその相手がどんな容姿で、どこにいるかということも」

スルトは難しい顔をしたまま俯くしかなかった。

リデイスが本調子なら倒すことは難しくても、最大限に抵抗し、その間に誰かが駆け付けることはできただろう。通常なら、もしかしたらこんな事件が起きなかったかもしれない。

「——よくよく考えると嫌な事件だね。リデイスちゃんが弱っているとき、そして僕たちが部屋から離れているときを狙うなんて。おそらく——」

内通者がいる——そこまで思っているだろうが、ロカセナはそれ以上言葉を続けようとはしなかった。もしそうだった場合、責任を追及されるのはスルトである。

「とにかく身代金目的の強行的な誘拐であるのなら、そろそろ連絡が入ってもいいと思いますよ。その場合どちらに要求するのかな。ミスガルム城と領主のどちらかに」

腕を組みながら他人事のように言っていると、扉が激しく叩かれた。スルトが促すと、侍女が一人現れ、スルトの元に駆け寄った。そして一枚の真っ白な手紙を差し出す。

「屋敷の敷地内に投げられていました……」

「ありがとうございます。戻っていてくれ」

一礼をして、彼女は足早に出ていった。手紙を開くなり、スルトの眉間のしわは寄るばかりだ。フリートがさりげなく近づくと、それを差し出される。受け取ると、ロカセナとトルも覗き込んだ。

『ミスガルム王国からの客人リデイス・ユングリガは我らが預かっている。手荒な真似をして欲しくなければ、明日の昼までにムスヘ

イム領主に古くから伝わっている、火の精霊サラマンダーが宿っている炎の魔宝珠が差し出せ。下手な行動を起こせば、娘に危害が加わるだろう。
ギョルヴィ団』

「これはまたシンプルな脅迫状だね」

ロカセナがにやりと笑みを浮かべながら感心している。また、達筆な字で書かれたその脅迫状の内容は、色々な意味で驚くべき事があった。

「リデイスのフルネームを知っている。あいつはミスガラム城に滞在してから数週間経っていないのに、どれだけ情報が漏れているんだ」

「そして金目的じゃなくて、魔宝珠目的。その点はよくあり得そうな話だけど。今や魔宝珠はお金以上に貴重品。それが伝統あるものなら尚更だね」

ロカセナが目を細めながらスルトの様子を見る。彼は口を一文字にしたまま、自分の椅子に座り込んだ。そして組んだ手に顎を乗せる。何かを知っているだろうが、拒絶の雰囲気醸し出していた。トルに魔宝珠の詳細を聞くにも、首を傾げている。

「なあ、この脅迫状が言っていた物、いつ受け渡すんだ？ これじやあ意味がなくねえか」

「おそらくこれを読んだスルト領主の様子を見てから判断するんじゃないのかな。もし魔宝珠を差し出さない方向だったら、何らかの事を起こすかもしれない」

静かすぎる声に、フリートは一瞬びくつとした。ロカセナは視線を合わそうとしないスルトにゆっくりと近寄る。彼の無言の背中からは、計り知れない怒気が感じられた。

歳のわりには冷静なコンビと言われているフリートとロカセナ。しかめ面のフリートとは対照的に、ロカセナはいつも笑みが耐えなかった。そのため怒りを露わにするときは、たいていフリートが先であるが、ロカセナも心の中では怒っている。しかしそれが表面化

するときなど、滅多にない。

「スルト領主」

呼びかけても何も返事がない。見かねた口力セナは大袈裟に溜息を吐いた。

「いい加減にしてください。勝手に自分の脳内だけで、完結しないでください。あなたの判断にかかっているんですよ、リデイスちゃん」

声のトーンをさらに落とした。フリートでさえも、ほとんど聞いたことのない、怒りが含まれた声。

「——わかつているでしょう、これはただ単に領内の問題ではなくなっているのです。彼女の身に何かがあつたら、あなただって痛手になりますよ？ 領主の屋敷という、領内で一番安全である場所でも簡単に人を連れ去られたなんて！ しかもその領主は保身のために彼女を切ったとなれば……」

「わかった、わかったから！」

我慢しきれず、溜まらず声を上げる。しかしそれでも口力セナの雰囲気は緩まなかった。

「わかったのなら、どのような行動をしてくれるのですか？」

ちらつと口力セナから視線が送られる。その目はもちろん怒気も含んでいるが、目の奥には何かが潜んでいた。その目配せに、フリートは彼の立場になって一瞬考える。そして目を見開くと、軽く頷き返した、半歩だけ後ろに下がり。

「聞いているのですか、スルト領主。サラマンダー火の精霊が宿っている適当な魔宝珠を与えても、やつらは満足しませんよ」

スルトの顔が強張った。凶星と捉えてもいい、わかりやすい仕草である。それだけ余裕がないのだ。トルが豹変した口力セナとスルトとのやり取りを、立ち尽くしながら聞いていた。それを横目で見ながら、さらにフリートは後ろに下がる。

「代々伝わる魔宝珠など、さぞ素晴らしい力を持っているでしょう。ギョルヴィ団が欲するのは当然でしょう。だからこそ、今回の取引

は慎重になる必要があるのです。わかっていますか？」

「そんなことはわかっている。だが、渡したくても渡せない代物だ。私でさえ迂闊に手など出せない……。そしてそれをあいつらが使いこなせるとは、まったく思えん」

足音を立てないように気を付けながら、フリートは扉の前へと立つ。その扉からは若干隙間があった。

「——それじゃあ話を変えましょう。どうしてリディスちゃんのフルネームがばれたのでしょうか。そしてなぜあの部屋にいたのを知っていたのでしょうか」

「それは金色の髪を追っていたれば、部屋くらいわかるだろう。一目見ただけで、印象に残るからな」

扉のノブにそっと手をかける。

「では、どうして僕たちがいないタイミングを奴らはわかったのでしょうか？ それはきつと内通——」

ロカセナが確信に触れると同時に、フリートは一気にドアを開け放つ。そこから目を丸くした侍女のレイイが倒れ込んでくる。だが彼女はすぐに鋭い目つきに変えると、右手から隠しナイフを取り出して、フリートに向かって突き刺した。

それを軽くかわし、彼女の体勢が崩れたところを、ナイフを持った手を握り、そのまま床に説き伏せる。その衝撃でナイフが転げ落ちた。

レイイはばたつくが、きちんと体勢を組まれて羽交い締めになれているのは、例え鍛えていた女性とはいえ、動くのは難しすぎる。やがて無理と悟ったのか、レイイは大人しくなった。

だが一息吐こうとした瞬間、彼女は空いている左手をとつさに胸元を突っ込むなり、魔宝珠を解除する声を発したのだ。

「フリート、離れろ！」

ロカセナが忠告する前に、既に飛び退いていた。

退く際に、左頬すれすれに小型のナイフが通過する。

「スパイか！」

物怖じをしない反撃、隙を見つければ明らかに急所を狙っていく、その様子は並大抵の人ではできない。

次々に鋭いナイフを投げつけて、レリイは無理矢理間合いを作る。フリートは忌々しく舌打ちをしながら、部屋の脇へと降り立った。

胸元から魔宝珠を取り出し、そこに手を触れるといくつもの使い捨ての小さなナイフを召還する。左手の指の隙間に四本はめ込むと、ぎろつとフリートを睨み付けた。

「——本性を現したようだねえ、リデイスちゃんの世話をしていた侍女。もともとスルト領主の見張り役として、いたんだろうけど、今回は好機と見て、行動を起こしたんだろう、リデイスちゃんの誘拐の手引きを。けどそんなの僕たちはわかっていたさ」

ロカセナが数歩レリイに近づくと、彼女は躊躇いもなくナイフを投げた。それを流れるようにかわしていく。その様子を見て、彼女は目を丸くした。

「今はスルト領主の言動を見て、報告するつもりだった。リデイスちゃんを痛めつけるかどうかの匙加減を」

まったく気分を害していないロカセナに対して、レリイは一気に八本召還し、五体の中心部に向かって投げつける。素早く投げてバラマかれたナイフは、一般の人なら確実に傷つけることができる速さであった。

だがロカセナは逃げることなく歩き続け、手近にあったクツションを取り、それと自分の足を動かしてすべてかわしたのだ。いくつかわるまで飛んでいたが、壁か机に当たる程度で他に誰も傷ついていなかった。

レリイはそこでやっと自分が相手をしている人物が、とんでもない人物だと気づいたのだろう。踵を返して、一目散にドアから逃げた。

「フリート」

「行くぞ」

お互いに一言だけ声を掛け合って確認すると、ロカセナとフリー

トも彼女を追いかけ始めた。

「トル」

「は、はい！」

呆然と成り行きを眺めていた傭兵トルは、顔色の悪い領主からの声に振り向いた。

「何でしょうか？」

「二人を追いなさい。そして必要ならば、助けなさい」

「しかし、領主様のご容体が――」

「騒ぎを聞きつけた連中が来るから大丈夫だ。それよりも今はウングリガ様を助ける。彼女を助けなければ、我々の信用が地に落ちる。わかるな、この領とミスガルド領との関係問題にも発展するかもしれないんだぞ！？」

無理をしつつも激しく叫ぶ様子を見て、トルは一瞬後ずさったが、スルトの想いを汲み取って返事をした。

「わかりました。傭兵トルはフリートとロカセナのサポートに転じてきます！」

あの殺気の出し入れ、機転の効き方など、対抗できる部分はほとんどないだろう。だがこの領の特性、そして地理なら負けないと思い、二人に追いつくために急いで走り去っていった。

9、連鎖する事件（3）（前書き）

今回の話よりしばらく、若干流血描写が多めにあります。

9、連鎖する事件（3）

さすがと行ったところか、単身スパイ活動を行っていたレリイは、思った以上に手強く、なかなか捕まらない。

彼女が屋敷から抜け出す際に脱ぎ去った侍女服の下は、最低限の露出のみの無駄のない素材でできた、隠密活動に適した黒い服。だぼだぼの服を基本としているヘイム王国ではあまり見ない服装であるが、目立たない色であり彼女自身も小柄なため、人でごった返している町の中ではほんの少し油断をしたら見失ってしまう。

その上、彼女は町のだ真ん中を走るものだから、追っている男の方が分は悪い。

「これじゃあ、僕たちの方が悪者に見えるよ。あつちはこの領の女性、こつちは違う領の男。不利だなあ」

「そんな不満を漏らすのなら、無理して逃がさなくても良かっただろう」

「けどそうしたら、リディスちゃんがどこにいるか、直接確かめられないだろう？」

悪びれた風もなく答える姿に、フリートは心の中で嘆息を吐いた。
——まったくこの相方は、あのわずかな時間でどこまで先を見越して行動しているんだ。

ロカセナ的能力を持っていれば、捕まえようと思えば捕まえられたはずだ。直接的な剣技ではフリートに劣るが、その他を総合的に考えれば、彼に軍配が上がるだろう。

そんなロカセナは意図的にレリイを逃した。それは彼女がアジトまで逃げきるか、仲間と合流する可能性が高いからだ。アジトだったら非常に有り難く、リディス救出に大きく近づくだろう。例えば合流だとしても、こちらとしては捕虜が多くできたとして、交渉の道具にでも使えるはずだ。

おそらくロカセナはあのわずかな時間で、レリイがフリートに対

して反撃するほど、一筋縄ではいかない女性とわかってから、そのようなことを考え、泳がしているのだろう。

——正直、こいつだけは敵にはしたくない。

それはこういう場になったときに、フリートがいつも思うことであつた。

「ちよつとやばいかなあ、このままじゃ撒かれるよ」

人の量はさらに増し、必死に押し退けながら進んでいた。幸いなのが、まだ真つ昼間の買い物時ではないことだろう。その時間帯の人の多さでは進むのは困難なはずだ。

町には出店が多く立ち並んでおり、そこにはたくさんのフルーツや加工品、手軽に食べられる食料が売られている。本当ならばリデイスと一緒にここを回っている予定だったが、思い通りには行かないものだ。

「もつと詰め寄れそうな気がするけど、どうしようかな？」

「——それならこっちに着いてこい」

ロカセナ以外の声がフリートの耳に飛び込んできると、そこにはオレンジ色のバンダナを巻いた、褐色肌のトルが息を切らせながら駆け寄っていた。

「お前たち、どれだけ速いんだよ」

「スルト領主はどうした？」

「大丈夫、他の傭兵が守っている。加勢してこいって言われてさ、この国の地理に関してはさすがに俺の方が詳しいから、手助けするよ」

「……すまん」

「いいってことよ。困ったときは人助けするのが普通だろう」

トルが目を凝らしながら、レリイの方を見る。どうにか焦げ茶色の彼女の頭が見える程度だ。

「ギェルヴィ団のアジトの方角はだいたいわかっている。西だ。今、南下しているから、このまま人通りの多い方を通るのなら、四つ先のブロックにある角を右に曲がって、西門にでるはずだ。そこ

までは裏路地を通れば回り込める」

「それなら二手に分かれるのがいいだろうね。フリート、トルと一緒に回り込んで。僕は普通に追いかける。万が一、見失ったらあとはそっちに任す」

ロカセナが指示を出したが、それをフリートは軽く笑った。

「お前が見失うことはないだろう。むしろ俺たちが一緒にいたら邪魔か？」

「大勢で女性を追いかけたら、誰でも不審に思っつて言うことだけだよ」

当たり障りのない言葉を返したロカセナは、あとは二人の存在などなかったかのようにして、レリイを単独で追った。

ロカセナがすぐに一人の世界に入ってしまったことに対して、トルは怒るよりも啞然としていた。

「あいつって、いわゆる仕事ができる男なのか？」

「そんな無駄口を叩く暇があったら、さっさと抜け道に案内しろ」
「わかったよ」

膨れっ面をしつつも、トルはすぐ傍にある裏路地を目で示すと、速度を落とすことなく、入り込んだ。全体的に建物が低いせいか日の光が隙間から落ちているため、暗いという印象は受けなかった。だが様々な物が地面に散らばっているため、足下には気をつけて進む。動物の死骸などもたまに見かける。

裏路地の住人は、フリートたちのことを見ると、不思議そうな顔をしている人や、にやけながら見ている人など、二種類ほど分かれていた。どちらの存在の視線も気分がいいものではないため、今はトルの背中に集中する。

瓶などを蹴りつつも、軽やかに障害物を越えていくトルはさすがに場馴れをしている雰囲気醸し出していた。傭兵の仕事でもこういう風に、駆けずり回っているのだろう。

フリートたち、ミスガルド城の騎士団はクーデターでも起これば、人間相手に市街に出るかもしれないが、基本的にはモンスターから城を守るというのが目的で発足した団体である。人々にとって、脅威となるモンスター。それによって傷つけられた、しまいには殺されたという話は日に日に増えていく。それがミスガルド領にとつては大きな悩みの種だった。

そう考えると、モンスターだけでなく、ギウルヴィ団という血の通った人間が人々に脅威を与えていることがプラスされているとなると、非常に大変な領なのではないだろうか。それでもなお、人々は商売や農業、工業に励み、生き抜こうとしている姿は本当に凄い。「傭兵になんて、どうしてなったんだ？」

少し速度が落ちたところで何気なく聞いた。トルは突然の質問に目を瞬かせつつも平然と返答してくれた。

「ある意味必然だろうな。小さい頃に家に強盗が入られて、そこで両親を殺されたんだ。数年はじいさんのところに世話になっていたんだが、最後に俺用の魔宝珠を残して死んだ。どうにかして食いぶちを確保しなければならなかったときに、スルト領主に出会ったんだ。『強く生きていきたいのなら、傭兵にでもなったらどうだ？』ってな」

それは実際の年月にしたら、かなり昔の出来事であろうが、彼にとつてはつい最近のことを思い出すような口振りであった。

「もともと体力には自信があったし、傭兵っていつても、ギウルヴィ団とかいったたいそうな団体をぶつ潰そうとかなければ、比較的安心な職業だしな」

「モンスター相手にそんな台詞を？」

「モンスター？ 何を言っているんだ。この領じゃ、滅多に出ないぜ。例え出たとしても、その時は傭兵でも少しだけ還術ができるやつがいるから、そいつに案件が回ってくる」

軽く流した言葉であったが、フリートの考えを一瞬で崩すには充分であった。

「モンスターが……いないのか」

「そう言っただろう。ヘイム王国周辺で見かけたなんて、聞いたことない。なんかそっちの領ではモンスターから身を守る魔宝珠があるらしいが、そんなのこっちでは売れない話だぜ」

——これは地理的条件が作用しているのだろうか、それとも他に何か――。

トルから出てくる言葉に驚きつつ、一瞬考えも巡らしたが、今は追求すべき内容ではない。思考を目の前のことに集中し直すと、表通りの喧噪がはつきりと聞こえてきた。

そして表通りに出る前に、一度立ち止まった。そしてちらっと左側の様子を見ると、目の前にあのレリイが険しい顔で通り過ぎていったのだ。それを見ると、フリートたちは飛び出し、人々をかき分けながら再び彼女の背中を追いかける。

よほど余裕がないらしく、フリートたちのことを見向きもしなかった。

人通りも少なくなった頃に、ヘイム王国の西門が見えてきた。ただの開けっ放しの門であるため、形だけの格好である。レリイはそこから飛び出し、外にあるアジトへと向かっていった。

ヘイム王国周辺は多くはないが森で囲まれており、雲隠れするなラここが最後の機会である。いったいどこにアジトがあるのか、リデイスはどこにいるかという考えが頭の中にこびり付く。

いつの間にか追いついたロカセナは、依然として眉間にしわを寄せっぱなしであった。彼にしている珍しい様子だと思ったが、味方の人質に取られるのはどの立場であるので当然のことだろう。

しばらく森の中を進んだところでレリイが急に立ち止まると、逃げるそぶりも見せず、鋭い目つきで睨んできた。その周りから物騒な剣を持った男が三人ほど出てくる。

「私が何も考えずに逃げていたと思ったか！」

はつきりと言い切る姿は、柔らかな物腰であった侍女の雰囲気など微塵も感じさせられなかった。まったく別の性格の人物になりき

ることができる、潜入調査用に鍛えられた女性であると改めて実感する。

手加減する必要などはないと宣言されたのと同然であつたため、ロカセナは愛用のサーベルを、フリートもバスタードソードを召還した。トルも慣れた手つきで武器——片方が斧状になっているが、逆側では突きもできるウォーハンマーを召還し、険しい顔で握りしめる。

そしてお互いに睨み、隙を探り合いながら、硬直状態が続いた。ほんの少し右に動くと、相手側は左に動く。そんなさりげないやりとりの末、フリートは意を決して正面から突っ込む。

相手側が動かないのは、時間稼ぎを目的としているからだ。それなら待つ必要などは一切ない。

突っ込んできたフリートに対して、二本の短剣を持った細身の男が前に構える。

彼に向かって振り下ろすと、二本を交差して止められた。そして反動で押し返され、若干たたらを踏みながらその場に留まる。だが息を吐かせる間もなく、攻撃を開始した。

その男は確かにやり手な方ではあり、フリートの剣技に付いていくが、双剣使いに関しては普段からもっと早く攻撃を繰り出す女性の上司を相手にしているため、男の剣筋は悪い意味で見えすぎていた。

男の息が上がってきたところで、簡単に懐に入り込み、腹に蹴りを入れる。だが以外にも遅いようで、強い蹴りながらも持ちこたえていた。

一瞬で決まらなかったことが若干悔しかったが、何度か剣を捌きつつ、軽々と反撃に転じると、見る見るうちに男の手際が悪くなっていく。

人間相手には正直遠慮していた部分があるが、今は時間がない。後ろに回り込み、彼の意表を突いたところで、表皮だけをなぞるように斜めに背中を斬る。

すると痛みが全身に走った男は剣を片方落とす。

反撃されないように落ちた剣を踏んで、まだ剣を持っていた右の甲を突き刺すと呻き声を発して、最後の武器も落とした。

血の量は背中ほど多くはないが、もはや何かを持っている余裕は彼にはない。

フリートは最後に彼のみぞおちに足を入れると、勢いよく飛ばし、木に当たるとそのまま動かなくなってしまった。

そしてそこで一息を入れる。

ロカセナやトルの方を見ると、既に終わっており、彼らの傍の木には血が飛び散っていた。トルは息が上がりながらも、苦しい顔でウオーハンマーを握りしめ、両足から出血をしている男を見下ろしている。

そしてフリートは、ごくりと唾を飲みながら、頬に血が付いたロカセナの顔を見た。

無表情であった。

「大丈夫、殺してはいないよ。ただ早く処置しないと、出欠多量は目に見えているかな」

ロカセナが相手をした男の左腕は、真つ二つとはいなくても半分近く斬られていて、そこから血が流れ出していた。微かに腕が動いていることから、生きてはいるだろう。

ちらつとロカセナはフリートの気を失っている相手を眺める。

「……彼、幸運だったね。モンスター相手なら、鬼のように還しているけど、人間相手には甘い男に相手で」

フリートのことなど見向きもせず、一瞬で終わってしまった攻防を見て、立ちすくんでいるレイリィに向かってロカセナは歩いていく。彼女はとっさに逃げようとしたが、ロカセナが投げたナイフが腿に刺さり倒れこんだ。おそらく即効性の痺れ薬が塗られたナイフが刺さったのだろう。

「ねえ、知っているかい？ 世の中はもつとどろどろしているんだよ。モンスターだけがすべて悪いものというわけではない。そんな

可愛い分類の仕方だけなら——世界はもつと穏やかなはずだ」

そしてある程度レリイに近づいたところで、返り血を浴びた口力セナは冷たい表情で振り返った。

「フリート、いつまで甘つちよろいこと言っているの。敵だと思つたら殺^やらなきゃ、殺^やられるのはこっちだよ。そんなので、誰かを守れると思っているの？」

俯いたまま、何も言い返せなかった。

それはある意味正論であり、フリートが悩んでいる一つの部分でもあったから。

10、更なる襲撃（1）

何も言い返さないフリートを一瞥したロカセナは、倒れているレリイを無理矢理起こした。そして両腕を後ろに回して動きにくくなつた状態で静かに声を出す。

「ギュルヴィ団のアジトに、リデイスちゃんはいるんだよね？」

言葉は優しいが、声色は低く、フリートでさえも怖いと思った。今までよく一緒にいたが、これほど怒っているロカセナは見たことがない。

今までなくて、今あること。それは――。

――リデイスが関係しているからか？

リデイスと一緒に楽しそうに乗馬をしていた姿が思い出される。だが同時に胸の奥に何かが刺さつた。

一方、レリイは何も答えず、黙秘を貫いている。ここで話をしたら、スパイとしての面目も丸潰れだろう。圧倒的な不利の状況でありながら、ロカセナを睨み付けていた。だが彼はそれを不愉快とも思わず、むしろ溜息を吐いた。

「こつちも時間が惜しいから早く答えて欲しいんだけど。その方が双方ともに苦しまなくてすむよ」

口を開かない彼女の顎を持ち、フリートたちがいる方へと向けさせた。

「僕と相手をした男の人ね、適切な処置をしなければ、数時間も絶たずに出血多量で死ぬよ」

レリイの眉が微かに動く。

「リデイスちゃんがいる場所を教えてくださいれば、君を解放してあげよう。そうすれば、どこかの医者に行くなり、自分で処置するなりするだろう」

「――そんな取引に私が乗ると思うのか」

「乗るよ。だって君たち、恋人同士だろう」

ロカセナが躊躇いもせずに言い切った内容に、レリイの表情は大きく歪んだ。

「何を理由にそんな馬鹿なことを」

「彼は僕と戦っているときも、君のことを常に気にかけていた。そして僕が左腕を斬ったとき、君は小さな悲鳴を上げただろう。スパイたるもの、そんなことに感情を入れてはいけない。けれど、声を漏らしたのは、そういう関係だからだろう？」

トルは目を大きく見開いて、ロカセナを凝視した。フリートでさえ、驚きで何も言葉を発することができない。

数分も攻防はしていなかったはずなのに、一瞬でその二人の関係を見切ったロカセナ。そして彼から紡がれる言葉は、剣術以上に鋭い刃を持っていた。

「ギョルヴィ団がどういう団体かは詳しくわからないけど、ずっと勢力を誇っているということは、内部規律が厳しいからだと思う。そんなところに任務を失敗して戻ったら、君はどうなるかな」

容赦なく追いつめる言葉。

やがてレリイの心は路地裏に追い込まれた。

「さあ、どうする？ 彼を見殺しにする？ それとも僕たちに情報を教えてくれる？ 命と団への大儀、どっちを大切にする？」

その台詞を微笑みながら、ロカセナは言つてのけたのだ。その表情を見て、背筋に悪寒が走った。

そしてレリイの目から一筋の涙が流れ、重い口を開いた。

「——西の方角にある、かつて集落があった場所でもっとも大きな屋敷に娘はいる。まだ何も危害は加えていない。要求を飲めば、すぐに返すつもりだ。こっちだってミスガラム王国相手までは敵には回したくない」

「それは賢明な判断だよ。欲しいのは領主に代々伝わる魔宝珠だけ？」

「そうだ。ヘイム国で火の加護がより強いわけは、この国にいる領主がその魔宝珠を持っているからだ。それを独り占めしてもいいの

か。加護を受け切れていない、領民は大勢いるんだぞ!？」

裏変えった声を出しているレリイに対して、目を細めて眺めている。そして不意にロカセナの表情が曇った気がした。

「加護なんて、すべての人が等しく受けられると思っているの？」

——フリート」

「な、何だ？」

急に呼びかけられ、我に戻って答える。ロカセナはいつも見せる含みのない微笑みを向けてきた。

「適当なガーゼとか包帯だけ置いて、リデイスちゃんを助けに行こう。もう彼女らは交戦する気はないようだ」

「わかった、お前がそう言うのなら」

ロカセナが指示することはほとんど間違っていない。例え相手側が刃向かうようなら、次こそ彼は容赦なく剣を振るう。それをするか否かの瀬戸際が、今なのだ。

いつも腰に付けて持ち歩いている鞆から止血用の布やガーゼ等を乾いた地面に転がす。そしてフリートとトルは殺気がなくなったロカセナの元に歩み寄った。

「トル、この人が言っていた集落までどれくらい？」

「たぶんあそこの集落だとすると、徒歩なら昼半ばから夕方くらいに着くと思う」

「その距離だとするのなら、スルト領主に報告する暇はなさそうだね。そのまま向かうけどいいかな、フリート？」

「ああ。俺たちは取引じゃなくて、奪還が目的だからな」

力強い言葉で返すと、二人もしっかりと頷いてくれる。

そして戦闘跡をちらりとだけ見ると、三人はその場から走り去った。

三人が離れたのを見たレリイは躓きながらも、止血用の布を拾い上げて、彼の元へ泣きながら駆け寄った。

* * *

その人は悠然と背丈の低い森の中を歩いていった。フードを被っているため、顔はわからないが、背の高さや見え隠れする体つきから、男だと推測できる。

腰には湾曲した剣も携えており、血が幾重にも乾いた鞘などから、相当の修羅場を潜ったものだろう。

一見、無防備な男に見えるが、実は隙なく動いているため、不意を突くのは難しい。

「まったく、つまらないことを押し付けてくれたな」

飄々と言葉を発した男の手には一枚の紙切れが握られている。文字数は少なく、何かが簡潔に書かれていた。

「少しでも骨太な奴がいれば楽しいんだが。所詮、ただの団体、あまり期待はできねえ。早く終わらすか」

葉の間から漏れた光に対して、眩しそうに眼を細める。

そして一言呟いた。

「しかし——どっちに進めばいいんだっけ？」

* * *

あの時の出来事は、リデイスにとって夢なのか現実なのか、把握できない状態の時に起こった。

フリートたちが朝食に行った後に侍女がやってきて、為すがままに服を着替えさせられた。汗が染みこんでいて気持ち悪かったため、とても有り難いことだった。いつも着ている服から、ゆつたりとした白色の短めのワンピースに着替えさせられる。意識がおぼろげな中、汗も拭いてもらっていた。

しかし突然、思考が鈍っていたリデイスでさえもわかる、殺氣を感じた。その侍女が冷たい目で見下ろしていたのだ。

それによって少しだけ覚醒した脳は、ドアから現れた二人組の男の存在に即座に反応した。侍女を横に払い、近くにあった愛用の短^ダ剣を手に取り応戦した。

だが熱が出て、体力が減少している状態、まともなやりとりなどできず、すぐに肩を刺され、動きが鈍くなった。

それと同時に男は侍女にまで手を出そうとした。彼女の視線は気になりはしたが、明らかにリデイスを狙った行為の上で、他の誰かが犠牲になるのは我慢ならなかった。

リデイスが抵抗をやめる意志表示として短剣を投げ飛ばすと、男に拳を入れられて、再び意識を失ったのだ。

そして微睡みの中、またあの場にリデイスは立っていた。地面は芝生であるが、他が霧で見えない、不思議な空間――。

しばらく呆然と立っていると、今度はあの女性から近づいてきた。ただ相変わらず、霧にかかって女性の顔や全身は見えない。

「驚きました。またここに来るとは。貴女は夢と現の間を行き来している状態なのでしょうね」

「そうだと思います。起きているのもままならない状態ですし……」

「目覚めたら、さらに大変なことが貴女の身に起こっているでしょう。今は精神だけでも休むといいわ」

それだけ言うと女性はリデイスに背中を向けようとしたが、慌てて呼び止めた。

「あの、さっき言いかけた、根本的なものとは何ですか!？」

「それは言えません。貴女がわかったときに、私もようやく言えるようになるのです」

意味が分からない言葉に首を傾げる。それを見た女性は人差し指をそつと唇にあてた。

「還術の仕方はいったい何種類あると思います？」

「二種類ですよ。武器などの物体を召還したものをを用いて還術すること、そして精霊召還を用いた還術」

「ええ、その通りよ、模範解答としては。なら——還術士ならば、通常の第一段階だけでは物足りないのも実感しているわよね？」

「……はい」

船上で遭遇したモンスターに対して、まったく相手にされなかったが、あの女性は一瞬で還したことを思い出していた。精霊を召喚できるということは、かなり広範囲で攻撃ができ、還すことができる。その上、攻撃力も高い。還術士として将来生活していきたいのなら、精霊まで召喚できればかなり重宝されるだろう。しかしリデイスの還術の師匠であり、ミスガルド城でも専門を務めたこともある、ファヴニールでさえ精霊召喚はできない。それほどできる人が限られているのだ。

「けど誰でも精霊召喚ができるとは思っていません。だから槍だけでも多くのモンスターを還せるよう、頑張ります」

精一杯の笑いながら、女性に言い返した。すると女性は口元に笑みを浮かべた。

「そう聞いて安心しました。貴女のその気高さをいつまでもお持ちなさい。きつといつかくる、“その時”まで——」

前回同様女性の姿が靄に隠され始める。また言われた意味深な内容の意味を急いで聞き返す。

「どうしてもつた言い方をするんですか！　いつかって、

“その時”　っていつですか!？」

「残念ながら、もう夢の中では会わないでしょう。次に会うときはきつと終わりが始まるとき——」

脳内にその言葉が響きながら、視界は暗転した。

目が覚めるのと同時に言いようも激痛に襲われた。その痛みの先

を見ると、右肩の部分が赤く染められている。

——肩、突きを入れられたんだっけ。

両手は後ろできつく縄で縛られており、横になった状態だったらしい。おぼろげな視界がだんだんと晴れてくると、誰かが覗き込んできていた。

「やっと起きたか、ミスガルム城の小娘」

「誰……」

痛みと体のだるさによって、出た言葉はかすれた声であった。すると男がリデイスの顔を持って無理矢理起き上がらせる。

「お前は人質だ。しばらく大人しくしている」

「人質って……だから何の話なの」

「わからないのなら、それでいい。気が向いたら肩の治療でもしてやる」

そう言いながら男は赤く染まった肩を触りながら、横に再び倒した。

「……痛っ！」

「静かにしている。それか何か、誘っているのか？」

今度は舐め回すように覗いてくる。肌蹴たワンピースの間をにやにやしながら見ていた。

そしてリデイスの顔に目を近づける。瞳を閉じながら、今できる範囲で拒絶の反応を示す。その様子をむしろ楽しそうに見ながら耳元で囁かれた。

「意外にいい体をしてそうだな。あとで落ち着いたらゆっくり遊んでやるよ」

それだけ言うと男は立ち上がり、上からリデイスのことを見下ろした。褐色の肌の男、口元に光るピアスが目にいく。

「それじゃあ、またな」

不用心にも背中を見せながら、彼は消えていった。

気配が消えると、大きく息を吐く。余程緊張をしていたのだろう、胸の動悸がなかなか納まらなかった。

これからいつたいどうなるのだろうかという、漠然とした不安がリデイスの脳内を埋め尽くす。だが一方で、口うるさい黒髪の青年と、微笑んでいる銀髪の青年が思い浮かんだ。

——どうにかして、考えないと。この状況を打開する最善を。

しかし熱による体力の減少が思った以上に激しく、リデイスはすぐに眠りについてしまった。

* * *

泣きながらレリイは男たちの血を止めていた。フリートが相手をした男はしばらく放っておいても大丈夫そうであったが、ロカセナが相手をしていた男、つまりレリイの想い人は、一番危険な状態であった。

容赦のない言葉によって、心まですたずたに切り裂かれていたが、今、自分が参ってしまったえば、彼の命はない。

「ちゃんとした医者に診てもらわなければ。けどどうやって……」
心の中での嘆きを呟いていると、誰かが歩いてくる気配がした。もしかしたら反逆の罪を犯したレリイたちを追ってきた人たちかもしれない。わずかながらのナイフを指の間にセットして、最後まであがこうと決める。

だが現れた人物を見ると、思わずその容姿の美しさに見とれてしまった。

「容赦なくやられたようね」

「あ、あの、誰か呼んできてくれませんか!? 彼を助けたいんです……」

明らかに追手ではない女性に、藁をもすがる思いで呼びかける。女性は町の方を見ながら、ふっと笑った。

「しばらくしないうちに傭兵たちが来るわ。そこで助かるかは、貴

女の言葉の巧みさつて所かしら。まあ間違つても貴女たちの所属先や誰に斬られたかを言つたら、終わるでしょうね」

そう言いながら、女性はレリイの脇を通り過ぎた。

「ご忠告ありがとうございます。……あの、貴女は誰ですか？」

紺色の髪を揺らしながら翻し、妖艶な笑みを浮かべた。

「これから大陸に起こるすべてのことを見届ける者よ」

11、更なる襲撃（2）

レリイに言われた集落まではほとんど言葉をかわさずに、青年たち三人は走り抜けていた。途中でトルが持ってきた携帯用の食事を取りながら、とにかく進んでいる。

ロカセナはさっきの戦闘下での怒りを滲みだしつつ、冷酷なことをするような雰囲気はまったく発しておらず、眉間にしわを寄せているフリートを宥めているといった、いつもの状態に戻っていた。

やがて森から出ると、背丈の高い草原が広がっていた。それをかき分けながら進んでいく。

「今ではここを通る人なんて滅多にいないからな、荒れているのかもしれないのさ」

「昔は通っていたのか？」

「かつて集落があつたつて言っていただろう。その通りで、十年前まではそれなりの大きさの集落だったのさ。けど今じゃ珍しいけど、モンスターがそこに現れて、荒らしていったらしい。その上、モンスターが住み着くものだから、誰も寄りつかなくなったのさ」

「モンスター、今はいないのか」

「いないよ。代わりに悪さをする人間は増えたけどな」

苦笑いをしながら、背丈より少し低い草をかき分け続ける。

さらりとトルから出された言葉に、思考の片隅に残っているものが再び出てきた。

——ミスガラム領よりムスヘイム領の方がモンスターは少ないが、悪事を働く人間は多い。これは偶然か。それとも関連があるのだろうか？

やがて草が刈り取られた開けた場所に辿り着いた。目の前に広がるのは鬱蒼とした雰囲気を漂わす、雨風に曝されて朽ちている家が並んでいる。普通なら誰もこんなところに近寄りたくはない。

ぱっと見たが、大きな屋敷らしき建物は見当たらない。大きいと

いうことだから町で一番重要なはずだ。警戒の意味から考えても、もう少し奥の方にあるはずだろう。

「お前たち、どうやって救出するつもりだ？」

町を眺めつつ腕を組みながら、仁王立ちのトルは怪訝な表情をしていた。

「さすがに正面はないよな。リデイスが人質として捕られているんだから」

「そんなの当たり前だ。裏側から侵入するっていうのが定石だが、そんな隙を与えてくれるか疑問だな」

「なんだ、ここまで来て手詰まりかよ」

「悪かったな。日が暮れてから事を起こすくらいしか思いつかない」
二人で溜息を吐きながら、肩をがっくりとさせる。もう少しリデイスがいる場所に関して情報があれば、考えを巡らすことは可能ではあるが、今の状態ではなかなか難しい。

「……すぐに実行に移せるのは古典的なやり方くらいじゃない？」
ロカセナがフリートに向かってある物を投げつける。それを片手で受け取った。

「リデイスちゃんがいるところくらい、検討は付けておこうか。一番大きな屋敷の居間か、寝室か。それとも地下に部屋があったら、そこも考えられるね」

「あんまり地下に部屋を作るとか聞いたことがないな。どこかの寝室とか倉庫じゃないか？」

トルが答えると、彼に対してもある物を投げる。

「囲まれたらどうする？」

目を細めながらフリートに視線やった。それに対して、力強く頷き返す。

「リデイスを奪還したら、とにかく強行突破だ」

はつきりと言葉に想いを込めると、二人も笑みを浮かべながら頷き返した。

そして集落の様子を少し近づいて見ようと思ったとき——突然視

界に噴煙が映ったのだ。

顔を見合わせた三人は、その現場まで急行した。

近くにいけばより鮮明にわかるが、町中に黒々とした煙が昇っており、焦げ臭さが一帯に充満している。顔を腕で覆いながら町の中へと注意深く入っていく。思わぬ展開にフリートは悪態を吐いた。
「どうなっているんだ、いったい！」

「領主が奇襲かけそうに見えなかったからなあ。ギウルヴィ団を取り締まりたかった、町の自警団の仕業とか？」

そう口カセナは推測したが、自警団なら大量に人を連れているはずだ。踏み荒らされていない地面や静かさからは、それを無言で否定しているように見える。

「確かに自警団は取り締まりたがっているけど、行動に移そうっていう話は聞いたことがないぞ。何かするなら、俺たち傭兵にも声をかけて駆り出していくはずだ」

さらに口カセナの推測を覆すような発言をしていく。

誰がやったかは大切なことであるが、それよりもリデイスの身をフリートは案じていた。熱を出し、怪我もしている、そしておそらく縄で縛られている状態では、何もできない。もしかしたら煙を吸ってしまふといった、危険な状況下にもあるかもしれないかった。

煙の向こう側から誰かが走りよってくる音が聞こえたため、大通りから足早に家と家の間の道に滑り込んだ。そして息を殺しながら、様子を眺める。すぐに黒色のバンダナをした男たちが、その場で落ち合った。筋肉質の男は腰が低そうな男に強い口調で言い放つ。

「火事はどこからだ！」

「それがわからないんです。火があつたからどうにか消そうと思つたら消えて、その代わりに他の場所に火がついていて……。けど煙は残っています。どっちにしても、ここにいたら危ないですよ、移動した方がいいです！」

「火がついたり、消えたりだと？ 誰かが火の精霊でも使っているのか？ おい、落ち着け。誰かが火を放っているのなら、これは何かの罠かもしれない。俺たちが慌てているのを、高みの見物でもしている野郎がいるかもしれない。とりあえず、お前は煙に関して呼びかけつつ、賊を捜せ。どこかにいるはずだ！」

「わ、わかりました！」

三人の警戒レベルが最高潮になる。この火事はフリートたちのせいではないが、見知らぬ青年たちを見つければ、一瞬のうちに囲みこんでくる可能性が大いにあった。

しかし、一方で混乱の状況下というのは、人々の視界を狭くしやすい。フリートは小さな声でぼそつと呟く。

「この火事がいつまで続くかわからない。だが逆に考えれば好機だ。急いで事を終わらそう」

「そうだね。やり方が違うにしろ、似たようなことはやろうと思っ
ていたんだから」

ロカセナは手元にあった黒色の球状のものを握りしめる。それは煙幕の元であり、火を付ければ発生する物だった。

「とにかく大きい屋敷だ、行くぞ」

フリートを先頭として、建物の合間を縫いながら、探し始めた。

だがあまり時間も経たずに目的の屋敷はすぐわかった。そこだけ煙が上がっておらず、散らばっていたギルヴィ団員が集まっていたからだ。人数にして二十人くらいだろうか。強面の男たちが大半を占めており、迂闊には近づけない様子である。

そつと様子を覗くと、その屋敷のドアが開き、口にピアスを刺した青年が出てきた。そしてその後ろから出てきた男は、目を布で覆われ、猿ぐつわを噛まされた、金色の髪の少女を連れているのだ。フリートは思わず声を発したい衝撃に追い込まれたが、ぐつと押し殺した。

右肩の白色の布に染まる赤い血が痛々しい。そして立つのも辛いはずなのに、無理矢理立たされている。どれだけ疲労が溜まってい

るのか、考えたくはなかった。その上、おそらく後々に場所を特定されたくないため目隠しまでもされており、それは余計に彼女の心理状態が圧迫されることを意味している。

「団長、もうこの屋敷しか残っていません！」

ぼろぼろの服を着た少年が、ピアスの男に向けて悲鳴に近い声を出す。

「落ち着けて指示出したらどう！ いいか、はめられたんだよ。ここでお前らがこの家に避難すればこんな適当な火事じゃなくて、本気で燃やしてくる。そうすれば一網打尽だろう！ ——畜生、スルトのやつ、人質まで殺す気か！」

吐き捨てる言葉を聞いて眉をひそめる。スルトがフリートたちより先に、ここに攻め入るよう指示を出したのだろうか。しかも精霊を操る人を使って。

「俺が知っている中の傭兵では、精霊を召還するやつはいるけど、ここまで使いこなせるのは聞いたことがないぞ」

「じゃあ、いったい誰だ。そいつが味方が敵なのかわからないと、動けないぞ」

「フリート、そう焦らないで。まだ様子を見る段階——」

頭に血が上っているフリートを落ち着かせようとしたとき、ロカセナは大きく目を見開いた。何かを凝視しており、その視線の先をフリートとトルは追った。

建物の間から、背の高いフードを被った男が現れ、ギウルヴィ団が集まっている中へゆつくりと近づいてくるのだ。

もちろんギウルヴィ団はその男の存在に気づくと、武器を取りだし、警戒心を剥き出しにした。

「何者だ！？」

「別に名乗っても意味ねえだろう」

威圧感たっぷりに言ったが、逆に軽い口調で返されて、ついむっとした顔をする。だが団員の表情はすぐに凍り付く。

「——すぐ死ぬ奴には」

次の瞬間、男が腰にあった二本の剣のうち、湾曲している長い剣を一本抜いていた。いや、正確に言えば抜いた瞬間が見えなく、気が付けば剣が現れたのだ。

そして男の近くにいたギルヴィ団が十人ほど所々血を噴き出しながら、為す術もなく地面に伏した。

一瞬で――見るに堪えない惨状と変わる。

男の口元には薄らと笑みを浮かべながら、そのまま一步一步屋敷の前にいる団長へと近づく。そしてその先にはリデイスも――。

「待て、フリート！」

その場から飛び出した黒髪の青年に向かって、ロカセナは音量を気にせず止めに入ったが、まったく気にも留めなかった。

表情がかなり険しく、容赦なく殺気を発しているせいか、ギルヴィ団でさえ道を開けてくれる。その間に剣を召還して回り込み、リデイスたちのすぐ目の前で歩いてくる男に対して剣を構えた。

フードの男の後には、動かなくなったギルヴィ団員が多数転がっていた。男はフリートを見るなり首を傾げる。

「なんだ、お前？ その格好、ここの奴じゃねえな」

「何を目的としているかわからないが、ここを通すわけにはいいかない！」

久々にフリートの声を聞いたからか、リデイスは猿ぐつわを噛まされた状態で、言葉にならない声を発する。それを聞いて、フリートも少しだけ安心した。

フードの男はリデイスとフリートを見比べると、ふうんと納得したような表情を浮かべた。

「お前、その嬢ちゃんの連れってわけか」

「だったらどうした！」

「それで、その剣に付いている地のマークからミスガルの騎士つてところが考えられるな。大陸でも有名な騎士団員の腕は――どの程度だ」

言い終わるや否や、男の体と気配が一瞬で消えた。

瞬間、慄いたが、一息吐くと、すぐに剣を自分の右肩を庇うように持ち上げる。

それと同じタイミングで、見えなかった刃が突然現れ、フリートの剣と交錯した。

男の口元が歪む。その隙を逃さず、フリートは一気に振り払った。切っ先が当たったのか、フードが破れ、男が跳び退いた時に、顔が露わになる。

くすんだ茶色の短髪に、精悍な顔つきに鋭い目。右頬には大きな切り傷があった。

男はフリートから離れると警戒をしながら、睨み付ける。

「一振りだけだったが、いい判断をするんだな。だが——」

口を大きく釣り上げた。

「その程度か」

冷たく言葉を吐かれた瞬間、左肩に衝撃が走った。

見ればぱつくりと左肩付近から傷口が開き、血が流れ始めているのだ。あの瞬間的な攻防の間に斬られていたらしいが、まったく斬撃が見えなかった。

あまりの激痛に膝を付き、剣を地面に刺しながら右手で柄を握りしめる。

苦々しい表情で斬りつけた男に、鋭い視線を突きつけたが、まったく相手にせず、フリートの横を通り過ぎた。

「おい、待てよ……！」

「うるせえな。たいして強くない奴が、騒ぐな。——消えろ」

覚悟を決めて最期の防御をしようとしたが、突然男は血相を変え、背を向けて、剣を抜いた。その瞬間、甲高い音がし、何かが地面に転がったのだ。

視界に入ったのは水色のリボン——先端には鋭く研がれた槍の先。……目も見えねえ、口も聞けねえ状態で、召還して、的確に攻撃するとは、なかなかやるじゃねえか、嬢ちゃん」

男の表情が嬉しそうににやけていた。不意打ちを仕掛けた少女は

肩で呼吸をしながら、うずくまっている。

「おい、死にたくなかったら、その嬢ちゃんの顔を見せろ」

隣にいたギルヴィ団の団長は震える手でその指示に従った。猿ぐつわが外れると大きく呼吸をし始め、目隠しを取られると、リデイスは目を細めながら、フリートの横にいる男をキツイ視線で見る。

「何のつもりなの、あなた……」

「勇ましい嬢ちゃんもいいねえって思っただけさ。顔もなかなかいいじゃねえか。まあ基本的には俺は女を殺したり、遊ぶ趣味はねえから、安心しろ。男とか、自ら攻撃を仕掛けてくるやつは別——」

「彼に手を出さないで！」

どこにそんな体力があるのかわからないほどの声をリデイスは発した。フリートは目を丸くしながら、今にも倒れそうな少女に視線が向く。

「これくらいの能力の男をどうして庇う？」

「……私が不甲斐なかったから。私がここにいなかったら、彼が傷つくこともなかったからよ！」

持てる力の声を使って叫ぶ姿が、フリートの心に突き刺さる。だが一方で、にやにやしている男の表情が気になった。

「そういえば嬢ちゃん、ここじゃ見ねえ髪と目の色をしているな。そいつと一緒にミスガラムから来たってことか。なあ、嬢ちゃんを人質に取れば、城くらい脅せるか？」

「それは無理な話よ……。私はただの町娘の貴族。脅せるなんて……」

「そうか。なら、ここの領主くらいは脅せるか？」

男がリデイスに向かって近づいてくる。フリートはなんとか体を持ち上げようとするが、リデイスが目で制してきた。手を出すな、自分でどうにかすると言っているようだ。その目力に圧倒されて、何も返す言葉がない。

少し高い位置にいるリデイスの前に近づくと、男はそっと彼女の顔を触った。リデイスの顔が若干強ばる。

「オレさあ、この団長が領主から奪ったかもしれないねえものが欲しくて来たんだ。だがな、様子を見てみると、どうやらそれはまだ奪っていいえようでな。もし持っていたら、こんな火事なんか一瞬で消せるはずだ。つまりまだ領主が持っているってことさ」

それはつまりギルヴィ団とこの男が求めるものは、同じと言うことだろうか。

「他の領域の女に万が一のことがあったら、さすがにあいつも慌てるだろうな。——いいだろう、お前の連れの命を取らない代わりに、お前を借りる。大人しくしているよ」

「えっ……」

男が口笛を吹くと、一匹の馬が勢いよく駆け寄ってきた。倒れている団員たちも遠慮なく踏んでいく。

やがて男の前で止まると、体力も限界に近いリデイスを軽々と持ち上げて、馬に乗り込ませ、自分も飛び乗った。

そして思い出したように団長に笑みを浮かべた。

「ご苦労さん。俺がかわりに領主が持っている火の精霊の大元が封印されている、火の魔宝珠を奪うから、もういいよ」

「何様の——」

言葉が途中で途切れた男の左胸には一本のナイフが刺さった。そして驚いた顔のままで、仰向けに倒れこんだ。

目の前で起こった出来事に対し、リデイスが悲鳴を上げたのと同じ時に、頬に傷がある男は彼女を連れ去った。

12、更なる襲撃（3）

リデイスが連れ去られることに対し、ただ眺めているだけしかできなかつた。まるで見えない壁に身体ともに跳ね返されたような気分である。相棒たちが駆け寄って、話しかけてくるまで、その状態は続いていた。

「フリート、大丈夫か!？」

ずっと息を潜めていたロカセナとトルは周りに警戒をしつつも、フリートに近づいてきてくれた。それと同時にふわふわとした浮き足だった状態から現実に戻り、左肩付近からくる激痛に、呻き声を上げる。

その部分にロカセナは最後に持っていたタオルを押し当てた。赤々とした血は広がるが、幸いにも地面に血が落ちるほどの量ではない。すぐ横で深々と溜息を吐かれる。

「……まったくこれくらいで済んだのが奇跡だ。何を考えているんだよ」

「悪い……。あいつがリデイスに危害を加えるんじゃないかって思ってたさ。俺たちは護衛だ。護衛対象に危害があつたら、駄目だろう」

「けど逆に護衛対象に守られたじゃないか」

トルが縛るものをロカセナに差し出すと有り難く受け取り、フリートの肩にタオルを当てたまま縛り付けた。

「どうにかしたかったという、気持ちわかる。でも、気づいていただろう、明らかな実力差を」

その言葉はフリートの胸に深々と突き刺さった。あのときは興奮していたため冷静に判断する余裕はなかったが、今思えば、なんと無謀なことしたのだろうと気づく。それでも成し遂げなければならなかったことがあった。

「……例えば実力差があっても、リデイスは助け出す」

「もちろんだよ。ただの人質というわけだったら、彼の目的が達成

すれば解放してくれるかもしれない。けど……それはあくまで可能性の一つだから、やっぱりこちらから助け出すことを視野に入れなくちゃね」

心の奥を見透かされたような濃い茶色の瞳を向けられたが、フリートはそこから視線を逸らす。そしてゆっくりと立ち上がった。

「とにかく今は追うぞ。あいつの話が本当なら、領主の元に向かっているはずだ」

「歩きで？ 絶対に追いつけないよ」

ロカセナの容赦のない指摘に口を噤む。

一方でトルは武器を手にしつつ、周りの警戒に当たっていた。だが残されたギルヴィ団員たちは、既に心臓が止まってしまった団長の周りに集まり、沈痛な表情をしている。それに注目しつつ、トルがさりげなく囁く。

「とりあえずさ、面倒なことになる前に、ここから逃げるのが先じゃないか」

「トルの言うとおりだね。フリート、一人で走れる？」

フリートはこくりと頷いた。

「じゃあトル、先頭に行つて。僕が後ろに付くから」

「おうよ。しっかり付いて来いよ」

じりじりと後ろに下がり、相手がこちら側の様子に気づいていないと判断すると、トルはフリートたちに背を向けて走り始めた。フリートたちもその後をすぐに着いていく。

しばらく茫然自失をしているギルヴィ団員であったが、余所者が逃げ出したことに気づき、何人かが職業病なのか反射的に追いかけてきた。

トルが適当なところで路地に入ったりして、撒こうとしているが、彼らの追跡はなかなか衰えない。あまり長時間は全速力で走るのはきついと思っていた矢先、目の前に突然一人の女性が現れたのだ。トルは胡乱な目でその人物を見たが、フリートとロカセナは目を丸くしていた。彼女の手には二本の手綱が握られており、その先に

は馬が繋がっている。

特に気にも留めずに彼女の横を素通りしようとしたトルを、フリートは手を引いて無理矢理制止させた。そして女性に話しかける。

「どうしてこんなところにいるんだ」

紺色の髪の女性は目を細めながら、その場に合わない、ふんわりとしたスカートを着ていた。

「体力も精神力も削られている状態で召還をしたあの子に興味があるだけよ。一応、私の中での基準は達したしね」

彼女が言う？あの子？とはリデイスのことだろうか。

「——私は敵でも味方でもない。世界が変革するのが、果たして私が思い描いた予言通りなのか、知りたいだけよ」

「……予言者だったのか」

「そうとも言えるわね」

リデイスが探していた予言者の肩書きを持つもの。その中でも実力は大小あるが、おそらく彼女は雰囲気からして——本物である。

「それで予言者がいつたい何のようだ。俺たち、急いでいるんだが」

「今さっき、連れ去られたあの子の下に行きたい。私の予言が正しければ、これから何かが起こるはずだから。けれど残念ながら、私は乗馬ができないのよ」

「つまり相乗りをお願いしているわけか。しかしその馬、どこで入手した？」

「そこら辺に大量に繋がれていた馬たちよ。どうせ半分以上いなくなっただんでしよう。使っても問題はないわ」

意味を深く取れば、さぞ恐ろしいことを、女性は淡々と言っていた。確かに馬があれば格段と速さは上がるため、今すぐにでも使いたい衝動に駆られる。だが正直言って、彼女に対して警戒心が解けないもの確かであった。

そんな考えとは裏腹に、ギルヴィ団の団員の一人がフリートたちを見つけたと叫んだ。

相棒に視線を合わせると、固い表情ではあったが頷いてくれた。

考える時間は——ない。

「いいだろう、その要求を呑もう。だがその前に、名前くらい教えろ」

女性はにやりと口元に笑みを浮かべた。

「話が早くて助かるわ、フリート・シグムンド。私はメリッグ・グナー。この貸しは船上でモンスターを追い払ったもので、相殺というところではよろしいかしら？」

「いいだろう。貸し借りはこれでなしだ」

妖艶な笑みを作り出すメリッグは、紺色の髪を揺らしながら、颯爽と近づき、手綱をフリートと口力セナに手渡した。

メリッグが馬に乗り慣れていないのは事実のようで、危なっかしく横向きに座る彼女を抱える形でフリートは馬を走らせている。その前には口力セナとトルが先頭を切って道を導いていた。転びそうになるのを必死に耐えて、馬をひたすら前に進める。

「さすが慣れているわね、王国の騎士さんは」

「当たり前だ。有事の際には必要となる技術だ」

「彼女にもやってあげたのかしら？ いえ、むしろ銀髪の彼が彼女を支えたようね」

まるですべてを見ていたような言い方に、怪訝な表情でフリートは微笑んでいるメリッグを見る。

「……メリッグはいつから俺たちのことを尾行していたんだ？」

「あら、私は推論を言っただけよ」

「なっ……！」

「私を支える手、慣れていないわ。女性に対して上手く接することができていない証拠よ」

「そんなことを言われる筋合いはない！」

そうはつきり言い切ると、口を尖らせながら若干速度を上げて、距離が開いた口力セナたちの馬へと近づく。一方でメリッグはくす

くすと笑いながら、楽しんでいた。

「わかりやすい人ね。武官に転身して正解だったのじゃない？ 文官なら、すぐに他の貴族に弱みを握られて、終わりね」

その言葉を聞き、フリートは警戒心を露わにした。

「……どこまで知っている」

「だから言っただでしょう、少しばかり今時の情勢には詳しいだけの予言者よ。別に驚くことはないでしょう、城内では周知の事実なんですから」

その話題について出されると、フリートとしては苦い思い出が蘇ってしまふ。確かに城内ではこの事実を知っている人は多く、転身直後に口止めはしたが、すでに噂は広まっていた。特に文官側の広がりようが尋常なく広まっており、もはや意図的に誰かが広めたとは思えなかったときもある。

「元々剣術の才能はあったから、文官から武官に転身したのは、そこまで不思議なことではなかったけど、きっかけは何だったのかしら？」

「話す必要のないことは言わない。あまりお喋りをし過ぎると、馬から降ろすぞ」

今までさけられて、何も語られなかった相手が、掌を返したように質問攻めにしてくる。これはかなり気分のいいものではなかった。メリッグは視線を合わせようとしなくなったフリートを見て、またもくすつと笑いながら、ようやく進行方向に向いた。

——調子が狂う。簡単に話術に乗せられて。

肩をすくめながら思ったことは、メリッグと接した際の率直な感想であつた。

背筋がぞつとするぐらい、恐ろしすぎる剣術を使いこなす男に無理矢理連れられて、リデイスは度々消えゆく意識を呼び起こしながら、男の様子を見ようとした。

ばさばさの髪は鳶色、ロープの隙間から見え隠れする服装は至って軽装であり、これを脱いでしまえば日焼けした引き締まった筋肉質の肌が露わになるだろう。防御に関しては考慮していないが、その代わり、非常に動きやすいと言ったところか。

リデイスは直接見ていないため、どれくらいの速さか見切れなかったが、一瞬のうちで、辺りの臭いが血でいっぱいになったのは、おそらく彼の力によるものだろう。

一方、馬は荒っぽく走らせており、口力セナと共に乗ったような爽快感はまったくない。むしろずり落ちないように、馬にしがみつくのがやっとだ。落とされたら、命の危険さえ感じるほどの速さである。

風景がだんだんと変わっていき、森を横目で見ながら草原を走っていたが、だんだんと荒れていた家が視界に入ってきた。擦り切れた服を着た人たちが、元気がなさそうに歩いている。

その横を通過している間に、男は思い切り手綱をひっぱたくと、さらに勢いよく前進していった。どことなく眉間にしわが寄っているようにも見えた。

やがて、少し開けた場所に出たかと思うと、背の高い人間より大きな塀が目の前に現れ、それに対してむしろ加速していく。

ぶつかると思い、リデイスはとっさに目を閉じて、馬をぎゅっと握りしめた。

次の瞬間、浮き上がったような感覚がし、何かかと思い目を開けると、宙を浮いていたのだ。加速を付けて、塀を飛び越えた後は、重力に従って衝撃と共に降りた。

ある屋敷の敷地内に着いたらしく、綺麗に整えられた庭が広がっている。それを見向きもせず、屋敷の裏側へと周り、徐々に速度を落とす。やがて大きな窓が見えると、シミターを抜き出して、軽く手を動かした。

リデイスが目丸くしたと同時に、その窓は一気に粉々に割れる。そしてその窓の奥には驚愕の顔をしたスルトや、警備をしていた

傭兵たちが数名いたのだ。

馬に乗りながら、男は中へと遠慮なく踏み入れた。

「こんにちは、スルト領主」

「貴様、何者だ！」

敵つい顔をした傭兵が体格に見合う大剣を抜いて叫ぶ。

「用があるのは後ろにいる領主。ちよつと黙っているよ」

男が懷に手を入れ、前に突き出すと、しゃべっていた男が喘ぎながら仰向けに倒れた。喉元には深々と一本のナイフが突き刺さっている。

他の傭兵たちが息を呑むのが空気からでも充分わかった。

緊張気味のスルトは傭兵たちを差し置いて、少しだけ前にでる。

「私がスルトだ。何のようだ。今日は失礼な客が多いようだが」

「ああ、そういや、他の領の女を誘拐されたんだっけ？ よくやるよな、そんな行為。……ちなみにその女、今、オレの人質」

馬にしがみついている状態だったが、無理矢理体を起こされた。リデイスを見たスルトの目には当惑した様子が映し出されている。ずっと喉近くに、男たちを一瞬で葬り去ったナイフを突き刺された鼓動が速くなる。

「まあオレもそいつらと同じ要求を領主さんにしたいわけよ。詳しくは知らないんだけどさ、普通の魔宝珠じゃない、領のための宝珠を持っているんだらう？ オレ、それを奪ってくるよう頼まれていてさ。くれよ、どこかにあるんだらう」

「誰に頼まれて、そんなことを……」

苦々しい顔でスルトは言い捨てる。

「そのうちわかることじゃねえか？ とにかく教えろよ。この女の息の根を止めるなんて、簡単なことだぞ」

唐突に低い声を出しながら、殺気を出す。すぐ傍から感じる、身もすくむような殺気にどうにか耐えていた。

「置いてある場所を教えたら、彼女を解放するか？」

「見つかったら、適当に解放するつもりさ。女を辱める趣味も、斬

り裂く趣味もないからな」

「なら、私と代われ。人質なら私をとればいいではないか！」

「無駄に口が動く男なんて、いらねえよ。体力の極限まで削り取られたやつなら、何もしねえからな」

ナイフがゆっくりと左に動き、リデイスの傷を負っている右肩の部分を超えるように突き入れる。

「……ああっ！」

堪らずか細い喘ぎ声が漏れ出た。それを見たスルトが声を大にする。

「やめろ、彼女には手を出さないんだろう！？」

「気分が変わってきた。交渉によつては考えるさ。別に女に興味もないからな、殺す以外にも人を痛めつける方法なんてたくさんある」

ナイフを抜かれたが、未だに激痛が残っておりぐったりとする。

こんな傷口を抉るようなことを何度もされたら、気が狂いそうだ。

そして男は目を細めながら、スルトに視線を突き刺した。

「話も早く終わらしたいんだけどさ。さあ、どうする？ 領主さん？」

スルトは沈痛な表情のまま、歯をぐつと食いしばっていた。

13、煌く想いを火に込めて(1)

異常は領主の屋敷の敷地内に入った瞬間から、誰でもわかる状況であつた。

屋敷の庭を慌ただしく走る傭兵らしき男や医者らしい人たち。侍女までもが走り回っている。綺麗に整えられていた庭の面影はほとんどなく、無造作に踏み荒らされた様子が広がっていた。

屋敷の手前で馬から降りたフリートたちは急いで領主の部屋と急いだ。

開けっ放しになっている部屋に踏み入れると、一人の男を囲むようにして、筋肉質な男たちが立っていた。

「スルト領主！」

フリートが声を上げると、傭兵たちに囲まれたスルトは顔を上げた。顔は青白く、どことなく絶望感に打ちひしがれているように見える。

「フリート君たちじゃないか……。無事だったのか」

「……リデイスを連れた男がやってきたんですね」

スルトは力なく頷いた。その後ろには見事に粉々に割られた窓があつた。

「どこに行つたか、教えてください。俺たちはリデイスの護衛です」

「その傷はあの男にやられたものか？ そんな状態で相手にできるものなのか」

スルトは赤く染まっている、左肩の布切れに目をやる。その目ざときは逆にフリートにとっては痛いところを突かれることだった。

それでもどうにか言い返そうとしたとき、口力セナにそつと手で制止された。フリートの目に映る彼の瞳は『自分に任せろ』と静かに物語っていた。

「スルト領主、別に僕たちは彼とやり合うつもりはありません。リデイスさんを無事に助け出すだけです。彼女を連れた男と多少接触

しましたが、彼は目的さえ果たせば解放すると言っていました。しかし真か偽かは判断しきれません。万が一のために彼女のもとへと急いだ方が判断しています」

「確かに気が変わりやすい男のようだから、その言葉を鵜呑みにはできないだろう。しかしね、私は直に見ていたが、一瞬で人間の急所を突いて息の根を止める男だぞ。どうやって対処するつもりだ」

「そこら辺は多少なりとも考えがあります。急所を突かれないよう、ある一定の距離や物があれば防ぎれますよ」

そう言いながら、ロカセナは静かに微笑んだ。

「――場所を教えてくださいませんか。ムスヘイム領主に代々伝わり、領全体に加護を与えている火の精霊サラマンダーが宿る？火の魔宝珠？の場所を」

スルトはごくりと唾を飲み込み、立ち上がって自分の机にある一枚の羊皮紙と羽ペンに手を付けた。

ムスヘイム領には、領全体を一望できる大きな山がある。

そこから東西に流れ出る二本の川は、同時に中心都市のヘイム王国を他の領から守られるように流れている川でもあった。

その山はかつて鉱山の発掘作業などのためにいくつもの洞窟が掘られており、多くの人で賑わっていたが、間もなくして掘り尽された宣言された以降は、使われなくなった洞窟がたくさんある。

そういった発掘作業中に発見したのが、ムスヘイム領に加護を与えている源の？火の魔宝珠？なのである。

発見した当初はむき出しの状態であり、色は赤く、まるで宝石のような光沢と美しさを兼ね備えていたらしい。しかしそれにそそれ、興味本意で触れた作業員は一瞬で炎の包まれたのだ。何事かと思ひ他の人も触れると、同様のことが起こった。

人々はその現象に畏怖し、この件に関してかつての領主に相談したところ、偶然にもその場にいた結術士けっしゅしの提案により、火の魔宝珠の周りに結界を張ったのだ。

それ以後、誤って触れてしまうと云った事故はなくなり、その魔宝珠はずっと領を見守り続けていると言う――。

「そんな魔宝珠をどうして、やつは欲しいのでしょうか。触れられないのなら、持って帰ることはできないはずでしょう」

スルトから男が狙っている火の魔宝珠について聞いた直後の感想である。だがそれに反して、彼はまだ渋ったような顔をしていた。

「……持つて帰ることは不可能なことではない。人間や生きたものの手が触れなければいいのだ。ナイフで削る程度ならできるだろう。そして本体から離れた魔宝珠の欠片は威力が損なうため、触れても火傷程度しかなくなるから、持ち運びは可能だ」

「話を聞いていると、俺たちが知っている魔宝珠とは違うのですか？ 欠片だけでも効力はあるのですか？ 普通、魔宝珠は手のひらサイズのものが一般的です。あまりに小さいと召喚はできません」スルトは眉間にしわを寄せたまま答えた。

「私たちが使っている魔宝珠とは違い、直接的な召喚とはあまり違うらしい。すまないが、私もよくわからない立場でな。ただ欠片だけでも渡すなどは言われている。――この一件が終わり、城に戻ったら、魔宝珠に詳しい人物に話を聞くといい。ここまで関わってしまったら、知らないでいる方が辛い立場だろう」

スルトは言い切ると、ソファアの背もたれへと力なく寄りかかった。これ以上、話すことはないと言ったように。

やがてフリートは地図と結界を張る呪文が書かれた紙を握りしめ、屋敷を後にした。

日が落ち始め、少しずつ辺りは茜色に染められていく――。

昼間に活動している者とは別の者が活動を始める時間帯でもある。良識のある女や子供ならば、外にはいつさい出なくなる時間であつた。

そんな時間に、駆け抜けていく二匹の馬がいた。一瞬で駆け抜け

ていくため、いったいどういった人たちが乗っているのかは判断ができないだろう。

「あの男がどこまで知識があるかはわからないけれど、火の魔宝珠に試しに触れるのなら、まず隣にいる娘を使うでしょうね」

メリッグが平静と恐ろしいことを言ったとき、フリートの顔は一瞬で強ばった。そして唇をぎゅっと閉じながら、さらに加速していく。

目的地である山は見えているが、なかなか近づいてこない。あの雄大な山に着くのはいったいどれくらいだろうか。最低でも日が暮れる前に着かなければ、厄介なことになるだろう。

「領全体に加護を与える火の魔宝珠、それはいったいどれほどのものなのかしら」

涼しい顔をしながら、むしろ面白がっているかのように馬の上に乗っているメリッグはふと呟く。それをフリートが気に留めつつ、軽く受け流す。

「メリッグは見えていないのか、火の精霊サラマンダーが突然現れたところを。畑が燃えているところを、一瞬で消し去ったんだ」

「あら、人が意図的に消したというのはないのかしら。精霊を扱う人は、数は少ないけれど、いなくはないわ」

「そんな気配はなかったと思うが。メリッグは水の精霊ウンディーネを使えるんだよな。何か感じることもあるのか？」

「さあ、他の精霊に関しては私も知らないことが多くて。だから他の属性の政令に関しては、とても興味があるわ。着いてきて良かった」

不謹慎な発言を躊躇わずに言っているあたりが、フリートにとっては理解できなかった。

前を走っていた馬からトルが大声を張り上げる。

「もう少しだ！ 少し入り組んだ道にはいるから、気をつける」

そう言われた途端、急に足場の悪いところに踏み入れた。速度が遅くなり、思わず振り落とされそうになるが、そこを踏ん張って先

に進む。

足下に気をつけている間に、山は目の前に近づいていた。遠くから見た感じでは、そこら辺の山と変わらなかったが、近くで見ると若干ながら赤く色付いているのがわかる。暮れゆく日の光の加減によるものだろうか、それとも元々の色なのだろうか――。

やがて洞窟の一つが見えるとうつくりと速度を落とし、目的の場所の入り口へと辿り着いた。馬から降りると、トルはランプを取り出し、マッチを使って火を灯した。それを見たメリッグが不思議そうな顔をしている。

「あなた、ここの出身なのに火は出せないのね」

「俺が召還するのはウォーハンマーだ。精霊召還はできない」

「へえ、この領ではそういうもののなの。才能だけで一線を引かれているのね」

トルが息を吐きながら、メリッグに険しい顔を向けた。

「何が言いたいんだ。思わせぶりな発言ばかりで！」

「別に。領によって慣習は違うから、それを言っただけよ。ほら、早く中に入らないの。時間がないわ」

メリッグに促される形で、ランプを持ったトルを先頭として中を進み始めた。

藍色の髪の彼女をちら見しつつ思うことは、正直一緒にいてやりにくいことはあった。会話はどこか噛み合わず、こちらからの追求を即座に打ち切るかわりに、自分からの追及は遠慮がない。そこから、どこか浮き世離れた言動に、予言者とは本当に厄介な存在であると感じたのだ。

予め一同は武器を召還し、頼りないランプの灯りのみで前に進む。注意深く進んでいるが、モンスターの気配は感じなかった。ミスガルド領なら、人気のない洞窟に入れば大なり小なりモンスターはいるものだ。

「人の出入りも基本的にはない。発掘作業が終わってから何十年も経っている。警戒するのはあの男だけでいいんじゃないか」

そんなことを言いつつも、トルは右手でウォーハンマーをしつかり握りしめていた。

そして前方から光が見えた途端、フリートの全身に悪寒が走った。

リデイスが男に引つ張られながら、やっとの思いで辿り着いた洞窟の部屋に入ると、真っ暗だったその場が、側面に並ぶ松明に火が灯ることで一気に明るくなった。まるで誰かを待っていたかのような待遇に困惑してしまう。

その奥には、球状の赤色の大きな魔宝珠が浮かんでいた。本当に魔宝珠なのかと疑ってしまうほど大きく、一般の青年男性の背丈以上はありそうだ。そして宙から浮かんでいるということが、リデイスの脳内の常識を遙かに越えていた。

「こりゃ、面白えな。領だけでなく大陸を支えているっていうわけも納得できるな」

リデイスを放っておいて、火の魔宝珠に近づくが途中で立ち止まり、眉をしかめた。あと少しで手を触れられそうな距離である。

「なるほど、ここで結界か。解除の呪文は教えてもらったから、それを読んで…… っと」

男がスルトから受け取った紙を広げ、つつかえながらも読んでいく。堅苦しい言葉ばかりで、リデイスに読みを尋ねることもあったが、どうにかして最後の文まで読み切った。

すると男の目の前にある空間が歪み、ヒビが入ったかと思うと、粉々に消え去ってしまったのだ。それは大きな魔宝珠を取り囲むようにして張られていた結界で、もはや用はなくなってしまった。意気揚々とした表情で男は魔宝珠に近づく。

だがまたしても手を触れようとした寸前で動きを止めた。ほんの少し考えた結果、壁に寄りかかっているリデイスに近づき、腕を持つと魔宝珠のもとへと引きずる。

そして魔宝珠に目を向けると、にやりと笑みを浮かべた。

「ちょっと触れてみる」

「どうしてよ……。私はただの体のいい人質でしょう。もう放っておいて……」

「いいから、触れて、死にたくなかったならな」

男は柄を触りながら、脅しに入る。リデイスは渋々と目の前にある魔宝珠に体を向けた。ゆっくり見上げると、その視界に広がるのは赤々とした魔宝珠。領を守る火の精霊サラマンダーが宿っている。あまりに美しいそれに触れるのは躊躇われたが、横にいる男の殺気に促されて手を持ち上げた。

『あなたはふさわしいもの？ ふさわしくないもの？』

突然、脳裏に若い女性の声が流れた。手は魔宝珠に触れる直前で止まる。

『ふさわしくなかったら、知らないわよ？』

その言葉に、リデイスの鼓動は速くなる。だが一方で、女性の声が少し声色を変えて言ってきた。

『——あら、でもよく見たら大丈夫そうね。むしろ触れなさい。道を導く者よ』

始めは恐怖で止められていた手だったが、最後の言葉につられるようにして手が魔宝珠に伸びた。

そして触れた瞬間——リデイスの全身に温かいものが走りわたった。

14、煌く想いを火に込めて(2)

「リデイス！」

大広間に着いた瞬間、呼びかけながらフリートは駆け出していた。ようやく追いついたその場でフリートたちが見たのは、リデイスが大きな火の魔宝珠に触り、そして薄らと赤い炎らしきものが彼女の体を包み込んだ瞬間であった。同時にリデイスは力なく地面に倒れ込む。

駆け寄ろうとしたが、目の前に頬に傷がある男が立ちはだかった。

「なんだ、てめえ。また来やがって。死に急ぎに来たのか」

「貴様、リデイスには手を出さないって言ったじゃないか！」

「俺は手を出していいえ。ただちよつと触れてみるって言っただけさ」

鼻で笑いながら、言い捨てる。その言葉はフリートの逆鱗に触れた。

目にも止まらぬ早さでバスタードソードを男に向かって突きを入れたのだ。男は反射的に急所から逃れるが右頬をかすった。

流れ出た血を手で触れて確認すると、男はにやりと笑った。

「怪我をしてもまだそんな力があるのか。名前、何て言うんだ、騎士さんよ。俺はガルザ」

「……フリートだ。その減らず口、すぐに言えない状態にしてやる」
じりじりと睨み合う。ガルザの武器であるシミターの柄にはまだ手が触れられていない。だがさっきの攻防から判断すると、一瞬間が重要である。

「——二人相手か。まあ悪くないな」

僅かに聞こえる程度呟くと、ガルザが剣を抜いた。フリートがすぐに飛び込もうとしたが、その前に銀髪の青年が目の前を通過する。そして小気味のいい音とともに、ガルザとロカセナの剣が混じりあった。

「おい！」

「……キャラじゃないけど、援護を頼むよ。怪我をしている相方を無理させられない」

ガルザがロカセナのサーベルを弾くと、目にも止まらぬ速さで切り返していく。それをロカセナはどうにか対応しながら後退していった。

フリートはリデイスの方を一瞬だけ見て、トルとメリッグが駆け寄っているのを確認すると、意を決して、その死闘の間へと無理矢理入り込んだ。

トルの目の前に広がっているのは、奇妙とも呼べる現象。目を凝らしてみればわかるが、リデイスは赤い炎のようなものに包まれていた。揺らめき具合からは、本物の炎に見えるが実体はなく、実際には彼女は燃えていなかったのだ。

「不思議な現象ね。つまりあの火の魔宝珠は、この娘を受け入れたということかしら。ミスガルム領出自なのに、珍しいこともあるのね」

「領の出自とか関係あるのか？」

メリッグがしゃがみ込みながら、リデイスに触れようとした。だが触れた瞬間、怪訝な表情をして右手を離す。綺麗な手にはうつすらと火傷ができていた。それを冷やすかのように、メリッグは水の精霊^{イーネ}を召還して、僅かな水を出していく。

「私はこの領の出身ではないわ。精霊召還についてはあまり多く知られていないけど、統計を取ればわかるはずよ。精霊召喚の使い手の内訳は、ムスヘイム領の者は火を、ミスガルム領では土を、東にあるヨトンルムでは風、北にあるニルヘイムでは水の精霊を使う人がほとんどだと。まれに混合で使うことができる人がいるらしいけど、数十年に一人の人材よ」

「リデイスはその人材だと……？」

トルは目を丸くしながら、微かに呼吸をしている少女を見下ろす。
「それはわからないわ。ただ単に偶然かもしれないし。どちらにしてもこの火の幻影が消えないと、まともに呼吸できなくて、死ぬわよ」

まるで他人事のようにメリッグは冷たく言い放つ。辛そうにうずくまっているリデイスをトルは見えていられず、思わず目を逸らす。
「まあこの火のおかげでガルザという男はこの娘には触れなかったみたいね。普通、フリートが現れたら、真っ先にこの娘を盾にしたはずよ」

「つまり人質としては、使えないってわけか」
だからガルザに取られる心配は当分ないだろう。だから今はリデイスを包んでいる苦しみの原因を取り除くことが先決と言うことだ。しかしトルにとっては、今の状況を打破する方法が何も思いつかなかった。

震える手でリデイスに触れようとしたが、直前で熱さが指先に走りわたる。それを見たメリッグも珍しく難しそうな顔をしていた。
「一般人が触れても駄目ということかしら」

その一般人の定義は何だと聞こうと思った矢先、耳にけたたましい鳴き声が飛び込んできた。何事かと戦局の方に目をやると、ガルザの左右に黒色の大きな狼が現れたのだ。四本足で立っているにも関わらず、ガルザより遥かに大きい。一匹の額には三日月が、もう一匹の額には太陽の絵柄が、浮き彫りになっていた。

「あの男、モンスター召還ができるの！ しかもスコルとハティの双子の狼。厄介な部類に入るわね」

メリッグが忌々しい表情で二匹を眺める。そして少し歩き、リデイスから少し離れたところで、両足でしっかりと立った。

「リデイスのことは貴方に任したわ。私たちが足止めをしている間にどうにかしなさい」

「どうにかって、どうやってだよ！」

「推測でしかないけど、火に触れるには火から……かしら？」

またしても意味深な言葉だけ発すると、あとはトルのことを拒絶するかのようになり、両手で首から下がっていた魔宝珠ごと握りしめ、目を閉じた。

「我が精霊、水の精霊……私に力をお貸しください。魔宝珠よ、我が想いに応えよ」

すると無表情ではあるが、長い青色の髪の毛の美しい小さな女性が現れた。その精霊に対して、メリッグは話しかける。

「あの男の周りにいる、モンスターを倒したい。還すのは難しいから、足止め程度で」

水の精霊は軽く頷くと、実体から水の球のようなものになり変わり、メリッグがスコルとハティと呼んだモンスターの元へと飛んでいった。

「——さあ、氷の刃よ、悪意あるものに裁きを与えよ」

涼しい顔で言い放つと、次の瞬間、二匹の狼型のモンスターが立っている地面から、氷の柱がいくつも現れ始め、突き刺さろうとした。だが間際で気づかれ、逃げられたため、せいぜいかすり傷を負わせる程度で落ち着く。

突然の珍客にガルザは不機嫌な顔をメリッグに向けた。

「おいおい、せっかく楽に終わらせようと頑張って召還したのに、どうして他から援護がこなきゃいけないんだ」

「貴方の相手は目の前にいる青年二人よ。モンスターは私が相手をするわ」

メリッグは鋭い目つきでガルザを睨みつけた。

二人で相手をして、ガルザはかなり手強い。彼の剣の特徴は色々で常人と一脱した部分が多数あるが、あえて上げるのなら？速さ？だ。仮に速ければ速いほど相手からの反撃も反らすことができ、同時に攻撃にも転じやすくなる。速い短所と言えば、一撃が弱くなってしまうところであるが、その心配はガルザにとってはほとんど

なかった。

そんな中で、急にガルザはフリートとロカセナと距離を取ったのである。そして二つの黒ずんだ魔宝珠を取り出して、召喚をするとそこから大きな狼が二匹現れたのだ。

突然のことに驚いたが、すぐにメリツグから援護を受けたため、事なきは済んでいる。

「モンスターまで召還できるとは、また面白い人だね。てつきり剣だけで生きている人かと思った」

フリートの左にいるロカセナが呼吸を整えながら、言葉を漏らす。「メリツグが引き受けてくれるらしいが、大丈夫だよな？」

「足止めくらいはできると思うよ、彼女の能力なら。そんなに心配なら窮地に陥る前に、僕らがガルザを倒せばいい」

自分専用の魔宝珠からの召還は、良くも悪くもその人の精神状態に関係する。召還者が怪我をすれば、召還物の動きは鈍くなるだろうし、命に関わる状態になれば、召還をする余裕などなくなるだろう。

ガルザも二人の考えていることがわかったらしく、意識を再びメリツグからフリートたちに向けた。

「モンスターなんて、オレにとってはオマケみたいなものだ。遊びも終わりにして、一瞬で終わらしてやるう」

瞳を閉じて、地面に向けていたシミターを中段程度まで持ち上げた。ガルザの殺気が急激に小さくなっていく。

フリートは用心深く見ながら、右手でバスタードソードを、左手は添えるだけにして中段に構えた。

そして――ガルザは消えた。

フリートは第六感で、できる限り右に飛んだ。

そして次に使った感覚は触覚であった。頬に生温かいものが感じる。着地して、おそろおそろ左に振り向くと、銀髪の青年が右脇腹を苦しそうに押さえていた。

「……予想以上に速いな……。恐ろしいやつだ」

ロカセナが愛用している召還武器、サーベルが消えると、彼も同時に地面に倒れた。

みるみるうちに血が広がっていく。一方でロカセナの顔色は青くなっていた。

「二人まとめて殺ろうと思ったが、何が悪かったんだ？」

ガルザの表情には、しとめ損ねた悔しさではなく、むしろさけられたのが嬉しいという様子が浮かんでいた。

俊足で動いたためか、ガルザは若干息があがっている。ほんの少しの攻防ではあったが、彼は息が極力あがっていない時に攻撃を仕掛ける。それが、一番効率がいいからだ。だからフリートに少しだけ思考する時間を与えられた。

——くそう、どうすればいい！？

しかし考えても、絶望的な状況から光がまったく見えなかった。

リデイスを任されたトルであったが、いったいどうすればいいのか途方に暮れていた。奥では目にも止まらぬ剣技を、こちらでは見たこともない召還術でほとんど接したことのないモンスターと対峙している。どちらにしても入る隙はなかった。

気を取り直して、もう一度リデイスに触れようとしたが、同じことの繰り返し。むしろ火の温度が若干ながら上昇している気がする。「なんだよ、いったい！　どうして火に包まれなきゃ、ならねんだ！」

そう言った瞬間、トルははっとあることを考えついた。ムスハイム領を守っている火の魔宝珠を改めて見る。ただ静かにその場に佇んでいた。

「火なら、火の一部に触れられるのか？」

魔宝珠に近づき、震える手をゆっくり伸ばす。脳裏にスルトが言っていた、触れたことで焼身した内容を思い出し、あと少しのところで止まる。だが触れなければ何も進みはしない、そう思いこんだ

が動くことはままならなかった。

その時、風がほんの少しだけ吹いた。

『臆病者は嫌いよ』

洞窟の中になぜ風が——と同時に火の魔宝珠の上に、丰满な胸の魅惑的な女性が足を組んで座っていたのだ。その容姿を見て、トルは驚きの声を発する。

「火の精霊！ サラマンダー しかも喋っている！？」

『あら、もともと精霊はみんな喋れるわ。ただそれを聴くことができるかどうかは、相手次第。今回はあたしが意図的にあなたに合っているのよ』

得意げにいいながら、美女は見下した。見とれるような体にならずどきりとしてしまうが、トルはどうにか自分を保とうとした。

「どうして現れたんだ、俺なんかの前に……」

『だから臆病者は嫌いっていうことよ。ただでさえ、あたしがいる目の前でこんな争いされて、非常に不愉快なのに。触るの、触らないの、どっちなの？』

「けど触ったら、燃える可能性が……」

『それを判断するのはあたしじゃなくて、あなたの心の問題よ。明確な理由があるのなら触れなさい。ないのなら、やめなさい。触れる資格があるかなんて——それだけよ』

躊躇いもなく、火の精霊の美女は言い切った。その目には何かを見定めているような雰囲気がある。

剣同士が混じり合う音が、甲高く、小刻みに鳴り響く。またフリートが声を出しながら、一撃一撃に気合いを入れて防いでいる。

メリッグも余裕のない表情で肩を上下させながら、巨体のモンスター相手に対峙をしていた。

それぞれ何か明確な意志によって、相手をしているのだ。

——目的。俺がここに来た目的——。違う。俺が今でも持ち続けている決心は——。

両親が惨殺された。ずっと部屋の隅で怯えていた記憶を隠してい

た。その時、感じた恐怖は隠していたが、そこから生まれた想いは今も心の奥底に生きている。

どうして傭兵になったかというのも、その想いがあったからこそ。トルよりも数段上の技術を持ち合わせた青年二人、そして気高い心を持っている少女との出会いは、ただ何気なく過ごしていた自分自身の心に意識をしなくても影響を与えられていたのだ。

手を改めて、火の魔宝珠の近くに持つていく。不思議と震えはなかった。

「強くなりたい。誰よりも強くなりたい。だから火よ、俺を受け入れろ！」

思ったことを吐き出し、トルは両手で魔宝珠に触れた。すると目映い光が放出され始める。

同時に幻覚か本物かわからないが火が体全体に広がっていた。

始めは熱いと思ったが、少し経つと汗ばむ程度の熱さになる。心が燃えるように熱いが、それがむしろ快感であった。

『臆病者じゃなかったのね』

火の精霊の美女は眉をひそめて呟いたが、その口元はどことなく笑っていた。翻ると、その姿は消えてしまった。

——火は熱い。善であれ悪であれ、熱い。けれどその熱さは、人の心にも宿るもの。それらを両方受け入れたとき、あたしは人に力を与えるわ。

——私はムスヘイム領を司る精霊、サラマンダー火の精霊。さあ——行こうか。

トルの周りにあった火は完全になくなった。そして目の前の魔宝珠から、丸い小さな赤い魔宝珠が生み出された。それをしっかりと握りしめると、トルは一目散にリデイスの下に駆け寄った。

15、煌く想いを火に込めて(3)

リデイスの顔色は先ほどと変わらず悪い状態ではあるが、まだ呼吸ははつきりとしていた。トルは躊躇いもなく彼女に触れると、驚くくらい簡単に腕を握ることができたのだ。そして彼女を包んでいた火の幻影はなくなった。

ほっとしつつも、脈を取り、生きていることを確認する。疲労による発熱、貫かれた肩、そして全身を包んでいた外との拒絶の火。非常に危険な状態ではあったが、無事で何よりだ。

しかし、安堵するには程遠い戦況であり、モンスターが激しく動く地響きや剣が混じり、弾き合う音は依然絶えない。

フリートの方に顔を向けると、彼一人で果敢に立ち向かっていたが、踏み違えたのか仰向けに倒れそうになる。それでも斬撃の中を華麗なステップを踏んで、致命傷だけはかわした。

あの戦闘に加わらなくては――、そう思うが、トルの力量では一瞬でガルザに戦闘不能にさせられるだろう。メリッグ側のモンスター相手も接近戦では難しそうに見える。フリートに対しても、メリッグに対しても加勢はできないのか。

『あなたに秘めている胸の内を出しなさい!』

トルの脳内に火の精霊の声が鳴り響く。サラマンダー

無意識のうちに、想いに溢れているものを具現化して召還する――手のひらサイズの火の球を。

それをフリートに対して斬りかかろうとしているガルザの目の前に投げつけた。

ガルザは目の前に現れた火の球に、驚愕の表情を浮かべたが、剣圧で消し去る。そして恨めしそうな視線をトルに向けた。

「何だ、てめえ。もう少しなんだから、勝手にしゃりしゃり出てくるんじゃないよ」

「それはそっちの勝手だろう! 危険な状態に助太刀するのが、仲

間だ！」

そんな言葉、いったい何年言ったことがなかっただろうか。傭兵としての仕事は一人で行ったり、複数でも単発のものが多かった。共に過ごす時間などあまりないのだ。友達もない、家族もない。だが、短くてもこれだけ濃密な時間を過ごしているのだから、仲間と言ってもいいのではないのか。

ガルザは珍しいものを見るかのように目を瞬かせていた。だが、血が付いた剣を振り払い、すぐににやりと笑った。

「そうか。ならその大切な仲間を真っ先に殺してやろう」

視線が辛うじて立っているフリートの方に向いた。

瞬間、トルの脳内に火の精霊の声が鳴り響く。言われたとおりに手と口を動かし、見よう見まねで火の球を具現化し、ガルザへと投げつける。だがそれは簡単に消されてしまい、時間稼ぎにはほとんどならない。

飛び込んで武器を振りかざす時間がない今、とにかく数打ち当たれと言わんばかりに召還して投げつけたが、すぐにトルの体力は激減し、立つのもままならないほど呼吸があがっていた。

召還は、特に精霊召還は召還者の能力に大きく左右される——ふと昔に教えてもらったことが、今更になって記憶に蘇ってくる。トルは自分のふがいなさに、大きく舌打ちをした。

ガルザがフリートにゆっくりと近づく中、たまにメリッグからの牽制で氷の刃が現れるが、すぐに溶けてしまう。体力が減少しているようだ。

しかしメリッグ側の戦闘をよく見れば、二匹の狼のうち、月のマークが額にあったモンスターの足下は氷漬けにされていた。致命傷を与えて還すことは無理でも、足止めはできると言ったところだろう。そのセンスにトルは脱帽した。

けれどもそれ以上、彼女は何かを行うことはできなかった。どことなく余裕のあったメリッグだが、眉間にしわを寄せている。綺麗な紺色の長い髪の毛や服がほこりまみれになるほど、動いていたの

だ。

圧倒的な力を持った鳶色の髪の死神がフリートに向かって、一步近づいていく。だが彼は、それから逃げることなく、まだ戦おうとしていた。

隙はまったくないわけではなかった。

それがフリートを今なお戦意を喪失させていない理由の一つである。

しかし状況は圧倒的に不利。メリッグやトルからの支援を受けても、状況は好転しなかった。視界の片隅にいる相手や奥にいる金色の髪の少女が辛うじて生きていることを確認する。

左肩が麻痺して、もはや痛みも感じられなくなったところで、剣を両手で握りしめた。

——おそらく一瞬で終わる。それを上手く逆手に取れば勝機があるはずだ。

相手の動きを事細やかに観察していると、ふとガルザの動きが止まった。

「よくここまで耐えたな。一瞬で終わるから安心しろ。——じゃあな」

ガルザが——消えた。

だが、短時間でも濃密に剣を混じり合わせたおかげで、彼がどこから来るかの癖は読み切っていた。ほぼ右から攻めてくる、そして――。

しかし彼が再び現れた気配を感じたとき、それは左から迫っていた。

——今までの動きは、すべてフェイクか！ 気づくのが遅すぎた。フリートは目前に迫った死を覚悟した。

その時、ほんの少しだけ風が吹いた。ほんのり生ぬるい、肌に汗がべたつくような気持ちの悪い風が。

瞬間、ガルザとフリートの間に火の柱が立った。ガルザは慌てて、そこから離れて間合いを取る。

「次から次へと余計なことを。いったい誰——」

洞窟を見渡した瞬間、ガルザは目を丸くした。フリートもその先を見ると、思わず声を漏らしていた。

「リ、リデイス……？」

金色の髪であつた少女が誰の支えもなく立っていた。発熱、出血等により、起きあがることなど困難なはずである。

そして目を見張つたのは、色鮮やかな金色の髪が若干ながら赤く染まり始めたことだ。品が良く、どこことなく可愛いよりも美しい容姿を持つ少女。白色のワンピース、そして薄らと赤く彩られた空気をまとっているのを見ると、まるで人外のものであるかのような錯覚に陥ってしまう。

見とれている一同の前で、少女は静かに微笑んだ。

それはフリートたちの心に癒しを与えてくれる、不思議な光景。しかしそれをぶち壊すような叫びが洞窟に響いた。

「あ、熱いわ、消えろ！」

ガルザの腕に炎が燃え上がったのだ。叩いて消そうとするが、意志を持っているかのように衰えることはない。

しかし突然消えた。彼がほっとしたのも束の間、他の部位に同様の現象が起こつたのだ。

そしてそんなやりとりがしばらく続いた結果、ガルザは全身に軽度の火傷を負つたのである。そこで負傷した影響でスコルとハティのモンスターは姿を消していた。

「畜生、舐めたまねをしやがって。女だからって、もう手加減なんかするか！」

『これ以上、事を大事にするのなら、私も容赦はしません』

急にリデイスの口から出た声に違和感を覚える。いつもより落ちていており、言い方も少しおかしい。フリートは訝しげに探るようを見た。それに気づいた彼女はどこか寂しげな表情を向ける。

『すみません、フリート。少々リデイスの体をお借りしています。彼を追い払い次第、私は消えましょう』

「は、はい。ですが……」

あなたは誰ですか――。

その言葉を発する前にガルザが怒りの形相でシミターを持って睨み付けた。

「おい待て。オレを無視するとはいい度胸だな！ もう皆殺しに――」

『すべてのものよ、在るべき処へ――還れ』

リデイスがそつとガルザのシミターを指で示すと、そこから炎が上がった。そしてあまりの熱さに彼はシミターを落としたのと同時に、消えてしまったのだ。

慌ててガルザはシミターを再び召還しようと声を発するが、まったくその気配は見せず、啞然と立っていた。

「何をした」

『ここは神聖な場所。本来なら争いを禁止している場であるから、召還したものを在るべき処に還ただけですよ』

気がつけばフリートのバスタードソードやトルのウォーハンマーも消えていた。

武器がなくなり、さすがに分が悪くなったと感じ始めたのだろう。ガルザはじりじりと後ろに下がり、一同を鋭い目で眺めた。

「畜生、魔宝珠の採取はまた今度だ。フリート、次会ったら、もっと楽しい死闘を繰り広げてくれよ。そして最終的には殺してやる。」

――あばよ――

それだけ言い捨てて、気に留めることなく背を向けて、ガルザは洞窟から抜け出した。

あとに残されたのは、満身創痍の四人の若者たちだけであった。

ガルザの後ろ姿を見て、どれくらい立っただろうか。

実際の時間にしたら僅かであろうが、感じた時間は長かった。

ようやく殺気が感じなくなったことを実感すると、フリートはリデイスの下に駆けつけた。薄赤かった髪が金色の髪に戻り始めている。彼女についていた、何かが消えようとしているのだろう。だがその前にどうしても聞かなくてはならなかった。

「待ってくれ、いったい誰なんだ!？」

息も荒々しく吐き出しながら訪ねると、どことなく儂げな笑みを浮かべた。

『——すべてが揃うとき、?その時?は訪れる。どのような展開でなるかは予言すらもできないけれど、その時は彼女の隣に必ずいてあげてください』

髪の色が金色に戻った。そして瞳を閉じると、リデイスは崩れるように倒れ込む。それをフリートは地に着く前に抱きしめた。

直に感じる温もりが、彼女は生きているという事実を教えてくれた。

誰もが全身疲労を抱えているが、彼女が生きているということだけが、唯一の救いであったのだ。

* * *

ガルザとの死闘の後、スルトに助けられたと言っても過言ではなかった。

左肩の斬り傷を始めとして全身に傷を負っているフリート、慣れない召還に精神を使い果たしたトル、平常心を装っているように見えるが、たまにふらつくメリツグ、そして脇腹を斬られ動くことがままならない口力セナといった面子であり、洞窟を出るのでさえも困難である。

リデイスをガルザの手から奪い返したことで、どこかほっとして

しまったフリートは、意識を失いそうになるのをどうにか保ちながら、どうしたものかと思案しているときに、スルトたちが駆けつけてくれたのだ。

一同が酷く怪我を負っているのを見て、彼は顔を真っ青にしていた。

「まさか……」

「誰も死んでいませんよ。致命傷もいません」

フリートはリデイスを抱えて座り込んだまま、淡々と答える。

「ですが、早めに治療をすることで、治りも早くなると思います。すみません、一応リデイスと火の魔宝珠は守りりましたが、俺たち、動くのは難しそうです」

「いや生きていれば充分だ。——彼らを丁重に屋敷にお連れしろ。医者にも治療の準備をしろと伝えておけ」

スルトがてきぱきと指示をすると、共に付いてきた傭兵たちが一斉に散らばり、次々とかつぎ上げて、それを拒否したメリッグ以外は、洞窟の外へと連れ出されていた。

洞窟の中にはスルトとメリッグ、そして数人の傭兵だけが残る。

「貴女はお怪我や疲労の方は……」

「少々無茶をしましたから、見た目以上に辛いところですね。洞窟の外へは自分で歩いていきますが、その後は屋敷まで連れていくてくれるのかしら？」

「もちろん。ムスヘイム領の危機を救ってくれた一人として、丁重に扱おう」

やがてスルトは火の魔宝珠の前に立った。そして深々と一礼をして、小さなナイフを取り出すと、躊躇いもなく突き立てたのだ。数回小気味のいい音がすると、火の魔宝珠から欠片が落ちた。そしてあと二度ほど繰り返し返すと、地面には手のひらに包めるくらいの欠片が三つ転がる。それを事前に持っていた火に耐性がある布に包み込

んで、鞆に入れ込んだ。

「何をしたのかしら。欠片でも誰かの手に渡ったら、危険と言っていないかった？」

メリッグは領主に対して遠慮なく質問をする。

「確かにこういう風欠片にすることはリスクが伴うだろう。だがそれでもして、やらなければならないことがある」

「それは大陸中を巻き込んで、これから起きるかもしれない出来事に関係すると、捉えていいのかしら？」

「予言者なら、それくらい予言したらどうだ？ 私は詳しいことは知らないよ」

スルトは持つてきた一枚の羊皮紙を掲げて口を開いた。

「――再び静かな時をお過ごしなされ。そして願わくば、我らの危機の時に再び参上して頂きますように。――在るべきところにお戻りになさってください」

火の魔宝珠が赤く光輝いた。目を瞑るほどかと思ったが、すぐに光はやみ、どことなく暗い印象を受ける魔宝珠へと戻ってしまった。「触れられないよう、封印をしたようで」

「解除の呪文も同時に変えた。あの男にこの魔宝珠が渡ることはしばらくないだろ」

「でも、また強硬手段に出たら、どうするのかしら。例えば貴方の命を盾にされたら」

「その時は全力で抵抗する。例えば戦力差は格段にあっても、希望はあると言ったことを教えてもらったから」

ふふつと笑いながら、スルトはメリッグに対して背を向けて、洞窟を出る。それを少しつまらなそうな顔で眺めていた。

気配を完全に絶っているからか、直接的には感じられないが、第六感としてあの火の精霊がすぐ傍にいることは気づいている。

外から流れ込んでくる風がすっかり感じ取れるのは、彼女が意図的に流しているからだ。

「そして彼女らは一歩進んだ。前進の一歩か、後退の一歩かはわか

らず

それを魔宝珠に対して言ってから、メリッグも洞窟を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8365s/>

魔宝樹の鍵

2011年10月8日03時15分発行